

大原芸術研究所

紀要

Bulletin of Ohara Art Institute

第1号 2025

大原芸術研究所

OHARA ART INSTITUTE

大原芸術研究所

紀要

Bulletin of Ohara Art Institute

第1号 2025

大原芸術研究所

OHARA ART INSTITUTE

ご挨拶

大原芸術研究所の紀要創刊にあたり一言ご挨拶申し上げます。

大原芸術財団は、芸術研究を通じて世界に、未来に貢献することを目的に大原芸術研究所を設立しました。この紀要はその成果の一つになります。

私たちは、研究対象や研究分野についての既成概念にとらわれることなく、自由に研究を進めます。その一方で、設立したこの倉敷という土地にはこだわります。この自由さとこだわりの結果生まれる、つまり、ここでしか生まれえない知見、価値を創造していきます。

そして、この紀要が、私たちの研究所の研究成果が社会とつながる一つの扉になることを願います。この扉を通った様々な知見が社会と出会い、新たな化学反応を起こした先に、未来の希望がうまれることを信じます。

本紀要の創刊に際し、高階研究所所長の急逝にもかかわらず、高階先生のご遺志を胸に、三浦研究所副所長と研究員たちが多忙な日常業務の中にいながら、日々研鑽を積み、貴重な知見を発信してくれたことに感謝します。また、この紀要を発刊することで描くことのできる大原芸術研究所の未来をともに築こうとしてくれることに感謝します。この紀要を手にとられた方々も一緒に未来へ歩み出すことができればこれに勝る喜びはありません。

結びに、本紀要の創刊にあたり、ご尽力いただいた全ての方々に深く感謝申し上げます。これからも私たちは芸術研究を深め、未来の世界へ貢献して参ります。

2025年4月1日

大原芸術財団代表理事
大原あかね

Preface

I would like to write a few words on the occasion of the launch of the Bulletin of the Ohara Art Institute.

With the aim of contributing to the world and the future through research on art, Ohara Art Foundation founded Ohara Art Institute. This bulletin is one of the fruits of such efforts.

We carry out research freely without being bound to established notions of our subjects or fields of research. Meanwhile, we do adhere to the locality of Kurashiki, where this institute was established. Through such independence and adherence, we wish to create views and values that can emerge only here.

We hope this bulletin will serve as a door that will connect the fruit of the research undertaken at our institute to the society. We believe that the various views which pass through this door will encounter the society, trigger new chemical reactions, and lead to hopes for the future.

I wish to thank Miura Atsushi, deputy director of the Institute, and all the researchers, who, despite the sudden passing of our director Takashina Shuji, have keenly pursued their studies and shared their valuable views cherishing the wishes of the late Professor Takashina. I am also grateful that by launching this bulletin, this team is endeavoring to shape the future of Ohara Art Institute together. It would be an unsurpassable delight if the readers of this bulletin would be able to take a step toward the future together with us.

In closing, I would like to express my heartfelt thanks to all those who put in their efforts to launch this bulletin. We shall continue to deepen our studies on art and contribute to the future world.

April 1, 2025

Ohara Akane
Chair, Ohara Art Foundation

創刊の辞

大原芸術研究所紀要創刊の辞を私が書くことになろうとは、夢にも思っていなかった。これは本来、昨年10月17日に逝去された高階秀爾大原芸術研究所初代所長が執筆されるはずのものであった。それが読めないのは無念でならないが、副所長として力を振り絞って書き記すしか手立てはない。

大原芸術研究所、この日本で最初のアート・インスティテュートの創設は故高階所長の年来の夢であった。ロンドンのコートールド美術研究所やパリのフランス国立美術史研究所のことをよく口にされていた。美術館や美術コレクションを内包し、国内外の研究者と学術交流ができるような研究所。芸術を中核に据えつつ分野を横断した人間研究を志向するような研究所。そこでは、将来的に大学とは違った形で美術教育すら可能になるかもしれない。そんな夢の第一歩を印すのが、この大原芸術研究所紀要と言えよう。というのも、大原芸術研究所の使命の基底にあるのは、所蔵する作品や資料の地道な研究とその成果の公開にほかならないからだ。言うまでもなく、紀要はその重要な発表媒体である。

本創刊号においても、大原美術館最初期のコレクションを大原孫三郎とともに築き上げた児島虎次郎の書簡や日記が紹介される。児島研究が芸術研究所の根幹を成すことは、紀要創刊号とほぼ同時期に児島虎次郎の作品目録をデジタル版で公開することからも理解されよう。さらに、所蔵作品の技法や素材の科学的な調査も報告されるが、こちらは外部の研究者との共同作業の成果である点も特記しておきたい。他にも、大原美術館と並んで研究所の中にある倉敷考古館の所蔵品に関する研究ノートも掲載される。これらの論文、資料紹介、研究ノートなどは、研究員たちによるささやかな貢献かもしれない。しかし、そこからしか芸術研究所の活動は始まらない。

そして、私たちは他の研究機関やミュージアムとの交流を切に望んでいる。作家や作品やテーマの共同研究、展覧会やシンポジウムや研究会の共同開催などを通じて、単独の機関ではできない充実した活動が可能となる。そのようなネットワークが倉敷のみならず、日本全国、さらには世界の各地域に広がっていくようなポテンシャルを信じている。そうした創造的なネットワークを構築するためにも紀要は有効である。

大原芸術研究所のエッセンスと方向性を体現する媒体、そんな紀要でありたい。

2025年4月1日

大原美術館館長
倉敷考古館館長
大原芸術研究所副所長
三浦篤

Foreword to the Inaugural Issue

I never even dreamed that I would be writing this foreword for the inaugural issue of the Bulletin of the Ohara Art Institute. This was originally meant to be written by Takashina Shuji, the first director of Ohara Art Institute, who sadly passed away on October 17 last year. I am very sorry that we cannot read it, and all I can do is to do my best to substitute Professor Takashina's words as deputy director.

The establishment of Ohara Art Institute, the first art institute in Japan, was the late Director Takashina's long-cherished dream. He often spoke about the Courtauld Institute of Art in London and the French National Institute for Art History (INHA) in Paris. An institute comprising an art museum and a collection of art. While placing fine art at its core, an institute aiming at human studies traversing fields. There, in the future, it might even be possible to provide art education in a way different from universities. This Bulletin of the Ohara Art Institute marks the first step toward such a dream. The reason is that what lies at the basis of the Ohara Art Institute's mission is no other than steady research on the works and historical materials in its collection and publication of the fruit of such studies. Needless to say, the Bulletin is a significant medium through which such findings are conveyed.

In this inaugural issue, letters and a diary written by Kojima Torajiro, who built the initial Ohara Museum of Art collection together with Ohara Magosaburo, are introduced. The fact that studies on Kojima form the basis of the Art Institute is endorsed by the release of a digital catalogue raisonné of the works by Kojima Torajiro around the same time as the publication of this inaugural issue of the Bulletin. There are also reports on scientific surveys of the techniques and mediums of works in our collection. A point worthy of mention is that these reports are the fruit of collaboration with outside researchers. In addition, there is also a study on the collection of Kurashiki Archaeological Museum, which, together with Ohara Museum of Art, is part of our Institute. These dissertations, articles, and studies may be small contributions made by the researchers. However, without them, our function as an art institute will not begin.

It is our sincere wish to interact with other research institutions and museums. Through joint research on artists, artworks, and themes or co-organizing of exhibitions, symposiums, and study meetings, substantial activities unrealizable by a single institute become possible. I believe in the potential for such a network to spread not only within Kurashiki but all over Japan and further across the world. This Bulletin is also effective as a means to develop such a creative network.

I hope this Bulletin will prove a medium which embodies the essence and course of action of Ohara Art Institute.

April 1, 2025

Miura Atsushi
Director, Ohara Museum of Art
Director, Kurashiki Archaeological Museum
Deputy Director, Ohara Art Institute

大原芸術研究所初代所長 高階秀爾 略歴

大原芸術研究所所長である高階秀爾は、2024年10月17日満92歳にて逝去いたしました。
ここに生前のご厚情に感謝いたしますとともに、謹んでお知らせ申し上げます。

主な経歴

1953年 東京大学教養学部教養学科 卒業
1979年 東京大学文学部教授
1992年 東京大学名誉教授
国立西洋美術館長
2000年 西洋美術振興財団理事長
2001年 レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ 受章
2002年 大原美術館館長
2012年 文化勲章 受章
2020年 日本芸術院長
2024年 大原芸術研究所所長

大原美術館における主な活動

- コレクションの意義を再考する展覧会を開催
2006年「インパクト 東と西の近現代——もう一つの大原美術館」
2009年「大原總一郎生誕 100年記念展 大原總一郎の美術館創造」
2010年「大原孫三郎生誕 130年記念特別展 大原孫三郎 日本美術への眼差し」
2011年「生誕 130年 児島虎次郎展——あなたを知りたい」
2013年「大原美術館特別展 Ohara Contemporary」
- 国内外で大原コレクション展を開催
- 教育普及活動として、2002年よりチルドレンズ・アート・ミュージアム、
高階秀爾の美術教室、外部講師を交えての大原美術館美術講座を実施
- 現代作家に関する事業として、大原家旧別邸有隣荘で現代作家による特別展を開催、
2005年より滞在制作事業 ARKO、2007年よりAM倉敷を実施

表紙デザインの意図

大原芸術研究所紀要の表紙デザインは、初代所長高階秀爾による「時間と地理の十字路にあるのが美術館である」という理念を着想源として生まれました。

大原美術館と倉敷考古館も例外ではなく、創設以来、時代や地域の異なる文化や人々が出会う場として使命を果たしてきました。そして、今、この活動に大原芸術研究所が加わります。高階は、当研究所のコンセプトとして「芸術研究は人間研究である」という言葉を掲げ、芸術という広大な領域に関連するさまざまな分野の研究者が集い、それによって創造的な研究が生まれることを願いました。この表紙に掲げられた十字には、そうした理念とともに、当研究所が芸術研究におけるひとつの結節点となることへの願いが込められています。

さらに、表紙をひらいて裏表紙とあわせて見えるデザインには、倉敷の伝統的な建築物に見られる「なまこ壁」のイメージが重ねられています。大原芸術財団のあらゆる活動は、およそ100年前に、この小さな町の一角から始まりました。当研究所はこの原点を大切に、倉敷から外の世界へとつながる活動を続けていきます。

また、この表紙に使われている緑と橙の色彩は、大原美術館の創設者である大原孫三郎の別邸兼迎賓館であった有隣荘の特徴的な屋根瓦を想起させるものです。有隣荘は、平屋建ての洋風建築と二階建ての和風建築、さらに中国に由来する意匠とが見事に調和した住居であり、倉敷を代表する近代建築です。日本、中国、そしてヨーロッパの、時代を超えた文化の交わりによって生まれたこの美しい建築物のように、これからの大原芸術研究所がうながす多種多様な交流によって、豊かな研究成果が生みだされることを願っています。

目次 | Contents

2 ご挨拶 —— 大原あかね

Preface by OHARA Akane

4 創刊の辞 —— 三浦篤

Foreword to the Inaugural Issue by MIURA Atsushi

9 研究論文

近代絵画における下層の創造的活用(1): 松本竣介《都会》(1940年)を中心に
小林俊介・大下浩司・塚本貴之

Creative Utilization of the Underlayer in Modern Painting (1): With Focus on *City* (1940) by Matsumoto Shunsuke
KOBAYASHI Shunsuke, OSHITA Koji, TSUKAMOTO Takayuki

27 研究論文

近代絵画における下層の創造的活用(2): パブロ・ピカソ《鳥籠》(1925年)を中心に
孝岡睦子・大下浩司・阿部善也・塚本貴之

Creative Utilization of the Underlayer in Modern Painting (2): With Focus on *Bird Cage* (1925) by Pablo Picasso
TAKAOKA Chikako, OSHITA Koji, ABE Yoshinari, TSUKAMOTO Takayuki

(57) 資料紹介

児島虎次郎日記 1919年(大正8年)

吉川あゆみ

An Introduction to Kojima Torajiro's Diary for 1919 (Taisho 8)
YOSHIKAWA Ayumi

(11) 資料紹介

大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について

水島博・柳沢秀行

On the Letters from Kojima Torajiro to Ohara Magosaburo
MIZUSHIMA Hiroshi, YANAGISAWA Hideyuki

(3) 研究ノート

倉敷考古館所蔵の安養寺第三経塚出土瓦経の整理経過について—ひかり拓本撮影—
伴祐子

A Report on the Surveying of the Sutra Tiles Excavated from An'yoji Daisan Kyozyuka in the Kurashiki Archaeological Museum
Collection—Utilization of the “Hikari Takuhon” App—
BAN Yuko

(2) 編集・投稿規定

近代絵画における下層の創造的活用(1): 松本竣介《都会》(1940年)を中心に

Creative Utilization of the Underlayer in Modern Painting (1): With Focus on *City* (1940) by Matsumoto Shunsuke

小林俊介 (山形大学地域教育文化学部地域教育文化学科教授)

KOBAYASHI Shunsuke (Professor, Department of Education, Art and Science, Faculty of Education, Art and Science, Yamagata University)

大下浩司 (吉備国際大学外国語学部外国学科教授)

OSHITA Koji (Professor, Department of Foreign Studies, Faculty of Foreign Languages, Kibi International University)

塚本貴之 (公益財団法人大原芸術財団研究部研究員・学芸員)

TSUKAMOTO Takayuki (Conservator, Curator, Research Department, Ohara Art Foundation)

要旨

本研究は、近代絵画における表現技法、とくにその多層的な構造の活用に注目する。具体的には絵画の下層や旧作の再利用、および引っ掻き、削り、塗り残しといった下層の創造的活用が見られる表現を精査するとともに、絵画制作の動的な過程を科学的な調査を通じて可視化し、その美術史的な位置づけを明らかにすることを目的とする。本稿では西洋の古典絵画にみられる重層的な技法が活用された作品として松本竣介の《都会》(1940年8月、大原美術館蔵)を取り上げる。今回、この《都会》に対して数種の科学調査を行った。具体的には、斜光写真、紫外線写真、赤外線写真の撮影と、蛍光X線分析法(XRF)である。

本研究で行った科学調査の結果は、基本的には松本のメモから推定される重層的な描画工程に対応している。例えば、紫外線写真におけるワニスを塗布したと思しき形跡や、赤外線写真におけるグレーズ(透明な上塗り)層の希薄化ならびに下層のマチエールの可視化、斜光写真における明部の厚塗り、XRFから推定される使用顔料の種類が少ないことである。これらの照応は、下層を活かしたグレーズなど、古典的な重層技法を活用するとともに、色彩を絞って主調色を活かすという松本の制作意図を科学的に裏付けるものであり、松本の表現が常套的なプリマ画法(一度塗り画法)とは異なる独自の価値を有することを示唆している。

This study focuses on modern painting techniques, especially the utilization of multilayered compositions. To be more precise, it makes a close examination of how the underlayer or former works are reused, and of expressions making creative use of scratches, scrapes, or parts of the underlayer left unpainted. Furthermore, by visualizing the kinetic process through which a painting is produced by means of scientific investigation, it aims to reveal the art historic significance of such applications. In this study, *City* (August 1940, Ohara Museum of Art) by Matsumoto Shunsuke is examined as a work in which layering techniques employed in Western old master paintings were applied. Several kinds of scientific tests were conducted on *City* this time, namely diagonal light photography, ultraviolet photography, infrared photography, and X-ray fluorescence (XRF) analysis.

The results of the scientific tests undertaken in this study correspond basically to the process of multilayered painting inferred from Matsumoto's memos. For example, ultraviolet photographs show traces of varnish having been applied. Infrared photographs reveal dilution of the glaze (transparent overcoat) layer and make the *matière* of the underlayer visible. Diagonal light photographs reveal the thick paint on the bright sections. XRF analysis suggests that there were not so many different kinds of pigments employed. Such correspondence provides scientific evidence that Matsumoto employed classical layering techniques such as making use of the underlayer by glazing and enhanced the dominant color by limiting the coloring. This suggests that Matsumoto's method of expression had a value of its own differing from conventional *alla prima* painting (wet-on-wet approach).

はじめに

本研究では、近代絵画における表現技法、とくにその多層的な構造の活用に着目する。具体的には絵画の下層や旧作の再利用、および引っ掻き、削り、塗り残しといった下層の創造的活用が見られる表現を精査するとともに、絵画制作の動的な過程を科学的な調査を通じて可視化し、その美術史的な位置づけを明確にすることを目的とする。美術史のみならず絵画技法・材料、修復、科学調査を含む総合的な観点から問題に接近したい。

ここでいう「下層」とは、絵画の表層より下の絵具層、厳密に言えば表層より下にある絵具層で、描画を担う絵具層とその基底にある地塗り層(priming [英]/préparation [仏])を含む。西洋絵画、とくに油彩画の場合、絵画は板やキャンバスといった「支持体」、その上に塗られる目止め層や地塗り層の上に絵具が重ねられて完成する。作品を前に私たちが直接目にするのは上層に塗られた絵具が中心であるが、一般に油彩画は地塗り層から最終的な仕上げ塗りに至るまで、何層かの塗り重ねによる多層的な構造によって成立している。

本研究で特に注目するのは下層の創造的活用、すなわち作者が制作の過程で下層を意図的に露出させ、表現効果として扱おうとする場合である。具体的な手段としては、表層の絵具を布などで拭き取ったり、ナイフや針様の鋭利な道具で掻き取ったり、また削り・引っ掻くなどして除去することが挙げられる。また、地塗りや下層をあえて塗り残したり、透明な彩色層を重ねて下層との相乗効果を狙う場合などが含まれる。

もちろん、絵画における下層の活用は近代絵画に限ったものではない。例えば「引っ掻き」についていえば、金箔の上に塗られた絵具を引っ掻いて下層の金箔を露出させ装飾的な模様を描く技法は「かき落とし」(sgraffito)と呼ばれ、チマブーエ(Cimabue, c. 1240-1302)やジョットー(Giotto di Bondone, c. 1267-1337)、シモーネ・マルティーニ(Simone Martini, 1284-1344)らの作品に頻出する¹。そもそも近代以前の西洋絵画においては下層が完全に被覆されてしまうことは少なく、下層は

必ずといっていいほど活用されていた。ファン・アイク兄弟(Hubert van Eyck, c. 1385/90-1426. Jan van Eyck, c. 1395-1441)に代表される初期のフランドル派の絵画においては、白色の地塗りの上に透明な油絵具が慎重に重ねられ、地塗り層の明るさが画面に光輝をもたらしており、一方、ヴェネチア派以降の油彩画においては明部を厚塗りするとともに暗部は薄塗りにして下層を活かすのが原則であった。

このような近代以前の絵画における重層的構造を絵画技術研究の面から強調したのはマックス・デルナー(Max Doerner, 1870-1939)である。デルナーによれば、明から暗への移行部で白色を漸減して下層を露出させ視覚混合によって生ずる灰色を光学的灰色(optisches Grau)と呼び、それは混色による不透明な灰色よりも鮮やかで効果的である。加えて、古典絵画における素描の精確さと色彩の鮮やかさの両立は、上述のような光学的灰色を活かしながら行う単色の下層描き(いわゆるグリザイユ)の上層にグレーズ(glaze:透明な上塗り)による彩色を行うという、重層的な制作工程によるものであるという²。

もっとも、西洋古典絵画における上述のような下層の活用は、基本的には具象的な描写、あるいは装飾的な効果を得るための手段であり、それ自体が目的化するような性質のものではなかった。しかしながら、近代絵画、とくに本研究が注目する19世紀後半から20世紀にかけての絵画作品の中には、その技法自体が前景化し表現効果として下層の存在を活用するようなものが少なくない。こうした作品においては完成作における表層のイメージを検討するだけではその特質を適切に把握することは難しい。本研究ではこうした研究上の問題を克服するため、近代の絵画表現における下層の活用に着目する次第である。

本研究は当初、松本竣介(1912-1948)や須田国太郎(1891-1961)、三岸好太郎(1903-1934)らによる、近代日本の絵画作品における多層的な構造の活用に関する研究として出発したが、自ずと彼らが参照した西洋近代絵画についても同様な問題

1 以下を参照。Daniel V. Thompson, *The materials and techniques of medieval painting*, Dover Publications, 1956, pp. 225-226。田口安男、『黄金背景テンペラ画の技法』、美術出版社、1978年、pp. 128-129。

2 Max Doerner, *Malmaterial und seine Verwendung im Bilde: nach den Vorträgen an der Akademie der bildenden Künste in München*, Muenchen: F. Schmidt, 1921。以下も参照。小林俊介、「須田国太郎の絵画技術について」、『美学』、75巻1号(264号)、2024年。

意識をもって研究を進めることになった。本研究の対象にピカソ (Pablo Picasso, 1881-1973) やルオー (Georges Rouault, 1871-1958) ら西洋近代絵画の作品が含まれるのはこのためである。

本稿では本研究の中でも特別な位置を占める松本竣介の作品について取り上げる。松本は近代日本絵画史において下層の創造的活用を試みた典型的な画家の一人であり、デルナーが定式化した西洋の古典絵画にみられる重層技法を活用した画家とみなすことができる³。その松本の重層技法への関心と独自の成果が顕著に表れている作品として《都会》(1940年8月、油彩・板、121.0×154.5cm、大原美術館蔵)【図1】がある。今回、この《都会》に対して数種の科学調査を行った。具体的には、斜光写真、紫外線写真、赤外線写真の各種撮影と、蛍光X線分析法(以下XRF)である。科学調査によって肉眼のみでは把握することが困難な絵具層の構成や、使用されている絵具顔料の同定を試みることで、松本の重層技法やその源である西洋古典技法への関心の在処を紐解く一助としたい。

なお、本稿は「はじめに」および「1. 作品の技法の特徴とその背景」、「2. 推定される制作工程」、「4. まとめ：科学調査結果との比較検討」を小林が、「3. 科学調査」を大下・塚本が執筆し、全体の表記などを小林が調整した。

1. 作品の技法の特徴とその背景

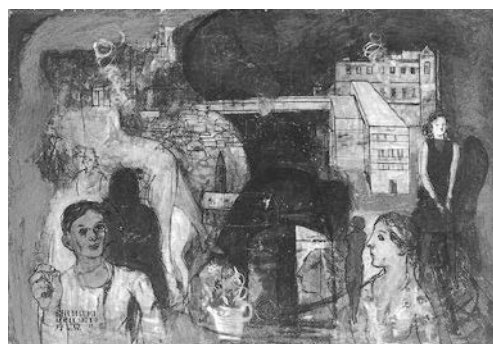
《都会》は1938年頃から始まる、しばしばモンタージュ的と称される都会風景連作のひとつで、1940年8月の第27回二科展に出品された大作である。画面右の顔を欠いた人物部分に顕著にみられるように、下層のマチエールやイメージを透かすように上層のイメージが重ね合わされる箇所がある。CG(コンピューターグラフィクス)に喩えれば、様々な透明度を持った層(レイヤー)の重ねによって全体のイメージが構成されている。下層の絵具が常に部分的に透けてみえているような、「透明」な画面構成と絵具の重層的な構造とが密接な関係を持つ、松本の典型的な作例のひとつである。

白色の用法からみたとき、当該作はモンタージュ的な構成から白色の多寡によって立体感を描写

する古典的な画風への過渡的な様相を示している。当該作は連作終盤の作品で、人物や建物の明部に白色の使用が目立つ。例えば、1938年の《街》(大川美術館蔵、第25回二科展出品)【図2】において白色は建物部分を中心に使用されているが、当該作品では人物にも白の使用が目立つ。1939年の《序説》(岩手県立美術館蔵、第26回二科展出品)【図3】において白色は建物のほか左右下部の人物部分にも認められるが、当該作品ほど大きな部分を占めていない。つまり、連作の進行につれて白色の使用が増大しており、人物の明部や中央部分の建物を中心に白色が厚塗りされ、また画面左側の建物や画面中央上の橋梁部などにみられるように、建築物も白色によって面が強調されているようにみえる。ちなみに1940年末以降はモンタージュ的な構成が後退し、《顔(自画像)》(1940年12月、個人蔵)や《画家の像》(1941年8月、宮城県美術館蔵)【図4】など、茶褐色を主調とする写実的な人物像が増えていくが、これらの作品においては白色による明部の厚塗りが当該作よりも更に明確である。

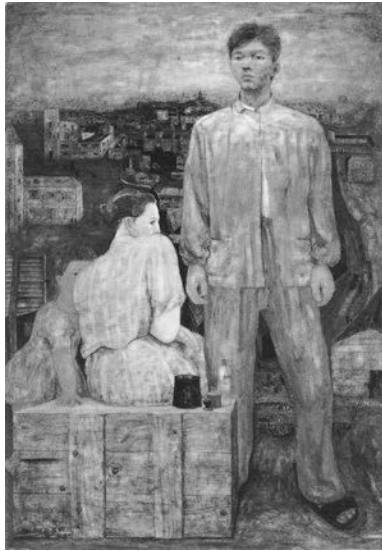


【図2】 松本竣介《街》(1938年8月、大川美術館蔵)



【図3】 松本竣介《序説》(1939年8月、岩手県立美術館蔵)

3 以下を参照。小林俊介、「難波田龍起、松本竣介、鏗光の油彩技法について」、『美術史』145冊、1998年。小林俊介、「近代日本洋画におけるルオーの受容—技法・表現の側面から—」、『ルオーと日本 響き合う芸術と魂—交流の百年』、パナソニック汐留美術館、2020年。



【図4】 松本竣介《画家の像》(1941年8月、宮城県美術館蔵)

色相対比ではなく明暗対比によって、明部に白を多く用いて立体感や空間を表現するのは、近代以前の西洋絵画における基本的な方法である。とくに白と黒の混色による灰色の階調でモデリング(肉付け)を行う絵画をグリザイユと呼び、これに油彩の透明性を活かしながら着彩を行うのが西洋古典絵画の制作工程であるとされてきた。これは下層から上層に至る絵具の多層的な構造を活用した画法であり、近代以降、とりわけ印象派以降の絵画がプリマ描き(一度塗り画法)に依拠し、色相対比によって立体や空間を描写したのとは異なるシステムである。

昭和戦前期における日本の洋画が、安井曾太郎(1888-1955)らの作品に典型的にみられるような、不透明なプリマ描きが基調であったことを鑑みると、松本が絵具の重層による西洋古典絵画の描法を採用するには何らかの契機が必要であったと考えられる。ひとつの契機としては1934年2月に開催された国画会主催福島コレクション展でルオーの実作を観たことが挙げられる。同展にはルオーやピカソなど福島繁太郎(1895-1960)が将来した海外作品の実物約40点が展示され、松本ら当時の美術家に絶大な影響を与えた。1935年以降の松本の作品には、ルオーの影響と思われる太い線による人物や建物がモチーフとして現れるが、本稿の

視点からいえば、ルオーの重層的なマチエールの影響が見られる点が重要である。ルオーの紹介に努めた洋画家である伊藤廉(1898-1983)によれば、ルオーの技法は不透明色と透明色の重層的な組み合わせによって成り立っており⁴、それは古典画法の近代的な応用と解釈されたのである。

文献としては同年に須田国太郎が「油絵の光輝表現法に就きて—セガンチーニの手法に及ぶ—」⁵において重層的な古典絵画技法を紹介しているのが注目される。同書で須田は原著にはない部分拡大写真を挿入して論文の趣旨を視覚的に示しながら、ティツィアーノ(Tiziano Vecellio, c. 1490-1576)やグレコ(El Greco, 1541-1614)の作品にはテンペラの下塗りの上に透明色が上塗りされていることを強調している。同論文は当時絵画技法研究の権威であったデルナーの技法書に依拠したものであった⁶。

1937年には伊原宇三郎(1894-1976)によってレンブラントのマチエールの詳細が伝えられている。伊原が紹介したのは絵画の科学的分析の先駆者であるA. P. ローリー(Arthur Pillans Laurie, 1861-1949)による*The brush-work of Rembrandt and his school*, Oxford university Press, 1932. である。伊原の記事は同書に掲載されたレンブラント作品の部分拡大写真を転載しており、明部に白色を盛り上げたマチエールや「運筆の順序もよく分り、後からかけたグラシ[gracis: グレーズにあたる仏語]のつけ具合も明白」である⁷【図5】。さらに伊原は原著の冒頭からおおむね全体の三分の二部分の邦訳を「レンブラントとその一派の筆技」として『造形藝術』誌の1939年9月号から11月号にかけて紹介している。1940年以降の松本の作品に、写実性と相まって、白色の



【図5】
「長官達」の左側人物の顔、
『みづゑ』397号(1938年3月)

4 伊藤廉、「ルオーについて」、『みづゑ』387号、1937年5月、p. 421。松本竣介におけるルオーの影響およびルオーの技法については註3の小林論文を参照。

5 須田国太郎、「油絵の光輝表現法に就きて—セガンチーニの手法に及ぶ—」、『アトリエ』、11巻1号、1934年1月。

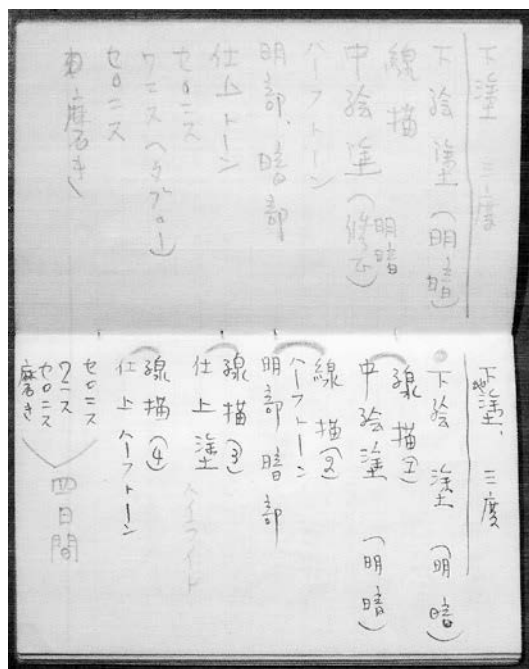
6 Max Doerner, op. cit. 註2の小林論文も参照。

7 伊原宇三郎、「レンブラントの筆技」、『みづゑ』、397号、1938年3月、p. 202。

られる。また、ローリーの論文はレンブラント作品における白色のインパスト (impasto: 厚塗り) の下層に暗い下塗りがあることを繰り返し指摘しており、同論文における下塗りから上塗りに至る手順の強調は、後述する松本の制作工程メモに少なからぬ影響を与えていると推測される。ちなみに伊原は原著を「三越の洋書部で私は発見した」と書いており⁸、松本が原著を見た可能性もある。前述の須田論文および伊原の文章が掲載された『みづゑ』の当該号は近年調査が進んだ松本の蔵書リストには含まれていないが⁹、これらの情報を松本が得ていた可能性は否定できないだろう¹⁰。

2. 推定される制作工程

松本の制作工程については、画家自身の手帖にメモが残されている。手帖はちょうど当該作品の制作時期にあたる1939年から40年にかけて使用されたものと推測されている。その一部は既に紹介されており¹¹、これを第一の工程メモと呼ぶことにしたい【図6】。



【図6】松本竣介の工程メモ (1939-40年頃)。上のページがこれまで紹介されてこなかった「第二の工程メモ」

下地塗, 三度

- ・下絵塗 (明暗)
- (線描 (1)
- 中絵塗 (明暗)
- (線描 (2)
- ハーフトーン
- 明部 暗部
- (線描 (3)
- 仕上塗 ハイライト
- (線描 (4)
- 仕上 ハーフトーン

- セロニス
 - ワニス
 - セロニス
 - 磨き
- } 四日間

また、同じ手帖の隣のページには以下のような記述もある。先のメモとほぼ同内容だが微細な相違もある。これを第二の工程メモと呼ぶことにする【図6】。

下塗り 三度

- 下絵塗 (明暗)
- 線描
- 中絵塗 (明暗修正)
- ハーフトーン
- 明部、暗部
- 仕上トーン
- セロニス
- ワニス (タブロー)
- セロニス
- 磨き

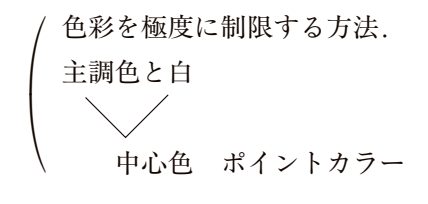
8 同前。

9 小金沢智・編、「松本竣介・主要蔵書目録」、「生誕100年、松本竣介展」図録、NHKプラネット東北、NHKプロモーション、2012年。および小金沢智・編、小此木美代子・補、「松本竣介 蔵書リスト」、「松本竣介 読書の時間」展図録、大川美術館、2019年。

10 例えば、松本の《水を飲む子ども》(1943年頃、岩手県美術館蔵)における子どものコップを持つ手のポーズは、『造形藝術』誌の1939年12月号に掲載されたグリュネワルト (Matthias Grünewald, 1470/75-1528) のイーゼンハイム祭壇画における聖アントニウスの手のポーズを踏襲していることが指摘されており、同誌の直近号に掲載された記事を松本が見ていた蓋然性は高い。以下を参照。佐々木一成、「松本竣介—永遠のリリシズム—」、『藝術文化雑誌 紫明』、13号、2003年9月、p. 43。

11 「松本竣介展」図録、東京国立近代美術館、東京新聞、1986年、p. 66。

また、同じ手帖には次のような記述もある。これを第三の工程メモとしたい【図7】。



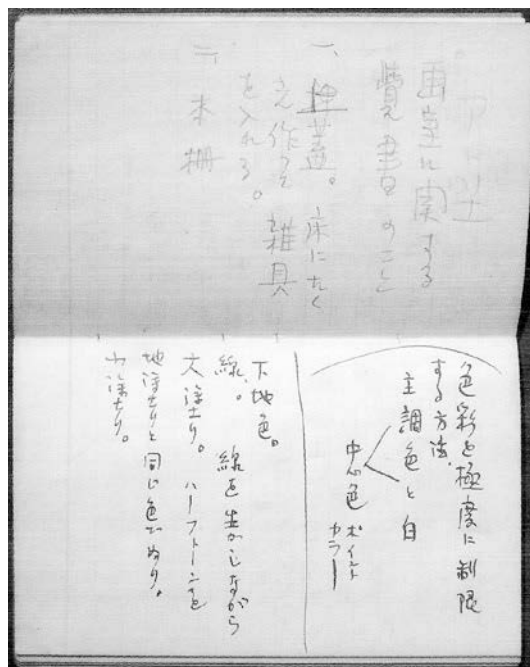
下地色。

線。線を生かしながら

大塗り。ハーフトーンを

地塗りと同じ色でぬり。

小塗り。



【図7】松本竣介の「第三の工程メモ」（1939-40年頃）

松本に師事した洋画家である中野淳（1925-2017）は松本の第一の工程メモに基づいて、その描画過程が古典絵画のグリザイユ技法であるとしている。すなわち松本は「灰色か褐色の単色で、戦中と戦後の一時期、下絵塗りをして」おり、下絵塗・中絵塗は「絵具をたっぷり含んでマチエールは分厚い〔中略〕仕上げはグラッシで、陰影の暗が

りの調子、ハーフトーンに透明で微妙な階調を響かせる」¹²。

中野の分析を参考に以上三種の工程メモを分析すると、松本の制作工程は以下のように推定される。

- 1) 下地塗りは三度となっているがその具体的中身は不明である。中野は「木地の吸収が無くなるまで、乾燥させながら、油絵具で三回塗り重ねた」か、「或は初めの一回は、膠水で目止めをしたかもしれない」と推定している¹³。膠による目止め層、あるいは絶縁層を一度（一層）と数える場合、顔料を含む地塗り層は二層である。いずれにせよこの工程は目止め・絶縁層および地塗りの工程であり、以下に続く描画層（松本の用語では「下絵塗」以降の工程）と区別しているものと思われる¹⁴。
- 2) 次に白色を中心とした分厚いマチエールを持つ「下絵塗」・「中絵塗」の過程がくる。単色の明暗描写による、いわゆるグリザイユである。
- 3) 「下絵塗・中絵塗」を活用しながら、「主調色」、当該作品の場合は建物や人物の背景などに青系統の色を塗り込んでいく。最初は大きく色面を塗り込んでいき、次に「ハーフトーン」を「地塗りと同じ色」、当該作品の場合は灰色系統の色で塗っていく。
- 4) 「仕上塗り」。「小塗り」すなわち細かい塗りで仕上げていく。明部に白色を厚塗りしてハイライトを際立たせ、立体感や空間を強調する。面的に筆やナイフで塗っていく段階で消えてしまう線描はその都度描き起こされる。
- 5) 最終的な「仕上」、ハーフトーンを整える塗りや最終的な線描、グレイズなどによって画面の最終的な効果を決定していく。
- 6) 最後にワニスがけを行う。ワニスがけは三層で、最後の磨きの工程を含めて四日間かける。一日一層で、最後の日が「磨き」の工程となる。一層目と三層目の「セロニス」は中野が推定するようにルフラン社の Vernis

12 中野淳、『青い絵具の匂い 松本竣介と私』、中央公論新社、1999年、pp. 194-195。

13 中野淳、同前、p. 194。

14 当時の「下地」や「地塗り」の用語法は混乱しており、描画層の下層であるのか、あるいは膠などによる目止め・絶縁層や地塗りであるのか判別し難い場合がある。岡鹿之助は後者について「絶縁体（第一地塗）」と「絵具を受付ける面（第二地塗）」という区分をしている。以下を参照。岡鹿之助、『油絵のマチエール』、美術出版社、1954年、p. 115。

Céronis pour tableauxであろう¹⁵。これは蠟が中心の艶消しのワニスで、刷毛や布などでこすると穏やかなつや消しになる。二層目の「ワニス」は第二のメモに「タブロー」とあるので、Vernis a tableaux、すなわち樹脂を含む艶のあるワニスである。セロニスは描画後完全な乾燥を待たずに塗布できるワニスであり、第一層目に、おそらく画面が指触乾燥した直後に塗られ、二層目を塗るための準備を成す層となる。一方、第三層目のセロニスは二層目の保護と艶の調整をはかるためのものと思われる。最後の4日目は三層目のセロニス層を布や刷毛で擦って半光沢を得る工程である。すなわちメモにいう「磨き」の工程で、画面全体が半光沢の状態に整えられる。二日目のタブローワニスで終了すると画面に光沢が出るが、おそらく松本は光沢が強すぎる画面を嫌い、またタブローワニスの黄変を防ぐ目的で最後にセロニスを塗布するのであろう¹⁶。当該作をはじめとする松本の作品の多くは画面の艶が均一に整っており、画面の光沢によって画面が鑑賞しにくかったり、艶引けによって画面の階調が乱れているということはない。

なお、以上の工程の内、下絵塗り以降の段階で画面を「削る」作業が行われる。舟越保武(1912-2002)や中野らは松本が制作過程で塗っては削るという過程を繰り返していたと証言している¹⁷。直接にはルオーの影響であるが、絶えず下層を覗かせて上層との相乗効果を狙うという意味で古典的な重層技法の応用であると考えられ、須田国太郎の「削り」技法との共通性を感じさせる¹⁸。

3. 科学調査

松本のメモに残されたこれらの記述内容から推定される制作手順や方法について、科学的なアプ

ローチからより多様な情報を得るべく、以下に示す各種の撮影及びXRFを実施した。なお、ここでは紙面の都合もあり、行った調査の結果のみを記述する。

2022年12月26日～27日にかけて、紫外線写真、斜光写真および赤外線写真を撮影し、絵画表面の状態を観察した。さらに、2023年12月25日～29日には、XRFにより、本作品に使用された絵具の種類を推定した。可視光線写真(通常写真)、紫外線写真、斜光写真の撮影にはNikon製デジタル一眼レフカメラD5100を用い、赤外線写真の撮影にはPENTAX製デジタル一眼レフカメラ645D IRを使用した。なお、本稿に掲載した写真はトリミングを行い、斜光写真では明るさおよびコントラストを調整し、赤外線写真ではグレースケールに変換するなどして視認性を向上させている。また、絵具の分析には既報のXRF装置を用いた¹⁹。絵具の種類および絵具に含まれる顔料は、『新装版 絵画材料事典』に記載された内容をもとに推定した²⁰。以下に、本調査によって得られた結果をまとめた。

3-1 紫外線写真による絵画表面の蛍光観察

絵画表面における蛍光を観察するために、松本竣介《都会》の紫外線写真を撮影した【図8a, 8b】。本作品は寸法が大きいため、紫外線ライトは作品に向かって左側手前あるいは右側手前から照射し、それぞれの紫外線写真を撮影した。撮影時には、調査環境を薄暗くし、室内照明からの可視光線が紫外線写真に影響を及ぼさないよう配慮した。また、適切なシャッタースピードに調整し、室内照明等の不要な光の写り込みを防いだ。

撮影した紫外線写真では、濃淡の差はあるものの、全体的に青色を呈していた。可視光線写真【図1】と比較すると、明度の高い白色様の描写部は紫外線写真においても明るく写り、青色様の描写部においても、明度の高い部分は明るく、明度の低い部分は暗く写っていた。これは、本撮影に使用

15 中野淳、同前、p. 195。

16 モロー・ヴォーチェ (1857-1924) は終了ワニスとして蠟を推奨しており、樹脂質のワニスを使用する場合もその上に蠟を塗ることを推奨している。Ch. Moreau-Vauthier, La peinture: les divers procédés, les maladies des couleurs, les faux tableaux, Librairie Hachette et Cie, 1913, pp. 231-235。モロオ・ヴォチエー、大森啓介訳、『絵画』、春鳥会、1942年、pp. 202-205。蠟ワニスは岡鹿之助も推奨している。以下を参照。岡鹿之助、前掲書、pp. 107-109。

17 以下を参照。舟越保武、「松本竣介 完成と挫折」、『石の音 石の影』、筑摩書房、1985年6月、pp. 150-152。中野淳、前掲書、p. 46。

18 須田国太郎の「削り」については註2の小林論文を参照。

19 下山進、野田裕子、『分析化学』、49巻12号、pp. 1015-1021、2000年。

20 『新装版 絵画材料事典』、R.J. ゲッテンス、G.L. スタウト著、森田恒之訳、初版、美術出版、1999年。

した紫外線ライトが発光する光には青色の可視光線が僅かながら含まれることから、これが絵画表面で反射し、紫外線写真の色調に影響を与えていると考えられる。また、絵画全体が概ね様な青色を呈していることから、表面に塗布されたワニスが紫外線を吸収し、青色の蛍光を発していると推測される。一方で、特定の部位から顕著な蛍光は認められず、青色の蛍光を発する絵具は使用されていない可能性が高い。

さらに、可視光線写真から、青色以外にも赤色の絵具が使用されていることが確認された。具体的には、絵画左下に描かれた家の屋根、中央の人物の頭部、服の襟、左脇、腰、上部に描かれた橋の橋脚、さらに右側の中段および下段の一部に赤色の描写が認められる。紫外線写真では、これらの部位が暗く写っているため、赤色の絵具が紫外線を吸収しやすい性質をもつことが示唆された。

3-2 斜光写真による絵画表面の微細構造の観察

斜光写真の撮影は、松本竣介《都会》の絵画表面における微細な凹凸を観察するために行った【図9a, 9b】。本作品は大型であることから、1枚目は作品に向かって左側から白色光を照射して撮影し、2枚目は右側から白色光を照射し撮影した。撮影は、室内を暗くし、不要な光の影響を極力抑えて行った。しかし、斜光写真【図9b】には、右側上部に赤色の撮像が認められる。この赤色は撮影時の白色光によるものではなく、調査場所に設置された非常灯などの灯りが写り込んだ可能性が高い。

可視光線写真では、絵画表面に顕著な凹凸は確認されなかったものの、斜光写真においては微細な凹凸を明瞭に捉えることができた。例えば、作品左側上段に描かれた建物左側に広がる青色背景部には、複数の微細な凹凸が確認された。また、左側下段では、青色背景部の下層に描かれた黒色の線描に沿って、3本の線状の凹凸が存在することが観察された。作品中央部においても、手前に描かれた人物の肩から胸元にかけて微細な凹凸が認められ、その背後に描かれた横向きの人物の腰のラインにも線状の凹凸が確認された。さらに、作品右側では、人物の胸元のラインに沿って線状の凹凸が分布し、右側の曲線的な描写に沿って弧状の凹凸が存在することが明らかとなった。加えて、

絵画右上部では筆跡によると推測される凹凸が認められるなど、全体的に多数の微細な起伏が散見された。

3-3 赤外線写真による絵画表面および下層の観察

絵画表面および下層の状態を観察するために、松本竣介《都会》の赤外線写真を撮影した【図10】。撮影は、作品に対して左右の手前から赤外線を照射し行った。

可視光線写真と赤外線写真を比較した結果、《都会》の構図は両者で一致しており、画面下層に目視とは異なる描写は確認されなかった。ただし、赤外線写真において、作品周辺の背景部や上段の橋の下に描かれた水面部が暗く写っていた。これは、当該部分において赤外線が吸収されていることを示唆している。

本作品には、白色様および青色様の絵具が多用されている。赤外線写真の結果、白色の描写部は明るく写り、赤外線を反射しやすい特性をもつことが示唆された。一方、青色の描写部は濃淡に応じた暗い撮像となり、赤外線を吸収しやすい性質を有すると考えられる。また、黒色の線描部も暗く写っており、赤外線を吸収する特性をもつことが確認された。

次に、赤色様の描写について検討した。可視光線写真では、左下に描かれた家の屋根、中央の人物の頭部、服の襟、左脇、腰、上段の橋の橋脚部分および右側の中段・下段の計3か所に赤色様の描写が認められた。これらの描写を赤外線写真に基づいて検証したところ、すべての部位において明るい撮像が得られた。このため、可視光線写真で確認された筆跡を赤外線写真からは確認できなかった。さらに、赤色様の描写層の下層に描かれた線描の構図が赤外線写真に写っていることから、この赤色様の絵具は赤外線を透過しやすい性質をもつことが明らかとなった。

3-4 蛍光X線分析法による絵具の推定

松本竣介《都会》に使用された絵具の種類を推定するため、XRFによる科学調査を行った。測定点を図示し【図11】、分析結果を表にまとめた【表1】。

キャンバスの描写すなわち絵具層または地塗り層と推定される白色部分の成分を分析するため、

測定点1および2においてXRF測定を行った。この結果、Ti (チタン) およびZn (亜鉛) が検出されたことから、これらの白色は、それぞれTiを主成分とするチタニウムホワイト、Znを主成分とするジンクホワイトであると推定された。さらに、TiおよびZnは他の測定点においても検出されたことから、本作品ではチタニウムホワイトおよびジンクホワイトが表層あるいは下層全体に使用されている、またはキャンバスの地塗りに施されている可能性が高いと推測される。

次に、表層の絵具層が剥落し、下層の白色描写が露出している、あるいは目視によれば下層の地塗り層とも考えられる測定点13を分析した。その結果、Ti、Fe (鉄)、Znが検出されたことから、前述の分析と同様に、白色部分はチタニウムホワイトおよびジンクホワイトであると考えられる。また、測定点13の周辺には表層の青色描写があることからこれが検出され、この青色はFeを主成分とするプルシャンプルーであると推定された。

本作品表面に塗布された青色を特定するため、測定点3、4、5、6、9、10、12においてXRF測定した。この結果、測定点9、10、12では、前述の測定点13と同様にTi、Fe、Znが検出された。このことから、これらの測定点に使用された青色は、Feを主成分とするプルシャンプルーであると推定された。一方、測定点3および4ではTiおよびZnが検出されたが、Feは検出されなかった。このため、プルシャンプルーや他の重い元素を含む青色顔料は使用されていないと推測される。つまり、XRFでは検出されない軽い元素のみを主成分とする青色のウルトラマリンブルーであると消去法的に推定された。また、測定点5および6では、Ti、Cr (クロム)、Fe、Zn、Pb (鉛) が検出された。Feの検出により、これらの測定点における青色はプルシャンプルーであると確認された。さらに、CrおよびPbが検出されたことから、クロムイエローが含まれていることが示唆される。このことから、測定点5および6においては、青色に対して補色の関係にあるクロムイエローを混ぜることで、青色の明度を下げ、目視では黒色に見えるほどの濃い青色を調製している可能性が高い。

次に、赤色を特定するため、測定点7においてXRF分析を行った。目視では、この部位の赤色は

透明感を有することが確認された。測定の結果、TiおよびZnが検出されたが、赤色顔料の主要成分となる元素は検出されなかった。このことから、この赤色はXRFでは検出されない軽い元素を主成分とするレーキ顔料であると推定される。レーキ顔料の具体的な種類を特定するためには、本作品の制作当時に画家が使用していた絵具の種類に関する文献調査が必要である。さらに、赤色顔料の組成をより詳細に調査するため、他の分析手法の適用も検討する必要がある。

最後に、黒色および灰色を検討した。測定点8の黒色部においてXRF分析を実施した結果、TiおよびZnが検出された。黒色としてはランプブラックおよびボーンブラックが候補として考えられる。ランプブラックはXRFで検出されない軽い元素のみから構成されるため、XRF測定では顔料成分が検出されない。一方、ボーンブラックはCa (カルシウム) を含むため、XRF分析によってCaが検出される。測定点8ではCaが検出されなかったことから、この黒色はランプブラックであると消去法的に推定される。さらに、測定点11の灰色を分析した結果、測定点8と同様にCaは検出されなかった。このことから、本作品の灰色に使用されている黒色もランプブラックであると推定される。また、白色成分としてTiおよびZnが検出されたことから、チタニウムホワイトやジンクホワイトが含まれていると考えられる。しかし、キャンバス全体にこれらの白色が塗布されていることから、灰色の調整に使用された具体的な白色の特定には至らなかった。

【表1】 松本竣介《都会》のXRFによる結果

測定点	色相	検出元素	絵具名(顔料の化学式) ¹
1	描写orキャンバス地塗りの白色	Ti, Zn	白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
2	描写orキャンバス地塗りの白色	Ti, Zn	白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
3	青色	Ti, Zn	青色:ウルトラマリンブルー (天然: $3\text{Na}_2\text{O} \cdot 3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2 \cdot 2\text{Na}_2\text{S}$) (人工: $\text{Na}_{8-10}\text{Al}_6\text{Si}_6\text{O}_{24}\text{S}_{2-4}$) 下層の白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
4	青色	Ti, Zn	青色:ウルトラマリンブルー (天然: $3\text{Na}_2\text{O} \cdot 3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2 \cdot 2\text{Na}_2\text{S}$) (人工: $\text{Na}_{8-10}\text{Al}_6\text{Si}_6\text{O}_{24}\text{S}_{2-4}$) 下層の白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
5	濃い青色or黒色	Ti, Cr, Fe, Zn, Pb	青色:プルシャンプブルー($\text{Fe}_4[\text{Fe}(\text{CN})_6]_3$) 黄色:クロムイエロー(PbCrO_4) 下層の白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
6	濃い青色or黒色	Ti, Cr, Fe, Zn, Pb	青色:プルシャンプブルー($\text{Fe}_4[\text{Fe}(\text{CN})_6]_3$) 黄色:クロムイエロー(PbCrO_4) 下層の白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
7	赤色	Ti, Zn	赤色:レーキ顔料(不明) 下層の白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
8	黒色	Ti, Zn	黒色:ランプブラック<C> 周辺and下層の白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
9	淡い青色	Ti, Fe, Zn	青色:プルシャンプブルー($\text{Fe}_4[\text{Fe}(\text{CN})_6]_3$) 下層or混色の白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
10	青色	Ti, Fe, Zn	青色:プルシャンプブルー($\text{Fe}_4[\text{Fe}(\text{CN})_6]_3$) 下層or混色の白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
11	灰色	Ti, Zn	白色:チタニウムホワイト(TiO_2) and/orジンクホワイト(ZnO) 黒色:ランプブラック<C>
12	青色	Ti, Fe, Zn	青色:プルシャンプブルー($\text{Fe}_4[\text{Fe}(\text{CN})_6]_3$) 下層or混色の白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO)
13	表面に露出した下層の白色 (表層の剥落部)	Ti, Fe, Zn	白色:チタニウムホワイト(TiO_2) ジンクホワイト(ZnO) 周辺の青色:プルシャンプブルー($\text{Fe}_4[\text{Fe}(\text{CN})_6]_3$)

1 XRFでは、絵具に含まれる顔料の成分元素を検出し、これをもとに顔料を判別して絵具の種類を推定した。表中には、絵具名を示し、()内には顔料の化学式を記した。

4. まとめ:科学調査結果との比較検討

本研究で行った科学調査の結果は、基本的には推定される描画工程に対応している。例えば、紫外線写真におけるワニス塗布したと思しき形跡や、赤外線写真におけるグレーズ層の希薄化ならびに下層のマチエールの可視化、斜光写真における明部の厚塗り、XRFから推定される使用顔料の種類が少ないことなどである。これらの照応は絵具の多層的な構造を活用し、また色彩を絞って主調色を活かした松本の作品作りを科学的に裏付けているものと考えられる。

今回の調査ではクロスセクション(絵具断片の断層写真撮影)を行っておらず、厳密な絵具層の上下の判断は出来ない。またX線回折法(XRD)による顔料の同定も行っていない。加えてXRFでは油や膠、ワニスといったメディウムを同定することはできない。これらの制約・条件付きではあるが、全体として、今回の科学調査の結果は推定される制作工程の妥当性を支持しているものと考えられる。以下、紫外線写真、斜光写真、赤外線写真、XRF分析結果と推定した工程とを比較検討して得られた知見について述べる。

紫外線写真をみると、可視光では判別できない、青白い痕跡が画面全体に多数認められる。個々の痕跡は20~30cmほどで、液が垂れたような痕跡もある【図12】。これらの痕跡はワニスを塗布した痕跡ではないかと考えられる。痕跡の垂れの方角がまちまちであることから、立てかけた画面を回しながら塗布したとも考えられる。工程メモの記述どおり当該作品の最上層に三層のワニス塗布されているとすれば、そのいずれかのワニス層の痕跡と考えられる。

斜光写真では画面に凹凸が確認できる。可視光線写真【図13】では一見平滑に見えるのは、当該作品は基底材が板であることや、ナイフによる塗りの多用、また制作の過程で行われていると推測される「削り」も関係している。下塗りから中塗りの過程で相当量の絵具が塗り重ねられるが、削りによって不要な盛り上げは整理されていると考えられる。

3-2にもあるように凸部は建物や人物の輪郭附近に目立つ。例えば【図14】の斜光写真では左向きの人物の胴から臀部にかけての輪郭附近に筋状の凸

部が見える。明度は人物の身体より背景の方が明るい。人物の輪郭にそってその外側から白色が厚塗りされているためであり、斜光はこの塗りの凸部を拾っている。身体を際立たせ、また背景に奥行きを持たせるために身体に対して背景を明るくしていると考えられる。

加えて、人物の明部にも凸部があることに注意すべきである。【図14】では正面向きの人物の胸部や頬、鼻頭などが白色で厚塗りされている。これは人物のモデリングのためであり、いずれも人物の立体感を強調し空間を描写することに役だっている。【図16】の斜光写真では、同部分の可視光線写真【図15】と比べ、右側の人物の胸部から下半身にかけて、衣服の輪郭部分にやはり筋状の凸部が目立つ。これは輪郭線附近の明部に行われたナイフによる白色の描写の凸部を斜光線写真が捉えたものである。このナイフによる描写の下層には灰色様の描写があり、下層の灰色の調子を活かしながら仕上げ塗りを行うという、工程2)~4)の過程がここでも確認できる。

赤外線写真にはおおむね可視光線写真に準じた構図が見て取れるが、赤色の描写部分については赤外線写真に写っていない。本研究の趣旨から注目されるのは、可視光線写真で観察される画面中央からやや左の左向きの人物の肩部分から右方向に棒状に伸びる青色の絵具層【図17】が、赤外線写真ではかなり薄く見え、むしろ下層の白色絵具の凹凸や粗密が目立つ点である【図18】。この水平方向に伸びる青色の絵具層は透明性が高くグレーズ層であると思われるが、同様な絵具層は正面向きの人物の胸部にも見られ、やはり赤外線写真では淡色化し下層の白色層の凹凸・粗密が目立つ。表層の透明な青色層を赤外線が透過、もしくは青色層が赤外線を吸収して下層にある白色絵具のマチエールが見えているものと思われるが、このような赤外線写真と可視光線写真との見え方の相違は、白色を中心とした分厚いマチエールを持つ「下絵塗・中絵塗」を活用しながら微細な塗りやグレーズによって仕上げを行うという制作工程を裏付けているものと考えられる。

XRFによって存在が推定されるのは以下の七種類の顔料のみで極めて少ない。これは第三のメモにいう「色彩を極度に制限」し「主調色と白」(当該

作では青色系と白色) による画面作りが実施されているからであろう。実際、中野は松本の談話として以下のように記述している。「色数が少なくても、豊かな色相や色調はつくれるものだ。僕は五・六色あれば充分だ。絵によるけれど、大体色数を絞って描いてきた。それも高価な絵具ばかり使っていない。たとえばバーント・シェンナやプルシャン・ブルーは好きな色だし、緑色にしてもクロム・グリーンのような安価な絵具でも耐久性はあるし、好きな色なので使っている」²¹。

白色：チタニウムホワイト〈 TiO_2 〉、
ジンクホワイト〈 ZnO 〉
青色：ウルトラマリンブルー
〈天然： $3\text{Na}_2\text{O} \cdot 3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2 \cdot 2\text{Na}_2\text{S}$ 、
人工： $\text{Na}_{8-10}\text{Al}_6\text{Si}_6\text{O}_{24}\text{S}_{2-4}$ 〉
青色：プルシャンブルー〈 $\text{Fe}_4[\text{Fe}(\text{CN})_6]_3$ 〉
黄色：クロムイエロー〈 PbCrO_4 〉
赤色：レーキ顔料〈不明〉
黒色：ランプブラック〈C〉

以上のように使用が推定される顔料は白色が二種、青色が二種、黄色が一種、赤色が一種、黒色が一種の計七色であり、黄土や朱、またライトレッドやバーントシェンナのような酸化鉄系の赤茶色など、通常よく使用される顔料は当該作では使用されていないか、検出されないほどごく微量にしか用いられていないことになる。加えて、第三のメモにいう「ポイントカラー」を局所的に用いられている赤色と解釈すると、メモの方針に則って顔料が使用されていることになる。

白色についてはチタニウムホワイト、ジンクホワイトの二種が推定されている。二種の白色顔料に関係する元素はすべての測定点で検出されており、これらが地塗りとして全面に塗られたものか、あるいは上層の描画における調色に用いられたも

のかは本調査からは判断できない。メモにみられるような秩序だった多層的な画面を構築している松本ゆえ、二種の白色の使用法にも何らかの法則性があったとも推測される。

堅牢な白である鉛白（シルバーホワイト）が用いられていないのは、大正期以降、各種の技法書でその有害性や、硫化物系の顔料と混色すると変色することなど鉛白の欠点が強調され、多くの画家がジンクホワイトを用いるようになったことも関係しているだろう²²。この点ジンクホワイトは混色制限がなく使いやすいが、塗り重ねると亀裂を生じやすいことも当時から指摘されており、この欠点を補うため、当時新しい絵具であったチタニウムホワイトが併用されているのであろう²³。

青色の顔料二種（ウルトラマリンブルーとプルシャンブルー）については、透明な上塗りすなわちグレースにはウルトラマリン、不透明な描写部分にはプルシャンブルーと、目的によって使い分けている。青色系統部分の測定点3、4、5、6、9、10、12のうち、3、4に用いられていると推定されるウルトラマリンは赤外線写真の箇所述べたように透明な青色であり、下層の白色にニュアンスを与えるグレース様の上塗りである。一方、測定点5、6の穹窿様の橋梁下の暗部はプルシャンブルーとクロムイエローの混色、もしくはプルシャンブルーとクロムグリーン（プルシャンブルーとクロムイエローの混和色）の混色で調色されていると推定される。先述のように、松本はクロムグリーンを使っていたという中野の証言があるからである。水面の描写にあたる測定点9と空の描写にあたる測定点12の明るい青色はプルシャンブルーと白色で調色されている。測定点10もやはりプルシャンブルーと白色の混色だが測定点9より彩度が高く、白色の混和は前者より少量であろう。これらの青色は白から灰色に至るグリザイユを基本とする下層（下絵塗、中絵塗）の上に塗られており、第

21 中野淳、前掲書、p. 70。

22 歌田真介、「キャンバスと溶き油―野見山曉治先生の思い出―」、『近代画説』、33号、2024年、p. 11を参照。

23 種倉紀昭の調査によれば、1929年の『文房堂発売品目録』でチタニウムホワイトが発売されているのはルフラン社とモラン・エ・ジェネ（アンポール）社である。以下を参照。種倉紀昭、「大正期・昭和初期（1912-1930）の我国に於ける油彩画材料についての一考察―萬鉄五郎の油絵具に関連して―」、『岩手大学教育学部研究年報』、46巻2号、1987年2月、p. 26。また吉村商店の『1935年吉村商店カタログ』によれば、同社の「ヴェルネ油絵具」にもチタニウムホワイトがある。以下を参照。
<https://holbein.actibookone.com/content/detail?param=eyJjb250ZW50TnVtJjoyNjgxMiwiY2F0ZWdvcnlnOjI1NTZ9&pNo=10>（最終閲覧2025年1月2日）。岡鹿之助（1898-1978）はチタニウムホワイトの長所として亀裂を生じにくいため下塗りとして好適であるとしている。一方、和田英作（1874-1959）は当時における油絵具のチタニウムホワイトは練り方が粗く使いにくいと評している。以下を参照。岡鹿之助、前掲書、p. 12。和田英作、「絵具の変色」、『アトリエ』、4巻7号、1927年8月、p. 35。

三メモにいう当該作品の「主調色」を形成している。

測定点11にみえる灰色は建物部分の描写に多用されているが、黒色成分としては油彩絵具として一般的なボーンブラックではなくランプブラックが推定されている。松本はこの顔料と白色によって調色される落ち着いた、青みがかった艶消しの灰色を好んだのではないだろうか。

測定点8の線描部分の黒色にもランプブラックが推定されているが、これが油絵具かどうかは一考を要する。今回の調査ではメディウムの同定はできないが、油煙墨すなわち墨汁やインクなど水性材料によっている可能性は高い。松本は自作のものも含む様々なペンで素描をしたといわれており²⁴、当該作の線質はペン様のものによるとも考えられる。牛胆汁のような界面活性剤を用いるか、あるいは下地が適度な吸収性を有していれば界面活性剤を用いなくても油絵具の上に水性絵具で描くことは可能である²⁵。この問題もまた白色の問題と同様、試料を制作して検証する必要があるだろう。

赤色顔料については、当該作とほぼ同時期に制作された《黒い花》(1940年9月、岩手県立美術館蔵)にも見られるような透明性の高い赤色系顔料、おそらくはローズマダーやクリムソンレーキのような顔料が用いられているものと考えられる。青系統の「主調色」に対する暖色のアクセント、第三のメモにいう「ポイントカラー」として用いられていると考えられる。

24 朝日晃、『松本竣介』、日動出版部、1977年、p. 145。佐田勝、「松本竣介」、匠秀夫編『異端の画家たち』、求龍堂、1983年、p. 235（舟越保武聞き書き）およびpp. 244-245（松本栄子聞き書き）。

25 小谷野・大川らは藤田嗣治（1886-1968）の1920年代の作品の地塗りは炭酸カルシウムを含むエマルジョン（半油性地）であり、「墨をはじかず、面相筆による美しい線を引くことが可能」と述べている。一方、歌田真介は松本の《黒い花》の下地層が板地の上に炭酸カルシウムを膠液で定着させたものであると推定しており、同様な下地塗りなら墨が定着する可能性がある。以下を参照。小谷野匡子、大川美香、「藤田の1920年代の絵画技法 メゾンはアトリエ・フジタに残る画材類を手がかりに」、木島康隆・林洋子編『藤田嗣治の絵画技法に迫る：修復現場からの報告』、東京藝術大学出版会、2010年。歌田真介、「技法の側面からの試論「立てる像」をめぐる」、『SAS NEWS 78』、28号、すいどーばた美術学院、1978年2月、ページ付けなし。

【附記】本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業（科研費）基盤研究（C）（課題番号：21K00125）の支援を受けました。ここに感謝の意を表します。

図版出典

【図1】本研究調査による撮影画像

【図2】「生誕100年 松本竣介展」図録 2012年 岩手県立美術館、神奈川県立近代美術史、宮城県美術館、島根県立美術館、世田谷美術館、NHK
プラネット東北、NHKプロモーション 53頁

【図3】「生誕100年 松本竣介展」図録 2012年 岩手県立美術館、神奈川県立近代美術史、宮城県美術館、島根県立美術館、世田谷美術館、NHK
プラネット東北、NHKプロモーション 56-57頁

【図4】「生誕100年 松本竣介展」図録 2012年 岩手県立美術館、神奈川県立近代美術史、宮城県美術館、島根県立美術館、世田谷美術館、NHK
プラネット東北、NHKプロモーション 89頁

【図5】『みづゑ』397号 1938年 春鳥会 203頁

【図6】筆者（小林俊介）撮影

【図7】筆者（小林俊介）撮影

【図8】本研究調査による撮影画像

【図9】本研究調査による撮影画像

【図10】本研究調査による撮影画像

【図11】本研究調査による撮影画像

【図12】本研究調査による撮影画像

【図13】本研究調査による撮影画像

【図14】本研究調査による撮影画像

【図15】本研究調査による撮影画像

【図16】本研究調査による撮影画像

【図17】本研究調査による撮影画像

【図18】本研究調査による撮影画像



【図1】 松本竣介《都会》（1940年8月、大原美術館蔵）



【図8a】 松本竣介《都会》の紫外線写真 作品に対して左側手前から紫外線を照射



【図8b】松本竣介《都会》の紫外線写真 作品に対して右側手前から紫外線を照射



【図9a】松本竣介《都会》の斜光写真 作品に対して左側から白色光を照射



【図9b】松本竣介《都会》の斜光写真 作品に対して右側から白色光を照射



【図10】松本竣介《都会》の赤外線写真



【図11】松本竣介《都会》のXRFによる測定点



【図12】紫外線写真の拡大。右側からの紫外線照射（画面右隅部分）



【図13】可視光線写真（画面左側人物部分）



【図14】斜光写真・左側から光源（【図13】と同部分）



【図15】可視光線写真（画面右側人物部分）



【図16】斜光写真・左側から光源（【図15】と同部分）



【図17】可視光線写真（左向きの人物の肩から右横方向にのびる青色層）



【図18】赤外線写真（【図17】と同部分）

近代絵画における下層の創造的活用(2): パブロ・ピカソ《鳥籠》(1925年)を中心に

Creative Utilization of the Underlayer in Modern Painting (2): With Focus on *Bird Cage* (1925) by Pablo Picasso

孝岡睦子 (公益財団法人大原芸術財団研究部部長)

TAKAOKA Chikako (Chief Curator, Head of Research Department, Ohara Art Foundation)

大下浩司 (吉備国際大学外国語学部外国学科教授)

OSHITA Koji (Professor, Department of Foreign Studies, Faculty of Foreign Languages, Kibi International University)

阿部善也 (東京電機大学工学部応用化学科助教)

ABE Yoshinari (Assistant Professor, Department of Applied Chemistry, School of Engineering, Tokyo Denki University)

塚本貴之 (公益財団法人大原芸術財団研究部研究員・学芸員)

TSUKAMOTO Takayuki (Conservator, Curator, Research Department, Ohara Art Foundation)

要旨

パブロ・ピカソによる油彩画《鳥籠》(1925年、大原美術館蔵)は、画家がキュビズム様式や古典主義的様式など複数の絵画様式を巧みに共存させていた1920年代半ばの静物画群のひとつである。その表現はヴァリエーションとマチエールの豊かさが際立っており、ピカソは引っかきや積層する絵具層を活かした表現を積極的に取り入れ、絵画は複数の絵具層を有しているという前提がなければ成立し得ない油彩画をいくつも生み出していた。

そこで本稿では、引っかきが多用されている《鳥籠》に焦点を置き、絵画の絵具層における多層構造を活かしたピカソの表現について検証するにあたりふたつの方法を試みた。ひとつは、蛍光X線分析をはじめとする非破壊・非接触による一連の科学調査からのアプローチであり、もうひとつは同時代の日本人画家、とくに伊原宇三郎がパリで目にしたピカソの作品に関する模写、観察記録や言説からのアプローチである。

結果、科学調査によって、《鳥籠》には下層に表層とは異なるイメージが存在する可能性は低いことが示されたが、下層には表層の描画とは異なる色彩、主に茶色(バーントシエナ)の存在が推定でき、それによって、本作は多層構造を有する絵画であるという仮定が補強されることとなった。また、引っかきにより表層のみならず、下層にもあたかも伝統的手法であるケガキのような引っかきを付すことで表層のイメージを形成するという、ピカソの多様な下層の創造的活用を理解することができたのである。そして、伊原は一連の観察によりキュビズム期のマチエールの実験を、1925年に絵具のみによって再びピカソが試みていることを指摘していた。このようなキュビズム由来のマチエールの探究という流れは、ピカソによる絵画の多層構造の活用や引っかきの技法の展開と密接に重なる。そして、それらが1920年代半ばにある高みを見せるということは、複数の様式の共存状態が主題や様式のみならず、技法にも関わる現象であることを意味するのであった。

The oil painting *Bird Cage* (1925, Ohara Museum of Art) is one of the still lifes by Pablo Picasso dating from the mid-1920s, when the artist adroitly combined multiple styles of painting including Cubism and classicism. The rich variations and *matière* of Picasso's expressions in those still lifes were outstanding. He eagerly employed expressions utilizing scratching and layering of paint, and created numerous oil paintings which would never have been realized without the premise that a painting is composed of multiple layers of paint.

Consequently, this study focuses on *Bird Cage*, in which the artist made frequent use of scratching. How Picasso utilized the multilayered structure of the paint on his painting was verified in two ways. Firstly, a scientific approach involving a series of nondestructive, noncontact tests such as X-ray fluorescence (XRF) analysis. Secondly, an approach from copies, observation records, and texts produced by Japanese artists of the time, particularly Ihara Usaburo, who saw works by Picasso in Paris.

As a result, scientific tests indicate that there is not much possibility of an image different from that on the surface layer of *Bird Cage* existing on the underlayer. Nevertheless, it can be assumed that colors different from the painting on the surface layer, particularly brown (burnt sienna), exist on the underlayer, which reinforces the hypothesis that this painting is composed of multiple layers. This analysis also enabled us to understand how Picasso applied scratching not only to the surface layer but also to the underlayer in what appears to be the traditional scribing method, thus making creative use of the underlayer in diverse ways. Through a series of observations, Ihara pointed out that Picasso retried his Cubist-period experiments with his *matières* in 1925 employing paint only. Picasso's pursuit of *matière* originating in Cubism overlaps closely with the development of his application of the multilayered structure of a painting and his use of the scratching technique. The fact that it reached a certain height in the mid-1920s, when Cubism and classicism coexisted, indicates that such coexistence was a phenomenon relating not only to Picasso's subject matters and styles but to his techniques too.

はじめに

パブロ・ピカソ (1881-1973) が1925年1月13日に完成させたと考えられる油彩画《鳥籠》【図1】は、画家が複数の絵画様式を巧みに共存させていた時期に制作した静物画群のひとつである。1900年代の末から手がけたキュビズム様式を展開させるさなか、古典主義的様式を手がけるとい、いわばふたつの様式を併用しつつ、さらにパリで1924年に宣言された芸術運動シュルレアリスムの存在というアクセントが加わった時期の作品である。《鳥籠》で描写されるのは、植物模様のある布地が敷かれた茶色いテーブル、そして、その上に配された彫像や鳥籠などのオブジェや果物であり、背景には窓の開口部が広がっている。このような構図をもつ「卓上の静物」は、1920年代半ばのピカソの静物画において、とりわけ1924年から1926年にかけて南仏ジュアン＝レ＝パンのアトリエやパリのボエシー通りのそれと場所を問わず、画家の挑戦の中核を成していた。当時、「卓上の静物」という限定されたこの主題は、ピカソにとって「着想と技術的発見」の試金石であり¹、その表現はヴァリエーションとマチエールの豊かさが際立っている。特に後者について、ピカソは引っかきや積層する絵具層を活かした表現を積極的に取り入れており、《卓上のマンドリン》(Z. V: 188) や《ギターと果物鉢》【図2】のように、絵画は複数の絵具層を有しているという前提がなければ成立し得ない創作を行っていたのであった。

そこで本稿では²、《鳥籠》に焦点を置き、絵画の絵具層における多層構造を活用したピカソの表現について検証するにあたり、ふたつの方法を試みた。ひとつは、科学調査からのアプローチであり、もうひとつは同時代の日本人画家の観察記録や言説からのアプローチである。近年、科学調査を起点にピカソの絵画制作のメカニズムは少しずつ明らかにされており、それら先行研究を参照しつつ、

《鳥籠》、そして1925年頃のピカソの絵画制作の諸相を浮き彫りにすることを目的とする³。

1. 《鳥籠》の技法的特徴とその背景

ピカソには画布のリユース、つまり旧作(過去)の創造的再利用という姿勢が制作の手段のひとつとして確認されている。これは1900年代初頭の作品に多く指摘されているものの、その時期に特有のものであったとはいえない。例えば、1920年代前半の作品にもピカソが、自分、あるいは他人の絵画を再利用することによって新たな作品を制作していたことが科学調査によって明らかにされている。

シカゴ美術館は、同館が所蔵する1922年作の絵画《静物》(Z. XXX: 286) について、2020年に興味深い結果を科学調査によって明らかにした⁴。同作の赤外線写真からは、卓上の水差し、マグカップ、そして新聞を思わせる長方形と椅子の背のような表層にある描画とは異なる描画、すなわち完成作とは異なる別の静物画が、完成作に対して90度角度を変えた状態でもともと描かれていたことが確認された⁵。さらに同作のX線写真と合わせて検証することで、完成作における中央の白い四角形が、下層にある旧作の、新聞紙のような長方形の形象に由来していることが示されたのである。つまり、完成作のイメージ形成に下層のイメージが影響を与えた。換言すれば、旧作を活用しながら、現在、私たちが目視できる《静物》をピカソは完成させたというわけである。

本稿と関連するこの先行研究の重要な点は、1920年代においても、ピカソが画布をリユースしていたこと、そして、絵具層の下層を創造的に活かした制作を行っていたことが明らかにされた点にある。絵具によって密閉された絵画表面を引っかく、ないしは削り落とすという行為は、絵画が複数の層をもつ、多層化された媒体であることが

本稿における略語は次のようである。Z.= Christian Zervos, *Pablo Picasso*, Paris, Cahiers d'art, 33 vols., 1932-1978.

1 Roland Penrose, *Picasso: His Life and Work*, New York, Harper, 1959, p. 226.

2 本稿の執筆分担としては、「はじめに」、「1. 《鳥籠》の技法的特徴とその背景」、「3. 日本人画家による観察：科学調査の結果とともに」および「結びに代えて」を孝岡、「2-3. 紫外線写真、斜光写真および赤外線写真による観察」と「2-4. 第2次蛍光X線分析による絵具の推定」を大下と塚本、「2-1. 第1次蛍光X線分析」を阿部、「2-2. X線写真による観察」を塚本が担った。

3 本稿は、科学研究費補助金21K00125「引っ掻き、削り、塗り残し—近代日本絵画における多層構造の活用に関する研究」の助成を受けたものであり、当研究課題に基づく内容となっている。その主たる目的については、以下の文献参照。小林俊介、大下浩司、塚本貴之「近代絵画における下層の創造的活用 (1) : 松本竣介《都会》(1940年)を中心に」『大原芸術研究所紀要』第1号、2025年、9-26頁。

4 Allison Langley, Kimberley Muir and Ken Sutherland, "Scenes from the Life of Picasso's *Still Life* (1922) : History, Materials, and Conservation", *SN Applied Sciences*, vol. 2, article 1384, 2020. URL: <https://doi.org/10.1007/s42452-020-3136-y> (最終閲覧日 : 2024年12月20日)

5 この下層にある表現は、様式的に完成作とほぼ同時代にピカソによって手がけられたものと考えられている。Ibid..

前提となる。ピカソはその画業の初期にあたる1900年頃の「青の時代」とそれに続く「バラ色の時代」へと移行する時期の作品において、頻繁に画布の再利用を行っていた。そして、それによって自ずと絵画の層は積み重ねられ、必然的に生まれてくるフラットではない独特の質感をもつ絵画表面のマチエールを画家は表現の中に取り込んでいったのである⁶。このような1900年代初頭におけるピカソによる絵具層の多層化は、得てして、画布を調達することが経済的に恵まれていなかった時期のやむを得ない画布の再利用の結果のひとつでもあったとも言える。一方で、1920年代のピカソは十分に裕福であり生活のために画布や旧作を再利用する必要はなく、また画材が入手できない社会的環境下にもなかった。それにもかかわらず、1920年代前半から半ばにかけてのピカソの絵画には、修正や描き直しにはとどまらない画布の再利用がみとめられているのである⁷。

なかでも着目すべきは、1925年作の《3人の踊り子たち》(ロンドン、テート Z. V: 426) であり、科学調査から同作の下層には、白色から黒色までの階調で表現するグリザイユ画法によって古典主義的様式の3人の踊り子たちが描かれていたことが確認された⁸。そして、モチーフは同じであるものの様式と色彩において下層の描画とは大きく異なる表現であるにもかかわらず、下層のグリザイユ画法による色彩が垣間見える《3人の踊り子たち》に対して、ピカソはその表層の絵具のひび割れから下層にある別の色彩が見えている状態こそが、作品の魅力を高めると語っているのであった⁹。このような作例やピカソの語りを鑑みると、絵画の表層の下に別の作品が存在するか否かにかかわらず、引っかきや塗り残し、ないしはひび割れによって下層が露出されているピカソの絵画は、絵画表面

にマチエールの触覚性を付与する効果のみならず、緻密に練り上げられた絵画の多層構造を芸術表現のひとつとして取り込んだ結果であると言えるのではないだろうか。

《鳥籠》の絵画表面には、鳥籠の金網と鳥の輪郭線、画面左側に描かれる彫像とその台座の輪郭線、中央の果物の輪郭線、そして青色の敷布や茶色のテーブルの輪郭線など、いたるところに引っかきが使われている。また、描画とは無関係に見える引っかきもある。ここで引っかきは、大きく分けて3種類に使い分けられているだろう。筆の柄など、幅5mm程度の道具で表層を削り落として、下層を露出させることによって線を表現しているパターンと、ニードルのような細く鋭利なもので引っかいた幅1mm程度の線、そして、針状の道具により、1mmにも満たない幅でかすかに絵具層を引っかいているパターンがみとめられる。引っかきの技法もまた1900年代初頭からピカソの作品に見受けられるが、画家がこの技法を積極的に使い始めたのは1910年代初頭のキュビズム期からであった。その行為は、絵画を絵具が積層するものにとらえ、そこに物質性や触覚性を見出す感覚、そして、絵具層の下層、いわば不可視の領域を現前化するというピカソの感覚に支えられているのだろう。以後、晩年までピカソは繰り返し引っかきを使用していくことになるが、その頂点は《ギターと果物鉢》【図2】のような1925年頃の絵画群であったと言える¹⁰。

なお、同時期の静物画と比較すると、《鳥籠》に用いられた色彩の数は多くはないが、同じ色彩でもその質感に変化がつけられている。例えば、彫像の台座や影の黒色はマットな質感をもつものの、一方で、欄干の表現に用いられた黒色ではつややかな光沢と表面の凹凸が目に残る。後者のよう

- 6 Ann Hoenigswald, "Works in Progress: Pablo Picasso's Hidden Images", Marilyn McCully ed., *Picasso: The Early Years, 1892-1906*, Exh. Cat., Washington, D. C., the National Gallery of Art, 1997, pp. 304-306; 内呂博之「『海辺の母子像』に隠れた絵画」『ピカソ 5つのテーマ』展覧会図録、ポーラ美術館、2006年、136-140頁。; Marilyn McCully, "Picasso's Artistic Practice in 1901", Barnaby Wright ed., *Becoming Picasso, Paris 1901*, Exh. Cat., London, the Courtauld Gallery, 2013, pp. 36-59; Susan Behrends Frank and Kenneth Brummel ed., *Picasso: Painting the Blue Period*, Exh. Cat., Art Gallery of Ontario; Washington, D. C., The Phillips Collection, 2021.; 『ピカソ 青の時代を超えて』図録、ポーラ美術館、ひろしま美術館、2022年。
- 7 孝岡睦子「バプロ・ピカソの絵画における層と時間」大高保二郎、永井隆則編著『ピカソと人類の美術—模倣と創造』三元社、2020年、136-160頁。
- 8 Annette King, Joyce H. Townsend and Bronwyn Ormsby, "The Three Dancers 1925 by Pablo Picasso", *Tate Papers*, no. 28, Autumn 2017. URL: <https://www.tate.org.uk/research/publications/tate-papers/28/picasso-three-dancers> (最終閲覧日: 2024年12月12日)
- 9 Elizabeth Cowling, *Visiting Picasso: The Notebooks and Letters of Roland Penrose*, London, Thames & Hudson, 2006, p. 280.
- 10 1920年代のピカソによる絵画の多層構造と引っかきの諸相とその意義については、以下の文献参照。孝岡睦子、前掲書、2020年、136-160頁。孝岡睦子「近代絵画における引っかきへの試論—バプロ・ピカソの絵画を中心に」高階絵里加・竹内幸絵編『芸術と社会 近代における創造活動の諸相』森話社、2025年、204-223頁。

な特質をもつ画材としては、エナメル塗料の一種であり、ピカソが1912年から使用していた家庭用工業塗料リポラン (ripolin) が想起される¹¹。リポランという19世紀末に開発された新しい画材は、色の種類も多彩で絵具にはなかった鮮やかな色もあり、かつ、その表面に偶発的なシワやたれなどを比較的起こしやすいという特徴がある。それゆえ、ピカソをはじめ20世紀初頭の前衛画家たちはしばしばリポランを採用していた¹²。実際にピカソが《鳥籠》に対してリポランを使用したかどうかは現時点では判断しがたいが、ここでは同じ色彩でも絵画表面のマチエールに変化を与えるピカソの工夫を見ることができよう¹³。

また、画布の側面を観察すると、茶色、そしてわずかに青色や白色の絵具をみとめることができる。さらに、画布の生の色がそのまま残されているととらえることが可能な部分もあるため、使用された画布はピカソ自身によって地塗りが施されたものとも仮定できよう。なお、本稿では、画布表面から数えて絵具層の第1層目を「地塗り」と表記する。また、引っかけによって表層が削り取られた部分からは、白色や茶色、ないしは青色などが露出しているのであった。

以上のように、《鳥籠》が制作された1925年頃のピカソの絵画制作の背景や作品表面の目視観察を踏まえると、本作にも絵具の層が幾重にも重ねられていると推測でき、その様を検証することは、ピカソの創作のメカニズムを知る一助となるだろう。1925年前後のピカソの静物画についてはジュアン＝レ＝パンでピカソが携帯していた画帳に構想や下描きが残されているものの、《鳥籠》のためのスケッチは確認できていない。そのため、完成作へと至るまでの過程を現時点では習作から追うことは難しい。したがって、本作の表層下の情報や可視光線下では得難い情報を得るために、非破壊・非接触による数種類の科学調査を試みたのである。

2. 科学調査

《鳥籠》に対して、目視での表面観察では掬い取れない情報と様々な手法の調査を行った上での総合的な視点を得るべく、2017年から2023年にかけてX線写真撮影、斜光写真撮影、紫外線写真撮影、赤外線写真撮影、そして蛍光X線分析といった非破壊・非接触による一連の科学調査を実施した。最初の科学調査は、調査を実施した2017年当時、東京理科大学に所属していた中井泉氏と阿部善也を中心に行われた第1次蛍光X線分析であった。2021年には、東京藝術大学の塚田全彦氏を中心となりX線写真の撮影を、そして、2022年には吉備国際大学の太下浩司が中心となり紫外線写真、斜光写真と赤外線写真の撮影を実施し、さらに2023年には同氏が中心となり第2次蛍光X線分析を行った。適宜、先行調査結果を参照しながら段階的に各調査を実施したため、ここから調査実施の時系列に沿って結果を報告する。

2-1. 第1次蛍光X線分析

《鳥籠》を対象とした第1次蛍光X線分析は、阿部、孝岡、塚本により2017年11月に行われた。この調査は、阿部が当時所属していた東京理科大学理学部第一部応用化学科の中井泉教授の研究室が実施した分析調査の一環として行われたものである¹⁴。後述する蛍光X線分析装置を含む複数の可搬型の分析装置が大原美術館の展示室および収蔵庫に持ち込まれ、同館の所蔵する油彩画や歴史的なガラス製品を対象とした非破壊かつオンラインでの理化学的な分析が実施された。《鳥籠》はこの調査の分析対象のひとつであり、時間的な制約のために作品全体を分析することはできなかったが、当時の問題意識に基づいて作品中の6点 (p1からp6) 【図3】を選定し、材質および技法の推定を目的とした非破壊の蛍光X線分析を実施した。

第1次蛍光X線分析に使用された可搬型蛍光X

11 Gertrude Stein, *The Autobiography of Alice B. Toklas*, New York, Harcourt, Brace and Company, 1933, p. 173; Elizabeth Cowling, *op. cit.*, 2006, p. 111.

12 Marilyn McCully, "Picasso et Ripolin", Michael Raeburn et al. ed., *Picasso express*, Antibes, Musée Picasso, 2011, pp. 27-35.

13 一方で、ピカソが絵具によってリポランの見かけを模倣している例もある。Kimberley Muir, Allison Langley, Aniko Bezur and Francesca Casadio, "Scientifically Investigating Picasso's Suspected Use of Ripolin House Paints in *Still Life*, 1922 and *The Red Armchair*, 1931", *Journal of the American Institute for Conservation*, vol. 52, no. 3, 2013, pp. 156-172. なお、果物の描写では、黄色の絵具によるハイライトの描写を囲むかのようにやや暗く沈んだ橙色に見える部分があり、そこに強い光を当てると光を反射する粒子のようなものを確認できた。1952年以前に撮影された《鳥籠》のモノクロ写真を見ると果物の暗い橙色の部分に相当する範囲は白く写っている。『みずゑ』第335号、1933年1月、32頁。; Christian Zervos, *Pablo Picasso: vol. 5, œuvre de 1923 à 1925*, Paris, Cahiers d'art, 1952, p. 183.

14 この調査には、当時中井研究室の大学院生であった平山愛里氏、日高遥香氏、赤城沙紀氏の3名が参加し、《鳥籠》の分析にもご協力いただいた。ここに記して謝意を表したい。

線分析装置は、当時、中井研究室が所有していたアワーズテック株式会社製の100FAである。この装置は、文化財応用を目指して中井研究室がアワーズテック株式会社と共同で開発したものであり、西洋油彩画や日本画を含む多くの文化財の研究で利用実績がある¹⁵。この装置は、X線源として金属パラジウム (Pd) ターゲットのX線管球 (最大出力50 W)、検出器としてシリコンドリフト検出器 (X線入射窓は金属ベリリウム Be 製の薄板) を搭載している。装置ヘッドの内部を小型の真空ポンプによって減圧することでアルミニウム (Al) までの軽元素の検出を可能としており、測定ヘッドの先端には窓材としてカプトン製フィルムが取り付けられている。この装置は、市販されている可搬型蛍光X線分析装置としては、唯一、「白色X線励起モード」と「単色X線励起モード」という2種類の励起モードを切り替えて利用できる。前者はPdターゲットから生じた白色X線をコリメータで直径約2mmに集光してから分析対象に照射し、軽元素から重元素まで幅広い元素の検出が可能である。一方、後者では装置に内蔵されたモノクロメータによって励起X線をPd-K α 線に単色化してから対象に照射し、エネルギー7から20 keVの範囲に吸収端を持つ重元素の高感度な検出に適している。調査時には全ての測定点において、これら2種類の励起モードを切り替えながら測定を実施したが、本稿は元素の組成に基づいた材質・技法の同定を目的としたものであるため、より幅広い元素の情報が得られる白色X線励起モードの測定で得られた結果のみを報告する。積算時間は実効時間 (live time) で100秒、管電圧は40 kVとし、管電流は検出器の不感時間 (dead time) が30 %未満になるように自動調整した。装置ヘッドには小型のCMOSカメラが内蔵されており、測定点を直接観察できる。測定は非破壊かつ非接触で実施し、装置ヘッドの先端と作品の距離は約5mmになるよう調整した。本装置はハンドヘルド型ではないため、測定時には装置ヘッドをラボジャッキに固定した状態で使用した。必要に応じてラボジャッキごと

安定な台の上に設置したり、作品の方を適宜回転したりすることで、測定点に対して装置の位置を合わせた。

絵具層に塗布された色料の推定を行う前に、作品の下部側面に露出していた絵具層の下層部分 (p6) で得られた蛍光X線スペクトルを【図A-6】に示す。なお、本稿で図示するスペクトルでは、検出された蛍光X線の各ピークに対して元素記号のみを帰属し、線種 (K α 、L α など) の記載については省略してある。2.3 keVに鉛 (Pb) のM線 (M α : 2.3 keV)、9~16 keVの範囲にPbのL線 (例、L α : 10.6 keV、L β : 12.6 keV、L γ_1 : 14.8 keV) が明瞭に検出されており、塩基性炭酸鉛 (2PbCO₃・Pb(OH)₂) を主成分とする白色顔料であるシルバーホワイト (lead white) が地塗りとして画布に塗布されていることが確認された。さらに、6.4 keVに鉄 (Fe) のK α 線が検出されていることから、地塗りの茶色い色調は何らかの土性顔料 (earth pigment) によるものと推定される。また、スペクトル上にはごく微量ながらカルシウム (Ca) および亜鉛 (Zn) が検出されており、これらを含む何らかの顔料、例えば炭酸カルシウム (CaCO₃) から成る白亜 (chalk) や、酸化亜鉛 (ZnO) から成るジンクホワイト (zinc white) が地塗りに含まれている可能性が想定される。他にもAl (K α : 1.4 keV)、ケイ素 (Si, K α : 1.7 keV)、リン (P, K α : 2.0 keV)、クロム (Cr, K α : 5.4 keV)、ニッケル (Ni, K α : 7.5 keV)、銅 (Cu, K α : 8.0 keV) のK線が微弱ながら検出されているが、これらのうちAl、Cr、Niについては装置のシャーシに使用された金属等に由来する信号であると考えられる。19から25 keVの範囲に検出されているいくつかのピークは、管球のターゲット材であるPdのK線のトムソン散乱 (K α : 21.2 keV、K β : 23.8 keV) およびコンプトン散乱 (K α : 約19.6 keV、K β : 約21.9 keV) である。散乱X線以外にも、20 keVを超える高いエネルギー領域にいくつかのピークが検出されている。これらはふたつの蛍光X線信号が同時に検出器に到達した際に、それらの合計値のエネルギーとして検

15 阿部善也、権代紘志、竹内翔吾、白瀧絢子、内田篤典、中井泉「可搬型X線分析装置を用いる『国宝 紅白梅図屏風』の金地製法解明」『分析化学』第60号、2011年、477-487頁。; 赤城沙紀、阿部善也、和泉亜理沙、平山愛里、村串まどか、中井泉、下山進「可搬型紫外可視吸収/蛍光分光分析装置の開発および葛飾北斎肉筆画の非破壊オンライン分析への応用」『分析化学』第68号、2019年、519-525頁。; 阿部善也、寺島海、古山月、村串まどか、谷口陽子、高嶋美穂「非破壊オンライン分析による国立西洋美術館所蔵2作品の自然科学的調査—カルロ・ドルチ《悲しみの聖母》およびヤーコプ・ヨルダース（に帰属）《ソドムを去るロトとその家族》」『国立西洋美術館研究紀要』第26号、2022年、25-47頁。

出されるサム (sum) ピークであり、地塗りに多く含まれる Pb の L 線のサムピークに帰属できる。透過力の高い X 線を用いた分析では、測定点の表面からの情報だけでなく、少なからず内側からの信号も同時に検出される。よって、地塗りに含まれていたこれらの元素の蛍光 X 線、特に比較的高いエネルギー領域に検出される Pb-L 線などは、絵具層の測定でも下層由来の信号として検出されることになる。

絵具層に使用された色料の推定として、まず敷布にある植物模様の緑色部分 (p1 および p2) の分析結果について説明する。黄色味の強い緑色部分 (p1) で得られた蛍光 X 線スペクトルを【図 A-1】に、青味が強い緑色部分 (p2) の蛍光 X 線スペクトルを【図 A-2】に示した。比較のため、これらの蛍光 X 線スペクトルには前述した地塗り (p6) のスペクトルも破線で表示してあり、各スペクトルの強度は Pd-K α 線のコンプトン散乱により規格化してある。地塗りに含まれていた元素に加えて、p1 ではバリウム (Ba) の L 線 (例、L α : 4.5 keV、L β_1 : 4.8 keV、L β_2 : 5.1 keV) と、カドミウム (Cd) の K 線 (K α : 23.1 keV) が検出された。また、p6 に比べて、p1 では Zn-K 線の強度が大幅に増加した。さらに、p6 と比べて 2.3 keV のピークの形状が明らかに鋭くなっており、p1 では Pb-M 線だけでなく硫黄 (S) の K 線 (K α : 2.3 keV) も一緒に検出されていると考えるのが妥当である。特徴的な重元素である Cd は、硫化カドミウム (CdS) を主成分とする黄色顔料であるカドミウムイエロー (cadmium yellow) に由来すると考えられる。カドミウムイエローは硫化亜鉛 (ZnS) と混合することで白味が増すとされるため、p1 で検出された Zn は黄色顔料由来である可能性があるものの、前述したようなジンクホワイトの形の Zn が共存している可能性も十分に考えられる。Ba はおそらく白色顔料として利用された硫酸バリウム (BaSO₄) に由来する元素であろう。ただし、硫酸バリウムと硫化亜鉛が混合した白色顔料のリトポン (Lithopone) の形で利用された可能性や、硫化カドミウムとの混合物で

ある黄色顔料のカドモポンイエロー (cadmopone yellow) として利用された可能性も考えられる。ここまで述べてきた色料はいずれも黄色または白色の顔料であるが、p1 は緑色であり、何らかの青色の色料を混合する必要がある。当時使用された青色顔料として、アルミン酸コバルト (CoAl₂O₄) から成るコバルトブルー (cobalt blue) のようなコバルト (Co) 化合物が代表的であるが、p1 では Co は検出されていない。あるいは、フェロシアン化鉄 (Fe₄[Fe(CN)₆]₃) から成るプルシアンブルー (Prussian blue) も当時利用された代表的な青色顔料であるが、p1 と p6 で検出された Fe-K 線の強度に大きな差は見られず、地塗りとして塗布された土性顔料以外に Fe 化合物が存在するとは考えづらい。ここでスペクトルの低エネルギー領域に着目してみると、p1 では微弱ながら Si-K 線が検出されていることがわかる¹⁶。Si を含む青色顔料として、青金石 (lazurite: (Na, Ca)₈(AlSiO₄)₆(SO₄, S, Cl)₂) などの方ソーダ石グループの鉱物を主成分とする半貴石のラピスラズリを粉末化して得られる天然ウルトラマリン (natural ultramarine) や、粘土などを原料としてこれを模倣した人工物である合成ウルトラマリン (synthetic ultramarine) が挙げられる。本調査の蛍光 X 線分析ではこれら2種類のウルトラマリンを識別することはできないが、おそらくは天然または合成のウルトラマリンをカドミウムイエロー (またはカドモポンイエロー) と混合することで緑色を得たと考えてよいだろう。なお、油彩画の緑色顔料として Cr あるいは Cu を主成分とする化合物が一般的に利用されたが、p1 においてこれらの元素はほとんど検出されていない。青味が強い緑色部分 (p2) では、p1 に比べて Ba-L 線と Cd-K 線の強度が減少した。黄色顔料の割合を減らすことで緑色の色調を調整したのであろう。なお、p2 では p1 に比べて Pb-L 線および Zn-K 線の強度が増加している。Pb はシルバーホワイトに由来するものと推定されるが、Zn はジンクホワイトに由来する可能性の他に、カドミウムイエローに含まれる硫化亜鉛の割合が p1 と p2 で異なる可能性

16 【図 A-1】に示した蛍光 X 線スペクトルにおいて、Si-K 線は p1 だけではなく、比較として示した地塗りの p6 からも検出されている。これは、地塗りに含まれる土性顔料に由来するものであると考えられる。Si-K 線はエネルギーが低く、透過力がきわめて弱いいため、地塗りに由来する Si-K 線が p1 で検出されているとは考えづらい。したがって、p1 で検出された Si-K 線は地塗りではなく絵具層 (の比較的表層) に由来すると判断できる。

も考えられるだろう。

続いて、窓から覗く青空に描かれた雲の分析結果として、白色の雲 (p4) と黄色がかった雲 (p5) の分析結果について説明する。これら2点の蛍光X線スペクトルについては、それぞれ【図A-4】および【図A-5】を参照のこと。まず白色部分のp4では、地塗り (p6) に比べてZn-K線の強度が大幅に増加しており、白色顔料としてジンクホワイトが塗布されているものと判断できる。Ba-L線の強度は地塗りに比べてほとんど変化していないことから、BaとZnの双方を含む白色顔料であるリトボンが使用された可能性は否定されたと言ってよいだろう。また、p4では地塗りに比べてCa-K線の強度も増加しており、白色顔料に白亜などのCa化合物が少量混合されている可能性が考えられる。これに対して、黄色がかった雲 (p5) では少量ながらBa-L線とCd-K線が検出されており、これらは黄色顔料に由来する元素であると判断できる。前述した緑色部分の2箇所 (p1およびp2) のスペクトルの比較でも同様であったが、この作品内でBa-L線とCd-K線の間には強度の増減に対応関係が見られた。よって、これら2元素は別々の色料ではなく単一の色料に含まれる可能性が高いと考えられ、この場合はCdとBaの双方を含む黄色顔料であるカドモボンイエローの利用が想定される。カドモボンイエローは、純粋なカドミウムイエローに比べて定着力は劣るものの、安価で入手しやすかったとされる。

最後に、バルコニーの欄干の黒色部分 (p3) の分析結果について説明する。蛍光X線スペクトルは【図A-3】を参照のこと。地塗りに比べ、この点ではジンクホワイトに由来すると考えられるZnのK線が増加した他に、CaおよびPのK線が明瞭に検出され、ハイドロキシアパタイト ($\text{Ca}_{10}(\text{PO}_4)_6(\text{OH})_2$) を主成分とする象牙または動物の骨を燃やすことで得られる黒色顔料であるアイボリーブ

ラック (ivory black)、またはボーンブラック (bone black) が用いられていると推定される。また、p3では地塗りに比べてFe-K線の強度が増加しており、さらにマンガン (Mn) のK線 ($K\alpha$: 5.9 keV) が検出されたことから、二酸化マンガン (MnO_2) を含む土性顔料であるバーントアンバー (burnt umber) も一緒に利用されているものと考えられる。

第1次蛍光X線分析の結果を【表1】にまとめた。推定された色料をまとめると、まずこの作品の地塗りはシルバーホワイトを主体とし、少量の土性顔料を含む。絵具層の色料については、分析した5点では最大で4種類 (シルバーホワイト、ジンクホワイト、白亜、硫酸バリウム) の白色顔料と、黄色顔料としておそらくカドモボンイエロー、青色顔料として天然または合成のウルトラマリン、黒色顔料としてアイボリーブラックまたはボーンブラック、さらには赤茶色としてバーントアンバーを含む土性顔料の利用が推定された。これらの色料はいずれも《鳥籠》が描かれた1920年代に容易に入手可能であったと予想され、また本作の前年 (1924年) に制作された1点を含む他作品の理化学的な研究でも利用が指摘されている¹⁷。以上より、第1次蛍光X線分析によって《鳥籠》の地塗りの組成と絵具層に使用された各種色料に関する基本的な知見が得られた。一方で、本調査では測定されたのは作品上のごく限られた点であり、また透過力の高い蛍光X線分析を用いた調査のみであったため、本稿で主題とする塗り重ねやマチエールなどの技法に関して考察することは困難であった。

2-2. X線写真による観察

《鳥籠》の下層の情報を得るべく、2021年1月に東京藝術大学保存科学研究所の塚田全彦氏、小椋聡子氏、塚本がX線写真【図4】を撮影した¹⁸。X線写真では、質量の小さい元素の顔料を主成分と

17 J. K. Delaney, J. G. Zeibel, M. Thoury, R. Littleton, M. Palmer, K. M. Morales, E. R. de la Rie and A. Hoenigswald, "Visible and Infrared Imaging Spectroscopy of Picasso's *Harlequin Musician*: Mapping and Identification of Artist Materials *in Situ*", *Applied Spectroscopy*, no. 64, 2010, pp. 584-594.; L. Fuster-López, F. C. Izzo, C. K. Andersen, A. Murray, A. Vila, M. Picollo, L. Stefani, R. Jiménez and E. Aguado-Guardiola, "Picasso's 1917 Paint Materials and Their Influence on the Condition of Four Paintings", *SN Applied Sciences*, no. 2, article 2159, 2020.; M. Ghirardello, V. Gonzalez, L. Monico, A. Nevin, D. MacLennan, C. S. Patterson, M. Burghammer, M. Réfrégiers, D. Comelli and M. Cotte, "Application of Synchrotron Radiation-based Micro-analysis on Cadmium Yellows in Pablo Picasso's *Femme*", *Microscopy and Microanalysis*, no. 28, 2022, pp. 1-10.

18 X線写真撮影に使用したのは、アールテック株式会社製の携帯型X線撮影装置IPF-21、ならびにGE Inspection Technologies製のイメージングプレートとイメージングプレートスキャナCRxFlexである。本調査には、当時、東京藝術大学保存科学研究所の教授であった桐野文良氏、大学院生であった堀口明日馨氏にもご協力いただいた。ここに記して謝意を表したい。

する絵具が塗られた箇所は、X線を透過するため黒く写り、反対に質量の大きい元素を主成分とした絵具が塗られた箇所は、X線を吸収し白く写る。なお、質量の小さい元素であっても使用された絵具の密度が高い(厚塗りなど)と、写真では白く写る場合がある。

本作では、画面左上部の彫像の影のような黒色部分は、X線を透過している。一方その上層に描かれた彫像の顔のうち、耳や目のように見える白色描写の一部は顕著にX線を吸収している。影と比較すると顔の造形を思わせる赤茶色の描写もX線を吸収しているが、耳や目の白色と比較するとX線の吸収度合は低い。これは、顔の描写に使用された赤茶色絵具に含まれる顔料元素の質量が大きいというよりは、影の描写の上層に重ねて赤茶色の層が描かれたがゆえに、その部分の密度が増している結果と考えられる。加えて、その右に位置する欄干模様の黒色、さらには木枠の中央縦の棧を挟んだ鳥籠の黒色部分も、X線を透過している。対して、これらの背後に位置する空の淡い青色の描写部分や鳥籠の鳥の黄緑色部分、その周囲に描かれた若干青味がかった印象の厚塗りの白色は、その筆跡が顕著に見て取れるほど写真に白く写っており、X線を吸収する質量の大きい元素を主成分とする絵具が用いられていることを示している。

また、作品中央付近から下部にかけてやはり赤茶色で描かれたテーブルと、その上に置かれた果物の橙色、およびその影の黒色はX線を透過し、同じくテーブル上に描かれた植物模様の敷布に用いられた濃薄が異なる2種の緑色や淡い青色は、X線を吸収している。

これらの情報は、前述の第1次蛍光X線分析の結果や、後述する第2次蛍光X線分析の情報と照らし合わせても、使用が推定される絵具の顔料元素の性質と適応していると言えるだろう。一方で本写真からは、下層に別の絵が存在することを示すようなイメージはみとめられなかった。

2-3. 紫外線写真、斜光写真および 赤外線写真による観察

阿部らが行った第1次蛍光X線分析に基づく調査報告、および塚田氏らによるX線写真撮影と塚

本の解題を受け、《鳥籠》の絵画表面の状態を観察するために、紫外線写真、斜光写真および赤外線写真を撮影した。撮影は、2022年12月に行った。可視光線写真(通常写真)、紫外線写真および斜光写真の撮影にはNikon製デジタル一眼レフカメラD5100を使用し、赤外線写真の撮影にはPENTAX製デジタル一眼レフカメラ645D IRを用いた。本稿に掲載する写真は、視認性を向上させるため、トリミングを施している。斜光写真では明るさおよびコントラストを調整し、赤外線写真ではグレースケールに変換している。以下に、本調査の結果を記す。

2-3-1. 紫外線写真による絵画表面の蛍光観察

本調査では、《鳥籠》の紫外線写真【図5】を撮影し、絵画表面における蛍光を観察した。撮影は、作品に向かって右側手前から紫外線を照射して行った。撮影時には、調査環境を薄暗くし、適切なシャッタースピードを設定することで、室内照明などの不要な光の写り込みを防止した。このようにして撮影した紫外線写真からは、絵画表面に蛍光を示す部分と示さない部分が存在することが確認された。

まず、蛍光を示す部分に関しては、比較的明るい描写部から青色～青緑色の蛍光が観察され、特に鳥籠の左下に描かれた橙色の果物は赤色の蛍光を発していた。可視光線写真【図1】の明るい描写部において青色～青緑色の蛍光が確認されたことから、本作にはワニスが塗布されている可能性が示唆される。そして、赤色の蛍光を示す部分については、ワニスが青色～青緑色に蛍光することを前提とした場合、この赤色の蛍光は絵具由来のものである可能性が高い。また、画面下段に描かれた青色様および緑色様の敷布にある植物模様からは、それぞれ異なる蛍光特性が確認され、青色の蛍光と青色以外の蛍光が観察された。これらの蛍光特性の違いは、ワニスの塗布状態や絵画技法に起因していると考えられる。

一方、紫外線写真において蛍光を示さない暗い撮像部分も認められた。その要因としては、①絵具が紫外線を吸収して蛍光を発しない、②絵画表面に塗布されたワニスが発光しない、③絵具およびワニスの蛍光が微弱であるため紫外線写真

にとらえられなかったなどが考えられる。今後、より詳細な分析を行うことで、これらの現象の解明が進むと考えられる。

2-3-2. 斜光写真による絵画表面の微細構造の観察

絵画表面の微細な凹凸を観察することを目的とし、画面右の側面から《鳥籠》に対し白色光を照射し、斜光写真【図6】を撮影した。

可視光線写真【図1】と斜光写真【図6】を比較した結果、可視光線写真では確認できなかった凹凸が、斜光写真において明瞭にとらえられた。これらの凹凸は、絵具の筆致による起伏、経年変化に伴う画面のシワ・波打ち・折れなどに起因すると考えられる。ただし、これらの凹凸は極めて微細であり、調査時に目視では確認することができなかった。また、斜光写真からは、画面表面に残る筆跡や絵具の質感もとらえられた。

2-3-3. 赤外線写真による絵画表面および下層の観察

絵画表面および下層の状態を観察するために、《鳥籠》の赤外線写真【図7】を撮影した。撮影は、作品に対して左右の手前から赤外線を照射し行った。

赤外線写真において、上層の絵具が赤外線を透過する場合、下層に白色の地塗りが施され、その上に赤外線を吸収しやすい木炭などによる素描が存在すれば、この素描を観察することができる。しかし、撮影した赤外線写真【図7】と可視光線写真【図1】を比較した結果、本作においては輪郭および構図が一致していることから、目視で確認できる構図と異なる下層の素描は認められなかった。

次に、絵画表面の絵具における赤外線応答を分析した。赤外線写真において明度が高い部分には赤外線を反射しやすい絵具が、明度が低い部分には赤外線を吸収しやすい絵具が使用されていることが確認された。さらに、同じ色相の絵具間で赤外線写真に写った明度を比べ、明度が異なる場合、これらの絵具には異なる色材が含まれていると推定される。例えば、赤外線写真において、画面下

段の敷布に描かれた植物模様の周辺部は、植物模様や背景に比べて明度が低く、赤外線を吸収しやすいことが確認された。可視光線写真では、このような描写は明確に認められないことから、当該部の下層に異なる色材が存在する、または混色により赤外線を吸収しやすい絵具が使用されている可能性が考えられる。

2-4. 第2次蛍光X線分析による絵具の推定

《鳥籠》に使用された絵具を推定するため、2023年12月、既報のXRF装置を用いて¹⁹、蛍光X線分析法(XRF)による調査を行った。本法による測定点を【図8】に示し、分析結果を【表2】にまとめた。なお、本稿では絵具層を論ずることから、本調査により顔料を判別し、絵具の種類を推定した。絵具の種類および絵具に含まれる顔料については『新装版 絵画材料事典』に記載された内容をもとに推定を行った²⁰。この結果を以下に述べる。

画布側面に絵具層の下層が露出しているp17は、淡い茶色を呈していた。分析の結果、Pb(鉛)のみが検出されたことから、そこにはPbを主成分とした白色顔料を含むシルバーホワイトが使用されていると推定された。また、この淡い茶色は、シルバーホワイトの経年変色または汚れによる影響である可能性が考えられる。同様に、画布側面のp1も淡い茶色を呈しており、分析の結果、Fe(鉄)、Zn(亜鉛)、Pbが検出された。Pbは前述のp17と同様に絵具層の下層に塗布されたシルバーホワイトに由来すると推測される。一方、FeおよびZnはPbに比べて微量であることから、側面ではなく絵画表面に塗られた絵具に由来する可能性が高い。また、p1の淡い茶色も、p17と同様に変色または汚れによる影響であると考えられる。他の測定点についても分析を行ったが、地塗りとしてPbを主成分とするシルバーホワイトが塗布されていることから、全ての測定点においてPbが検出されたと推察される。

画布表面の白色に塗られたp8のXRF分析では、Fe、Zn、Pbが検出された。Pbは地塗りのシルバーホワイトに由来すると推測されるため、絵画表

19 下山進、野田裕子「低レベル放射性同位体を線源として用いる簡易携帯型蛍光X線分析装置及び日本古来の絵馬に使用された無機着色料の非破壊分析への応用」『分析化学』第49巻第12号、2000年、1015-1021頁。

20 R. J. ゲッテンス、G. L. スタウト著、森田恒之訳『新装版 絵画材料事典』美術出版社、1999年(初版)。

面に塗布された白色はZnを主成分とするジンクホワイトであると推定された。また、調査時の目視観察により、p8の下層には茶色の層が存在することが確認された。これに基づき、下層の茶色はFeを主成分とするバーントシエナであると判別される。

次に、本作に使用された茶色の成分を推定するため、p2、5、9、10、11において分析を行った。この結果、Fe、Zn、Pbが検出された。前述の結果から、地塗りにはシルバーホワイト、絵画表面にはジンクホワイトが使用されていることが確認されている。このことから、本測定点で検出されたPbおよびZnは、それぞれシルバーホワイトおよびジンクホワイトに由来すると考えられる。また、茶色の顔料成分としてFeが検出されたことから、本作に使用された茶色は、Feを主成分とするバーントシエナであると同定された。さらに、これらの茶色はバーントシエナとジンクホワイトを混合して調製された可能性が高いと推測される。

橙色および赤茶色の成分を特定するため、p12および15の分析を実施した。これらの測定点では、Fe、Zn、Hg（水銀）、Pbが検出された。Hgが検出されたことから、赤色はバーミリオンであることが推定された。また、目視による観察によって、これらの描写の下層に茶色が存在することが確認された。このことから、下層の茶色はFeを主成分とするバーントシエナであると推定された。したがって、p12および15においては、地塗りのシルバーホワイトの上にバーントシエナが塗布され、その上にバーミリオンとジンクホワイトを混ぜて描写されていると推定される。この層構造は、色彩の複雑さと豊かな表現を可能にしていることを示唆している。

さらに、黄色の成分を特定するため、p14の分析を行った。本測定点では、前述のp12（果物の描写）と同様に、Fe、Zn、Hg、Pbが検出された。p14の黄色は、p12と同様の橙色の描写層の表面に塗布されている。このため、p12で検出された元素が、p14においても検出されたと考えられる。しかし、黄色の主要成分となる元素は検出されなかった。このことから、黄色の顔料は本法の蛍光X線分析では検出されない軽い元素を主成分とするレーキ顔料であると推定される。また、p13に見

られる光沢のある粒子状物質についても分析を行った結果、前述のp12（果物の描写）と同様に、Fe、Zn、Hg、Pbが検出された。一方で、光沢のある粒子状物質に特有の元素は検出されなかった。このことから、この粒子状物質もXRF測定では検出されない軽い元素を主成分とすると推定される。これらの黄色のレーキ顔料および光沢のある粒子状物質の特定には、更に詳細な検討を要する。

本作では、茶色と同様に青色も多用されている。この青色の成分を特定するため、p3、4、6、16を分析した。p4および16では、ZnおよびPbが検出されたが、ウルトラマリンブルー以外の青色に含まれる顔料成分の元素は検出されなかった。ウルトラマリンブルーは本法では検出されない軽い元素のみから構成されるため、この青色はウルトラマリンブルーであると消去法的に推定される。これにより、これらの青色はウルトラマリンブルーとジンクホワイトを混合して調製されたと考えられる。p3では、Fe、Zn、Pbが検出された。また、目視により、p3の下層には茶色の層が確認された。このことから、シルバーホワイトによる地塗りの上にバーントシエナが塗布され、その上にウルトラマリンブルーとジンクホワイトを用いて描写されたと推定される。一方、p6の青色からはCo（コバルト）が検出された。これにより、p6に使用された青色はコバルトブルーであると判別された。これらの分析結果から、本作にはウルトラマリンブルーとコバルトブルーの2種類の青色が使い分けられていることが明らかとなった。

最後に、灰色の成分を特定するため、p7の分析を実施した。この結果、Fe、Zn、Pbが検出された。黒色としてボーンブラックおよびランプブラックが候補として挙がるが、ボーンブラックに含まれるCa（カルシウム）は検出されなかった。このことから、本作に使用された灰色の黒色成分は本法では検出されない軽い元素のみから構成されるランプブラックであると推定される。さらに、Znが検出されたことから、白色としてジンクホワイトが使用されていると考えられる。したがって、本作の灰色は、ジンクホワイトとランプブラックを混ぜ合わせて調製されたものであると推定される。また、目視観察により、この灰色の下層には茶色の描写が施されていることが確認された。こ

のことから、下層に塗られた茶色はFeを主成分とするバーントシエナであると同定された。

3. 日本人画家による観察： 科学調査の結果とともに

1926年6月15日から7月10日にかけて、パリでピカソの大規模な個展が開催された。それは、当時のピカソの主要な取引相手であったポール・ローザンベール画廊の改装後のお披露目を兼ねたものであり、そこに《鳥籠》も出品されている²¹。その出品目録では制作年ごとに分けて作品名が掲載されており、同展は、1918年から1926年までに手がけられた合計58点の出品作のうち、1923年から1925年作のものが9割を占める近作展であった。1925年作のものは17点が展示され、作品名からそれらのうち12点は静物画であったことが推測できる。

パリを拠点に、1925年5月より4年ほど続く滞欧生活のさなかであった画家 伊原宇三郎 (1894-1976) もまたこの展覧会を訪れたのだろう。実際、伊原が所有していたピカソ関係資料(個人蔵)には同展の出品目録が含まれており、また『滞欧手帳』(世田谷美術館蔵)には同展についてのメモが残されている。伊原にとって、パリでの活動の中心はピカソの作品をできる限りつぶさに観察することであり、少しでもパリでピカソの作品が公開されているという情報を得るとこまめに足を運んだという²²。その一環として、伊原は少なくとも1914年から1927年にかけてピカソが制作した総合的キュビズムによる静物画やシュルレアリスムの傾向を見せる人物画の模写を手がけており、模写15点の現存が確認されている²³。それらは大部分がオ

リジナルと比較するとかなり小ぶりであるが、それにもかかわらず、細かな引っかきや絵具の盛り上げなど絵画の多層構造に関わるピカソの表現技法が、緻密に写し取られているのであった。

伊原の観察に基づいて再現されたものという前提を外すことはできないものの、それを押しても当時のピカソの創作のメカニズムを理解する歴史的証言として、伊原による一連のピカソ作品の模写や観察記録を見過ごすことはできないだろう。特に、模写15点のうち、11点が静物画であることは注目に値する。また、伊原が所有していた1926年のピカソ展の出品目録【図9】には、伊原によると考えられるメモと簡単なスケッチが残されている。それらと伊原による模写とを照らし合わせることによって、少なくとも模写の原作9点が、1926年のピカソ展に出品されていたと考えられる²⁴。そのため、同展の機会に集中してピカソの作品を観察し、模写に励んだ伊原の姿が想像される²⁵。現存する模写15点が伊原によるピカソ作品の模写の全てであったとは言い切れないが、9点という模写の数そのものもまた、1926年のピカソ展が伊原にとって重要な出来事であったことを物語ってくれるだろう。

伊原は観察したピカソの作品を技法面から分析・解剖することに専念し、あたかも自分自身がその絵を描くかのように、ピカソ作品の技法について活字で表現できる限り具体的に伝えることを使命ととらえ、それが、依然としてピカソの実作品を見ることができると同時に乏しかった日本国内の状況においては、有益になると考えていた²⁶。このような考えに基づき、伊原は古典主義的様式によるピカソの1921年の作《泉》【図10】について、技

21 出品目録 *Exposition d'œuvres récentes de Picasso chez Paul Rosenberg, juin-juillet 1926*, no. 51.

22 伊原宇三郎「ピカソに憑かれる」『美術手帖』第90号、1944年1月、72-73頁。

23 江川佳秀「伊原宇三郎作ピカソ作品の模写をめぐって」『徳島県立近代美術館研究紀要』第1号、1993年、3-21頁。

24 9点とは、《ピカソ『プリント地のスカーフ』模写》(no. 31)〔Z. V: 323〕、《ピカソ『胸像、コンボート、マンドリン、赤い敷物』模写》(no. 25*)〔Z. V: 364〕、《ピカソ『窓の前のマンドリンとリンゴを盛ったコンボート』模写》(no. 33)〔Z. V: 376〕、《ピカソ『ギターとオレンジを盛ったコンボート』模写》(no. 44)〔Z. V: 446〕、《ピカソ『彫刻家』模写》(no. 50)〔Z. V: 451〕、《ピカソ『コンボートと窓ガラス』模写》(no. 42*)〔Z. V: 380〕、《ピカソ『静物』模写》(no. 49)〔Z. V: 462〕、《ピカソ『マンドリン、コンボート、石膏の腕』模写》(no. 48)〔Z. V: 444〕、そして《ピカソ『ギター、楽譜、メロンの薄切りのあるコンボート、女の胸像』模写》(no. 55)〔Z. V: 377〕。模写はすべて徳島県立近代美術館蔵。なお、() の数字は1926年のピカソ展の出品目録に記載された作品番号であり、出品目録の個別の作品としては同定し難いが出品記録のある作品には「*」を付した。また、() の記号はピカソの原作を特定する略語となる。

25 模写9点のうち《ピカソ『ギター、楽譜、メロンの薄切りのあるコンボート、女の胸像』模写》を除き全て裏面に「1925年」の年記がある。この記載は伊原が模写をした年を示すのか、原作の制作年を示すのかは判断し難い。《ピカソ『プリント地のスカーフ』(模写)》と《ピカソ『胸像、コンボート、マンドリン、赤い敷物』(模写)》、そして《ピカソ『窓の前のマンドリンとリンゴを盛ったコンボート』(模写)》の原作は1924年作のものであるため、「1925年」という年記が原作の制作年を示すのであれば、齟齬が生じる。一方で、年記が模写した年を示すのであったとしても、1925年作の原作群を1926年のピカソ展以前に公の場で目にできる機会はほぼなかったはずである。

26 伊原宇三郎「ピカソ論を書く迄」『みづゑ』第336号、1933年2月、27頁。

法、色彩、構図の観点から詳細に分析した記事を1929年2月に『美術新論』で発表している²⁷。同号はコレクターである福島繁太郎の収集品に関する特集号であり、《鳥籠》同様に《泉》もまた福島のパリの邸宅で実見することができたのだろう。伊原はこの記事において、「ピカソの繪具の用法は千變萬化である。時には『鳥籠』『馬』の様に極度に繪具を使つて盛上自身と、盛上に表れる筆觸^{ツツシユ}の性質を別殊の要素として扱ふ場合もあれば、此處には無いが「マダムピカソ」の連作の様に全然おつゆのものもある。又『母と子』の様に兩者の相織られた例もあれば、油繪具でないリポランで特殊な盛上与輝きを作ることもある。砂も依然として使用されてゐる。そして繪具の厚薄に拘らず畫面の觸感を重大に考へてゐる」や「布で拭ひ取るとか、上層を引搔いて下の繪具を覗かせるとか、淡くかけて下を透かせるとか時に應じて必要な手法をとるが」と述べていることから²⁸、繪具の盛り上げやおつゆ描き、リポランや砂、さらに下層の活用によって、ピカソが絵画の肌理の触覚性を積極的に表現として取り込んでいたと伊原は理解していたことがわかる²⁹。

伊原の『滞欧手帳』にもまた福島のところで見たとピカソの《泉》について、画家は色彩、筆触、調子や量感などの項目別に詳細なメモを残している。前述の『美術新論』に寄せた記事は、このようなメモを基に伊原が記したのであろう。例えば、『滞欧手帳』にある「意識的のもり上げ（地に他の線あり）」というような記述が、『美術新論』で仄めかされている《泉》でのピカソによる画布のリユース、つまり、「トアルは比較的細目のものが選ばれてゐるが、多分古い繪を塗りつぶして描いたと思はれる繪具の盛り上が此繪に關係なく残つてゐる」という記述へと結び付いたのだろう³⁰。

さらに、塗り残しによって、表層のイメージ形成に「地塗」を組み込むというピカソの手法につい

ても伊原は触れている。《泉》が描かれた順序を示す中で、「先づ、體以外の下半を濃い緑、空の部を淡いテルドンプル、體の部を明るい灰色のテルドンプル、岩と壺とを同じ濃い色で地塗がしてあつて、それが隨處に残されて畫面全體をつゝむ上品な雰圍氣を作つてゐる。そしてその上を他の主要な色彩が全然自由に表面で活躍してゐる。・・・（中略）・・・そして此明暗兩色の界に濃い地塗が残されて兩色が柔かに連絡している」と複数の「地塗」の色を挙げ、部分的に「地塗」の層と表層とが調和することによって作品全体が完成されていると分析しているのであった³¹。

一方で伊原による《鳥籠》の模写はなく、かつ、伊原のピカソ関係資料の中にも本作に直接関係する資料を確認することはできず、また、『滞欧手帳』でも福島のパリの拠点で見ることができたピカソ作品のメモとして《鳥籠》に相当する作品名が記されているばかりである。しかしながら、1933年に発表した「ピカソ論」の中で、伊原は1925年のピカソの絵画について次の様に記している。

「又、キュービズム時代に、繪具のマチエールの違つた性質を、繪畫的要素の一つとする爲に、繪具の厚薄の上に、砂が混じられ更に紙片、布等がこれに加へられたが、此處では繪具以外のものを使つてゐない代りに、繪具によるパートの性質に、實に多種多様な効果を持たせ、特には漆の様なリポラン（エナメルの上等の様なもの）をも併せ用ゐ、或部分には浮彫的に盛り上げを施し等してゐる。色彩の上で特に注意されることは、黒、白の極端なるものが異状な効果を収めてゐること、コバルト、ゼール・エムロード、カドミウム・シトロン、シエンヌ、ブリュール・ゼルミヨン、オークル・ジョン、ルージュ・プッゾールの系統の原色が、そのまゝ好んで使はれてゐること、今迄の彼には想像し難いギョレやガランスが大膽に用ゐられ

27 伊原宇三郎「ピカソのLa Fontaine」『美術新論』第4巻第2号、1929年2月、44－53頁。なお、これとはほぼ同じ内容の文章が別所でも発表されている。伊原宇三郎「ピカソのマチエール」外山卯三郎『新洋書叢書一 パブロ・ピカソ』金星堂、1930年、29－48頁。

28 伊原宇三郎、前掲書、『美術新論』1929年2月、49頁&51頁。

29 また、次のようなエピソードも伊原は伝えている。「今一度はモンパルナスのグランド・ショームエール繪具屋で、まるで學生でなければ使はない様な、枠に張つてある安トアルを四五枚買つて、小脇に抱えておらへ出て行つたのを見た。・・・（中略）・・・其時、一體ピカソは何故こんな安トアルを使ふのだらうと、一寸不思議に思つたが、其後、さうした安トアルに、オムブル一色のおつゆでデッサンし、安トアル特有のザラへした面を、一つの素材の性質として生かし、上等のトアルでは何うしても出せない効果を其處に出してゐるのを見て、私は宛で、私の有罪を宣告された様に感じたことであつた。」伊原宇三郎「ピカソ論」『みづゑ』第335号、1933年1月、35頁。

30 伊原宇三郎、前掲書、『美術新論』1929年2月、46頁。

31 なお、伊原は福島コレクションにおける他のピカソの作品についても、「地塗」の層が完成作に活かされていると指摘している。上掲書、46－47頁。

る様になったこととである」³²。

興味深いのは、この伊原による言説が、キュビズム期に成されたマチエールの実験が、1925年に絵具のみによって再び試みられていることを指摘している点である。このようなキュビズム由来のマチエールの探究という流れは、ピカソによる絵画の多層構造の活用や引っかきの技法の展開と密接に重なる。先の伊原による「ピカソ論」が掲載された『みづゑ』は、ピカソ特集号であった。それは、おそらく1932年6月よりパリのジョルジュ・プティ画廊で始まり、チューリッヒ美術館に巡回したピカソの大回顧展の開催を受けて組まれた企画であったのだろう。無論、伊原自身は《鳥籠》も出品された1932年のピカソ展を見てはないが、パリの福島邸で本作を実見していたわけであり、『みづゑ』の同号にはその作品図版も掲載されている。そのため、「ピカソ論」における1925年のピカソの作品の記述の対象には、《鳥籠》も含まれていたととらえることは不自然ではないだろう。

それでは、特にマチエールの探究において1920年代半ばの絵画がキュビズム期のそれと密接に結び付くとすれば、キュビズム絵画での様々な工夫は、絵具のみでもってどのように立ち現れていったのだろうか。一連の科学調査の結果を通じて、《鳥籠》の表層の下に別のイメージが存在する可能性は低いこと、しかしながら、本作は絵具の質感や絵具層の下層を活かすことによって構築された絵画である、という点を確認することができた。さらに、目視でも表層の隙間や薄塗りからかろうじてバーントシエナの茶色を見ることができ、第2次蛍光X線分析による8か所(p3・6・7・8・12・13・14・15)の測定結果は、表層に塗布された絵具とは異なる色であるバーントシエナが下層に存在することを裏付けた。また、画布の側面を目視で観察する限り、右側側面の表層には黒色を帯びた色彩が目をとらえるものの、その下には、暗い青色、そして茶色を見ることが出来る。これら

らも、本作では白色の層の上に、広範囲でバーントシエナの茶色や青色、あるいは両方が重ねて塗布されている可能性が考えられる。つまり、白色層とその上にある茶色層の上か、あるいはさらに塗布された暗い青色層の上に、各モチーフの描写を行うというピカソの制作工程が推定される。また、各モチーフの描写はあたかも色面を貼り付けたかのように、線描よりも色面でもって絵具の層を部分的に重ねながら描いたように見えるが、下層もまた、ある種の疑似コラージュのごとく茶色や暗い青色による色面が画面に広がっていた可能性が考えられる。このような色面でもってイメージを形成するピカソの手法については、福島コレクションのひとつであるピカソの1923年作の絵画《馬》(Z. V: 147) が1934年に日本で公開された際に、その作品に対して画家 伊藤廉が同様の点を分析しているのであった³³。

さらに、《鳥籠》の敷布の描写に着目すれば、白色層の上に茶色層があり、それを引っかいた線を手掛かりに塗布された暗い青色層を地として植物模様が描かれ、さらにそれを縁取るかのように明るい青色が部分的に塗り重ねられたと推定できる。それによってこの部分は少なくとも3層の絵具層を有していると考えられるが、このような積層される絵具層によるピカソの制作については伊原も理解していたようである³⁴。また、敷布における暗い青色の色面の輪郭は、微細な引っかきでとられている。微細な引っかきは表層に散見されるが、表現のための引っかきというよりは、ケガキ、ないしは伝統的なフレスコ画の技法を絵画制作に応用したかのように、引っかき線をあてとして構図をとるためのものであったと考えられる。このような手法はまた、輪郭線が不在した色面による《鳥籠》画面構成を支えるひとつの柱となっていると言えるだろう。

結びに代えて

1920年代前半のピカソの静物画を語るにローラ

32 伊原宇三郎、前掲書、1933年1月、28頁。

33 「パートは充分厚く筆で塗り上げられて、馬と背景とは、色面と色面との接触によつて、物體の輪郭を作り、(この色面と色面とのつながりの間に、下の輪廓線が見えてゐたり、全くかくされてゐたりする部分に注意せよ) 輪廓を説明する線を後からはひいてない」。伊藤廉「ピカソの『馬』」『美術』第9巻第2号、1934年2月、頁数記載なし。

34 伊原の『滞欧手帳』には、自身による《ピカソ『ギター、トランプ、ガラスのコップ、新聞』(模写)》(制作年不詳、個人蔵)の原作であるピカソの絵画に関する観察記録があり、原作は少なくとも5層の絵具層を有していることが図説されている。孝岡睦子、前掲書、2025年、215-216頁。

ンド・ペンローズは、ノミにほとんど食べられて骨組みだけとなったピカソの服の有り様から、X線写真とキュビズムの初期段階の作品がもつ透明性について回想している³⁵。この回想は、直にピカソの静物画へと結び付くものではないが、あえて1920年代前半の静物画について言及する際にペンローズがX線という物体の内部、表層では見えがたい部分を可視化する科学技術とピカソの作品が有する特質との共通項を思い出したというエピソードは示唆に富む。本来、作者しか認識し得ない絵具層の下層を創造的に活用することは、絵画の透明性に触れる行為でもあるのだろう。

《鳥籠》には、現時点での科学調査によって下層に表層とは異なるイメージが存在する可能性は低いことが示された。一方で、下層には表層の描画とは異なる色彩、主にバーントシエナの茶色の存在が推定でき、それによって、本作は多層構造を有する絵画であるという仮定が補強されることとなった。そして、下層にあると推定される茶色層に微細な引っかけを施し、表層の描画の手がかりとしながら、ピカソが制作した可能性が考えられた。白色層とその上に広がるバーントシエナの茶色層、そしてその層に引っかけ線あたりをつけ、さらに部分的に面として暗い青色層を置いた上でモチーフを描く、そして最後には表層をまた引っ

かくという一連の制作プロセスが見えてくる。つまり、引っかけにより下層を露出させて表層のマチエールに変化を与えつつも、その前段階として下層にケガキを付すことで表層のイメージを形成するという、ピカソの多様な下層の創造的活用を理解することができた。そして、《鳥籠》におけるケガキや《3人の踊り子たち》の下層に適用されたグリザイユ画法といった古典的な技法とキュビズム絵画におけるマチエールの探究が、キュビズム様式と古典主義的様式をピカソが併用していた1920年代半ばに交差するということは、技法の点においても同じく複数の形式が共存状態にあったということではないだろうか。

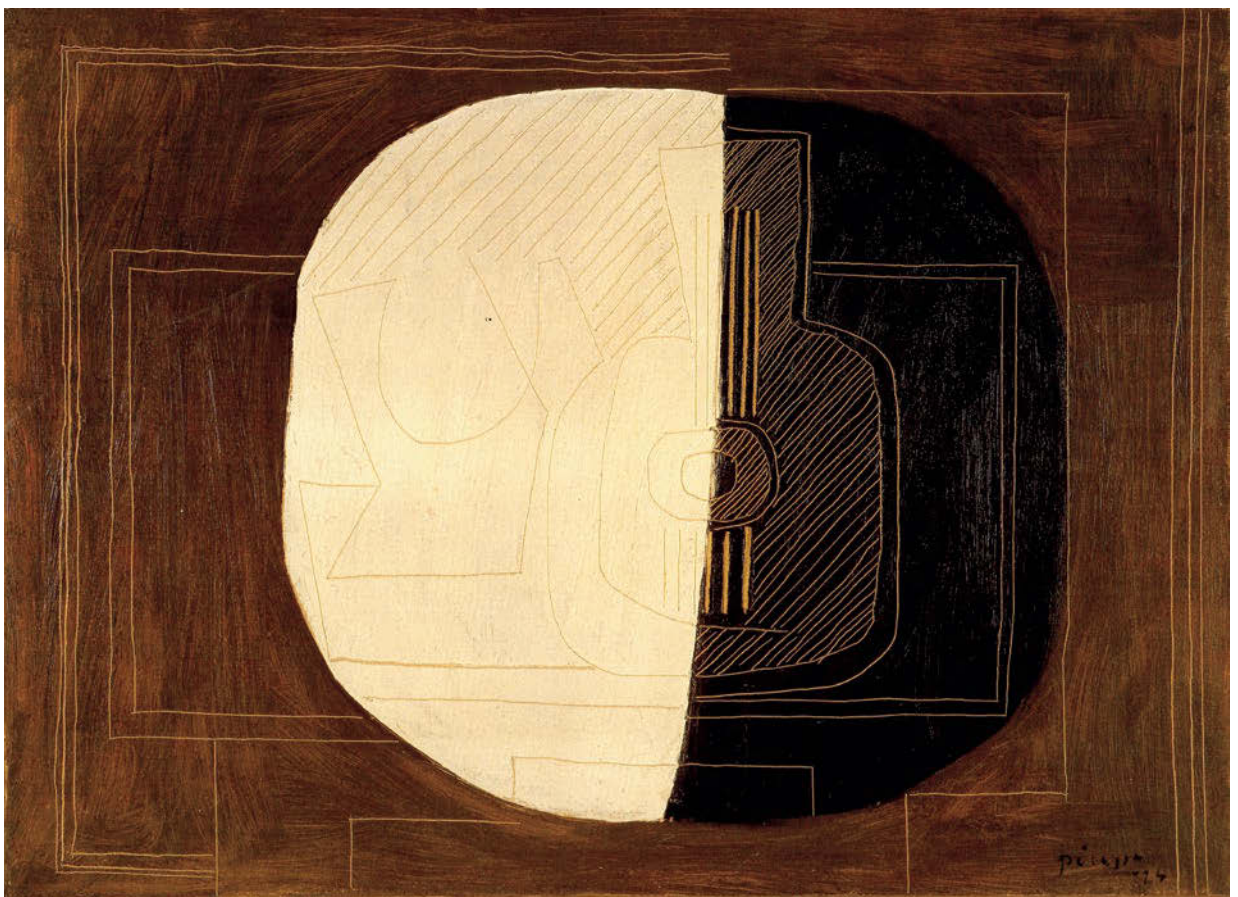
伊原が《泉》を色彩、線描、マチエールなど絵画を構成する諸要素から一通り解説した後に述べた一文「これ等畫面の諸要素の組織、諧調、按分的配置（面積、強弱、寒温、筆觸、明暗等總ての點で）についてピカソは正しく一つの主張を持つてゐる。此處にある「鳥籠」及數多い彼の同傾向の作品は、モチーフの興味を第二にして此主張を強調したものと思ふ」を鑑みれば³⁶、《鳥籠》と1925年頃の静物画は視覚的イメージにとどまらない、まさにピカソにとっての「着想と技術的発見」の実験場であったと言える。

35 Roland Penrose, *op. cit.*, 1959, p. 224.

36 伊原宇三郎、前掲書、『美術新論』1929年2月、52頁。



【図1】 パブロ・ピカソ 《鳥籠》（1925年、油彩/画布、81.5×101.0cm、大原美術館、Z. V: 456）の可視光線写真
撮影：大下浩司



【図2】 パブロ・ピカソ 《ギターと果物鉢》 1924年末、油彩/画布、77.0×105.0cm、モナコ、ナーマッド・コレクション（Z. V: 378）
図版出典：Jean Sutherland Boggs, *Picasso & Things*, Exh. Cat., The Cleveland Museum of Art, The Philadelphia Museum of Art, Paris, Galeries nationales du Grand Palais, 1992, p. 209.



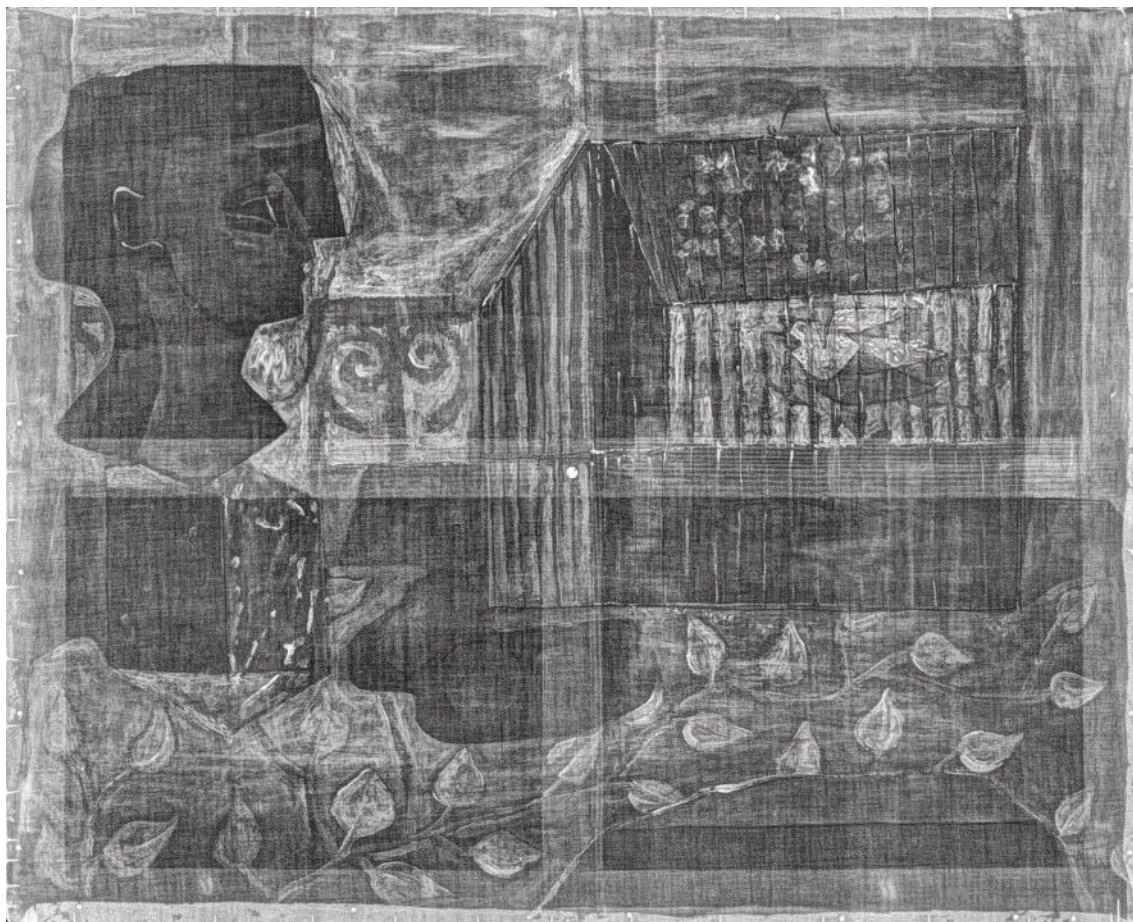
【図3】 パブロ・ピカソ《鳥籠》の第1次蛍光X線分析 測定点画像
制作：阿部善也

【表1】 第1次蛍光X線分析による結果

測定点	色相	主な検出元素*	推定された色材**
p1	黄色味の強い緑色	Si, S, Zn, Cd, Ba	白色: ジンクホワイト<Zn> 黄色: カドモポンイエロー<S, Cd, Ba> 青色: おそらくウルトラマリン<Si> (消去法的に推定)
p2	青味が強い緑色部分	Si, S, Zn, Cd, Ba	白色: ジンクホワイト<Zn> 黄色: カドモポンイエロー<S, Cd, Ba> (p1に比べて強度減少) 青色: おそらくウルトラマリン<Si> (消去法的に推定)
p3	黒色	P, Ca, Mn, Fe, Zn	白色: ジンクホワイト<Zn> 黒色: アイボリーブラックまたはボーンブラック<P, Ca> 茶色: おそらくバーントアンバー<Mn, Fe>
p4	白色	Ca, Zn	白色: 白亜<Ca>、ジンクホワイト<Zn>
p5	淡黄色	Ca, Zn, Cd, Ba	白色: 白亜<Ca>、ジンクホワイト<Zn> 黄色: カドモポンイエロー<Cd, Ba>
p6	茶色(地塗り)	Si, Ca, Fe, Zn, Pb	白色: シルバーホワイト<Pb>、白亜<Ca>、ジンクホワイト<Zn> 茶色: 土性顔料<Fe, Si>

* 測定点p1～p5では、地塗り由来と思われる元素を除く。

** < >内には蛍光X線分析で検出された元素との対応を記した。



【図4】 パブロ・ピカソ 《鳥籠》 のX線写真
撮影：塚田全彦



【図5】 パブロ・ピカソ 《鳥籠》 の紫外線写真
撮影：大下浩司



【図6】 パブロ・ピカソ 《鳥籠》の斜光写真
撮影：大下浩司



【図7】 パブロ・ピカソ 《鳥籠》の赤外線写真
撮影：大下浩司



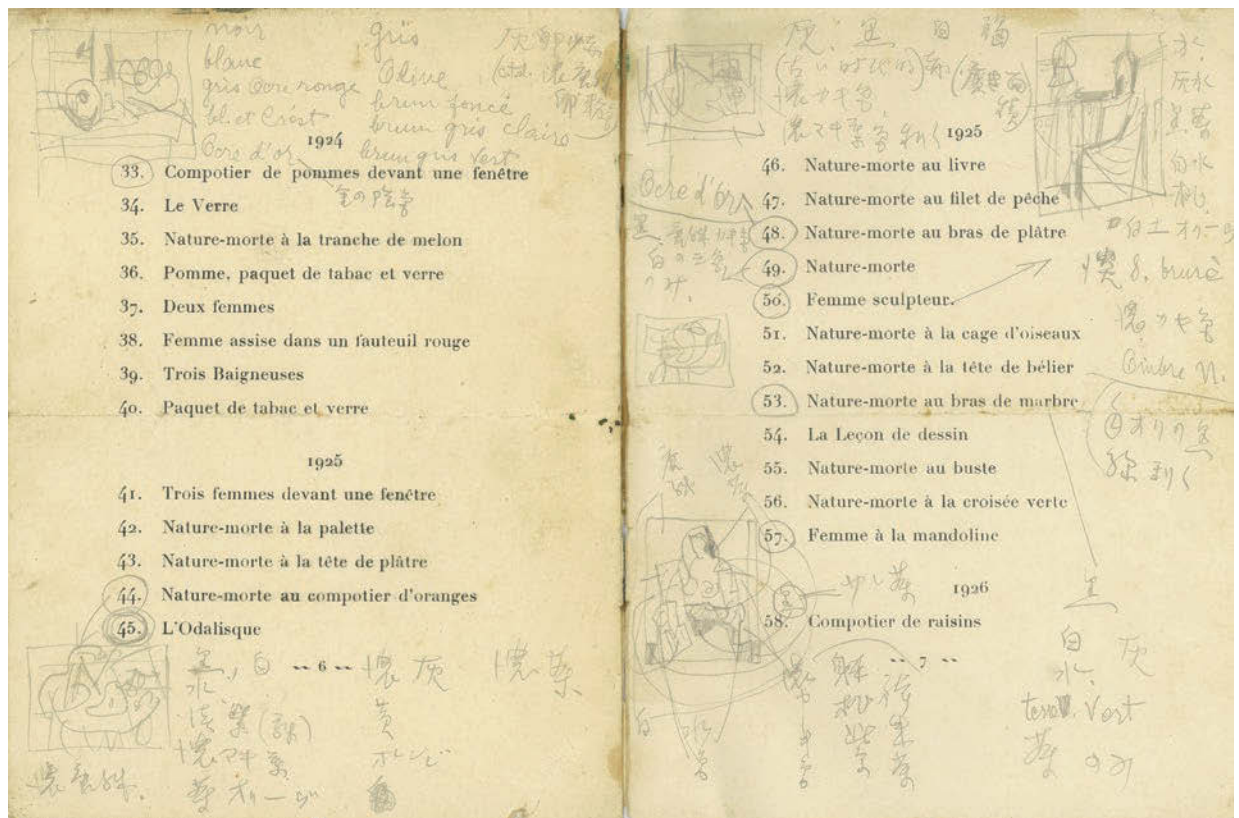
【図8】 パブロ・ピカソ《鳥籠》の第2次蛍光X線分析 測定点画像
制作：大下浩司

【表2】 第2次蛍光X線分析による結果

測定点	色相	検出元素	推定された絵具名(顔料の化学式)*
p1	地塗りの 淡い茶色	Fe、Zn、Pb	地塗りの白色:シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p2	茶色	Fe、Zn、Pb	茶色:バーントシエナ (Fe_2O_3) 白色:ジンクホワイト (ZnO) 地塗りの白色:シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p3	淡い青色	Fe、Zn、Pb	青色:ウルトラマリンブルー (天然: $3\text{Na}_2\text{O} \cdot 3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2 \cdot 2\text{Na}_2\text{S}$, 人工: $\text{Na}_{8-10}\text{Al}_6\text{Si}_6\text{O}_{24}\text{S}_{2-4}$) 白色:ジンクホワイト (ZnO) 下層の茶色:バーントシエナ (Fe_2O_3) 地塗りの白色:シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p4	淡い青色	Zn、Pb	青色:ウルトラマリンブルー (天然: $3\text{Na}_2\text{O} \cdot 3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2 \cdot 2\text{Na}_2\text{S}$, 人工: $\text{Na}_{8-10}\text{Al}_6\text{Si}_6\text{O}_{24}\text{S}_{2-4}$) 白色:ジンクホワイト (ZnO) 地塗りの白色:シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p5	表面に 露出した 下層の茶色	Fe、Zn、Pb	茶色:バーントシエナ (Fe_2O_3) 白色:ジンクホワイト (ZnO) 地塗りの白色:シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p6	濃い青色	Fe、Co、Zn、Pb	青色:コバルトブルー ($\text{CoO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) 白色:ジンクホワイト (ZnO) 下層の茶色:バーントシエナ (Fe_2O_3) 地塗りの白色:シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)

測定点	色相	検出元素	推定された絵具名(顔料の化学式)*
p7	灰色	Fe, Zn, Pb	黒色:ランプブラック(C) 白色:ジンクホワイト(ZnO) 下層の茶色:バーントシエナ(Fe_2O_3) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p8	白色	Fe, Zn, Pb	白色:ジンクホワイト(ZnO) 下層の茶色:バーントシエナ(Fe_2O_3) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p9	茶色	Fe, Zn, Pb	茶色:バーントシエナ(Fe_2O_3) 白色:ジンクホワイト(ZnO) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p10	茶色	Fe, Zn, Pb	茶色:バーントシエナ(Fe_2O_3) 白色:ジンクホワイト(ZnO) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p11	茶色(薄塗)	Fe, Zn, Pb	茶色:バーントシエナ(Fe_2O_3) 白色:ジンクホワイト(ZnO) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p12	橙色	Fe, Zn, Hg, Pb	赤色:バーミリオン(HgS) 白色:ジンクホワイト(ZnO) 下層の茶色:バーントシエナ(Fe_2O_3) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p13	光沢のある 粒子状物質	Fe, Zn, Hg, Pb	光沢のある粒子状物質:不明(不明) 赤色:バーミリオン(HgS) 白色:ジンクホワイト(ZnO) 下層の茶色:バーントシエナ(Fe_2O_3) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p14	黄色	Fe, Zn, Hg, Pb	黄色:レーキ顔料(不明) 赤色:バーミリオン(HgS) 白色:ジンクホワイト(ZnO) 下層の茶色:バーントシエナ(Fe_2O_3) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p15	赤茶色	Fe, Zn, Hg, Pb	赤色:バーミリオン(HgS) 白色:ジンクホワイト(ZnO) 下層の茶色:バーントシエナ(Fe_2O_3) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p16	画布側面には み出した青色	Zn, Pb	青色:ウルトラマリンブルー (天然: $3\text{Na}_2\text{O} \cdot 3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2 \cdot 2\text{Na}_2\text{S}$, 人工: $\text{Na}_{8-10}\text{Al}_6\text{Si}_6\text{O}_{24}\text{S}_{2-4}$) 白色:ジンクホワイト(ZnO) 地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
p17	地塗りの 淡い茶色	Pb	地塗りの白色:シルバーホワイト($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)

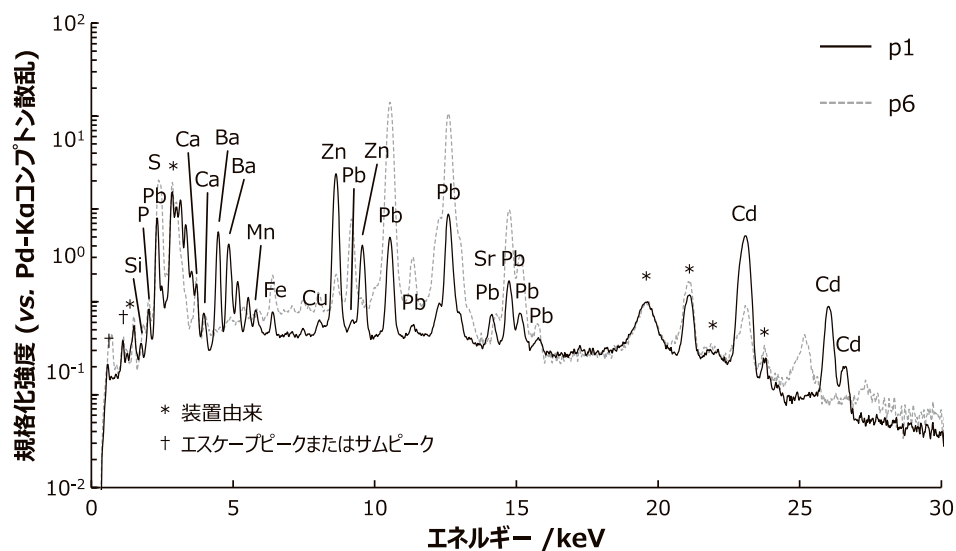
* XRFでは、絵具に含まれる顔料の成分元素を検出し、これをもとに顔料を判別して絵具の種類を推定した。表中には、絵具名を示し、()内には顔料の化学式を記した。



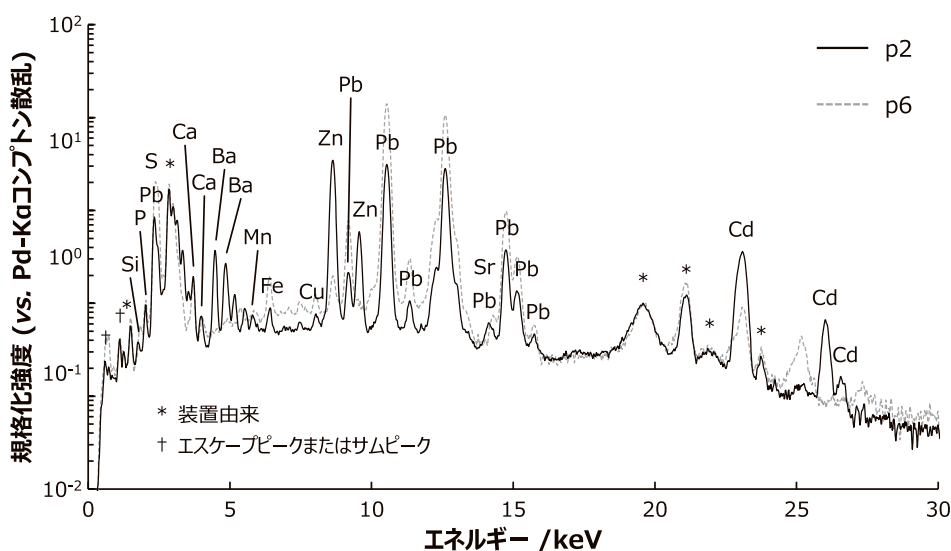
【図9】「ピカソ近作展」（1926年、パリ、ポール・ローザンベール画廊）出品目録、個人蔵
撮影：孝岡睦子



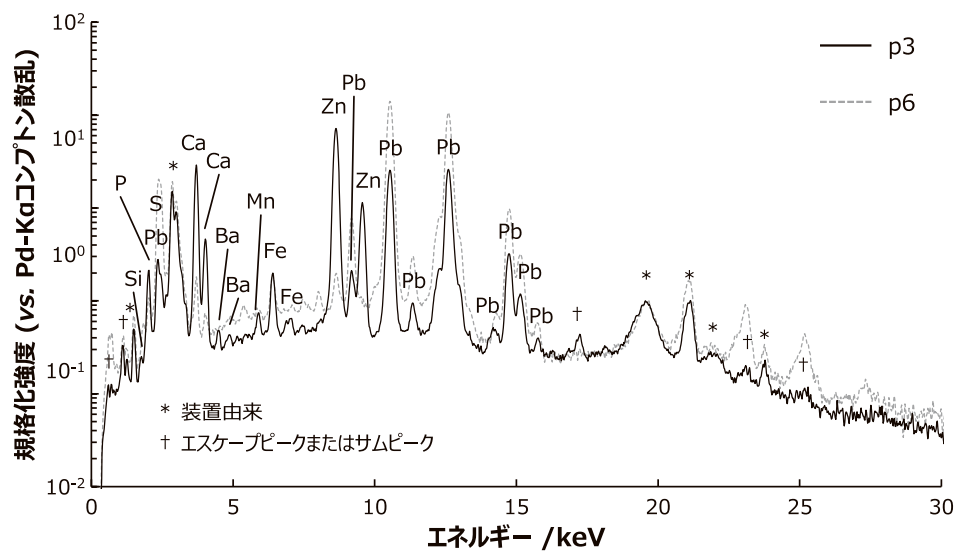
【図10】パブロ・ピカソ《泉》1921年、油彩／画布、64.0×90.0cm、ストックホルム近代美術館（Z. IV: 304）
図版出典：Josep Palau i Fabre, *Picasso: des ballets au drame (1917-1926)*, Cologne, Konemann, 1999, p. 279, no. 1047.



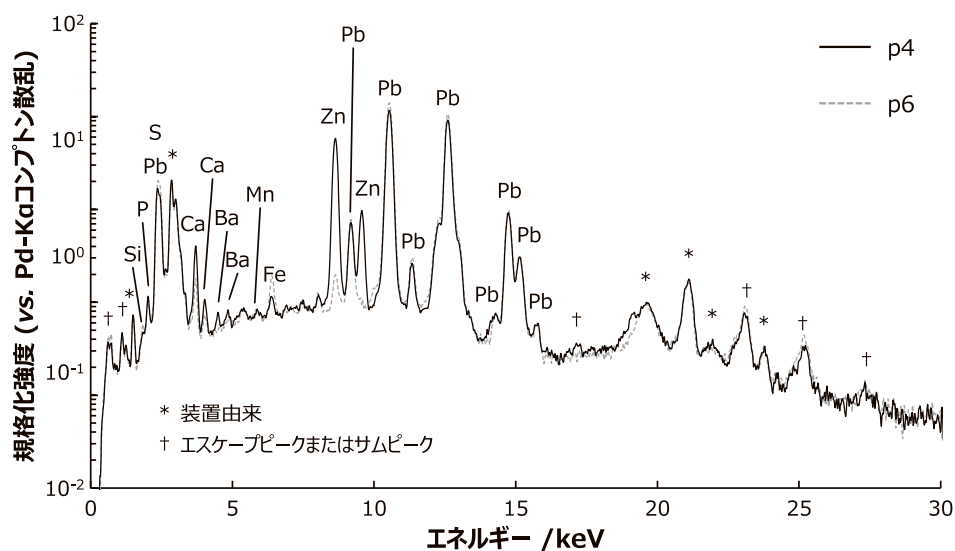
【図A-1】植物模様の緑色部分（p1）と地塗り部分（p6）の蛍光X線スペクトルの比較
制作：阿部善也



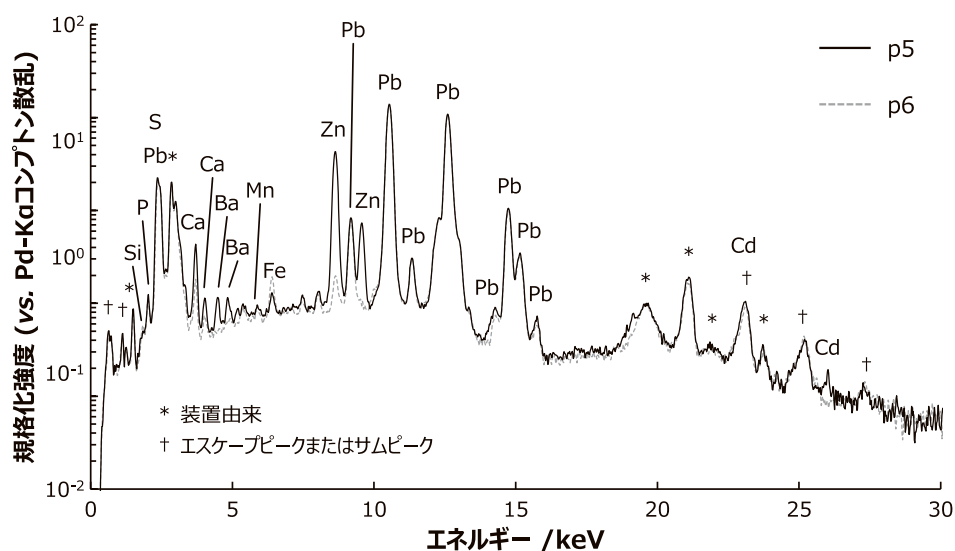
【図A-2】植物模様の緑色部分（p2）と地塗り部分（p6）の蛍光X線スペクトルの比較
制作：阿部善也



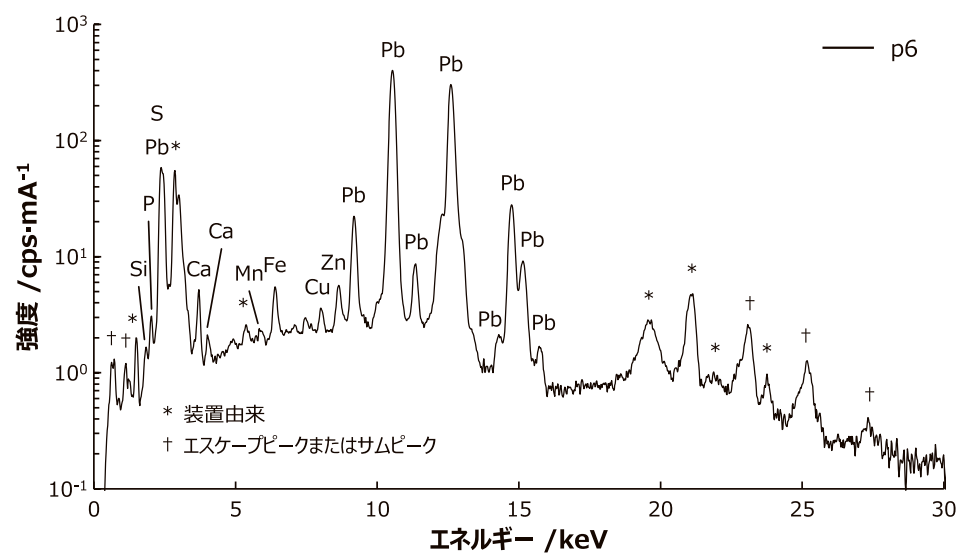
【図A-3】バルコニーの欄干の黒色部分（p3）と地塗り部分（p6）の蛍光X線スペクトルの比較
制作：阿部善也



【図A-4】 白色の雲（p4）と地塗り部分（p6）の蛍光X線スペクトルの比較
制作：阿部善也



【図A-5】 黄色がかった雲（p5）と地塗り部分（p6）の蛍光X線スペクトルの比較
制作：阿部善也



【図A-6】 地塗り部分（p6）の蛍光X線スペクトル
制作：阿部善也

謝辞

本稿執筆にあたり、塚田全彦氏（東京藝術大学保存科学研究室教授）、桐野文良氏（2021年調査当時 東京藝術大学保存科学研究室教授）、中井泉氏（東京理科大学名誉教授）、伊原乙彰氏、江川佳秀氏（2022年調査当時、徳島県立近代美術館主席）、野田尚稔氏（2022年調査当時、世田谷美術館学芸員）、伊藤まりん氏（2022年調査当時、世田谷美術館学芸員）、そして小林俊介氏（山形大学地域教育文化学部地域教育文化学科教授）をはじめ多くの方々にお力添えを賜りました。ここに深くお礼申し上げます。

倉敷考古館所蔵の安養寺第三経塚出土瓦経の 整理経過について ―ひかり拓本撮影―

A Report on the Surveying of the Sutra Tiles Excavated from An'yoji Daisan Kyozyuka in the Kurashiki Archaeological Museum Collection
—Utilization of the “Hikari Takuhon” App—

伴祐子 (公益財団法人大原芸術財団研究部研究員・学芸員)
BAN Yuko (Curator, Research Department, Ohara Art Foundation)

要旨

この整理報告では、倉敷考古館の所蔵資料である安養寺第三経塚出土の瓦経の再整理と画像記録について、その過程を報告するものである。

安養寺第3瓦経は昭和33年(1958)に安養寺裏山の発掘調査にておいて発見された遺物であり、発掘後の整理において、水を使用して瓦経を一枚ずつ分離し、文字を読み取り経種同定を行っている。資料はその後、紙で梱包し、木箱に立てた状態で保管されていたが、包み紙と木箱の経年劣化のため瓦経が崩壊する恐れが生じた。再整理では破損状況を記録し、個別にトレーに移し替え保管した。瓦経は劣化が激しく、報告書と照合しながら少量ずつ進める必要があり、記録には通常の写真に加え新たにひかり拓本を試みた。

ひかり拓本を用いても、すでに摩滅した文字を読み取る事は難しいが、瓦経表面の調整やスノコ状の跡、未報告の絵瓦の直線の浮かび上がりが確認できた。ひかり拓本は、撮影を進める中で精度を上げることが課題であるが、拓影は多くの情報を残すことに有効であることがわかった。

This is a report on the process of re-sorting and recording images of the sutra tiles excavated from An'yoji Daisan Kyozyuka (The Third Sutra Mound at An'yoji, a temple in Kurashiki) and kept at Kurashiki Archaeological Museum.

The sutra tiles in the third sutra mound in An'yoji are relics discovered on a hill behind the temple during an excavation undertaken in 1958 (Showa 33). After the excavation, using water, each one of the tiles were separated, the inscriptions were deciphered, and the sutras were identified. The tiles were then wrapped in paper and stored in an upright position in wooden boxes. However, due to deterioration of the wrapping paper and wooden boxes over time, there was a danger of the sutra tiles disintegrating. Therefore, in order to re-sort them, the damages were recorded, and each tile was transferred into an individual tray. The sutra tiles have deteriorated severely, and the re-sorting needs to be carried out little by little checking each one against the report. In addition to normal photographs, “Hikari Takuhon,” i.e., optical rubbing, a unique image processing technology, has also been attempted as a new form of recording them.

Even with “Hikari Takuhon” (optical rubbing), it is difficult to decipher the letters which have already worn away. However, it has enabled us to confirm how the surface of the sutra tile was adjusted, lattice-shaped traces, and the surfacing of hitherto unreported lines on picture tiles. While we do need to improve the precision of utilization of the “Hikari Takuhon” app, we have found that it is an effective means to retain a lot of information.

はじめに

倉敷考古館の所蔵資料である安養寺第三経塚出土の瓦経（以下 第三瓦経）は昭和三十三年（一九五八）に安養寺裏山の発掘調査にて発見された資料である。当時の整理では一枚ずつ紙で梱包し、木箱に立てた状態で保管されていたが、包み紙と木箱の経年劣化のため資料に破損の恐れが生じた。安養寺第三瓦経の性質上資料そのものの劣化も免れないため、状態を確認しながら継続的に整理を行っており、整理記録のなかに新たにひかり拓本を試みたため報告を行うものである。

経塚と瓦経

仏教経典を後世に残すために土中に埋納した場所を「経塚」と呼び、経塚の造営は寛弘四年（一〇〇七）の藤原道長の吉野大峯山への埋納例がもっとも古く、平安時代後期紀の藤原摂関期から院政期に盛んになり、目的を変化させながら近世まで造営されている。経塚は、釈迦入滅後に仏法の教えが失われる末法思想を背景に、未来の仏である彌勒（みろく）如来が五十六億七千万年後にこの世に現れ、衆生を救済するという彌勒信仰のもと、彌勒下生の際に地中から経典が湧き出るよう、経典を後世に残す目的で聖なる山への埋納が行われたとされる。

「瓦経」とは埋納される経典の一種であり、粘土の板に経典を刻み焼き上げたものである。埋納する経典は多くの場合は紙の卷子であり、金属や陶製の経筒に入れ、さらに陶製や石製の外容器に入れて埋納を行う。地上部は盛土に葺石や石塔などの標識を置く場合があるが、後世に上部構造が改変されるなど、当初からの形状が不明な場合も多い。瓦経は紙本経に比べて圧倒的に

数が少なく、遺跡としての経塚が日本国内で二〇〇カ所以上確認されているなかで、出土地が明確ではないものも含め瓦経は約五〇件程度が知られている。（注1）その中で紀年銘を持つ瓦経は八例あり、製作が行われていた時代は伯耆大日寺瓦経の延久三年（一〇五一）から伊勢小町塚瓦経の承安四年（一二七四）、までのおよそ一二〇年間が主流である。このほか天徳元年（一二二九）の紀年銘をもつ瓦経が二点知られる。（注2）これらは塔、五輪塔を捺印したものであり、安養寺の毘沙門堂付近から同様の瓦片も発見されているが、年代は不明である。（注3）その中で安養寺第三瓦経は應徳元年（一〇八六）の紀年銘をもっており、経塚全体においても、瓦経だけを見ても古い部類といえる。

安養寺経塚の発掘調査の概要

瓦経の出土した安養寺の経塚群は、岡山県倉敷市に所在する朝原山安養寺の裏山から昭和十二年（一九三七）に最初の一基が発見されており、これを第一瓦経塚としている。第一経塚の遺物は瓦経百九十六点、塔婆型が八点、土製宝塔一基があり、園田敬男氏、石田茂作氏、梅原末治氏により発見後の調査がなされ、昭和三十一年（一九五六）に国の重要文化財に指定された。（注4）現在は安養寺と東京国立博物館に収蔵されている。

続いて昭和三十三年（一九五八）に再び安養寺裏山から焼き物片が発見され、これをきっかけに、石田茂作氏と保坂三郎氏の両氏の指導のもと、瓦経塚の学術的な発掘調査が初めて実施された。倉敷市教育委員会と倉敷考古館が携わったこの発掘調査は、後の経塚研究においても重要なものであった。

続いて石囲いや経筒と思われる陶製の筒が発見され、これを第二経塚とし

注1 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所「文化財総覧Web GIS」

注2 関秀夫『平安遺文』一九八一

注3 大本琢寿「吉備考古八十八―九」一九五四

注4 梅原末治『安養寺瓦経とその他の遺物』一九五一吉備考古八十一

た。陶製経筒の下部から金銅仏が出土している。経筒外容器の中に在るはずの経筒は失われていたが、第二経塚は紙本経を埋納した経塚と断定できる。この後、第一経塚の抜き取り跡の確認調査中に第一瓦経塚からわずか数十センチの場所から発見された粘土の塊が第三瓦経塚である。

第三瓦経塚の粘土の塊となった瓦経は、三つのブロックに切断され倉敷考古館に運び込み、整理を行っている。瓦経は未焼成といって良いほど軟質であり、癒着した状態であった。現在知られる瓦経の中ではこのような状態の瓦経は他に例を見ない。方形の瓦経三〇二枚、塔婆形瓦経三十九枚、円形板状瓦製品十一枚分、塔型瓦製品一基分、ほか不明品数十点が出土している。当時、粘土塊の中から瓦経の単位を見極めて丁寧に取り出し表面を判読していく、このときに水と筆で表面を何度も清拭しているため、後に判読できなくなる可能性がすでに示唆されていた。経種の照会には大正新脩大藏經を用いている。第三瓦経には法華經をはじめ、仁王經上下巻、薬師經、不動經、阿弥陀經、寿命經、心經六部、願文、懺法（行法）など十種が判明した。特に願文に「應徳三年」の記年銘と「安養寺」の寺号も記されており、発掘による埋納状況に加えて年代の特定もされた経塚として重要な発見となった。これらは「安養寺瓦経の研究」（以後報告書と記載）において報告されている。（注5）

遺物の現状について

瓦経は瓦という名称ではあるが屋根材としての瓦を転用したものではなく、最初から経典を刻むために特別につくられたものであり、素焼きの焼き物の板の状態を指して瓦と呼んでいる。未来に残すための不朽性のある素材として経典の支持体に採用されているのであれば、本来なら第一瓦経同様に第三瓦経も焼成して瓦状に仕上がっているべき物なのである。現状をみる限りほ

は粘土の板である。木箱と新聞包みから出した瓦経は多くは亀裂が入り、分離している個体も多い。円形の瓦は大きな歪みと亀裂が見られたが、もともと破損の多い埋納位置であったと報告されているため、歪みは一次整理時からと考えられる。そのような状態の遺物であっても水分を含ませた後の適切な処置や、紙と木箱による保存環境の保持により、未焼成の粘土であってもカビは皆無であった。未焼成で粘土状であることが最も深刻なのは耐久性がきわめて低いことである。報告書によれば、瓦経の解説された文字は方眼紙に写したとあり、報告書に各経典の翻刻が一部掲載されている。しかしその他の書き写した資料や実測図などが考古館には残されていない。そのため、経種判定は既に為されているが、その根拠となった翻刻を含め、遺物の調査作成など再整理が必要である。

写真記録について

安養寺発掘調査に関わる写真も考古館には残されていない。しかし発掘調査に携わった当時の考古館主事 鎌木義昌氏（岡山理科大学教授）のご遺族が平成三年にガラス乾板を岡山理科大学に寄贈しており、その中に報告書に使用されている写真二十八枚分がガラス乾板に残されていた。フィルムも同時に寄贈されており、岡山理科大学学生にて整理が進められている。現在のところ出土した瓦経約三百五十五枚すべての写真は確認されておらず、ガラス乾板とフィルムの調査はひきつづき継続されている。（注6）

整理の手順

昭和三十六年『安養寺瓦経の研究』刊行に伴い整理・調査された瓦経のうち、一部は倉敷考古館にて常設展示している。一枚ずつ紙製の昆虫箱に入れ薄葉紙を緩衝材としており、ガラス蓋のまま展示していたが、紙箱部とガラ

注5 鎌木義昌編 一九五八『安養寺瓦経の研究』

注6 岡山理科大学博物館学芸員課程 二〇二四『備讃瀬戸地域の先史・古代遺跡を写したガラス乾板』『ひかり拓本プロジェクト』

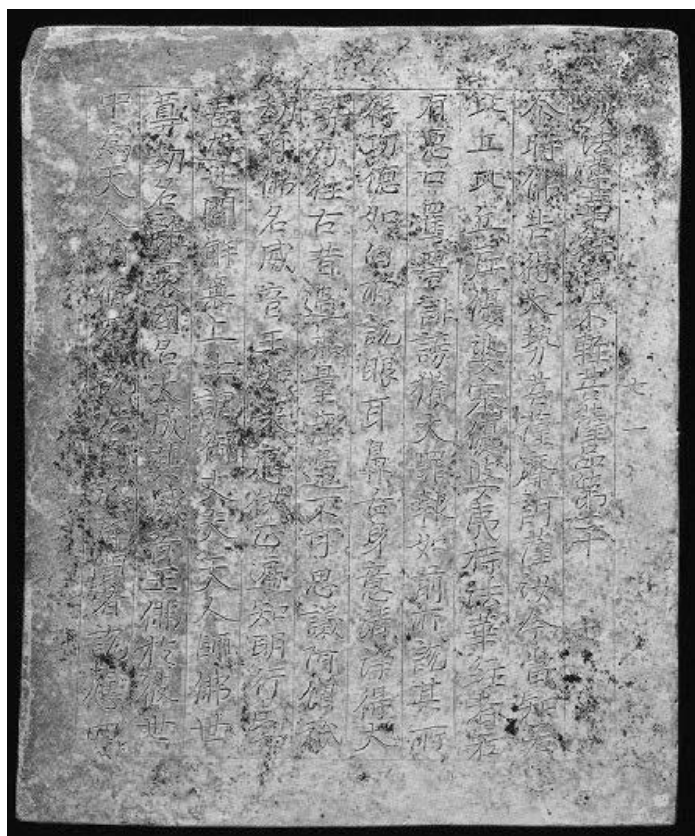


写真1：安養寺第一経塚 瓦経 法華経
倉敷市教育委員会提供

スのゆるみや欠損など経年による不具合が生じているため、現在は蓋を取った状態で展示している。それ以外の瓦経は、一枚単位で新聞紙に包み、木製リング箱十二箱に二十〜三十枚ずつ立てて収納されていた。新聞紙の日付が昭和三十五年、六年のものであるため、以後開梱されていないと思われる。木箱の釘は経年劣化により腐食し、底板や横板が外れている箱もあり、木箱の外圧を失った遺物は破損しているものもあった。加えて包みの新聞紙も経年劣化のため散壊する状態であり、内部にあったと思われる出土位置と経種の記された遺物カードが分離するなど混乱が見られた。

これらは平成二十八年（二〇一六）に、就実大学と倉敷考古館により、破損した木箱からコンテナに仮移動する整理を行っている。瓦経は台紙と和紙の包みを用い、経種ごとに分類し、遺物カードを同封した。記録のため開封

の際に斜光による写真撮影を行っているが文字は判読不明であった。同様の整理作業を引き続き行うが、コンテナに移された瓦経は観察を行い、台帳を作成する。木箱に残るものはひかり拓本の撮影の後、和紙で包み直して、遺物への負担を軽減するため一枚ずつ小型のトレーに移し替えた。

瓦経の拓本について

安養寺第三瓦経の判読を困難にしている理由の一つは未焼成による破損であり、もう一つの理由が、もともと文字の刻み込みが極めて浅いことである。第一瓦経塚の瓦経は焼成されており、文字もはっきりと判読できるが、比較すると文字の刻み込みが浅い。第一瓦経、第三瓦経ともに錐のような細く鋭い道具を使用して文字を書いており、第三瓦経においては針で書いたと表現しても良い細さである。通常の瓦経であれば写真のほかに拓本が用いられるが、未焼成の状態ともいえる軟質な状態であることから、拓本は行われていない。針書きのような文字の細さ、浅さから明瞭に拓影が得られるとも限らない。

瓦経はその発見が江戸時代に遡ることも多く、古瓦の一種として好古家に蒐集されたり、拓本がとられるなどしていた。とくに播磨極楽寺瓦経においては、姫路藩主酒井忠之が、発見された約五百枚すべてを拓本にとらせている。極楽寺瓦経は江戸時代にはすでに贈答されたり、明治維新後に散逸しており、確認されている瓦経は姫路城の堀から発見された五十一一点と、個人所有のものが知られているが、これは現物が失われていても瓦経の全容を知ることのできる例であり、拓影はじめ記録の重要性を示すものである。

ひかり拓本について

現代においては写真が拓本に変わる記録であるが、安養寺瓦経特有の問題として写真でも文字の判別が難しい点がある。今後も劣化の進行が想定される第三瓦経の記録としては、複数の記録法が必要と考え、ひかり拓本を試みることとした。

ひかり拓本は独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所が二〇二二年にクラウドファンディングにより開発を行い、二〇二三年に一般運用が開始されたアプリケーションである。本来の拓本とは、水を用いて紙を石造物などの対象物に貼り、その上から墨を乗せて文字や文様を写し取る伝統的な手法のことである。対してひかり拓本は、対象物に様々な角度で光を照射・撮影し、複数方向からできた影から画像を合成する技術である。(国立文化財機構 奈良文化財研究所)。撮影にあたってはタブレットやデジタルカメラ、スマートフォンなど一般的な機材を使用することができ、懐中電灯の光源で撮影可能である。石碑の研究に多く用いられているが、金石文や瓦などにも



写真2：安養寺第三経塚瓦経 心経
筆者撮影

応用することができ。対象物に直接接触しないため、劣化の進んだ第三瓦経には有効な手段と考えた。

写真2…安養寺第三瓦経の中で最も状態の良いグループのもので、経種は般若心経である。他の瓦経と比較するとやや黄色みを帯びており、幾分火を受けている可能性があるが軟質である。洗浄や剥離作業時の水分による縮み、ひび割れは他の個体に比べると少ないが、やはり文字のある面は摩滅して判読不明である。

写真3…は写真2のひかり拓本による画像である。罫線がより明瞭に確認できる。まっすぐな定規や刃物を押し当てたような線であり、引き搔いた粘



写真3：安養寺第三経塚 瓦経 心経 [ひかり拓本]
筆者撮影

土の塊は確認できない、文字が在ることは確認できるが、摩滅のため現在判読は難しい状態である。上下の界線と縦方向の罫線が十一本あり、線の間に文字が残存していることは確認でき、報告書によれば心経であり、裏表両面で完結する文字数になる。裏面は安全確保できる状態を確保できてから撮影することにし、今回は見送った。目視や写真よりも表面の砂粒が確認でき、精緻な胎土ではあるが水漉し粘土のみではないことがわかる。

写真4…仁王経 通常の写真でも文字が判読できる個体である。

写真5、6…仁王経（ひかり拓本） 通常撮影でも十分に文字が明確であるためひかり拓本にも文字が確認できるが、ひかり拓本では肉眼では確認で



写真4：安養寺第三経塚 瓦経 仁王経
筆者撮影



写真6：5の拡大 布目か [ひかり拓本]
筆者撮影



写真5：安養寺第三経塚 仁王経 [ひかり拓本]
筆者撮影



写真8: 円形瓦 10 (4) [ひかり拓本]
筆者撮影



写真7: 円形瓦 10 (4)
筆者撮影

きないスノコ痕のような横方向の単位と、布目も確認できる。

写真7・円形瓦 安養寺第三瓦経には十一枚の円形の瓦がみられ、六点については仏像などが描かれた絵瓦として報告されている。ひずみが非常に大きく、崩壊の度合いが最も激しい。石膏が入れられていることから発掘当初から状態がよくなかったことがうかがえる。包みのメモには「丸10(4)」とあったが、報告書図面の10のほか、報告されているものとは形状が一致しない。

写真8・円形瓦(ひかり拓本) 通常光でも曲線が多く見えていたため図像があることは想定されるが、この個体には直線がいくつも確認できる。仏像を描いた針描より若干太い線であるため整理時についた傷の可能性は無視できないが、直線を描いた絵瓦として形状は方形であるが伊勢山田旦過経瓦に曼荼羅の例があるため、円形瓦の直線が図像に関係ないとはいいたい。

おわりに

安養寺瓦経の再整理、ひかり拓本による記録は着手したばかりで途中経過である。確実に今後も劣化が進んでいくことが予想される瓦経に対して、通常行われる実測は資料の状況を見ると難しい。瓦経が基本的に規格品であること、また計測されている数値は報告されているため新たに実測は行わない。より多くの情報を残す手段としては写真とひかり拓本が適切である。今回のひかり拓本撮影では、曲線より直線に有効であることがわかった。報告書においては円形瓦経の曲線についてのみ触れ、図像の意味づけを見送っているため今後円形瓦の図像復元を重点的に行う。図像が明らかになることで、安養寺第三瓦経塚の持つ性格を検討することができる。五十六億七千万年を待たずして偶然発見され、経塚から地上に姿を現した瓦経、目的は変われども、これらを後世に引き継ぐことはミュージアムの重要な役目である。ひかり拓本をはじめ、新しい技術で記録を残すことが今後の瓦経研究の発展につながれば幸いである。

謝辞

朝原山安養寺、徳澤啓一（岡山理科大学）、曾根正人（就実大学）、田中愛弓（赤磐市山陽郷土資料館）倉敷市教育委員会

参考文献

- 倉敷市教育委員会「倉敷市史」
岡山県史編纂委員会 一九八五「岡山県史考古編」
『備中誌』一九六〇
岡山県立博物館一九八六「朝原山安養寺」
関秀夫 一九八五「経塚遺文」一九九九「平安時代の埋経と写経」
倉敷市教育委員会「倉敷埋蔵文化財年報 倉敷発掘調査報告Ⅰ」
高野孤鹿 一九七四「筑前愛宕山瓦経の研究」
時枝努 一九九一「瓦経に描かれた仏像―安養寺経塚出土例をめぐって―」
間壁忠彦・間壁霞子一九六五「願文より見た瓦経塚造営の意趣―新資料倉敷市安養寺瓦経願文を加えて」『岡山史学』
鎌木義昌・間壁忠彦・間壁霞子一九六〇「安養寺瓦経本「法華三昧行法」の復元」『日本歴史考古学論叢』
雄山閣 一九三六「仏教考古学 第六卷」
安藤孝一 一九八〇「備中安養寺裏山経塚出土の瓦経」『月刊考古学ジャーナル』一七六
安藤孝一編 二〇一一「経塚考古学論考」
石田茂作 一九五八「瓦経の研究」一九七八「仏教考古学論考 一寺院編」
雄山閣 一九七一「仏教考古学講座Ⅰ」
保坂三郎 一九七一「経塚論考」
関根大仙 一九六八「埋納経の研究」
坂詰秀一 二〇〇三「仏教考古学事典」
鎌木義昌・亀田修一 一九八八「播磨江ノ上経塚」
谷口澄夫 一九七〇「岡山県の歴史・三十三」
姫路市教育委員会 一九九八「播磨極楽寺瓦経 特別史跡姫路城内堀出土 世界文化遺産姫路城発掘調査報告」
網干善教「伯耆大日寺出土の瓦経について」一九七九「瓦経の復元研究」一九七九「瓦経の復元と其の考察」
難波田徹 一九八〇「伝鳥取・大日寺出土の瓦経」一九三四 大正新脩大藏経

大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について

On the Letters from Kojima Torajiro to Ohara Magosaburo

水島博 (公益財団法人有隣会研究員)

MIZUSHIMA Hiroshi (Researcher, Yurinkai Foundation)

柳沢秀行 (公益財団法人大原芸術財団シニアアドバイザー)

YANAGISAWA Hideyuki (Senior Advisor, Ohara Art Foundation)

要旨

児島虎次郎(1881-1929)が、東京美術学校入学当初から生涯にわたって経済的支援を受けていた大原孫三郎(1880-1943)へと、同校在校時に宛てた書簡40通を紹介する。

これらの書簡は、岡山県倉敷市の大原家本邸に残されたもので、同邸を「語らい座 大原本邸」として運営する公益財団法人有隣会の水島博研究員の調査により現存が確認された。

その内容は、児島虎次郎の足跡を明らかにするのみならず、日本近代美術史研究にとっても貴重な資料と考え、水島による全文の翻刻を掲載すると共に、公益財団法人大原芸術財団の柳沢秀行による各書簡の意義と全体への解説を付して紹介する。

主なポイントとしては、児島虎次郎が東京府勧業博覧会美術展へ入選を果たした《なさけの庭》、《里の水車》の制作過程と、その後、渡欧するまでの児島の動向が把握できることが挙げられる。特に、この展覧会での成功を契機として5年間の滞欧が実現したと考えられてきたが、その渡欧についてはすでに児島が強く望んでいたことが明らかとなった。

また、東京美術学校における指導者であり、東京府勧業博覧会美術展審査員でもあった黒田清輝が、どのような形で、それらの作品制作と同展への出品に関わっていたことも伝える内容であり、このことは、同展へ《わだつみのいろこの宮》(アーティゾン美術館)を出品しながら、三等末席という低評価を受けた青木繁との対比を考えるためのきっかけともなるだろう。

Kojima Torajiro (1881-1929) received financial support from Ohara Magosaburo (1880-1943) from when he entered Tokyo Bijutsu Gakko (Tokyo Fine Arts School) throughout his lifetime. Introduced here are forty letters which Kojima wrote to Ohara while he was a student at the art school.

These letters remained at the Oharas' principal residence in Kurashiki-shi, Okayama, and their existence was confirmed through a survey undertaken by Mizushima Hiroshi, a researcher at Yurinkai Foundation, which runs the former residence as OHARA HOUSE KATALYZER.

The contents of these letters not only reveal the course Kojima Torajiro followed but are considered as precious documents for research on modern Japanese art history. Besides a reprint of the entire contents of Kojima's letters transcribed by Mizushima, Yanagisawa Hideyuki of Ohara Art Foundation explains the significance of each letter and provides commentaries on the overall content.

The main points that can be grasped through these letters are the process of the production of Kojima Torajiro's *Garden of Sympathy* and *Watermill in the Village*, which were accepted for the art exhibition at Tokyo Industrial Exposition, and his activities until he went to Europe. It has hitherto been assumed that Kojima's five-year-long stay in Europe was realized as a result of his success at the Industrial Exposition. However, these letters reveal that Kojima had already harbored a fervent desire to go to Europe before that.

There are also descriptions of how Kuroda Seiki, who was Kojima's teacher at Tokyo Fine Arts School and also a judge for the art exhibition at Tokyo Industrial Exposition, was involved in the production of those works and the submission of them to the Exposition. This could also lead to a comparison with Aoki Shigeru, whose *Paradise under the Sea* (Artizon Museum) was submitted to the same exhibition but received low marks, the lowest third prize.

大原孫三郎宛児島虎次郎書簡の翻刻は、水島博が行った。水島による【凡例】も参照のこと。
柳沢秀行は、各書簡に、※以下に字体を変えて、内容と注意点を示したうえ、解説を執筆した。

【凡例】

- 一、史料の体裁はできるだけ原本に従ったが、改行はいちいち指摘していない。
- 一、異体字・俗字などについては、一部を除き、常用漢字・正字へ改めた。
- 一、繰り返し記号は、「々」（漢字）・「ゝ」（ひらがな）・「、」（カタカナ）で表記し、二文字以上の繰り返しは、「くく」で示した。
- 一、史料の判読を考慮し、適宜、「、」（読み点）・「・」（並列点）を挿入した。
- 一、誤字や脱字・衍字については、該当箇所「（ ）」に「カ」「力」「脱カ」「（衍カ）」と記した。また、意味不明な箇所には「（ママ）」を付けた。但し、助詞や濁音などの軽微な誤りや多数の誤記が連続するなど、煩瑣に過ぎると判断した場合は、訂正を省略した場合がある。
- 一、本文の訂正抹消は、二重取り消し線で示し、訂正文字を右行間に記した。抹消などで文字が判読できない場合は、■で示した。また、行間等に挿入されている文字は可能な限り行間に記し、必要に応じて「」で括り右肩に（後筆）・（挿入）などと示した。
- 一、判読に疑念の残る文字については、右行間に（カ）と記した。
- 一、封筒の表・裏書については、改行を「／」で示した。なお、書簡の日付と、封筒の消印に時間差が大きい書簡については、柳沢解説内でその旨を注記する。
- 一、書簡の年月日については、本文・封筒裏書・消印等から特定を行っているが、疑問の残る年月日は、（ ）で示している。
- 一、各書簡は、冒頭に通し番号を付し、以下、「F」で始まる大原家史料番号と、書簡の日付を記した。なお今回記している「F」で始まる史料番号は、飽く迄も仮番号であり、今後大原家文書整理が進んだ場合、番号が変更されるものである。

以上

(1) 大原家文書 F-199 明治三六年六月三十日

(封筒裏上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／六月卅日 児島虎次郎」

謹啓、

御高堂愈々御多祥之段奉賀候、

昨日、東京なる保証人より、本学年試業成績平均点壹百点、進級内規に依り、撰科三年級へ編入之旨通知有之候間、不取敢御報知申上候、先ハ当用迄如斯に御座候、頓首

六月卅日

児島虎次郎

大原孫三郎様 台下

※「東京なる保証人」は、大原家の奨学金を提供する会へ児島を推薦した桜井熊太郎のこと。児島の故郷に近い高梁出身の弁護士。

東京美術学校での、一度目の飛び級(在学二年目ながら三年次に進級)を伝える。

(2) 大原家文書 F-308 明治(三七)年九月十四日

(封筒裏上書)
「播磨国明石町／相生町中崎交中館／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京府南葛飾郡／隅田村三在百十一 長尾方／九月十四日 児島虎次郎」

先日は立寄り御役介様に相成り候段、深く奉謝候、

其節御話し被下候儀、早速其場にて御相談致度存候へ共、一応考へての上と今日迄差控へ、不明了なから手紙にて申述べ候、桜井氏は訪問致し候へ共、不在なるま、別に相談する必要無之事と存候、余は世界の上に美術国と自惚

する此日本が、世界芸術の上に於て何れ程の実力かあるかを思ひ考へれば考へる程、実に寒心の至りに不堪す候、活きんとして務め候、務めんとして活

きんとする理想の下に芸術のために尽きんとする余は、此の幼なき我芸園に

我一生を終るを恨むものに候、世界の上に尚光ある芸園の存するを知ればな

らんか、余は一度身を芸界^術に献してよりは真^{神に趣知ざる}の誠の芸術家たらんと欲するも

のに候、神の与へられたる天職を誠実に務めんとするものに候、金を以て本

位とされたる此の世に芸術家なるものは、財ある外向上するの道なきを如何

せん、即ち研究とは早く云へは財を費すの云なりとすれば、資^{とても}なくては充分

思ふまゝの研究出来ぬは当然の事ならんか、余は足下が先日余に話れし言を

以て、余は大に我神に感謝する所に候、芸術の発達は全^其く社界保護如何によ

るのみとは、明に世に歴史の示す所に候、世に保護者ありてこそ、芸術家な

るもの家を忘れ、欲を去り、身を尽して斯道の発達を計るものと存候、仏は

何か故に美術の旺盛を極めしや、全く是に外ならざる事に候、余は此の仏に

於けるルイ十四世を、此の小なる国^我の中に神の我等に授けられたる事を、神

に謝ざるべからざる所に候、余をして資を忘れて専心斯道の研究に務めさせ

んと尽さるゝ足下の高意に対し、謝するに辞なき所に候、余は此の光榮ある

生涯に相遇し、何を以て此に報るん、只後日の大成を期し撓す屈せず芸術界

に尽さんとする決心に候、

足下の御意見少しの服せざる所無之、嚙国に在る老たる家人共の嬉しく涙と共に悦ふ事と存候、余ハ足下の恵まれたる学資により、日々研究したる成績品は、足下の笑留に供すべく候、されど見るべきものは、とても今の中出来ぬ事と御断^{承知}致され度候、出来る丈け骨折りたるもの数少なく共差送り可申候、学資の方は如何なりとも足下の御考へにまかせ可申候、

尚、渡航等の事は何れ拝眉の節に譲るべく、今の中一弐年間は学校に学ふべく候、

今度からの小生の研究の仕方に就ての考へは、午前は学校に通ひ、午後は教師の内へ通ひ、又はモデルを雇ふて教師の画^室で勉強するか、又郊外に学ふ考へに候、学資もかくすれば今迄より自然嵩む事と閉口致居りたる次第に候、実に御はづかしき次第に候、

先ハ勝手なる事のみ御依頼仕り申訳なき事に御座候、何卒不惡御取計被下度、伏して貴報待入候、頓首

九月十四日

虎次郎

大原先生 台下

福田君は元より一層病氣快復して健康の姿に候、九月の白馬会展覧会へ先日小女の習作画、人の勧むるまゝ、出品するやも知れず候、其後にて宜敷候へバ差送り可申候、

※「桜井氏」は前出の桜井熊太郎こと。福田君は不明。

芸術の重要性和自身の覚悟を語るが、「学資もかくすれば今迄より自然

嵩む事」とさらなる支援の要請を願う様子であるが、文面からは、児島の制作品の大原への提供についても直接に話が成された形跡がある。

また「渡航等の事は」とあるところから、すでに虎次郎の渡欧についての相談もあつた可能性が高い。

(3)大原家文書 F1223 明治三十八年一月二十六日

(封筒上書)
「備中国／倉敷町／大原孫三郎様／御親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区千駄木／林町二二四中川方／一月廿六日 児島虎次郎」

春未だ寒さ烈しき頃にハ候へ共、御変りもなく御健祥の事と奉大賀候、今朝、小包にて油絵風景画式枚差送り候間、御落手被下度候、御高覧之上、何とか御批評之程願上置候、

大き方ハ綾瀬の記念、余か庭前之秋景色に候、緑なるは丸葉の河端柳、紅なるハ雁来紅、コスモスもあれバ菊^野もあり、調たる花たでもあり、遠きハ稲田の色つきたる積りに候、

去年の暮、仕方なしに綾瀬を去るの時、描残してかつてありしむかしを忍ばんものと止置き候、

小なるハ同じく綾瀬之秋月の夜に御座候、梓へ張れば嵩みて郵送不便なるまゝ、出はづし置き候間、御落手の上ハ、梓へ御張り被下度願上候、梓の見本、先日差送りし分にて、分明之事と奉存候、競技も前週にて相済み申候、

小石川の

美しき

此頃、午後藤島先生の所にて勉強致居り候、植物園か新宿の植物御苑かの温室之内の草花を写生致度、黒田先生に許可の手續願置き候、許可されたる上ハ、少し費用と時間を費して、大きな物に描き度考へに御座候、

博物館へ陳列の欧州名家の油絵之模写の志望も黒田先生に願置候、右之許可を希望致居り候、真面目なる御陰で、先生之信用を得、勉強上・研究上に便利を得る事を幸福と存居り候、是も全く閣下之愛情より出づる事と感謝之涙にたへず候、

何れ今夏休暇帰省之節、委しくハ御話致すべき考に候へ共、前途遠大なる余か希望否天職に就而色々と此頃考へ計り居り候、仏国留学ハ余が第一に必要な

渡

とする所に御座候、如何にしても近き間に彼地に航して、充分の研究を積ま

巴里より

ざるべからざる事に候、先日、昨年帰朝されたる先輩に就て、彼地の模様承り候処、こゝに閣下の大なる同情を得バ、我目的も達し得らるべくと信じ申

候、如何なる事情あらむとも、是非共閣下の御尽力によりて、此の計企実行致度、嘆願して止まざる次第に御座候、余ハ只神の誠の心により、限なき生命を以て、限なき天職に従はんとする外、無一物に御座候、余ハ閣下のあた、

かき同情によりて、此の高き計企之実行されむ事を信じ居り候、其の委しき

事共ハ、拝顔の上御話し可致候、何卒誠ある馬鹿物と御愛し被下度願上候、

何時でも

其れから、此の冬の休にハ、都合悪しくて志を得ず候へ共、休暇を利用して

旅行写生を志望致居り候、此の夏どもハ、支那の風景・風俗を画布に上せんかと野心を懷き居り候、日本内地之面白き所にも可ならむ、又離れの小島等の生活も面白き事と存居り候、

差

其れから、甚だ我まゝ千万にハ候へ共、小生の送り候絵、反古ハ取まゝめて保存致置被下度、余が描きたるものにハ、如何なものを撰ず、全く余が暖き

愛をこめたる製作物に候、自然は余が妻にして、製作物ハ皆余が慈愛の幼児共に候、

余が愛児ハ誠の情ある人に捧るの外、決して奴隷之其れの如き金銭之交換物とはなさぬ考へに御座候、

勝手ケ間敷候へ共、本月分之研究費として、前月之通り御貸与願上度、其積りにて研究致居り候ため、大に差支を来し候間、御高察之上、御承諾被下度願上候、来月も差送り可申候間、例月の如く御送り被下度御依頼申上候、何時も何たが訳のわからぬ事のみ申上失敬の段、御高免被下度候、是でも極面目なる考へに候、右御返報待居り候、

一月廿六日

虎次郎

大原先生 台下

※冒頭に、二点の風景画の記述があり、東京美術学校在学中から、大原孫三郎へ研鑽の証として作品を送っていたことがうかがえる。

博物館での西洋画家の作品を模写する願いに関わり「真面目なる御陰で、先生之信用を得、勉強上・研究上に便利を得る事を幸福と存居り候」とあるのは、黒田との関係を、児島がどのように認識していたかがうかがえる。

また「室内の草花」の写生に基づく制作を検討することを伝え、黒田清輝から「許可されたる上ハ、少し費用と時間を費して、大きな物に描き度」の一文は、その場合の費用負担を願ひ出る伏線かと考えられる。大原孫三郎から児島虎次郎への支援は、定額継続のみならず、発生ベースでの追加もあっただろうことがうかがえる。

なにより注目すべきは、児島より、すでにフランス留学の希望を伝え
ていることである。

(4)大原家文書F・311 明治(三八)年一月二八日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京市本郷区千駄木林町／二二四中川方／三月廿八日 児島虎次郎」

(後筆)
「一度読返し候処、文意不明、筆乱誠に失敬之段不悪御推演之程願上候、

三月廿八日

虎次郎拝

大原先生台下

追啓、御送り可申絵画少し延引致すかも知れ不申候間、其辺不悪御承了被
下度候」

先日來競技引続き居り候ま、不本意ながら御無沙汰致候段、不悪御海容被
下度候、

競技もやつと昨日終了仕候、就而ハ今度学校より學術研究之為め京都地方へ
出張を命ぜられ、昨日命令書と旅費を受取申候、今度の競技と此の旅行とに
関し、小生が非常に嬉しき感を得たる事、我が理想の実現せられたる事に付
き、少し御話し申上べく候、

斯様な話しは或は閣下に御不快の感を与ふべくも計られず候へ共、小生は

決して自慢などの意味にて語るものにてハ候はず、我信仰之ある処と芸術に
対する余が誠実なる処を、閣下の美しき御心の内に告げむとするのみに御座
候、

本年一月第一回の競技は開かれ候、研究科は西洋画のみにて十名計、此時競^技
加りしもの七名、其成績として余は首席に撰べる、の本分を得候、

其後の競技は静物とコンポジションの二通にて、各自宅製作、提出期限は本
月の十六日と云ふ事で候るしも、何分割合に日数之不足なる故、静物ハ描き
終へ居り候へ共、組立之方は出来るなれば尚一日程要し度き事と相成り候、^{居り}
大低^(抵力)競技の時、小生は期日を正しく守り学校に差出し、今迄遅延等之事御座
なく候へ共、其度ごとに他の人々之分の出揃と云ふ事無之、又教師も芸術之
事故、然程期限等も八ヶ間敷は申されず居り候、

今度も大低そんな事故、十六日に持行くべきを、十七日に描き終て持行くべ
く考へ居り候、然し十六日に持行きても競技のもの(即ち日数を限りて描く
事)としては別に差支之ある程にても御座なく候るしなり、

此の
第二回の競技に加りしものは僅か四人と相成り候、

十六日製作品を持たずに登校致し候処、四人の内一人のみ提出致居り候、他
の二人は余と同じく提出致さず、余に語る様甲も乙も共に提出する程出来居
らず候ま、今日教師に依頼して延期を乞ふ積りであると、

時間に於て黒田教授は来られたり、余は此時兩人に先ち代て一週間の延期を
乞ひ申候、黒田先生の告げらる、様、此度の競技は研究科奨励之一法として
優等者に官費製作を命ずる事となり居る事にて、其経費の支出の都合にて期
日延ばす事は六ツヶ敷、期限に提出出来ざるものは致方なく不合格者と見な
し、提出ある分を以て合格者となすより致方なき故、君(余)しも今出来居

るまゝにて直に持来るべしと、余は此時他の二人の未だ出来上り居らざると共に、余のものも未だ日数を要する事を告げ、奨励金云々の事に就而ハ別に少しの望みも無之、右奨励金は提出済の前者に授けらるゝとも何の言ふ所も無之、誠に正しき事と存すれば、其奨励法の外として、四名のものゝ悉く製作済の上にて公平なる審査を乞ふ事こそ、今延期請願之由なる事を誠の心を以て告げぬ、此時甲乙の友は君（余）之静物絵などは早や已に出来上り居る事なれば、余等に対して遠慮する事なく早速持来るべしと、又黒田先生も余の絵の出来上り居る事を告げられ候、然し此時余は余がよし製作品の出来上り居るにもせよ、此時持来るべく余を学校より帰らすべく余が本心に命せざりし、黒田先生も持来るべく余に勧められぬ、余ハ何が故に此の光栄ある奨励に接せんとハなさざりき、此所に即ち信仰の大能力がよく我が心の中に宿り存せしばなり、我友甲乙の二人の分ハ実に此の期限迄には見る程も出来居らず、全く競技に加はるべくの資格を存せざりし事は、余が目にも明かなる所に候、或は此時早速友を思ふ之念を止めて持来りしなれば、或は其の光栄なる首席をしむるなりしかも計られず候、

され共余が本心ハ、此の時よくも友を思ふの念を断ざりしなり、ゐかで友を捨て、我のみ此の光栄を受くる事を快よしとせんや、光栄は望まざる処にあらされ共、願はくは親しき友と共に均しき光栄に接し度きの同情的觀念の存するあればなり、

斯くし■遂に延期は許可されぬ、友は喜び語しぬ、官費製作云々之分は提出済の友に決したり、此の作品に就而余をして不遠慮に語らしむるなれば、余は其の提出済の作品を以て、よく研究科を代表する程のものとは思れさりし、第一回の競技にもあまりよき成績にてハ無かりしなり、

其後余は静物絵の^方は描き加ふる事を自分禁し候、其れハ提出済の友に対し、^{又余が製作の}出来上りたりと云ふ友に對し、よく其義務を全ふせん事を期せん為めに候、組立絵の方も一兩日を経て描き終へ候、昨日友と共に打揃て学校に製作品を持行き重荷をおろし候、今度の競技はかゝる始末にて終候、

然るに去る廿四日の夕、教師より使参り^{寒寓を}態々訪問なされ候ゐしも、折悪しく小生不在、何の事かと教師の宅へ訪れ候処、本夕君の宅へ行^たたぬ、実は今度の競技に就而各科（日本画・西洋画・彫刻）より各一名を撰抜して、學術研究之為出張を命する事となつて居るのだが、此の競技の成績として第一回の競技にて撰定する考へであつたのだが、其れで或ハ不公平な事があつてハと思ふ、別に第二回を執行したので、其結果力の競技が出来なかつたのは残念である所で、君は^{（余）}第一回の時首席であつたのと、第二回も出来て居て友に同情して差し出さなむだと云ふ、其美しむ志に感動されて、黒田教授が特に校長に乞ふて、他科より例外に尚一人分の経費を願ふて、君（余）を撰拔されたので、君は此の光栄を謹で受けるべき事である、^{それから}是れは内端之話であるが、君が製作済になつて居ると告げた友の優しき志に對して、君が受ける旅行費の幾分を割きて、友に謝してはどうとの黒田先生の意見であるがと、其翌ク日、余ハ友の下を訪れ、昨夜の委細を話し、此の教師より君が^{優しき}美しき志を賞せらるゝ事を心よく受けらるゝなれば、余ハ同じく教師の命に従ふ可^{光栄ある}此度の命に従ふ考へなる故物語り候処、友ハ自ら賛し余にも其の命に従ふ可^く勧められ候、

昨日学校に行き、校長より命令書を^と辞令書を受取り候、

私は此時実に嬉しく感じました、私ハ誠に不肖なものでありますが、自分を忘れて友を思ひ、芸術の真聖を守たものではありましたが、かく迄身にあま

りたる此の大なる光榮を受けたる事を、余ハ教師が師弟の間に此の形式的の規立を無視し、其の芸術上に於ける感操^(マツ)に対し、かく迄大なる賞賛を与へられし事を、余一個の外芸術界の爲めに深く感謝して止まざる所に候、如何にして小なる此の余ハ、此の身にあまりたる重任（余の身にハ重任）を全く尽くし終する事の出来得べきかに就き、深く心に苦しみ居り候、され共く余は余の外に余の尤も救れつゝ、ある大なる力の存するを以て、よく余が誠との真心の務めに対し、大なる保護のあらむ事を信じ居り候まゝ、此の不当の責任を全ふせん事を期し居り候、

余は此の情ある黒田教授に精神的先生の高き志に謝せんため、昨日先生を麹町の黒田邸画室に訪れ、厚く其高意に謝し、併而真面目なる余が務めに於て、此度の模範的奨励之任を全ふせん事を斷言致置き候、

余ハ此の間の事に就き、つらく思ひ考へます、今度の如き実に理想^的な旅行に接す事の出来る原因は、そも何所にあるかと云ふ事を、

余にして若し閣下を通じて受けし美しき信仰^(仰カ)と感操が無かつたなれば、何かで此の心の底からの快^味■を感じずる事が出来るであらうかと、余ハ謹而此所に閣下に感謝致します、閣下の大なる力と同情の深き事に於て、余ハ人間的行をなし、芸術の真味を守る事が出来ました事を、噫つみ深き余、小なる余は閣下の高恵^きみに於て神の子達の救に加へられたる事を感謝致します、前途次々たる余が目的に對、此上ながらの力を与へられむ事を嘆願致します、小さき余は誠の一塊とならむ事を期し置き候、

余が今度の旅行に就而ハ、他科へ對する面目も有之候へバ、学校より与へらる僅なる旅費を的にせず、出来る丈けの閣下よりの補助をも乞ふて、西洋画を代表して大に面目を施さんとする決心に御座候へバ、其辺何卒宜敷御承引

被下度候、

かくも書き続けるに、目に涙の浮び出でて、筆持つ手にも力なく、頭はぼんやり致候、余が閣下に感^謝せんとする言は、とても筆や文字や言葉などにで告げられ得ざる事に候、若し閣下、余が前に在りせば、今余の目に浮^所ふ満眼の熱涙はよく閣下に感謝之真意を告げる事の出来得べき事を信じ候、

料紙も已につき終へ候まゝ、失敬可致候、旅行先は京都と学校よりの命令に候へ共、自分の勝手之地方へ行きて宜敷事に候、旅行未定に御座候、来月一日頃出發する考へに候、何れ其節御報知可致候、

子供の絵^はかき其後所々尋ね候へ共、別に変りたるもの無之候まゝ、其内出版出来候節御郵送可致候、

※明治三八（一九〇五）年は研究科一年。

東京美術学校よりの命で、學術研究目的で京都方面への出張があることが確認できる。そして、その研究機会の提供は、学内競技会での成績と連動していることを伝える。

児島は一次競技会では主席であつたことを告げるが、二次の競技会に関わり、締め切りがルーズなことなど当時の美校の内実がわかる記述と共に、その後の顛末は、黒田との関係が語られており興味深い。

競技に際して与えられた主題は、「静物とコンポジションの二通」とするが、そのコンポジションについて「組立之方」との記述されており、いわゆる構想画がそうした言葉で語られていたと推察される。

(5) 大原家文書 F-230 明治三十八年七月十四日

〔封筒上書〕
〔都窪郡倉敷／大原孫三郎様／親展〕

〔封筒裏上書〕
〔川上郡成羽新町／七月十四日 児島虎次郎〕

謹啓、

先日ハまかり出で御厄介に相成候段奉深謝候、其後御病人様ハ如何に御座候哉、少しハ御快方に向ひ候哉、不及ながら案じ居り候、先日ハうれしく御目にかゝり、色々と楽しき御話とも御伺致し度く望み居候も、御母堂様の御不快中にて、本意を得ず誠に心残之事に御座候、御相談申上度き事も山々重り居り候も、致方なく杉君のすゝめらるゝまゝ、只ぼんやりと倉敷を去り申候、九州行も何となく進み不申、直に帰郷仕候、

なつかしく暮居り候に、ろく／＼拝顔も出来すはなはだかなしき処に候、先日参堂の節、御願致度き事共拙なき筆にて申述べ度き事に御座候、小生如き心の中になみだもろきものハ人の前にてハとても思ふまゝの事述ふる事困難の事に候、其に此迄不相応なる御尽力に預り居り候処へ、一層の御力を願ふと云ふ勝手かましき事に候へハ、私の口よりハとても言葉出る事六つヶ敷事と存候、

されと余ハ己が天職の爲め献身的之研究に進まんとする処に候へバ、余に同情よせらるゝ閣下の前に口ふさぐ時にあらざる事を思ひ候、

余を愛せらるゝ閣下、幸に余をして此の世に働き得る丈けの力を得せしめ給へ、余をして社界の爲めに勉め得るに必要なだけの研究を積ましめ給へ、

余の望む所只修養的研究あるのみに候、余ハ如何にしても世界の芸術家たらずんバ止まざる所に候、余に覚悟あり、余に誠と愛あり、余に大なる意志あるを信す、余ハ余をして余が志す道に導びき給ふ神の大なる力あるを信じ居り候、閣下の大なる力により、余ハ数年間仏国留学を許されん事を切望して止まざる所に候、余ハ他の総ての事情を忘れて、斯く嘆願して止まざる次第に御座候、今迄希望のみハ烈しかりしも、閣下に相語り申すべき事の何となくきまり悪しく口をふさぎ居り候、今年の休暇にハ是非留学之御相談を致さんものと東京にて黒田・和田先生其他岩村教授なり新帰朝者之其れらの人々に学資等の事なと承り置き候、人々により学資なとの点ハ少々相違有之候へ共、年限なとハ大低五ヶ年位なれハ通常ならんとの説に候、

学資ハ普通^{一ヶ月}百フランより百二十フラン、即ち日本の金にて八十円より百円位に候由、官費留学生ハ殆んど百五十円位の由に候、然し無理の勉強をすれば、

七十円位にても出来得べく候へ共、少し書籍など読まんとすれば、先づ百円は入用ならんとの事に候、岩村教授の説によれば、百円なれハ出ず入らず真面目の勉強するに適當なる所ならんとの事に候、先づ日本の学資の四・五倍と思へハ大差なき事と存居り候、然しもとより被服料なとハ支出出来ざる所に候由、旅費ハ巴里へ着するまで総ての費用三等にて六百円斗りに候由、然し凡て費用の点ハ閣下より心当りの方へ取しらへ給らん事と望み居り候、岩村教授の説ハ学資百円に旅費六百円との事に候へ共、小生ハ勉強出来得べく候へバ、費用の多少ハ少しも望まざる所に御座候、

岩村教授ハ今秋直に先方へ計りて出発する様にせよと、呉々も語られ候、黒田先生などへハ未だ留学云々の事ハ許可され居らざる事に候へバ、相談も致し居らず候、若し幸にして留学許可被下候上、委しく相語り候へハ、満足さ

る、事と存居り、只何事も神の命せらるゝ所にまかせ置く事に候、

小生も今秋出發出来得る様な^れバ、誠にうれしき事に候へ共、左程急ぎ申さず候、其れかと云へあまり延引するも勉強不得策と存居候、今秋出發出来されバ、明年ハ出發致度き事に御座候、要ハ只早く行てよく勉強する事に候、九月よりの勉強の方法も有之候に付、是非御承諾願上度、懇願の次第に御座候、希望通り留学許可さるゝの暁にハ、余ハ己が理想を社界に伝ふる未来に大なる光明を見とめ居り候、余が氣にかゝるものハ、只今の所にて留学云々あるのみに候、即余が飛躍向上せんとする事に候、新なる大なる發展を望む所に御座候、閣下重ねて乞ふ所、余が心を愛し給ハ、此の望みを得させ給へ、噫此の天地の間何望む所無之事に候、留学中の事ハ面談も致すべく候へ共、今迄と同じく製作ハ御送り可申、又名画の模写も甚小生の力にも相成り、又閣下の修養とも相成る事に候へバ、出来得る丈務むべく考へ居り候、兎に角右御許可如何を承ハらさる上ハ、何事も手につかさる所に候、何卒御多忙中ハ万々承知致居り候へ共、御返信願上度、一日も早からん事謹而待居り候、

先日御目に懸け候修作仕るべく持帰り居候間、然様御承引被下、出来上れバ御送り可申候、

繪葉書と日曜講演表紙图案、近日御送り可申候、尚用事も有之候へ共、あまりなが／＼とかきつゝけ候間、後便にゆるり可申候、^(つか)

末筆にハ候へ共、御病人様之御快方あらん事奉祈候、拙宅一同よりも宜敷御見舞之由伝言致居り候、敬白

七月十四日

虎次郎

大原先生 梧右

※郷里成羽に夏季帰省中の手紙。終わり近くに「繪葉書と日曜講演表紙图案」とある記述から、児島はこの頃から大原関係のデザイン仕事を引き受けていたことがわかる。

なにより注目すべきは、滞欧経験のある教員から、具体的な経費や滞在年数などのヒアリングを行い、児島より具体的かつ強く渡欧希望が述べられていることである。

(6)大原家文書F-309 明治三九年一月二九日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区千駄木林町／二二四中川方／一月卅日 児島虎次郎」

酷寒の候如何遊され候哉、伺上候、

先日黒田先生を訪れ、色々留学の事につき先生の説を承り候、小生より自分の境涯、今後の方針及び閣下に厚き同情を受けつゝある事とも委しく物語り候、何時しか先生の眼にハ涙あらはれ、顔にハ笑浮ひ候、先生のよろこびハ一方ならず、己の子弟が愈々進むで研究の途に就かむとするを誠に子弟を愛さるゝ師なりせばなどて嬉しさの覚へられさる、然して後閣下の高き人格と大なる働きを賞せられ候、

世にも感すべき人ある哉と、余ハ此時感謝の念とうれしさに堪さりし事に御座候、

先生も出来るだけの尽力致し給る由、小生に対してよりも閣下の厚き志に対して致さるゝ事と覚へ候、黒田先生よりのあまり差出ケ間敷かなれとも、自分の経験と理想とを大原氏に伝へる様にとて永き物語に時をうつされ候、

先づ画家としてハ世界の芸術を一覧する事大ならむとせハ、大に学さる可からず、されバ留学ハ尤も必要なる事ならむ、

世界の術芸を観る間、如何にして偉大なる芸術的の感念を懐く事を得む、成さんとすれハ先づ学さるへからず、学はんとすれバ進まざるべからすと尤の事と考へ候、

今に日本の経済がゆるして多くの人が本場で勉強し、美術学校よりも多数の留学生を許す様になれば、洋画なるものも進むであろう、然し今の様に留学生の数の少なく、幾年振に一人位の事にてハとても駄目と思はれると、

それに学校よりの留学生も数の少なきため、競争的熱心の研究少なく、やゝもすれバ留学の成果を見る事を得さる様の事あり、要するに学校なとより行くのハあまりにのんきすぎるからである、それに帰朝すれバ学校の教授と御定りになつて居るから、留学生の心が自然と勉強してもなさぬ共己の地位に差のなき事を自覚すれハなり、

学校より留学と云ふ事ハ、今幾年のうちにあるか計り難き位にて、殆んと的にならざる事なりと、

留学の期に就而ハ望むらくハ、一日も速かならむを、然して専心の研究とを今年（カ）の春の間にも趣（カ）ハ都合よき事あり、そハ今春開かるべき大展覽会を參觀する事を得ればなり、留学の年限ハもとよりかきりなき事なれとも、先づ（カ）二年ほどの研究と二年間程の製作と半年ほどを伊太利地方への漫遊となし置けハ充分ならむ、

費用の点に就而ハ出来るだけの都合よき方法もある故、大原氏より尋ねられたる場合にハ委しく御答する、

先生の御話しハざと斯様なる事に御座候、小生ハ先生に小生より色々の事を大原氏に願ふ事の己の情として忍びず候間、若し大原氏より御尋ねの事共有之候節ハ、先生の眼に見られたるまゝ、小生が技術と小生が望みの事共御伝へ下さる様に願上候処、如何様な事なりとも御答するから其積にて大原氏へも申送るべき様（カ）、呉々も親切に申され候、

父なき身ハかゝる話の間にも、父なる人の情の深きを思はれ候、何故に高き師ハかくまでかゝる愚なる身の上に尽し給はるならむ、考へて先立つものハ、感謝の涙に候、

閣下によりて此身救れ、先生来りて又助けを恵まれんとすなとて、余ハ感謝せざるを得む、此の厚き感謝の意を次て余ハ専心天職の上に尽すべく候、

慕しき閣下、余をして愈々進むで芸術の園に学せ給へ、余ハ充分汗なかつて学の道に進まむ、学ひの奥の奥まで倒るまで誠と熱き心とをもて、もとより浅き学ひの身に候へ共、果して己の身に学むて望みあるかなきハ神ならて知る人もなければ、我師の少しハ知る処も有之候ハん、

一応我師に問多くし給ひて我に学はしむるに望みありと思召し給ハ、留学の事許し給れ、如何にうれしく此身ハ働かむ、我心は小さけれども虚と怠りハなき事と自覚致居り候、学費の事につきても、一応黒田先生の許へ御間合せ被下候へハ、色々の様子も明かなる事と考へ候間、我志のある所御察し下され、御尽力あらむ事切に望み申候、此迄一方ならざる同情をうけつゝ、又かくも申上える事言得る所にてハ無之候へ共、余ハ己の力養ふて、閣下の高き恩恵に報ひんところ思定むれハ、かくも重ねて願ふ事に候、

何とかの御返事煩し度く待入候、

毎月の貸資額今迄少しも足^不なる様感せし事も無かりしが、今度夜学などに通ひ出してより色々月謝なり書籍などの必要と、学校の方にてても卒業生ともすれバ少しハ金の入る事も有之候ため、今月より増資願上度、先日の旅行にて少し不足を生し居り閉口致居り候、それに国元ハ家兄の出征中、後にハ老人と女のみ、少しの事も申送る事忍びず、如何ともする事相成ず候まゝ、あまり勝手ケ間敷事にハ候へ共、右許し被下度願上候、此の次きよりの製作にハ、少し費用もかけて紀念ともなるべきもの描き度く考へ居り候ため、絵具材良なども嵩む事に候へバ、御察し被下度願上候、

今迄世話になり居りし中川の内に、来月末位に亜米利かより息子さんが帰朝され、同時に妻君を迎へらるゝとの事に候へバ、其まてに転居せねハ相成不申、転居すれバ今迄の中川の内の様に、万事親切に又都合よき事も無之と考へられ候、小生が上京後今度にて転居する事四回、その中三回までハ新に妻君を迎へらるゝため致方なく転居する事と相成り候、自分にも何たか不思議に覺へられ候、

またしてもなか／＼とかき来り失敬仕り候、何卒右の数々御承諾之程願上候、尚、御暇の節ハ時々御芳墨御恵み被下度、切に希望仕り候、敬白、乱筆多罪
一月廿九日

夜半

虎次郎拝

大原先生 梧右

※渡欧について、大原からも支援の方針がすでに伝えられた様子が垣間見える文面。黒田との相談内容を伝えながら、個人的な希望のみならず、東京美術学校、さらには日本の美術界のためにも必要との説明が行われている。

また、夜学（語学習得のためと想定）経費、意欲的な制作のための経費、兄の出征に伴う郷里の家族事情、転居などの多数の理由を挙げながら支援の増額を依頼している。大原と児島の関係性を知るためにも興味深い。

〔7〕大原家文書F-252 明治三十九年七月四日

〔封筒上書〕
〔備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展〕

〔封筒裏上書〕
〔東京本郷区千駄木／林町二二五野中方／七月四日 児島虎次郎拝〕

拝啓、去る一日当地出発、帰途につくべく準備致居り候処、突然その前日、黒田先生より学校にて古画の模写を命ずる都合と相成たるため、帰郷を見合すべき様通知有之候ため、当分滞京致す事と相成候、あまり面白くもなき事に候へ共、何分特に指命されたる事に候へバ、充分勉む考へに御座候、大低^{（抵力）}二三週間にて相済む事と存し居り候、就而ハ帰郷の節持参可仕考へ居り候扇面あまり延引可致候へバ、昨日小包にて送出し置候間、御落手被下度願上候、

差送り候五枚の外、三枚今少し御猶予被下度願上候、玉章先生・寛畝先生ハ
さすが大家の名にはちすと感じ候、拙きものも有之様子に候へ共、何卒不悪
御海容被下度願上候、

右の報酬ハ別紙受取の通りに候へバ、何卒至急御送金被下度待居り候、
先日本文晁の鑑定料金沢氏に問合せ候処、大低二円位のものに候由、博物館
の方の人へ依頼するも、大低其辺に候へバ、以後もその御心持にて御承知置
被下度由、金沢より伝へ候、

本月分の学資、帰郷相延び候ため、都合あしく相成候故、勝手ケ間敷候へ共、
右の便に共に御送金願上度御依頼申上候、

昨日午後突然切山君と伴に友青野と三人連にて、切山君の卒業の祝を兼ね、
鎌倉へ足を運び候、着したるハ五時頃ふらくと八幡宮に詣で、大塔の宮の
崩御されし土窟に涙を流し、夕月を眺めつ、由井ヶ浜へと趣き、輝く明星お
とる潮に心はげましつ、時のうるを忘れ候、山百合の花ハ四方の山々に美
しく咲きみたれ、なかめ広き田の面にハ若苗のすし風になびきつ、十三
夜の月ハ静に中空にかゝれり、嗚呼哉歴史の語る所誠なりせば、此の古き昔
栄へし地の今の淋しき此の様見て、そこに一つの感しの起らざる事のあるべ
く、共に語りつ、九時過ぎ発の列車にて帰途につき、今朝午前一時頃寓に帰
り候、

明日より愈々模写にかゝる事に御座候、右当用のみ申上置候、頓首

七月四日

虎次郎拝

大原先生 梧右

(別紙)

証

一、金拾五円也

但シ、川端玉章・荒木寛畝・結城素明・鶴田機水・岡田秋嶺、五人扇面
右正ニ領取候也、

明治三十九年六月廿八日

右代

岡田秋嶺(印)

児嶋虎次郎殿

※大原は、児島を介して川端玉章、荒木寛畝、結城素明などの作品入手
や、作品鑑定の専門家への仲介を行っていたことがわかる。こうしたケ
ースは他でも見受けられる。

また黒田より、突然、古画模写の命があることもわかるが、対象は次
なる七月十日の書簡より、《支倉常長像》であることがわかる。

桐山君は不明。青野君は、同郷の友人で、児島が上京当初に間借りを
していた青野俊一郎と思われる。

(8) 大原家文書 F1253 明治三十九年七月十日

(封筒上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

〔封筒裏上書〕
「東京本郷区千駄木林町／＼二五野中方／児島虎次郎」

〔尚々書〕
「今朝御手紙拝受仕候、為替券と岩田氏宛の御書面落手致候、岩田氏へハ本日午後参上可致候、何れ後便にて御知せ可申候、十一日」

梅雨の候と相成候てより、毎日面白くもなき天気のみ引続き居り候、御高堂にてハ皆々御変無之事と奉延賀候、先日学校より模写製作を命せられ候ため、帰郷を見合せ、数日前より模写に従事致居り候、

原画ハ支倉常長とて、伊達政宗が幕府に請ひて波斯・羅馬に渡航せしめたる外交史上特に注目すべき常長の肖像に御座候、

筆者ハ未詳に候へ共、波斯或ハ羅馬の画家の描きたるものにて、常長帰朝の節持歸りたる品に御座候、

欧州芸術品の渡来の沿革上にも参考となるべき品に御座候、

構図ハ法衣着たる半身像にして、十字架の前に合掌したる図に御座候、絵の出来ハ古き昔の事に候へバ、評する事は出来得ず候へ共、日本人の特色よく現れ居る様に御座候、

何分年月を経たると、保存法の不完全なりしたため、画面の破損甚たしく、絵具等も剥脱したる所多く、模写する上に一方ならざる困難を感じ居り候、
博物館の特別展覧会に、伊達家より出品されたものにて、非常に貴重なる
取扱に御座候ため、博物館の特別従覧室にて模写致居り候、

朝の九時頃より夕方六時頃、一人静に筆をとり居り候、
興うつり行く時実に云はれぬほど楽しく候、

此の絵に接し、すぎし元和の昔を思出し候へバ、一種の面白き感じにうた

れ候、

その日その日の務めを怠りなく勉め居り候ため、非常に愉快を覚へ居り候、朝ハ望みに満ちて家を出で、夕ハ上野の晚鐘を耳にする頃筆を止めて家路に急き候、その楽しき味はとて我ならで知る人もなき事と存し候、然し描きつゝある間の苦しみもとても我身ならで味不申候、

此頃の生活ハ、なんとなく画家らしき身らしき様覺へ居り候、友より借り受たる徳永氏の遺稿逆境の恩寵に夜を過し居り候、今度の模写製作ハ、小生にとりてハ光榮なる事にて、又責任あつき事に候へバ、充分出来るだけ尽す考へに御座候、身体相変らず健全に御座候へバ、乍憚御安心被下度、右あら／＼なから様子など一寸御知せ申上候、末筆ながら謹而閣下の幸福を奉祈候、

七月十日
十日夜

大原先生 梧右

虎次郎拝

※黒田より命ぜられた古画模写が、現在は仙台市博物館が所蔵し、慶長遣欧使節関係資料として国宝となっている「支倉常長像」とわかる。現在の東京国立博物館での企画展示のために伊達家より借出された作品を、児島が模写。完成した模写は現在、東京芸術大学蔵となっているが、こうした形での文化財保存活動が進められたことがうかがえる。

(9) 大原家文書 F・256 明治三十九年八月三十一日

(封筒裏上書)
「倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「八月卅一日 成羽町／児島虎次郎拝」

其後ハ御無沙汰致居候、いつまでも暑きひしき事に御座候、

御皆々様御変りも御座なく候哉、伺上候、

小生儀、無異製作に従事致居り候間、御放神被下度候、

昼夜筆とり居り候ため、ろく／＼御音信も不申、失礼致居候、製作も大分運

び候へ共、何分重荷に御座候へバ、進めバ進むほと苦しき事に御座候、

一日も早く思ふほどのもの描き終へ、御目にかけたく望み居り候、図ハ水車

の内に憩へる家族の様に御座候、モデルを雇ふ事さへ田舎の事に候へバ、思

ふまゝにハ相成り不申、閉口も致し居り候、

然し充分勉むるたけハ務むる決心に御座候、御教訓被下候通り、筆とる前に

ハ心こめたる祈をさゝげつゝ、神ハ如何なるものゝ上にも等しき愛と恵とを

与へ給ふ事、真の美ハ如何なるものゝうちにも備へられある事を信じつゝ、

誠の平和と幸福の境にあこかれつゝ、清き製作に尽し居り候、

絵の出来上る日も定まらず候へ共、出来上るまでハ決して動かぬ積りに御座

候間、然様御承引被下度願上候、

先ハ御様子伺上度く、小生の現情一報申上候、

末筆ながら御全家様へ宜敷御伝へ被下度、尚時節柄御自愛專一に願上度、謹

而閣下の幸福を祈居り候、

八月卅一日夜半

大原先生 台下

虎次郎拝

追啓、弊屋一同よりも御全家様方へ宜敷申伝居り候、

※明治三九（一九〇六）年八月に故郷成羽に戻り、「水車の内に憩へる家族」の図に着手したことを伝える。《里の水車》と考えてよいだろう。「モデルを雇ふ事さへ田舎の事に候へバ、思ふまゝにハ相成り不申」とモデルについての記述があるが、モデルが見つからないために、近親者を頼んだのかなどは不明。

(10) 大原家文書 F・258・1 明治三十九年十月五日

(封筒裏上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区千駄木林町／二二五野中方／児島虎次郎拝」

拝啓、愈々御清栄之事と奉大賀候、

先日御目にかけ候油絵、上京直に黒田先生に面会をもとめ候も、先生に差支有之候ため、やつと本日批評を聞く事を得候、先生の大略の批評申伝へ度く候、

先づ大体の所にて無難の由に候、

若し筆を加ふる考へなれば、石段にある人を除く方面白からむ、そして母親の背後雉の居る辺に少し明き光線を入れてハ如何にや、出来より云へバ、先上出来なり、小生の作としてハ、未だなき所の由、少し感情の不足なる点ハあれとも、面白味あり、色と形に於て無難なり、親子の手指はよく出来たり、顔ハ子供の顔の愛らしきと母親の顔の雅味ある所よき様述へられ候、

兎に角多くの画家（学生）が風景の写生に従ふもの多き、人物画の製作につくもの少なき遺憾とする所、此方面に向ての研究ハ誠に結構なる事なりと、明年の博覧会へハ出品する方都合よからむとの事に候、

博覧会出品云々の事ハ兎に角、夏休の間、小生が不及からも心こめての製作が、少しだなりと成効したる点のあるとせば、如何ほかの小生に慰安を与へられ候、先生只一人をさへ僅なる満足をさ、けたる事の小生にとりて光栄とする所に候、製作中の苦しきつとめも、その製作の上に力と、むる事を得候、誠にうれしく存候、モデルに頼みし人々にもなき骨折をかけたる罪も少しハ謝する事を得へき事をよろこび候、先生の批評により、只一人余のみ心よろこばしく候、

然し先生の批評より以上の批評を己が心の中に聞き候、

今度の製作中々につとめたる様に候へ共、尚力足らず、製作ハ失敗に終りた、^{（り脱力）}全くの失敗に終りたり、高き理想のそれより見れば、誠に憐なる価値なき物と考へ候、

尚進むへき所ハ、遙かの彼所に候、

夏の勞れにねむらずに怠なきつとめに従ふべく、何事も己の信仰に帰する事と存居り候、

製作ハ先生の説に従ひ、直に修製致すべく候、出来上り候上ハ、^{（緑カ）}額禄買求め

度、何れ御依頼申上べく候へバ、何卒宜敷御承知被下度願上候、此製作の上に見得ざる所に力加へられ候人々の上に、心深き感謝をさ、け奉候、

延引致候受取証差送申候間、御落手被下度願上候、

尚未筆にハ候へ共、皆々様へ宜敷御伝へ被下度願上候、

十月五日

虎次郎拝

大原先生 台下

※制作途上の《里の水車》を、おそらくは東京へ戻る中途に倉敷へ立ち寄り、大原孫三郎に見せたことがわかる。

注目すべきは、黒田清輝に作品を見せて修正指導を受けたことと、黒田によつて翌年の博覧会、つまり東京府の勸業博覧会出品を示唆されていることである。

作品については、親子の表情や、手指の描写を褒められ全体に上出来との評価であり、修正点としては、石段にある人を除く、母親の背後となる雉のいるあたりに少し明るい光線を入れてはとのアドバイスがある。作品の現状では、黒田の指摘通りの修正がなされている。また、学生が風景写生に向かい、人物画へ取り組むことが少ないことを黒田が指摘することも伝えている。

児島は、納得のいく作品が描けると大原へ額縁の経費をためらいなく依頼することが多く、ここでも額縁を誂えることを願っていることから、自ら作品の出来栄に納得しているようであり、さらに黒田の評価に自信を得ており、展覧会への出品を想定していることをうかがわせる。

(11) F・258・2 明治三十九年十月十一日 ※F・258・1と同封

拝啓、

先般中申上置候油絵の額縁(縁カ)の価格問合せ候処、先づ並の品にて十五六円より
に御座候、拾円位にて出来さると云ふにハ御座なく候も、あまり面白からず
候、然し縁のみ上等なるも致方無之事と存居候、絵ハ訂正致居り候へ共、額
縁へ嵌め候ハすばほどよく行き不申候ため、毎度勝手の事のみ申上る様に候
へ共、右額縁調製御許し被下度願上候、

費用ハ閣下の御考へに従ふべく存し居候へバ、幾何ほとなりとも右費用御送
金被下度御依頼申上候、なるべく至急の方都合よろしく候、

其序に向屋敷の大広間のかもゐから上方の寸尺御知せ被下度願置候、

右の製作全く終へ候へバ、今一層奮発して一製作致度望み居り候、若し出来
得る事に候へバ、明年の博覧会に出品する考へにて、何か力ある作に従ひた
く、気のみ勇み居り候、黒田先生にハ一寸先日話し置候処、極結構なる考へ
なれば、実行致すべき様申され候、

製作するとすれハ、小生の考へにてハ、とても東京の汚れたる空気の中に
ハ清きものも生れ不申と考へられ候、何所か自身の思想の上にあるものを得
る地清きに旅行して、一二ヶ月を製作のために奮闘致度き事を希望致居候、然し
費用も少々嵩む事に候へバ、閣下の御一考を煩し度望み居り候、

此夏の製作の水車も若し出品を許可さるゝなれば、出品ハ進で致す考へに御
座候、

次回の製作が水車以上の製作の出来申や否やハ未明に候へ共、此の気力の進
み居る所を善用致度き事に御座候、

右の二件御返事至急願上度御依頼申上候、

額縁代金御送付被下候へバ、其節申上兼候へ共、本月分学資御貸与願上度望
居り候、

岡田先生に依頼致置候扇面の儀今少し御猶余被下度願上候、黒田先生の分も
今少の御猶余を願申上候、

右当用まであらゝ申述候、

十月十一日夜

虎次郎拝

大原先生 台下

※《里の水車》の額縁を誂えるにあたり、金額は大原の考えに従うが、
なるべく至急に送金されることを願っている。あわせて大原家所有の向
屋敷（現在の大原美術館本館に隣接する敬俟堂か？）のかもし上方のサ
イズを尋ねるのは、その場所への設置を考えたものが。

さらに《里の水車》以上の作品を描きあげ、明年の博覧会出品を目指
す希望が述べられているが、東京の汚れた空気の中では清らかなものは
生まれないので、相應しい地を探し、一、二ヶ月を制作に充てたい希望
と、そのための経費負担を望むことを伝えている。

(12) 大原家文書 F・268 明治(三九)年十月二六日

(封筒上書)
「備中倉敷町／大原孫三郎様／至急親展」

〔封筒裏上書〕
「東京本郷区蓬萊町／六荒井方／二月廿八日 児島虎次郎拝」

拝啓、

御芳墨拝承致候、

今度の製作に就而ハ、旅行地方法等委しき事未定に候ため、閣下の御承諾被下候上、愈々決心する考へに御座候、委しき御返事承らす候へ共、小生の送り候事に御同意被下候ものと奉察候へバ、此等準備などの事今一応黒田先生にも相計り可申考へに候へハ、其上にて費用等の点委しく申送致べく候間、然様御承知被下度願上候、

〔縁カ〕
額禄の代金とし拾円、本月分の学資と共に拝受致候、

額禄も今一応よく取検べ注文可致候、若し都合によりて少々嵩む事有之やも知れず候につき、其辺御承知被下置願上度候、

右当用まで申述候、向寒の候に候へバ、御自愛專一に奉祈候、末筆にハ候へ共、御華邸皆々様へ宜敷御伝声の程願上候、

十月廿六日

虎次郎拝

大原先生 台下

※博覧会に向けた制作のための経費を願うと共に、《里の水車》の額縁代も送付されて来た十円では足りない可能性も伝えている。改めて、児島が自らのやるべき事に向けては、大原へと必要な経費を求める姿勢が伝わる。

本書簡については、封筒の消印が明治四十年二月二十八日で、封筒裏記載の日付も同日となっており、書簡文面の日付と齟齬がある。後出の

ように明治四十年二月二十八日付で岡山孤児院から差し出された書簡(23)があるため、本来、この封筒に、書簡(23)が入っており、何らかの理由で、封筒と中身が入れ替わったと想定される。

書簡の文面には、差出年の記載がないが、文面の内容から明治三九年と判断する。

〔13〕大原家文書F1260 明治三十九年十一月四日

〔封筒上書〕
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

〔封筒裏上書〕
「東京本郷区千駄木林町／二三五野中方／十一月四日 児島虎次郎拝」

今日ハ誠に心地よき日曜日に御座候、日あたゝかに朝風すゝしく、何となく身のけかれもきよめらるゝ様おもはれ候、我しらす祈と感謝とに時をすごし候、

一度信するものを得て身を捧げ、その使命に服してより己の身ハ幸福と慈悲とのうちに護られつゝ、此の日々を楽しく送り得る事を感じる度に感謝の涙は湧き候、身ハ使命のもとに力のあらむかきり誠のつきむかきりハ働く決心に御座候、

一度信者の生涯に入りてより、誠の信者として一生を終らむと望むものに候、身ハ信者としての生活と行為を全せむとするものに御座候、

誠の信仰ハ、誠の行為のみと存せられ候、己ハ己の働きの上に此の美しき信

仰を実現する考へに候、己ハ何れの教会、何れの宗派にも身を置さるものに候、され^共それ等の人より以上の信仰ハ持ち居る考へに御座候、宗教一度派に分れてより、各派只形式と虚礼の満る所となり、教堂にあ、わ^らる、宗教ハ、何となく真の力を失ひたる感せられ候、教会堂に同胞に楽しく集まれる何とて心地よからさる、されとその半面にハ面白からさる欠点も見受られ候、会堂の洗礼も全くの罪より人を救ひ浄むるの水としてハ少し濁りたる様おもはれ候、かくして己ハ教堂なるものに一種の疑を宿し候、教會員も一度会堂の人となりて何処となく会堂くさき人と化した様子に考へられ、此頃にてハ少し変な氣持を帯び候、全く自己の不完全に歸する事と覺へ居り候、

今日ハ安息日の半日を会堂にすこすを面白く進まざりしまゝ、室に籠りて祈り候、己の信する名なき宗教に只己ハ従はむのみ、然し總の宗派の信者よりもより以上の働を世の同胞に上に尽さむのみと古き決心に歸り候、

あまり多くを語り候事を謝す事に候、只胸のおもひの苦しきまゝ、誰れにかたむよしもなく、己の信する人なる閣下の前にかくも述たる事に候、

先般申送置候次の製作につき、画題のみハ握り居り候へ共、その方法につきてハ、今尚考へ中に御座候、

画題につき少し物語りたく候、画題を扒ハ愚の様に候へ共、己の志したる所に従さるへからさるを思出し候、

画題ハあれやこれやとさまゝとまよふ候折から、総ての空想を倒して現れたる一つの力ある感しを得候、

一度此の感を得候時、余身ハおどり候、己の涙ハ湧き候、そハ孤兒^がに候、最も憐なる孤兒のために弱きなからにも己の力を尽して世の人に語らむため

に、此度の製作を起す決心に御座候、

すきし年、岡山孤兒院の參觀の時に起りし一種の感、今春上野に東北孤兒を迎へし時に湧きし念、堪へず身に來りて一種の励みをわれに与ふるものあるを覺へ候、

よし製作ハ成効に或ハ失敗に終るとも何かあらむ、余ハ此の清き使命のために此身を捧けむ、一度製作に従ふ以上ハ、決して寸毫も自己の身を考へざる覺悟に御座候、余ハ幾十日か製作のために活きる考へに候、

製作の爲めにのみ此身を務むる考へに御座候、かく思定めてより、製作の地を何れに撰はむを考へ候、

岡山に歸れハ種々の孤兒院より便利も得られむ哉、鎌倉に近く某孤兒院も在る由、鎌倉の地あまり面白からず候、上毛孤兒院のあるあり候も聞き及候、何れかの孤兒院に生活して研究と感想を強めむ事を希望致居り候、此の時、一昨夜と昨夜、岡山孤兒院の第二音楽隊の來京、本郷会堂に慈善会を開会するありて、決心ハ愈々強く相成候、

博覧会開会迄にハあまりほと遠くもなく、限り有之候へ共、製作にハ限りなき事に候へバ、出来たけ思想の熟すると同時に着手致度考へに御座候、一応閣下の説を仰きたく望み候、

御尋ね被下候費用としてハ、毎月の貸費以外に、少し絵具材良の費と旅費とに御座候、それにモデル費用に御座候、今仮に予算を記し候、

絵具材良として毎月要する以外に○カンパス^{貳拾円ほど}などの費用として五六円、

絵具ハ一ヶ月の費に候、幾月かゝるか知れ不申候、

旅費ハ遠近によりて差有之事に候へバ、予想出来不申候、

滞在費ハ東京にあるとさほどの差もなき事と存候、

モデル費ハ予算も出来不申候、人ハ小年を用ゆる事に候、少くとも六七人位の構図に致すつもりに候、

他の費用ハ目的地に着してより後の事に候へ共、絵具費・カンパス材良費ハ出発前に要する事に候へバ、本月の学資と共に至急御送り被下さる様願上候、^(行カ)

若し余る事に候へバ、御返し申べく、来月の学費へ廻し可申候、

兎に角、十一月分と外に十二月分の学資として前記の費用拝借願上度望み置候間、然様御承諾被下度願上候、

前述申上候岡山孤児院にかへり可申^方■よからむ哉否か、御一報御高見を承り度望候、

無論、製作ハ閣下のもとに捧げ可申事に御座候、

以上、^{小生}■が意のある処、情の強き所御察し被下、此度の製作に便宜を恵み給らむ事を希望致候、

思のみ高まりて胸せまり頭みたれ筆つゝくる事も出来ず、紙もつき候、

閣下の前にさゝけつゝある真の感謝の我が此の涙を何卒御納め給らむ事を望み候、只思ふ事のみ申述、伏して御返信のみ待ち居り候、只胸に孤児あるのみに候、噫、

十一月四日朝

虎次郎拝

追啓、

近々御上京の由とか信に御座候哉伺上候、

※特定の宗派へ帰属するのではない児島独自の信仰心のあり方が語られる。

東京府勸業博覧会に出品するために《里の水車》以上を目指すとして

いた作品の主題が、「孤児」へと絞られたことを語る。そのために、関東の孤児院を考えるが、やはり地元であり、大原孫三郎が支援する岡山孤児院での制作を願ひ出ている。岡山孤児院での制作の是非を問いつつも、完成作は大原へと送ることを前提に、旅費、画材費などの提供についても打診している。この構想段階で、六、七人による群像とする構図を明確に語っていることも興味深い。

(14) 大原家文書 F-257 明治三十九年(十二)月十五日

(封筒上書)

「京橋区木挽町二丁目／水明館にて／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「本郷区千駄木林町／二二五野中方／十二日児島虎次郎拝」^(ママ)

拝啓、先日中ハ度々まかり出で御厄介に相成候段奉謝候、小生今夜の列車にて岡山へ直行可致候間、然様御承了被下度願上候、昨日、東京府博覧会事務所へ出品願書差出し置候、此度の製作につきてハ、充分なる覚悟と決心を致居り候、

出発までに御伺可致の所、かれこれととりまきれ、そのまゝ失礼可仕、何れ御帰郷の節、御伺申上度候、頓首

(二脱カ)
十月十五日

虎次郎拝

大原先生 台下

※東京府博覧会への出品願書を提出したうえで、制作のため岡山へ向かっている。

(15) 大原家文書 F・239 明治三十九年十一月十八日

(封筒上書)
倉敷町／大原孫三郎様／親展

(封筒裏上書)
「岡山孤児院にて／十一月十八日 児島虎次郎拝」

拝啓、一昨日夕、新橋出発、途中に下車一泊の上、昨夕無事岡山へ着し候、今朝、孤児院におもむき、表面の参観だけハ致候、愈々本日より孤児院に御厄介に相成る事と致候、充分の観察を致すまでにハ、尚数日を要すること、存居候、その上にて、構図にとり懸る事に御座候、

本日、孤児院にて、閣下の御帰宅の由聞及び候、早速御伺申上へき存候へ共、今数日間が小生にとりてハ非常なる感想を養ふに必要な時に候へバ、構図とも定まるまでハ失礼申べく御断申置候、慥に何物をか得らる、様な心致候、否必ず或物を得すハ、止まぬ決心に御座候、

孤児院より貸与へ給りし事務所の二階、誠に結構なる部屋にてよろこび居り候、

右ハ一寸様子のみ申上候、頓首

十一月十八日

岡山孤児院にて 虎次郎拝

大原先生 台下

※岡山孤児院での制作への意欲を知らせる。孤児院内で提供された部屋が、事務所の二階で「誠に結構なる部屋」であることなど、金井文彦が『なさけの庭』当時の思い出(『美術新論』四巻五号)に引用する金井宛の岡山孤児院から翌十一月十九日発信の手紙の内容と一致する。

(16) 大原家文書 F・261 明治三十九年十二月二日

(封筒上書)
備中倉敷町／大原孫三郎様／親展

(封筒裏上書)
「岡山市岡山孤児院にて／十二月一日 児島虎次郎拝」

拝啓、

昨日御来岡遊れ候由、御拝顔を得らる、事とよろこび居り候処、御来院無之
ま、御帰倉なされ失望致候、未たお目にかける程のもの出来不申候へ共、構図につき御批評願上度、一寸油絵の下絵づくり候、昨日博覧会事務所よりかねて願出の容積坪数を要する、陳列上差支候ため、縮小の上、願書訂正致すべき様申来られ、今更となりて容積縮小なと、ハ実に閉口致居る次第に御座候、

先方の勝手のよき様に致し候へハ、当方の都合あしき事と相成る事に御座候、あまり訂正なと致さぬ考へに御座候、

出品になるともならさるとも、何れにしても小生ハ只自分の尽すべき所を真面目に働く決心に御座候、

何れ式枚の出品の願書のうち、上都合にて一枚出品を許可さるれハよき方に御座候、今よりすでに陳列場の不足を口にする様の博覧会にてハ、とても一人の作を二点も陳列を許す様の事ハ万々ある間敷事と存居り候、今度の構図ハ孤児の病めるを主眼と致す考へに決し候、右あらましをのみ御報告申上置候、不備

十二月一日夜半

虎次郎拝

大原先生 台下

※下絵の制作と、制作する画題は「孤児の病める」であることを伝える。
博覧会事務局より、願書に示した展示容積の縮小を求める連絡があったことに対する反応は興味深い。

(17) 大原家文書 F-262 明治三十九年十二月二十六日

(封筒上書)
「備中／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)
「岡山孤児院にて／十二月廿六日 児島虎次郎拝」

拝啓、

昨日のクリスマスに御来院遊され候由、勝手なる事致居り御挨拶も致さす誠に失礼仕候段、不悪御海容被下度奉謝候、
(候脱カ)
別紙領収証延引ながら御送付申上間御改め被下度願上候、

昨朝五時頃のまだ星の光清き頃、院児の一隊窓の外に集りて讚美歌声可愛らしく唱れ候、全く大国に身のある夢の様なる心地致し、歌の終りたる頃、床の上に泣きくづれ候、

如何に音楽の大家ありて、我耳にその高尚なる調を聞く事を得るとも、如何で此のクリスマスの早朝の孤児の讚美歌以上に感動を得る事を得べきと信し候と共に、感謝致候、年の終りの此日最も楽しき此の祝日を受けたる事を閣下の前に感謝致す処に御座候、

聖霊の此の世に生れたりと聞く此日を記念さるべく小生が性格の上にも面目を改めむ事を祈り居り候、頓首

十二月廿六日

虎次郎拝

大原先生 台下

※滞在制作開始から一ヶ月以上が経ち、孤児院で暮らす者たちへの観察が鋭敏になっている様子を伝える。

(18) 大原家文書 F-263 明治四十年一月十五日

(封筒上書)
「備中倉敷町／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)(印刷)
「岡山市門田屋敷百七十九番地／岡山孤児院」ニテ／一月十五日 児島虎次郎拝」

拝啓、本日小包にて図案一葉差送申候間、御落手被下度候、

外の模様ハ重ねて印刷致す考へに御座候、

文字の配置ハ半紙に一寸小生の考へにて記し置候間、御一覽被下度候、

褒賞授与の証の文字不必要かと存せられ候まゝ、記入致さざる事と致置候、地の

模様ハ紋を地の色より少し濃く致す積に御座候、色ハ同質に御座候へバ、

総てにて二度摺、文字ともに三度と相成る事に御座候、

訂正の場所御遠慮なく申送り被下願上候、

今朝持参可致存居り候へ共、製作の方後れ勝に候ため、不本意ながら失礼申候、先ハ当用まで申述候、頓首

一月十五日

虎次郎拝

大原先生 台下

※大原よりの「褒賞図案」デザインの依頼に対しての対応。岡山孤児院での滞在制作時にもこうしたオーダーがあったことがわかる。水島は、次の一月二五日付（19）書簡にある「不作の稲」との孫三郎の批評とも合わせて、この「褒賞」を明治四十年二月に第一回褒賞が授与された「大原家小作俵米品評会」を指すと想定。

（19）大原家文書 F・264 明治四十年一月二五日

（封筒上書）
「備中倉敷町／大原孫三郎様／親展」

（封筒裏上書）
「岡山孤児院にて／一月廿五日 児島虎次郎拝」

謹啓、承り候へバ尊大人御不快之由、其後如何に御座候哉、御伺申上候、御療養專一に御全快の速ならむ事を切に奉祈候、

褒賞図案御目につけ候間、御一覽被下度候、御氣に叶たる様に参り不申申訳無之事に御座候、

今一度御批評願上度、万一御氣にかなひ候へ共、^バ清書可致候間、其節ハ先日

の図案御送り被下度願上候、
（小文字）
「先日図案の不作の稲とハ誠に好き批評なりし事を自覚致候、」

製作に怠りなく従事致居り候へ共、中々思ふ様にハ捗り不申、月日のみ遠慮なく進行致し、実に心苦しき事に御座候、

覚悟の上の事に候へバ、充分完製を期し可申候、

かねて御教訓被下候通り、筆とる時ハ不堪祈りつゝ、画面に対し居り候、

愚痴の様に候へ共、此度の如き製作ハ初ての事に候へバ、中々一通の事にて

ハ出来致さゝる様に御座候、

全力を信したる此の製作の上に注ぎ居り候間、然様御思召被下度候、

昨日の失敗を今日ハ重ねと誓つゝ、も又来る日くを失敗に終る事に御座候、

されと此の失敗こそ成功にたどるべき階段たる事を信じ居り候、信じつゝ、も

己の力弱き事を深く嘆慨致居り候、

先日、青野君より返事参り候へバ、一寸序なからに御一報申上候、

御同情深き閣下の信情に対し、誠に感謝に耐へざる事を切に申送り候、返事の
大略ハ、只今の境遇ハ信用もあり置位(地方)もよくして別に不足の所ハ無之候へ

共、只勉強時間の不足なる事のみ遺憾たる由に御座候、

自分にハ希望ある身に候へバ、徒に事務會計家を以て終るべからざる事を申
述べ、今望む所のものハ、支給金にあらず、置位にてもなく、只労働の傍ら
充分自習するの時間を得事を望み居る様に御座候、

別に委しく倉敷に来るべき意も無之候へバ、今一応先方へ若し自習時間得ら
るゝとせバ来社あるかを聞合すべく存居り候へバ、会社の方にて時間の都合
など如何に御座候哉、一寸御手数ながら御知らせ被下候給バ幸の事に御座候、

本月分の学資御拝借願上度御依頼申上候、

参堂仕るべく本意に候へ共、今ハ半日の時間も惜れ候まゝ失礼申居候、
何れ委しき事ハ拝顔の節申述べ、当用のみ御一報申上候、乱筆多罪

一月廿五日

虎次郎拝

大原先生 梧右

※「褒賞図案」デザインについて、大原よりの指摘を受けて、やり直し
たことが語られる。児島の仕事に関して、大原からも忌憚なく意見が示
される点も、二人の関係性について興味深い。

孤児院での制作については、複数人を大画面にまとめる制作のあり方
に苦慮している様が伝わる。

後半は、同郷の友人で、児島が上京当初に間借りをしていた青野俊一
郎についての記述と思われる。この後も、青野の身の振り方についての

記述が多い。

(20) 大原家文書 F1265 明治四十年二月一日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)
「岡山孤児院にて／二月一日 児島虎次郎拝」

謹啓、

本日青野俊一郎君が為めに御話し被下候事共誠に感謝の涙にむせび候、思ひ
起し候彼が一昨年身を捨てむために浅間の山頂によぎ登りし、その悲惨なる
折の彼の心の苦しさを、而して最も不幸なる彼が歴史と生涯とにその幸福を
祈りたる事を、

よる辺なき彼ハ世を果無く思定めて都を去りて自棄の境にさまよるた時、不
肖なからにも小生ハ若し不幸なる友を此世に救ひ得る事の能ふべくんバ、謹
而此の身を際よく友の身にかへて捧けて、友の命に代へられむ事を一夕心こ
めて巢鴨の野に祈り候、無我の祈の力ありたるかハ信せられす候へ共、友ハ
不思議にも浅間の山頂に於て神の子たるの自覚を得て、再び人の道を全くせ
んと励みつゝあるを見て、実に心嬉しき事に御座候、
幸に此度青野兄が閣下の御仁恵の下に厚き救護を得んとしつゝあるをよろこ
びて、全く此身のその恩恵のうちに浴しつゝある事を自覚致し、無上の感謝
の念に満され候、

(カ)
慈父の味知らて盲で来たる此身が御同情厚き閣下の愛に接し、その未だ嘗て味さりし慈父の愛を感じ候如く、此の不幸なる友も閣下の高き愛に欽慕しつゝ、止まざる次第に御座候、

願はくハ行末不幸なる此の孤児の爲めにその前途に幸福の光を輝し給らむ事切に希望致候、

彼ハ誠の兄の如く、小生を愛し導き候、小生も誠の弟の如く接したる積りに御座候、今や共に不幸なる兄弟ハ、閣下の恩恵のもと包まれむとす、睦しき兄弟ハ未だ見さり樂しき家庭に手を携へて慈父の愛に接せんとするの感し致され候、噫何事も神の摂理と只々感謝の外無之事に御座候、かくして益々深き信仰にと急き可申候、

二ヶ月余の孤児院生活、不完全なる我が品性のうへに幾分かの修養を益さる^{れた}事を感謝致居り候、

青野君へ只今早速出発の運び致され度き様申送り候、

何となく心の裡に思起されたるまゝ、申送度、乱筆をも鑑す御目にかけ候、不備

二月一日夜

虎次郎拝

大原先生 台下

(21) 大原家文書 F・267 明治四十年二月六日

(封筒上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「岡山孤児院にて／二月六日 児島虎次郎拝」

拝啓、

本日難波氏を訪問致、揮毫の旨御依頼申候処、目下同氏御多忙にて、今週土曜日の夕刻迄ならずてハ何とも致兼ねる様申出され候、致方も無之候へバ、同日迄の約束にて御願申置候間、然様御承知被下度願上候、

本日青野君より来電にてイマねガイキカレヌスコシマテ、との由に御座候、多分代理無之為退院するに少し手間どるとの事と奉察候、甚た相済み不申候へ共、今之処少し御猶予願上度御依頼申上候、其内委しき手紙受取次第、御報知申上べく候、

昨夜御托し相成候金員、先方へ相渡し候間、受領証封入致置き候、

去月分の御貸資の受領証甚た延引仕候へ共、御改手被下度御断申上候、^(ママ)

写真機の御伝言、本日取急き候ため忘れ終へ候間、明日早速先方へ相伝へ可申候間、御海容被下度願上候、

実ハ今日難波氏の宅を訪ぬる為め、二時間程費したる事に御座候、下西川を全体尋ね廻り候も見当り不申、交番の巡查も不明と答へ候処、折よく郵便脚夫に出会ひ問合せてやつと上西川なる事を確め、それから師範学校にて面会致候、書体字列等ハ委しく依頼致置候、右様の都合にて、小生が傍に在りて揮毫中批評すると云ふ事ハ出来不申、何時書ける事ハ土曜日迄ハ不確に候へバ、然様不惡御承引致置き被下度候、

右当用のみ申述置候、末筆にハ候へバ、御自愛專一に奉析度、謹而閣下の御祝福を奉析候、

二月六日夜半

虎次郎拝

大原先生 台下

※難波氏は、特定出来ず。青野の動向を伝える。

(22) 大原家文書 F・266 明治四十年二月十一日

(封筒上書)
「備中国倉敷／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「岡山孤児院にて／二月十日 児島虎次郎拝」

拝啓、今朝青野君より別紙到着如何とも小生の考にハ相成り不申候為め、一寸不取敢御一報申上置候、尚先方へハ出来るだけ速に決断ある様申述べ候、かゝる次第に御座候へハ、一時御心当も有之候へバ、雇医有之方御都合よろしからむと存し候、あまり延引致候て御迷惑を相かゝる様の事にてハ、甚た申訳無之事に御座候へバ、何卒然様御運び置き被下度願上候、

昨夕、難波氏の宅へ訪れ候処、約束の揮毫ハ同氏風邪の気味にて延引したれば、今日御猶予相成度様申され候へバ、明朝早々参上可致候、兎に角期日ならに遅さる様お運び致度候、

(縁カ)
次に此度の製作の額縁、先日東京へ尋ね置候処、価格二十五円位よりとの由、早速注文致度如何に候哉、一寸御意見伺上度、至急御返信被下度、早速注文致さすでハ間に合さる様にてハ残念の事と存し居り候へハ、御同情を以て御

承知被下度懇願致候、

右当用のみ取急ぎ申述べ候、頓首

二月十日夜

虎次郎拝

大原先生 梧右

(別紙原稿用紙)
「拝啓」

児島兄困まつたこと二なつた、先般保証人を経て辞職願を出した■、其理由二曰く、

「自分ハ経験ハなく頓智ハないし、それに頭が悪いで連も此大病院之事務とか、会計と云ふ様な煩雑な責任の重ひ仕事ハ苦しくて、そして成績が上りませんと、それに自分ハ本職かあるのでそれを余暇ニ習いたいから、増々成績が上らず、自分も前途を案じるから、何卒職を辞することを許可して被下ぬ」と云ふ理由で辞表を出した、処が却下された、それハ君が医学を志して居ることハ承知して居る、事務家か一生の目的でないと云ふことも承知して居る、それであるから、本院二更りても、又他の職二更へでもしてやる、今学

資があつて、勉強すると云ふのなら格別であるが、他へ又行きて働くと云ふのなら、同じ便利を与へてやる、望みなら本院へ廻してもやる、と云ふ工合二同情のある、又熱心なる言葉である、

児島兄よ、余ハ如何ニなすべきそや、大原氏之御高義ニ感泣した余ハ、もふ一日も早く其御本に行きたいのであるが、前陳の様に、引き留められて見れハどふ返事してよいやら、殆ど困却して居る、大原氏も兄も近に来ることとして、待て居て被下るのである、僕が今行かないとすれハ、大原氏へ対して再び何と云ふて言訳があるふ、

又斯くまでも僕ニ対して茲ニも同情の言葉を呉れられ、而も衣食ニ困まつて居た時から、厄介ニなつたとすれハ、義理となくとも言葉に従はねばならん、どふしたらよいであらふ、僕もほんとに気ハせるのである、こんなこととして日を過して居つたなら、何日の日か目的が達せられるであらふ、もふ余程記憶が減したであらふ、又再び勉強せねハならんのである、ほんとに僕も気が気でない、今一度話しをして、何卒暇を貰ふことニして、大原氏の方ニ行きたいのである、今一二日之内にはつきりと御返事を致し、大原氏へも御礼やら、何やらで、手紙を出す、例全身ハ茲ニ在りても、大原氏ハも僕の大恩人である、

嗚呼、今更なから束縛之身を悲しむ、金なきを思ふ、自由ニ学ひ得るの日の怠たりなりし事を思ふ、児島兄よ、右之事情不悪合点して呉れ玉へ、

此手紙ハ不取敢電報して置いた、彼れニ対するものである、又一二日中ニ発翰する、

兄之帰京ハ何日ニなるか、是非立寄て呉れたまへ、早々頓首

二月七日夜

青野俊一郎拝

児島虎次郎兄」

※青野、難波に関わる動向。岡山孤児院に滞在しての制作中も、こうした活動に関わっていた様子が知れる。

(23) 大原家文書 F-273 明治四十年二月二八日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区駒込蓬萊町六／荒井方 児島虎次郎拝／五月廿六日」

拝啓、昨日正午無事着京致候、製作も途中安全に持運び候間、御放神被下度願上候、

一昨日、茅ヶ崎に青野君を訪ね候、

未だ代人たるへき人無之候ため、そのまゝ、出発も致難く、何とも申訳無之様申述居り候、

兎に角近々のうち数日の暇を乞ふて、一度閣下の御元へ参上可致様考へ居り候由に候へバ、委しき事ハ本人より直接に申上べく候へハ、然様御承了被下度候、

昨夕、黒田先生を訪問致し候、

一応製作をお目につけ批評を求め候、

ガラス窓の外を今少し明るくすれバ、それにて足れりとの事に候、小供などハ別に改めるべき所もなしとの事に候、

次に小生より岡山孤児院の出品物として院長石井氏より借^貸呉れとの願にて、小生も如何なりてもよろしく、孤児院の都合よき様になれハ、それが本意なる旨申述べ、孤児院の出品物として別差支ハ無之候哉を尋ね候処、先生の意によれば、差支ハなからむも面白くなし、自分ハ不賛成なり、折角骨をりて描きたるものを広告的に用ゆるハ、残念の事ならむ、宜敷大原氏の方へ自分

の意なりとて、堂々美術部に陳列すべき旨申伝へられたし、そハ製作を觀て然様勧める次第なれば、是非孤兒院の方へ斷りを出して出品すべし、

小生ハもと^より、大原様ハ孤兒院の出品物として出品するハ不賛成なりしも、小生ハとても美術部の方に陳列さるゝたけの価値なきものを、徒に自分一人の名誉を得ために野心にて美術部に出品せんとするより、むしろ孤兒院の看板となりても、僅にても人の同情を引起せハ、それにて足れりとする考へにて、石井院長の望みに従たる次第に御座候、それに孤兒院よりハ、陳列場の取扱の許可も得たる事に候へバ、今更小生の勝手のよき事致し難き様申述候處、先生ハ更にその不可なる事を申され候、そハ此の繪ハ美術部に陳列してこそはしめて孤兒院と云ふ事を世人に注意さする事を得れとも、孤兒院の出品物としてハ、只人々が看板としてより外ハ意を注かさるため、その功も薄く、孤兒院のためにもあまり役にもたゝさる事なり、是れを美術部に置く時にハ、はしめて心注きて岡山孤兒院と云ふ事に心を起すべき事と信す、総て物ハ置くべき所に置かれバ、その功なく、用^ひひ方にて働に強弱ある事なれば、其由大原氏へ申述、「君^{挿入}より石井院長へ申にくければ、」大原氏より石井氏へ申伝へて戴く様にすべし、

若し此の繪が賞与などにあづかりたる時にハ、一層孤兒院の上にもその働きを及ぼす事なれば、必ず小生の意見に従ふ様、先方へ依頼せよとの事に御座候、そして新聞などにも此の繪の縮図なども何れ出る事となる場合にも、矢張孤兒院のためとなる事ならむ、折角の広告に使用するも、美術館に陳列してこそ、はしめてその功もあるなれば、大原氏より御手数ながら、石井氏の方へ委しく申述べて戴く様、切なる希望なる由物語り居りたる事を申置かれしとの事にて、小生も何となく心嬉しく、満百ヶ日の心尽しも誠に満足な

る報を得たる事を感謝致候、されと孤兒院の爲めに先生の言の方却て役立つにもせよ、約足を違ハんとする事を残念の事と又罪ある事と信し候、小生より孤兒院へ如何にして斷る事出来不申候へバ、甚失礼にハ御座候へ共、閣下より然様石井氏迄申伝へ被下候へバ、幸の事に御座候、総て此の願ハ小生の願にてハ無之、全く黒田先生よりの依頼に御座候へバ、然様惡しからず御承了被下度願上候、

出品期限にも余日無之候へハ、至急孤兒院の方へ然様御伝へ被下度願上候、画題ハ黒田先生の言葉にハ、岡山孤兒院云々とせよとの事に候、

右取急き申述置き候、

(緑カ)
額禄代金三拾五円一兩日中にハ額禄出来可致候へバ、なるべく早く御送金被下度御依頼申上候、

その序に岡田先生に依頼し置候扇面一枚出来上り居り候へバ、揮毫料三円共^〆に御送金被下度候

黒田先生ハ此繪の売約となりたる場合にハ、幾分かを孤兒院に寄附したればよからむとの事に候、

小生ハ非売品として出品致し、陳列後ハ大原氏の元へ保存を願ふ決心を申述べ置き候、

出発の際にハ、種々御迷惑かけ申訳無之事に御座候、右厚く御礼申上候、孤兒院へ二拾円食料として差出し候處、食料としてハ頂くべき筈なれば、寄附金として収め置く様致され満足の事に御座候、孤兒院ハ一方ならざる御厄介相掛誠に感謝の至りに候、かく相成り候も、閣下の全く御尽力によりし事謹^〆而鳴謝奉候、

宿所変更致し御手数煩し度く候、

前の所へ帰岡の節一時立のき候為め、臬今度上京後賃間見当る迄友人の宿へ一時止まる事と致し候、場所も空気もあしからず候へば、御安神被下度候、末筆にハ候へ共、御全家皆々様へ宜敷御伝へ被下度願上候、乱筆多罪

二月廿八日

虎次郎拝

大原先生 台下

※封筒の裏書は明治四十年五月二六日で、消印は翌日となっているが、岡山孤児院での滞在制作を終え、東京へ戻ったことを伝える文面から明治四十年二月二八日付の書簡であり、書簡(12)の封筒に入っていたものが、現在の封筒へと入れ替わったと判断する。

早速に黒田清輝を訪ねて、作品の講評を得ている。作品については、ガラス窓の外を少し明るくするくらいで十分との評価であるが、黒田の指示が、そうした細かい描写に向かっていることも興味深い。

注目すべきは、岡山孤児院長の石井十次(後に児島は、その娘の友と結婚)より、美術部門ではなく、それとは別の孤児院関係の展示場に、岡山孤児院からの出品物として作品を展示する希望があり、児島も了承してもよいような態度であることに対しての黒田清輝のリアクションである。

黒田は強く美術部門(美術館)への出品を推し、そのために大原へも石井への懐柔を願うように述べている。

黒田とすれば、岡山孤児院の宣伝ということならば、美術部門の評価が波及することや、そのためにも作品名に岡山孤児院を加えるような発

言を続けている。

また、作品が「賞与などにあづかりたる時」「売約となりたる場合にハ、幾分かを孤児院に寄附したればよからむ」という発言もあるが、それは単なる仮定にとどまらず、審査員を務める黒田からすると、それに見合う作品の出来栄であつたとも考えられる。

(24) 大原家文書 F1269 明治四十年三月六日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区蓬萊町六／荒井方 児島虎次郎拝／三月六日」

拝啓、

先日御依頼申上置候額禄代金甚た申兼候へ共、至急御送付被下度御願申上候、
(行間罫筆) 本月分の学資も「御手紙」共に御貸与被下度御依頼申上候、今度の宿ハ
(博覧会) 一ヶ月分前払に候為め、会計都合あしく候間、不悪御承了被下度候、出品期限ハ本月十日迄と相成り候、

石井院長へ御話し被下候哉、御多忙中と御察し申上候へ共、何卒よろしく御取計被下度願申候、

青野君四日に茅ヶ崎発にて御地へ罷越し候由、何れ委しき事ハ御面談有之候事と察居り候、御都合あしき事も候はんも、何処迄も宜敷御尽力を煩し度く謹而御依頼申上候、

此頃毎日部屋にとしこもり修製にのみ従事致居り候、
右取急き要用のみ御依頼申上候、頓首

三月六日

虎次郎拝

大原先生 梧右

※額縁のこと、青野のこと、そして石井十次への説得についての記述。
そして、出品作の微修正が続いていることがわかる。

(25) 大原家文書 F-259 明治(四十)年三月八日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区千駄木／林町二二五野中方／児島虎次郎拝」

拝啓、昨日青野君来京致し委しき話承り感謝に堪ざる次第に御座候、青野君も有益なりし面談をよろこび居り候、御托し被下候額縁代金三拾五円正に拝受致候、青野君ハ昨夜一泊、^{今夕}無事帰院致候間、御放神被下度候、
本日、電報為替にて金五拾五円御送付被下候へ共、何のためか不明に候へ共、察し申居り候ハ、数日前、小生より額縁の代金と本月分の学資の御送付方願上候書信、閣下の御留守中に届き候ため、御留守中にもかゝはらず御心配被下候て、早速御送金被下候事と存し候、謹而かく迄も此身の上に御尽力の切なる事を感謝致候、

就而ハ右の金ハ本月分と来月分との学資に相廻し可申候間、然様御承了被下度、その^{残の}五円ハ、扇面の揮毫料の三円を支払致し、早速扇面落手次第、御送付申上べく候、残の二円ハ小生の手元に一時御預り置可申候へバ、その御思召之程願上候、
明日、出品物博覧会の鑑査会に持運び可申為め、少し多忙に候故、不本意ながら当用のみ申上候て、失礼申上べく候、末筆ながら御華邸御一同様へ宜敷御伝へ被下度願上候、頓首

三月八日

虎次郎拝

大原先生 台下

※翌日に、鑑査のための搬入となることを伝える。

問題なのは、封書裏に記載された差出先で「林町二二五野中方」である。この住所は、岡山孤児院での制作前の児島の住所であり、岡山での滞在制作を切り上げた後の東京での住まいは、前出の三月六日付書簡のように「本郷区蓬萊町」の「荒井方」である。本文献の最後の段落の記述内容からしても、「明治四十年」の三月八日と判断すべきゆえ、書簡(12)、書簡(23)のケースと同様に、中の書簡が、後に取り違えられて本来とは異なる、この封筒へ入れられたと考える。

(26) 大原家文書 F-270 明治四十年三月十八日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京本郷区駒込蓬萊町六／荒井方 児島虎次郎拝／三月十八日」

拝啓、

博覧会へ式枚出品可致、鑑査相待ち居候処、昨^日同事務所より式枚共出品許可相成候由、報じ来り候間、然様御承了被下度候、

陳列場所の狭き為めか、出品数三百枚程の中より、僅か九拾余枚を撰択したる由と聞及び候時実ハ如何相成事かと念し居り候処、幸に右の都合にてやつと安心致候、折角描き候甲斐有之、何となく心嬉しく候、孤児院の方ハ「なさけの庭(岡山孤児院)」と画題を付し置き候、一つハ『里の水車』と名け置き候、

右不取敢御一報申上置候、開会期日も一兩日中と相成り候、

一層の勉勵可致決心に御座候、

末筆ながら御全家様へ宜敷御伝へ被下度願上候、頓首

三月十八日

虎次郎拝

大原先生 梧右

※博覧会事務局より、二点とも入選の通知があり、また出品名を《な

さけの庭(岡山孤児院)》《里の水車》としたことを伝える。

(27) 大原家文書 F-242 明治四十年三月三十一日

(封筒上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京本郷区駒込蓬萊町六／荒井方 児島虎次郎拝／三月三十一日」

拝呈、

上野に東京博覧会の開会せられ候てよりすでに十余日を過し候、

陳列致され候拙作の何となく心なつかしきまゝ、折々会場に足を運びてハ作品の前に深き思に沈み居り候、無論場中にて見栄も無之、何の価値もなき拙き作品に候へば、観者にハ只勞を覚へさせ候外、何の感しをも与へ不申事と存せられ候、小生自身にさへ不満足の点のみに候へば、とても人々に満足を与へ得る道理も無之事と信じ居り候、

(り脱力)

修養もなく、研究も浅き小生如き弱輩、そもかゝる作品にとりかゝたる事の無慮なる事を覚へ候、

製作ハ失敗に歸し候様考へられ候、されと小生ハ小生の出来るだけの事尽たる上に御座候よりせば、失敗と云ふよりも自身の無能と云ふ事を証明した迄の事と存ぜられ候、

現代の大家の作品の間に、かゝる無価値なる製作を混られ候事に候へば、小生が苦しき思へ愈深き事に御座候、

無論失敗せる作品小生自身より見れば、拙劣なる製作を大胆にもかゝる場所に出品致候小生が心の中知る人ハ察し給らむ事と存せられ候、

社界の状態、現代の経過、人生の感想の様々を觀て涙覚江候、身ハ遂に己の

不完全なる技術と浅慮なる修養の身を忘れて、遂に今度の^(かゝる力)かるゝ重大なる問題の下に絵を作る事に立至らしめ候事に御座候、

若し小生か心のほと察し給はる情けある人ありとせハ、小生が如何なる感想の起りて此度の製作に従事致候かの心実御計り被下度事に御座候、

博覧会の期日の迫りたる事と、種々の事情なとハ幾分か製作を満足に終らしめさりし事と存せられ候、

されと一人心の中に深くく切にくゝ感謝の涙にくれ居り候、あゝ誰れか不肖なる身に此の作品を与へ給ひしかを、

小生の心ハ遂に遠くくはてもなき処にさまよひ候事に御座候、感謝の念の心に満ち候時、語れぬほどの嬉しさを覚へ候、神ハ余を愛し給へりと云ふ事の愈深き事を感じ候、恵に浴しつゝ、ある身ハ充分曲身^己の身を勉めて世人のため

に幸福を計るべく奮闘可致事に御座候、

此度の製作につきても、只一人にても半人にても此の作品より何か感しを得られ候人有之候へバ、過分なる身の幸と存し居り候、情の庭なる絵かそこに

或一種の感情を世人に伝へ得らるゝべく相成候ハ、幾年かの後の事と存せられ候、不肖が余年の身を此の画題の製作のもとに捧げ尽すべき悟^覚に御座候、

今日月^三の終りの安息日の夕暮れ行く鐘の音に耳さへて深き■冥想に沈み候て力ある自覚に醒め候、己の精神一到致し候へバ、何事かならざる事かあるべき充分なる覚悟と信仰のもとに思を定めて聖なる芸術の下に此の霊と肉とを

捧げ可申事に御座候、

前途尚遠く暮れ行く夕ハ又清き朝を迎ふべく神に身の運命を祈りつゝ、修養に怠り申間敷事に御座候、かく何事か心の中に現れ感したる様に候へバ、心の

せまり候まゝ、筆運び申候、

思乱れて意味もなき此の書面御送り申候不遠慮さ御ゆるし被下度候、頓首

三月三十一日夜

虎次郎

大原先生 台下

※展示された自作を前にして、卑下する言葉を並べている。大原へ、謙遜の姿勢を示す意図もあるのかもしれないが、制作が済むと、自分の達成を極めて低く見積もり、メンタルが落ち込む様子は、制作者の中にま

ま見受けられるパターンだが、児島のこの手紙はその典型。

(28) 大原家文書 F1272 明治四十年五月二二日

(封筒上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「仙台市菊平旅館にて／五月廿二日 児島虎次郎拝」

拝啓、其後ハ誠に御無音に打過ぎ申訳も無之事に御座候、御高堂愈々御清福の事と奉賀候、昨日上野駅に東北地方貧兒の岡山孤兒院より帰国するを見送りに参り候処、急に此の兒女を待迎^へとする故郷の憐なる両親兄弟の情ある心の中如何や、親を慕ひそびて遙之旅路たとる此の幼兒か心情、何となくなつかしく其処に美しき人生の愛情ハ現れ申さず哉、その一場の光景ハ何か或る黙示を与へられむかと思ふ心のやる瀬なく、突然当仙台迄兒童と同車致し、道々久し振にて帰郷する愛子を迎ふ親の愛情の極、殆むと狂人の如く呼び走

る姿、憐なる母姉の見違るほど美しき姿をなかれて無邪気に打見守る妹弟なとの影一つとして詩ならさるなく、絵画ならさるハ無之候、慥に此の行ハ或る物を小生か心操の上に与へられたる事を感じ居り候、

此の旅ハ全く別世界に路たとなる様の心地致し候、明日ハ帰京可致く考へ居り候、

親子会遇の情ハとても言葉にも筆にも現せ不申候、何時かハ一度絵面の上に描き現し度く考へ居り候、

此の旅行ほと心霊上に得たる大なる土産ハ無之候、

○

昨日午前、学校にて黒田先生より申伝へられ候、大原様の御出京ハ未定なる哉、なるべく早く大原様に面会して、是非話し合せ度き事有之候故、是非御上京を的にして待ち居る故、御上京の上ハ、早速御一報願上度き様切に依頼され候、黒田先生より直接通知致さる、筈に候へ共、多忙中取急きノま、小生より問合せ置き呉れと依頼致され候、

御上京の御噂のみにて、未だ御出発も無之、待心のみ積り居り候、何れ御上京の節にハ、何かと御話しも申上度樂しみ居り候、今日ハ少々旅勞れ致居り候ま、此ま、失礼申べく、末筆ながら皆様方へ宜敷御伝へ被下度願上候、先日、博覧会出品洋画目録一部差送り申置候が、御落手被下候事と存し候、頓首

虎次郎拝

大原先生 台下

申上兼候へ共、六月分の貸資本月末迄に御送金願上度御願申上候、理由ハ先月申上候通りに御座候、

※東北地方から、一時的に岡山孤児院に身を寄せていた子どもたちが故郷へ帰る姿を上野駅に見送りに出たが、情動的に仙台まで同道したことを伝える。

また大原が上京の折に、黒田が面談を希望していることを伝える。

(29) 大原家文書 F-274 明治四十年七月八日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区駒込蓬萊町六／荒井方 児島虎次郎拝／七月八日」

拝啓、愈々御清適の御事と奉賀候、博覧会授賞式も終り候へバ、早速帰郷可致休暇中の製作にとりかゝるべく考へ居り候、不肖の出品物にも賞与有之候事、誠に意外の事と存せられ候、例へ賞牌を得候とも、やはり拙きものハ拙き事に候、別に製作物に光彩加るへき事にても無之事と存し居り候、先日、陛下の御観覧有之候節、孤児院の絵に御目止まり候由、小生ハ何の光栄も無之候へ共、孤児院のために目出度き事と嬉しく覚へ居候、昨日、宿の老嫗涙うかべてその光栄を祝し呉れ候、別に此迄何とも感せざりしも、此の深き同情の涙に動かされ候、愈々奮励神の榮を發揮可致事に御座候、

御上京中拝受致候学資金の外、絵具代式拾五円過分に候へ共、そのま、拝借致置き候、此の夏も充分勉強可致候、額縁^(縁カ)ハ帰郷の節持帰り申べく候、

博覧会へ出品中の油絵式面の外箱代ハ二個にて凡そ拾円位かゝり申様に御座

候へバ、運送費たけ別に御払ひ被下度願上候、尤も本月末迄ハ發送出来不申候へバ、小生帰郷の時御訪問致し御話し申上べく候、

先日、青野君を茅ヶ崎に訪れ候、病氣ハ全快致し居候、大分十日頃にハ代理来るべく候へバ、出来るたけ速に出発可致語り居候、

右延引ながら一寸申上置候、末筆ながら皆々様へ宜敷御伝へ被下度願上候、頓首

七月八日

虎次郎拝

大原先生 台下

※授賞式が終わったことを伝えている。天皇・皇后の観覧や、宿の老婆の喜びを伝えながらも、本人は極めて自制的に、自身の作品についての評価を示している。

一方、金銭の動きについては実に几帳面に伝えている。

(30) 大原家文書 F-275 明治四十年七月二十七日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「備中成羽町／七月廿七日 児島虎次郎拝」

拝啓、

愈々御清栄の事と奉賀候、帰郷後ハ画題の撰択におもひこらし居り候、

宮内省の買上も手続相済みたる様子に御座候へ共、小生の所ハ未だ何の通知も御座なき事に候、委しき事を事務所に問合せ度、切山君に依頼致置き候、知人よりの通知によれば、価格定まりたる様子に候、価格の点ハ小生の意を得たる次第に御座候、

黒田先生も熟考なされし事と奉察候、

此度の事につき、家人のよろこび筆にも尽されず候、我恩人の上に深き感謝の意表し居り候、留学の事も先日始めて相話し候処、只感謝の涙にむせび居り候のみ、此の一場の光景ハ詩とも絵とも相成るべき事と存せられ候、渡航免状の方もそれ／＼相運び居り候間、然様御承引被下度候、何れ御面倒相かけ可申事と恐縮致居り候、延引ながら受領証差送り申上候間、御落手被下度候、

末筆ながら御自愛專一に奉祈候、此夏の海浜御生活誠に嬉しき事に御座候、謹而我恩人の上に御健全を祈るものに御座候、御全家様へ乍憚御鳳声願上度候、

右当用のみ申述候、頓首

七月廿七日

虎次郎拝

大原先生 台下

※成羽に帰省し、早速に次なる画題を求めていることを伝える。

《なさけの庭》の宮内省への買い上げも触れているが、その価格について「黒田先生も熟考なされし事と奉察候」との記述から、その点にも黒田の関与があったことがうかがえる。

この買い上げについて、児島の生涯をたどる最初のまとまった著述で

ある児島直平『児島虎次郎略伝』（一九六七年 児島虎次郎伝記編纂室）に「皇后陛下の御感に入り、宮内省お買い上げの光栄を得」という記述があったこともあり、従来、皇后陛下がお買い上げになったとする記述を私もなしていた。しかしながら、水島博氏の調査により「東京勸業博覧会事務報告 第五節御買上品」（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/801787/1/52>）では、「皇后職買上品」欄ではなく、「宮内省買上品」欄に児島作品は記載されている。実態は、皇后陛下がお気にいられての買上となったのかもしれないが、今後はその記載に留意したい。

かねて希望していた渡欧については、「渡航免状の方」とあることから、すでに具体化していることもわかる。

〔31〕大原家文書 F・276 明治四十年八月十四日

〔封筒上書〕
〔都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展〕

〔封筒裏上書〕
〔川上郡成羽町／八月十四日 児島虎次郎拝〕

拝啓、

暑きびしく候へ共、愈御清福の事と奉大賀候、

先日ハ御親切なる御言葉戴（きか）く奉感謝候、御無沙汰のみ致居り、何と申訳も御座なく候、

日夜を製作のために心痛致居り候、祈りつゝ、祈りつゝ、或物を得る迄祈り居り候、

此の苦しき心も祈らハ熟するの時も来る事と信じ居り、

此度の製作の画題ハ未定に候へ共、思想とも云ふへきハ、「弱き者のために」

筆とる考に御座候、

中の画人物ハ二人描く事と致候、

早く製作を終へ、我（わが）き製作のために祈り給る恩人の御目にかけ、親しき批評

承り度く望み居り候、

博覧会出品のなさけの庭ハ、去る六日、宮内省に差送り済之由通知有之候、

水車の絵数日の内東京発送と相成るべき事と存し候、

青野君一昨日着倉の由、向後種々御厄介に相成候事と存し候、何卒此の不幸

なる友の上にあたかき御同情給り度く懇願申上候、

末筆ながら皆々様へ御伝声被下度、尚御自愛專一に奉祈候、頓首

八月十四日

虎次郎

大原先生 台下

※次なる作品は「弱き者のために」人物を二人描く構想を伝える。

《里の水車》が東京から発送されることが、青野俊一郎が茅ヶ崎での療養を終えて、倉敷に移ったことも伝える。

(32) 大原家文書 F・277 明治四十年八月二四日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／八月廿四日 児島虎次郎拝」

拝啓、

益々御清祥の事と奉大賀候、

製作も追々進み申居候、画題ハこれと云ふほとの名も定まらず候へ共、二人の少女が学校の業を終へての帰途の様を描き居り候、
中の画人物ハ他に一人の老夫一人加り候、

二人の少女の幼きハ六七才位、他ハ十才位のあまり裕ならざる家庭の子を撰び候、

モデルの上にも心の貧しきものを撰び候、そハ聖書の心の貧しきものハ幸なりと云ふ言葉の意に適せしめ度く存し候ま、かく致候、二人連たちて途過る傍に、半裸体の老夫の草履造る所に御座候、時ハ暑き日光を描き度、モデル使ふにハ一方ならず閉口致居り候、幼き方のモデルハ如何にしても其後ハ来す閉口致居り候、他に代りの子供雇てハなるましき事と存し候、今日ハ旧盆の休とて、モデルハ遊びに耽りて来らず候、中々に思ふ様にハ参り不申候、されと此の憐なるモデルの上にも幸福を祈りつ、製作に従事致居り候、

去る十六日、東京発送にて、博覧会出品中の水里の絵差出し候由、不日着倉の事と存し候、運賃先払と致たるやも知れず候へハ、然様御承引被下度候、製作の暇有之候へバ、時々御音信申上度存し候、充分心注きて自然の意を製

作の上に実現致度奮励可致候、

御全家様へ宜敷御伝へ被下度願上候、頓首

八月廿四日

大原先生 梧右

虎次郎拝

追啓、博覧会にて買上と相成候絵画の価格ハ、未だ事務所より何の通知も御座なく候へ共、知人よりの報知にハ、三百五十円とかに御座候、価格如何にか、はらず、小生の所有にてハ御座なく候へバ、あまり委しく尋ね不申、孤児院への寄附金の一部とも相成候へハ誠に結好の事と存し候、博覧会より通知有之候へハ、慥なる事御報知申上^(く脱カ)べ候、拝具

※《登校》(高梁市成羽美術館蔵)の制作経緯が語られる。「二人の少女が学校の業を終へての帰途の様」を描くとの記述は、現在の作品の図像通りであるが、児島は、登校時ではなく、帰校時と位置付けていることがわかる。当初は、半裸体の老夫が草履を作る姿(高梁市成羽美術館に習作あり)も描かれ、子ども共々モデル探しに難儀している。

《里の水車》の倉敷到着と、《なさけの庭》の買い上げ金額に目途が立ったことを伝える。

(33) 大原家文書 F・278 明治四十年八月二九日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／八月廿九日朝 児島虎次郎拝」

芳墨拝見仕候、明石地方へ御旅行遊され候由、静けき浜辺に御心と御身養い給ふ事誠に嬉しき事に奉存候、一昨日、青野君より来倉致せよとの伝言有之候ため、本日訪問可致考に候処、只今御手紙に接し思止まり候、祈れともく製作の苦しみハ身に滲み申候、一層倉敷に趣きて楽しき製作にとりかゝらむかと心定めかけ候、今日の御手紙にて出発も思止み候と共に、勇気加りて製作を続け可申候、神の御心のかなはせ給ハ、拙き製作の上にハ光ハ加り可申事と信じ候、

先般岡山県庁にて旅行券下付願につき聞合せ候処、至極榮々たる由承り、其通り願書認め当地警察署へ差出申候処、斯様な簡単なる事にてハ駄目なればとて、非常に複雑なる書式を要する由告げられ候、製作の妨となりてハ馬鹿しくと打過し居り候、就而ハ本日倉敷に趣き親しく御依頼可申存し居り候へ共、御帰倉迄ハ出発を見合せ申候につき、面談も得られ不申候へバ、一寸其要用のみ申述度候、

保証人氏名を要すべき事(なるべく一地方に保証人の住所あれハ調査等自然と速に運るべき由に候故、なるべく他の一人の保証も御地にて依頼致度く望みに候)保証人の保人としての■証明書と町長の保証人の資格証明書と其他に通学資出費者の承諾証と都合五通必要に候由、委しくハ倉敷に参り御依頼可申存し居り候へ共、右御承知置き被下度願上候、保証人の一名若し御地にて閣下より御依頼致下され候へバ、誠に都合よろしき事に候へ共、若し承

諾給る人無之候へバ、他にその資格の人見出申べく候へハ、御様子御聞せ被下べく候へバ、甚た好都合の事と御願申上候、毎度勝なる御願のみ申述失礼の事に奉存し候、

桜井熊太郎氏御母堂の一周忌かねて御帰郷中に候ため、昨夕一寸訪問致居、留学の事なと物語り申候処、非常によろこび給り候、これより製作を続け可申摺筆可申候、

明石御滞在幾日頃に候哉、御帰倉の日も定まり候へハ御一報被下度御願申上候、頓首

八月廿九日

大原先生 台下

虎次郎拝

※旅券の申請手続きのため、岡山県庁と警察署を訪ねるが、手続きの煩雑さに辟易する様子を伝える。渡欧準備が進む。

(34) 大原家文書 F-279 明治四十年九月十五日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／九月十五日 児島虎次郎拝」

謹啓、

先日中ハ長々御厄介に相成り候段深く御礼申上候、

御調印御依頼申置き候書類、本日差送り申候間、一応御改め被下度候、

県庁に立寄り問合せ申候処、別紙様の書式の外、他に身分財産の証明書など必要無之由に御座候、成羽の警察署の方へハ其節電話にて委細の願書の事なと県庁の警察係の吏員より相談致居られ候へバ、今度ハあまり面倒臭き事もある間敷事と存せられ候、

当地ハ夕方よりハ秋冷を覚ゆる事あまりに強き位に候、製作にハ誠に都合よろしき氣候と相成よろこび居り候、絵具欠乏東京に注文すれとも品切のもの多、これのみハ実に閉口千万に御座候、

先日、岡山にて石井院長に面会致候、七日間の祈りの実験上得られ候感想親しく承り大に得る所有之候事感謝致候、

倉敷紡績会社にて数度目に致し候工女の様、尚今もあり／＼と記憶に残り居り候、近き将来に於て、美しき製作の画題たり材良と可致事決心致候、

九月分学資受領証差送り申上候間、御落手被下度候、

先日参堂仕り候節、是非御願申べく存し居り候処、つい／＼打忘れそのまゝにて帰郷仕り候が、甚た失礼なる次第に候へ共、写真機の御不用なる品出来候へハ、御拝借願上度、製作中散々苦しみたる上致方なく其の必要を感じた

る次第に御座候、何時にても宜敷、若し御不用のもの出来候節ハ、御貸与被下度前以て御願申上置候、

東京博覧会へ出品致候孤児院の絵の写真、東京にて六ツ切か四ツ切かに撮影致候もの、岡山孤児院に参り居り候、中々上出来の写真に御座候、絵よりも写真を見る方余ほと立派に御座候、失礼ながら御高堂皆々様へ宜敷御伝声願上度、先ハ御礼旁々御依頼申上候、頓首

九月十五日

虎次郎拝

大原先生 台下

追啓、切山君ハ其後御参堂遊され候哉、御不幸なる御境涯誠に同情に堪ざる次第に御座候、何卒此上も御親情厚からむ事を願上候、種々残りし一家の始末につきてハ、一方ならざる御厄介に相成る事と存候、何分によりしく御取計被下度、切に懇願致置候、

※旅券の申請手続きなどが続く。

倉敷紡績の女性従業員を描きたい旨などは、児島の主題選択の好みを示すだろう。

大原へと写真機の借用を申し出ているが、制作へ役立てようとする記述は注目。

(35) 大原家文書 F-281 明治四十年十月二日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)
「備中国成羽町／十月二日 児島虎次郎拝」

拝啓、

益々御清祥の事と奉賀候、先日、青野君に托し製作中絵画写真にて御目にか
け候か、御高覧被下候事奉存候、嘸御予想と違ひて御不満の事と奉察候、

意外労力と日数を費し、予定の日数を過し候、今数日間にハ製作を終へて親
しく作品を御目にかけ候へく相成事に御座候、

製作ハ余か生命に御座候、作品ハ永遠に伝べき余か愛子に御座候、然して神
を賛美するための献物に有之候、

作品の上に生命を宿さむにハ、作者の生命を献けさるべからざる事を自覚致
居り候、神の高き批評ハ心に響き、新なる思想ハ胸に湧き候、祈りに筆とり

て祈りに製作を休止致居り候、されと我手ハ弱くして、神の御旨伝導すべき
製作の筆ハ握るに尚力及さるものに御座候、

噫我ハ煩惱すれとも尚目的の道ハはるけく候、

先日来二週日の労を費して描きたるも、画面の一部あた成すなくして塗抹
する所と相成り候、

描き試みてハ得るなくして空しく絵具の底に葬り終へるハ、誠に心苦しき事
に御座候、小生か描く目下の作品ハすべて手習草紙に均しき草稿のみに御座

候、

美しき真の清き作品ハ、幾十星霜の後にハ御目に懸くる事も出来得べきやと
痛心の事に御座候、

前途の光明ある神の御座に近かむため祈こめつ、天職の下に専心奮励可致候、

製作以外物思ふ暇も無之失礼のみ致居り候、末筆ながら秋冷身に沁み来り候
折柄、御自愛專一に奉祈候、御令室様へよろしく御伝へ被下度候、

製作完結の日未定に御座候へ共、尚四五日ハ今の処にて相かゝり可申、不満
足なる点見出し候へハ、又々訂正のため延引可致やも不計候、

右御様子申上候、早々

十月二日

大原先生 台下

虎次郎拝

※7月からの成羽滞在も長引くが、《登校》と考えるべき作品の制作に手
間取り、画面の一部を塗り潰したことがわかる。

(36) 大原家文書 F-282 明治四十年十月十九日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／十月十九日 児島虎次郎」

拝啓、

本日製作を終へ申候、昨日海外旅券下付相成候共に種々御配意を煩し候段、

謹而奉感謝候、

作品ハ完製とハ申上兼候へ共、不満足之点ハ大低訂正致候につき、一先筆を置き申候、何れ御高評承り候上、描き改むる所も有之候事と奉存候、画面の乾き次第、出発可致事に御座候、

上京前、福岡に従兄正田を訪問致度望み居り候まゝ、数日間御暇被下度、尚祖母同伴致呉れと申居り候につき、不意なから、下向の節ハ失礼可申やも不計、帰途ハゆる／＼参堂可仕候間、何卒不惡御了承被下度、右不取敢御様子申上候、委細ハ拝眉の節申述候、早々

十月十九日

虎次郎拝

大原先生 台下

— ※成羽での《登校》制作を終え、東京へ戻る。 —

(37) 大原家文書 F・283 明治四十年十一月八日

(封筒上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)

「東京本郷区駒込蓬萊町／六荒井方 児島虎次郎／十一月八日」

拝啓、

本日博覧会にて支払を受け候、別紙記載の通りに御座候、

昨日、正木校長に面会仕り候処、何故今度の展覧会に出品なさゝりしや、斯

様の時に出品して呉れるなら都合よきに、何れ大作か出る事と楽しみ居りたるに、失望なしたる由語られ候、かくも同情を与へらるゝ人々に対し、誠に申訳もなき事と残念の至りに御座候、されと別に自分の職分を怠りたるにハ御座なく候へハ、自分の尽したる所に推察を給るより外致方も無之事に御座候、来るべき大博覧会にハ、その謝意として充分奮励の作を御目につけ可申候、

文部省の展覧会一通り参観致候、博覧会のそれよりも一層の見栄致され候、画家の苦心のあとと各作品の上に歴然と現れ居り候、

黒田先生ハ、未だ面会仕らず候、今少し不十分なる所を訂正致し候上、批評を乞ふ考へに御座候、その節ハ委細申伝べく候、

切山君にハ一兩日に御目にかゝり可申、委しき事承り可申候、

右一寸当用まで申述置き候、末筆にハ候へ共、御全家様へよろしく御伝へ被下度願上候、

先日拝受致候学資の受領証之紙一枚必要に候間、御序に御送り被下度御依頼申上候、早々

十一月八日

虎次郎拝

大原先生 台下

(37・2) 大原家文書 F・283 同封別紙

博覧会事務局の書式で項目名が印刷されたものに、手書きで記入。手書き部分は―で示す。

美術館売約代金下渡表

出品人 児島虎次郎（本郷区駒込蓬萊町六 荒井方

売約月日	部	類	品名	数量	価額	手数料	福引基金	下渡高	下渡月日
7月 20日	1	19	西洋画 なさけの庭 岡山孤児院	1	350円000	10円500	17円500	322円000	

※正木直彦東京美術学校校長と面談。正木の言う「今度の展覧会」は同年十月に開催されたばかりの第一回文部省美術展覧会と考えられ、同展への不出品を残念がられる。従来、この文展不出品について事情を検討する資料がなかったが、児島としては、郷里成羽に籠り、制作に没頭していたゆえのこととの認識であり、同展の感想などからも、何らかのトラブルがあったわけではないと察せられる。

(38) 大原家文書 F-284 明治四十年十一月十三日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区駒込蓬萊町／六荒井方／十一月十三日 児島虎次郎」

拝啓、楓葉紅なる小春之空愈々御清栄の段奉大賀候、

昨日、切山君と会談致候、別にさしたる変りも無之候へ共、何となく心痛之様子察せられ候、一週に二日午後を木山君の所に通勤致し居られ候由、時間

の規定等もなき為め、帰宅ハ大低十時・十一時頃と相成るべき由に御座候、

費用節減のため備中館に引越れ候につき、通学の便も都合あしき事と存せられ候、木山君の所にてハ一ヶ月五円之収入にて、国元の御母堂に全部御送金の由に御座候、

種々話も承り候か、只今の様子にてハ、^随充分無理なる勉強と存せられ候、切山君の修学上にも却て結果あしき様察せられ候、

此上なから国元への送金ハ、切山君の労をとらずし、^て只同氏を修学にのみ専心勉強之方法を与ふる事得策と存せられ候、小生より甚た差出かましき事に候へ共、切山君卒業迄国元への送金、閣下の厚き同情に乞ひ、御保助仰き度、^(補カ)

切に希望する所に御座候、

斯く相成り候へハ、切山君も一層の奮励可仕、学業の成績も充分望みある事と存せられ候へハ、何卒然様御承諾被下、親しく嘆願申上候、

本日小包にて褒賞落手仕候、後便にて様子申上べく候、

今夕、黒田先生を訪問可仕候、先日より先生多忙に候ため面会を得ず、それ

と花筵の着荷を待ち居り候処、本日着荷致す由、会社の方より通知有之候へハ、絵と共に持参仕り、閣下より御托意申伝へ可申候、

先生に面会致候へハ、種々用事も出来可申事と存せられ候、委しき事後便にて申述べに候、

学資受領証一葉御恵み被下度願上候、

右当用迄申述候、早々

十一月十三日

大原先生 梧右

虎次郎拝

※同郷と考えられる切山への支援依頼。

黒田を訪ね、大原から託された花筵を届ける旨が記される。明治期に倉敷近郊で花筵が盛んに生産され、特に磯崎眠亀による錦莞筵は、海外向け輸出品の花形ともなる高級贈答品であった。孫三郎から黒田への贈答品としても相応しいものだが、一方で、大原が一九二〇年代半ば以降に注力する地場の優れた工芸品振興に、すでに関わっていた形跡として注目される。

(39) 大原家文書 F-285 明治四十年十一月十四日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)
「東京本郷区蓬萊町六／荒井方 児島虎次郎／十三日」

拝啓、昨夜黒田先生を訪れ申候、錦筵相届け申候処、厚く謝意伝へ呉れと申され候、拙作の批評夜中にて満足に聞とれ不申候へ共、二人の子供の内にて、帽子を戴たる年少之方面白き様申され候、老人と其傍の小供ハ取去りたる方全体の調和よろしきと語られ候、色調ハ灯光にてハ批評も出来かたき事と存し候、老人と子供とを無くして背景を少し改め可申候、夏の強き光を目にする事を得ず、都合あしく候、兎に角く未成品に候ため、とても満足なる事ハ御座なき事と存し候、今一夏を此の作品の上に費し候へハ、此の絵も完製可致存し居り候、

旅行準備の事など種々承り候、これよりその準備にとりかゝり可申候、昨夜額縁屋に参り候、適合之縁無之、新に調製致させ候、普通一週間ハかゝり可申、急きても四五日かゝる由、致方なく切合せのもの作らせ、本日中午に発送の運びに致させ候、縁ハ舶来にて上等に候へ共、只トメの所之花形都合よく適合致し不申るが欠点に御座候へ共、和製の品より金の色など美しく候、価格仕上後ならでハ定かならず候へ共、八円内外之处に候、若し画面か此の縁より狭き場合にハ、縮少致す事も出来可申候、運送ハ旅客車便にて発送致させ可申事に御座候、

右御一報申上候、早々

十四日

大原先生 台下

虎次郎拝

※黒田を訪ね、《登校》の講評を受ける。この際に、老人と子どもを「取去りたる方全体の調和よろしき」のアドバイスを受ける。児島としては

構成要素を増やし「弱き者のために」という意図を実現しようとしたの
だろうが、黒田の示唆に従い、現状に至ったと考えられる。

※《登校》の修正を進める。この後、児島は東京を引き払った後、一九
〇八（明治四一）年一月に神戸から渡欧することとなる。

（40）大原家文書 F・286 明治四十年十一月二七日

（封筒上書）
「備中国倉敷町／大原孫三郎様」

（封筒裏上書）
「東京本郷区駒込蓬萊町／六荒井方 児島虎次郎拝／十一月廿七日」

謹啓、向寒の候と相成り候処、愈々御清栄之事と奉遥賀候、

先日御尋ね申上置き候品評会褒賞印刷之件、如何御確定相成るべく候哉、御
多忙中勝手ケ間敷候へ共、何卒御一報被下度願上候、其節同図案原稿御送り
被下度願上候、

休暇中の製作、其後筆を加へ居り候、背景描き改むべく、写生を要し候へ共、
天気都合あしく閉口致居り候、額縁ハ不日出来上り可申候へバ、それ迄にハ
仕上致度存し居り候、充分此絵を完製可致にハ、今数ヶ月を要すべく候、語
学の勉強に時間を費し居り候、

先便にて様子申上置候切山君之現状、如何御考へ被下候にや、御高慮御漏し
被下度御願申上候、末筆ながら御全家様へ宜敷御伝言被下度、謹而閣下の祝
福を祈居り候、早々

十一月廿七日

虎次郎拝

大原先生 台下

「解説」

はじめに

ここで紹介する40通の書簡は、東京美術学校在学期の児島虎次郎（1881-1929）が、経済的支援を受けている大原孫三郎（1880-1994）に宛てたもの。大原が暮らした岡山県倉敷市の本邸に残されたもので、同邸を「語らい座 大原本邸」として運営する公益財団法人有隣会の水島博研究員の調査により現存が確認され、同所での特別展「大原家に残る書簡の数々」学生児島虎次郎からの書簡」（2024年7月9日-8月4日）にて公開された。この公開に先立ち、児島虎次郎の孫で、長年虎次郎の顕彰に務める児島塊太郎（公益財団法人成羽美術振興財団理事長）が、事前に資料提供を受け、虎次郎の義父である石井十次を顕彰する「第二十四回石井十次セミナー」（2024年8月25日 主催：社会福祉法人石井記念友愛社）において「石井十次の娘 友を妻にむかえた画家 児島虎次郎の家族」と題した講演を行い一部は活字化もされた。

その内容は、美術史研究にとっても極めて貴重な資料と考え、改めて水島による全文の翻刻を掲載すると共に、柳沢秀行によるこの解説等を付して紹介する。

児島虎次郎と大原孫三郎の關係

児島虎次郎は、現在の岡山県高梁市成羽出身。1902年に東京美術学校西洋画科選科に入学。同年、倉敷紡績初代社長大原孝四郎（1833-1910）と、その息子で1906年には倉敷紡績の経営を引き継ぐこととなる大原孫三郎が設けていた大原奨学会の奨学生となり、その経済的な支援を受けることとなる。これ以後、大原孫三郎と児島虎次郎は、1歳しか年齢が違わないこともあり、支援する者とされる者という関係にとどまらぬ深い交友を持つこととなる。

児島は、東京美術学校を、二度の飛び級を果たして1904年に卒業。同期卒業生は青木繁、熊谷守一、山下新太郎、和田三造など合計10名。児島は、引き続き同校研究科に学ぶが、在学中の1907年3月20日-7月31日に上野で開催された東京府主催の勸業博覧会美術展（以後、東京府勸業博覧会《なさけの庭》（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）と《里の水車》（大原美術館蔵）を出品し、前者が洋画部門一等賞かつ宮内省買上となり一躍その名を高めることとなる。

この博覧会は340万人が来場する盛況ぶり、美術展も西洋画だけで99点の入選作からさらに受賞作が絞られる競技会形式の本格的なものであった。この時、同じ一等賞に名を連ねたのは岡田三郎助（1869-1939）、中沢弘光（1874-1964）、中村不折（1866-1943）、満谷国四郎（1874-1936）、山本森之助（1877-1928）、和田英作（1874-1959）だが、このうち岡田、満谷、和田は、この展覧会、さらに半年ほど後となる同年10月に創設された文部省美術展覧会で中村も加えて審査員を務めている。すでに高い評価を受ける画家たちに混じって、まだ学生であった児島が受賞したわけである。

この壮挙を受け、大原孫三郎の経済的支援によって、児島は1908年から5年間の滞欧を果たし、画家としてのキャリアを積み上げると共に、大原美術館の礎となる西洋美術作品収集を始めることとなる。

書簡の意義

1907年の東京府勸業博覧会、児島虎次郎にとって国内的に高い評価を受けるとともに、5年間に及ぶ滞欧の機会を得る重要な契機であった。その出品作である、《なさけの庭》と《里の水車》の制作の状況が、ここで紹介する書簡によって明らかになったことは大きい。また従来は、十分な検討資料がないため、この受賞を契機として大原孫三郎が推奨したと推定するにとどまっていた児島の滞欧が、すでに先じて児島より強い希望が伝えられてい

たことも注目される。

また東京府勸業博覧への制作、出品にあたつて、東京美術学校教授であり、東京府勸業博覧の審査員も務めた黒田清輝（1866-1924）の具体的な関与の在り方をうかがい知ることが出来ることも大きい。またそのことは、すでに《海の幸》（1904年作 アーティゾン美術館蔵）などで高い評価を得て、東京府勸業博覧へも現在では重要文化財に指定されている《わだつみのいるこの宮》（アーティゾン美術館蔵）を出品しながら、三等末席という低評価を受けた青木繁との対比を考えるためのきっかけともなるだろう。

加えて、東京美術学校在学中に模写を行った《支倉常長像》（東京藝術大学美術館蔵）と、東京府勸業博覧以降に制作された《登校》（高梁市成羽美術館蔵）の制作経緯を把握することも出来る。

現在は仙台市博物館が所蔵し、慶長遣欧使節関係資料として国宝にも指定されている《支倉常長像》の模写は、当時の東京美術学校関係者が、文化財保護にどのような関わり方をしたのかを示す具体例として注目される。

また郷里成羽に長期間留まつて《登校》制作に没頭したことや渡欧準備もあつて、1907年10月の第一回文部省美術展覧会へ、児島が出品することもある。考えていなかった様子が把握できる。

《なさけの庭》と《里の水車》についての従来の研究

児島虎次郎の活動概要について最初にまとめられた文献として、虎次郎の長男の児島琥一郎や甥の児島直平により編まれた『児島虎次郎 三十三回忌供養志』（私家版 1961年）所収の「児島虎次郎略年譜」、そして児島直平『児島虎次郎略伝』（児島虎次郎伝記編集室 1967年）がある。

「児島虎次郎略年譜」では、《里の水車》に描かれた人物と場所について、成羽川総門橋北詰約200m上流にあり当時児島家所有となつた水車小屋で、モデルは児島の実姉谷田タキ（戸籍上は「たき」とその娘（2才）で、手拭いを被つた娘を「松島とし子（当時15才）成羽町下原上之丁の曲り角で中島

屋といった家の娘」と詳細に伝えている。制作時期については推論を試みながら、具体的な記載はない。

『児島虎次郎略伝』では、1906年2月に岡山孤児院で《なさけの庭》が制作され、《里の水車》は、その完成後の初夏に成羽で描いたものと記され、これに基づいた認識が広く定着したこともあつた。ただ、両文献とも典拠不明の記述や他の一次資料と齟齬のある内容も多く、《里の水車》と《なさけの庭》についても同様である。

それに対して、《なさけの庭》と《里の水車》の両作品の制作経緯について、児島逝去直後の1929（昭和4）年5月に刊行された『美術新論』4巻5号掲載の金井文彦『「なさけの庭」当時の思い出』の記述が、これまでは基本的な情報となつていた。金井の記述は、児島から金井宛の手紙に依拠して1906年7月末に成羽へ帰省した児島がまず《里の水車》を制作し、同年11月18日から岡山孤児院に通い、事務所の2階を画室に借り受け、12月半ばから着色を始め翌年2月まで制作を行うとしている。さらに、8畳の部屋は光線の具合も良く画室としても十分という環境の中、早晩に起床して孤児院のある東山を登り孤児たちと感謝と祈りを共にした後、夕方まで制作に打ち込む日々を送るといった状況も伝えており、今回の書簡で確認できた内容と齟齬はない。

この他にもインターネット上のブログ的な記載で、谷田タキからの伝聞を主に、《里の水車》に関して、異なる取材場所とモデルを挙げる記述もあるが、いずれにせよ、これまでは東京府勸業博覧出品の2作品の制作経緯は、金井文彦の伝えるところを出ることがなかった。

そうした状況ゆえに、重ねて述べるが、ここで紹介する大原孫三郎宛の児島虎次郎書簡の意義は極めて大きい。これにより、《里の水車》《なさけの庭》の制作時期や場所、モデルについても金井の記述を大きく超える詳細な情報が明らかとなった。また出品前の黒田清輝の関りおよび垣間見えるうえ、展覧会出品後の両作品の移動についても興味深い動きを把握出来るのである。

東京府勸業博覧会の西洋画部門の審査員は、主任が黒田清輝、以下は、久米桂一郎、小山正太郎、松岡寿、河村清雄、岩村透、そして岡田三郎助、和田英作、満谷国四郎。「東京勸業博覧会審査報告卷二」国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/801788/1/124>
『生誕130年 児島虎次郎―あなたを知りたい』（大原美術館 2011年）P.33 に同時点で把握できていた情報を記載している。

児島虎次郎日記 1919年(大正8年)

An Introduction to Kojima Torajiro's Diary for 1919 (Taisho 8)

吉川あゆみ(公益財団法人大原芸術財団特命上席研究員)

YOSHIKAWA Ayumi (Senior Fellow, Senior Curator, Ohara Art Foundation)

要旨

明治末から昭和初頭、即ち、1900年代の終わりと1920年代にかけて活躍した洋画家児島虎次郎(1881-1929)は、フランスの国民美術協会展を主な発表の舞台とし、評価を得た人物である。同時に、実業家・社会事業家である大原孫三郎(1880-1943)の賛同と出資を得て、ヨーロッパ近代絵画やオリエント古美術を収集し、日本に招来したことで知られる。「日本の芸術界のために」という公益を目的に掲げて収集された美術品は、日本に到着して間もなく一般公開され、1930年の大原美術館開館以降は同館で常設展示されることとなる。児島は画家としての業績とともに、日本におけるヨーロッパ近代およびオリエント美術の受容という点でも重要な業績を残したのである。

本稿は、児島虎次郎の日記を翻刻・紹介するものである。児島は大原孫三郎とともに大原美術館の礎を築いた人物であり、その足あとを物語る日記の解読は当館の長年の念願であった。日記に記された情報それ自体の重要性はもちろん、今後、児島に関連する諸資料が持つ情報をつなぎ、編み上げていくにあたって、核としての役割が期待されるという点でも、重要性の高い資料である。しかし、私的な覚えとして速筆で記された児島日記は難読であり、引用や参照、部分的な翻刻の紹介はたびたびなされてきたものの、日記自体をまとめた形で紹介した例はこれまでなかった。本稿では、手始めとして児島の第二次滞欧の初年となる1919年の日記を取り上げる。渡欧に先立ち開催された初個展、第一次世界大戦終結後間もないヨーロッパでの暮らしや学び、制作、旧知の人々との交流の様子が記されている。

翻刻は、現時点では残念ながら十分な精度に達しているとはいえない。児島日記の解読には多くの情報を参照することが必要である。現時点での成果を公開することが新たな情報につながる契機となり、今後の解読に寄与することを期待するものである。

The *yōga* (Western-style painting) artist Kojima Torajiro (1881-1929), who was active from the end of the Meiji era to the beginning of the Showa era, i.e., from the end of the 1900s to the 1920s, presented his works mainly at the Salon de la Société Nationale des Beaux-Arts in France and earned a reputation there. At the same time, having received approval and funds from the businessman and entrepreneur Ohara Magosaburo (1880-1943), he collected modern European paintings and Middle Eastern antiquities, and brought them back to Japan. These artworks collected in the interests of the public, “for the Japanese art world,” were put on public view soon after they arrived in Japan. Once the Ohara Museum of Art was opened in 1930, they were put on permanent view there. Together with his achievements as a painter, Kojima’s accomplishments from the point of view of the reception of modern European art and Middle Eastern art in Japan were significant too.

This article is a transcription and introduction of Kojima Torajiro’s diary. Kojima was a man who laid the foundation of Ohara Museum of Art alongside Ohara Magosaburo, and the deciphering of his diary narrating the course he had come along was a longtime wish at our museum. Needless to say, the information written in the diary is important. In addition, in order to hereafter connect and compile the various pieces of information in the diverse reference materials related to Kojima, his diary is expected to play a pivotal role as a principal document. Nevertheless, as it was written rapidly as a personal recollection, Kojima’s diary is difficult to decipher. Although it has occasionally been quoted, referred to, or reprinted in part, the diary itself has never been introduced as a whole so far. In this article, as a start, Kojima’s diary of 1919, the first year of his second stay in Europe, is taken up. It describes his first solo exhibition, which was held prior to his departure to Europe, and his life, studies, work on his paintings, and mingling with old friends in Europe soon after the end of World War I.

At present, the transcription is unfortunately not yet fully accurate. The deciphering of Kojima’s diary requires cross-references to a vast amount of information. By publicizing our findings to date, we hope that it might lead to new information and contribute to further deciphering in the future.

本稿は、洋画家であり、大原美術館の礎となる美術品の収集にあたった児島虎次郎（一八八一―一九二九）の日記を翻刻・紹介するものである。大原美術館は、児島が没した翌年の一九三〇（昭和五）年に、彼の業績を記念する美術館として設立された。当館にとって児島虎次郎は、創立者大原孫三郎（一八八〇―一九四三）と並ぶ生みの親であり、その足あとを物語る日記の翻刻は長年の課題でもあった。

児島虎次郎と関連資料

一八八一（明治十四）年、岡山県中西部の川上郡下原村（現高梁市成羽町）に生まれた児島虎次郎は、東京美術学校西洋画科選科および同研究科に学んだ後、一九〇八（明治四十一年）年から一九一二（明治四十五年）年まで大原孫三郎の支援によりヨーロッパに留学。主にベルギーのセントに滞在し、同地の王立美術アカデミーで研鑽を積んだ。この留学中、同時代ヨーロッパの美術潮流、特にベルギーのルミナスムに触れることによって、児島の絵画は筆触の存在感と鮮やかな色彩のハーモニーを獲得。一九一一（明治四十四）年、フランスの国民美術協会展へ初出品・初入選を果たし、留学の成果を証明することとなる。帰国後は倉敷郊外の酒津（現岡山県倉敷市酒津）にアトリエを構え、国内はもとより、ヨーロッパや東アジアを巡っては、各地の文化を自作に反映させていった。帰国後も引き続き国民美術協会の展覧会を主な発表の舞台としており、一九一三（大正二）年には同会準会員に、翌一九二〇（大正九）年には出品作《秋》がフランス政府買い上げとなり、あわせて同会正会員に推挙された。一方、日本では帝展審査員をつとめており、日仏両国で一定の評価を得た画家であったといえよう。

同時に児島は、大原の賛同と出資を得て、ヨーロッパ絵画やオリエント古美術を収集し、日本に招来した人物としても知られる。これらの収集は、当初より「日本の芸術界のために」という公益を目的に掲げたもので、実際、収集品は日本招来後間もなく一般公開され、一九三〇年の大原美術館開館以

降は同館にて常設展示されることとなった。児島は画家としての業績とともに、日本におけるヨーロッパ近代美術およびオリエント美術の受容という面においても重要な業績を残したのだった。

児島の作品、収集品は、現在、大原美術館（大原芸術財団、以下同）と高梁市成羽美術館がその多くを収蔵・保管している。また、大原美術館は児島旧蔵書籍のうち洋書を「児島文庫」として所蔵している。本誌で別に紹介されるが、児島の活動を大原孫三郎が支援していたことから、有隣会が管理する大原家関連資料には書簡をはじめとする児島の関係資料が含まれている。これらとは別に、児島の元にあった作画資料や書簡、写真など、多種多様な関連資料（以下「児島家資料」とする）は、遺族の手によって大切に、かつ豊富に保管されてきた。

児島虎次郎日記

児島家資料の中でも最も重要な資料のひとつが、本稿で取り上げる児島虎次郎の日記（以下「児島日記」とする）である。日記に記された情報それ自体の重要性はもちろんのこと、今後、作品や各種関連資料が持つ多様な情報をつなげ、編み上げていくにあたって、核としての役割が期待されるという点でも、重要性の高い資料である。

児島日記は、児島が最初の渡欧を果たした一九〇八（明治四十二年）から、没年の前年にあたる一九二八（昭和三年）年までのものが確認されている。ただし、その間の一九一一（明治四十四）年、一九一七（大正六）年の日記は現時点では見つからない。また、一九〇九（明治四十二年）年の日記は手帳様の三冊で構成されているが、別の時期に使用された同様の手帳も存在することを勘案すると、これらは日記とは別の備忘録的な手帳と考えるべきかもしれない。これについては、手帳の調査のちにあらためて検討・判断することとしたい。

現在、現存する日記全てを対象に翻刻作業を進めており、順次紹介してい

く予定であるが、手はじめとなる本稿では一九一九（大正八）年の日記を取り上げる。年を追って順に紹介することが最良ではあるが、この年にはじまる第二次滞欧期の児島の動向を明らかにすることは、大原コレクションの形成過程を知る上で重要であり、そういった関心からこの期間の翻刻作業が先行して進んでいるという事情がある。ご理解頂ければ幸いである。

一九一九年の児島虎次郎

博文館発行の『当用日記』（中長形、縦一七・五×横一一・二cm、総頁数五〇二頁）を用いて記された一九一九年の日記は、「本年渡欧の事 本日（年）四月上旬東京と大阪にて作品展覧會を開く 右昨年末決定の事²」という一文ではじまる。「昨年」即ち一九一八（大正七）年の児島は、春・夏に約三ヶ月かけて中国・朝鮮を旅し、そこで得た刺激をもとにアトリエで制作に励んでいた。そんな中、十一月に第一次世界大戦の終結が報じられる。これを受けてヨーロッパへの再留学と、出発に先立って自身初となる個展を開催することが決定したというわけである。

年が明けると、個展開催に向けて倉敷と東京・大阪を行き来しながら忙しく過ごし、個展終了からわずかひと月半ほどで児島はフランスを目指して旅立った。機雷の残る地中海は航路が制限されていたため、マルセイユへの寄港はなく、イギリスのサウサンプトンで下船し、ル・アーヴル経由でパリに向かった。ヴェルサイユ条約調印の報に接したのは、フランス入りを控えたロンドンでのことであった。折しも、西園寺公望ら日本の政府要人が滞在中の英仏に、児島は到着したのであった。

パンテオンのそばのオテル・デ・グラン・ゾムに当面の宿を得た児島は、落ち着き先となるアトリエを探しながら、クロッキーのためにグラント・シヨミエールなどの美術学校に足を運び、また、エドモン・フランソワ・アマン・ジャン（Edmond-François Aman-Jean、一八五八―一九三六）ら旧知の人々を訪ねている。ようやく再開しはじめた美術館や画廊、骨董店にも足

繁く通っている。美術館では、エジプトやローマ、ペルシアなどの古美術ばかりを模写しており、これらの分野に対する児島の関心の高まりをうかがうことができる。

八月末にエルネスト・クレツソン通りのアトリエに転居するまでは、集中的にパンテオンを描き、転居後はサロン出品のために日本から持参した作品の修正に取りかかった。パリ在住の日本人画家との行き来も増えていった。特に青山熊治（一八八六―一九三二）とは多くの時間を共にしており、青山とともに実業家中沢彦吉によるルノワール作品の購入に関わったことも確認できる。

第一次滞欧時もそうであったように、都会暮らしに心満たされることのない児島は、たびたび郊外へ遠出を試み、年末にはスペイン旅行に出発。翌一九二〇（大正九）年の元旦をアンダルシアの空の下で迎えることとなる。詳細な時期は明らかでないが、児島は遅くとも一九一九年の秋頃までに、大原に対してフランス絵画の本格的な収集を提案したと考えられる³。この提案は一九二〇年の夏にようやく受け容れられ、クロード・モネの《睡蓮》をはじめとする大原コレクションの収集が始動するのであった。

児島日記 現状と課題

児島研究の基本文献である『児島虎次郎略伝』⁴は、児島の甥で新聞記者であった児島直平によつて著されたもので、生前の児島を知る人物ならではの情報、新聞記者ならではの取材成果とともに、児島日記からの引用が多く含まれている。児島の没後七十年に際して出版された松岡智子・時任英人『児島虎次郎』⁵では、『児島虎次郎略伝』をベースとしつつ、児島日記をはじめとする児島家資料にあらためて照らして、『児島虎次郎略伝』の修正と新発見の追加が行われた。また、松岡智子『児島虎次郎研究』⁶は、児島日記ほか児島家資料を多く参照しつつ、児島の画業とともに文化交流における功績を明らかにした。

その他にも展覧会図録や各種文献において、児島日記の部分的な翻刻、引用および参照がなされてきたが、日記自体がまとまった形で紹介されたことはこれまでなかった。それはひとえに、児島日記が非常に難読であることによる。私的な日記であるから、他者に読ませるつもりがないのは当然であるが、児島にとって日記は、記された出来事を知る児島本人が、その出来事を振り返る手がかりになりさえすれば良かったのであろう。このことは、特に欧文のスペルミスからはつきり感じ取ることができる。正確に綴ろうという意思はほぼなく、もはや「ミス」というレベルではないものも多い。大体の音がわかりさえすれば、書いた本人であれば何のことかはわかる、という考えであったのだろう。日本語においても同様である。

本稿はこの難題に取り組んだものであるが、現段階では残念ながら、十分な精査を経た信頼のおける翻刻に至っているとは言い難い。作業の多くは「文字を読む」というよりも、多種多様な資料から、いわば「状況証拠」を拾い集め、それらを積み上げることによって「文字を特定する」というものである。本来であれば、翻刻とともにそれらの「状況証拠」も示すべきであろうし、また、原文校正によつて翻刻の妥当性を客観的に検証すべきであろう。本資料の難読さは、そのハードルまでも高め、これを実現するには至らなかった。しかし、不完全ながら現時点の成果を公開することをきっかけに、多くの「状況証拠」が寄せられれば、管見ではかなわぬこともかなえ得るかもしれない。そうなることを期待して、本稿をまとめた次第である。

また、現在進めている児島家資料の調査成果も児島日記の解説に大いに役立つものと考ええる。今回はごく一部を活用するに留まったが、今後そのデータ整理が進めば、決定的な「状況証拠」も多く得られることであろう。これらを反映し、遠くない将来、あらためて信頼できる精度で、かつ、まとまった形で児島虎次郎日記を広く共有できればと考える。

1 児島虎次郎・満谷国四郎、大原孫三郎宛書簡、一九一二年五月三十日付、大原芸術財団所蔵

この書簡は、児島が第一次滞欧時中の一九一二年、児島と同じく大原孫三郎の支援により滞欧中であった洋画家満谷国四郎と連名で送ったもので、エドモン・フランソワ・アマン・ジャン作《髪》（現大原芸術財団所蔵）の購入を依頼する内容となっている。同作品の購入・招来は、のちの一九二〇年から始まる児島と大原による本格的なヨーロッパ絵画収集の端緒となったと考えられている。同書簡中で児島は「これは個人としてのお願にては候はず 日本 の芸術界のために最も有益なる次第に候へば 突然ながら切に懇願申上候次第」と記している。

2 原文は「本日四月上旬」となっているが、「本年四月上旬」の誤記であろう。本誌六四頁上段を参照のこと。児島直平『児島虎次郎略伝』児島虎次郎伝記編集室、一九六七年、一一八頁

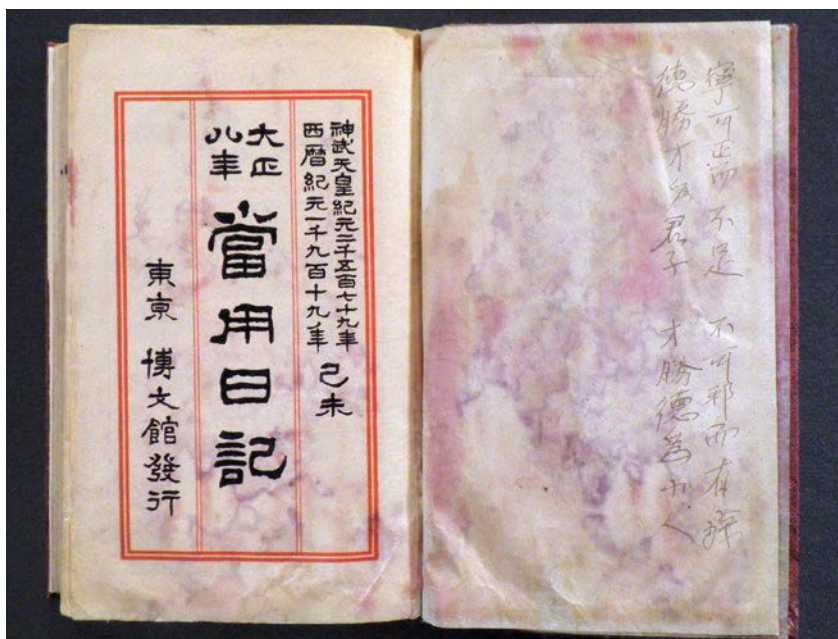
3 一九一九年十二月五日発信の三橋玉見宛児島書簡が引用されており、その中で大原孫三郎に対して現代フランス絵画の収集を提案していることが述べられている。

4 前掲書

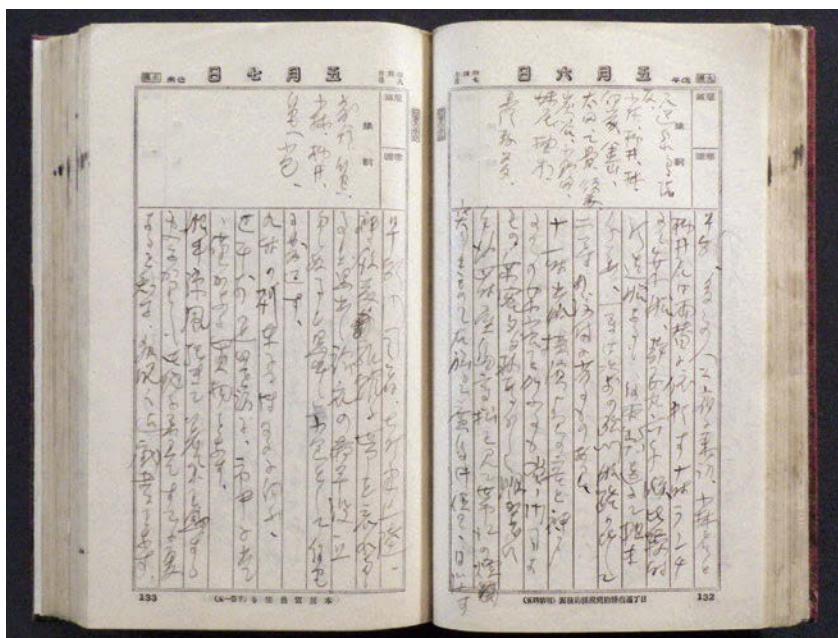
5 松岡智子・時任英人『児島虎次郎』山陽新聞社、一九九九年
6 松岡智子『児島虎次郎研究』中央公論美術出版、二〇〇四年



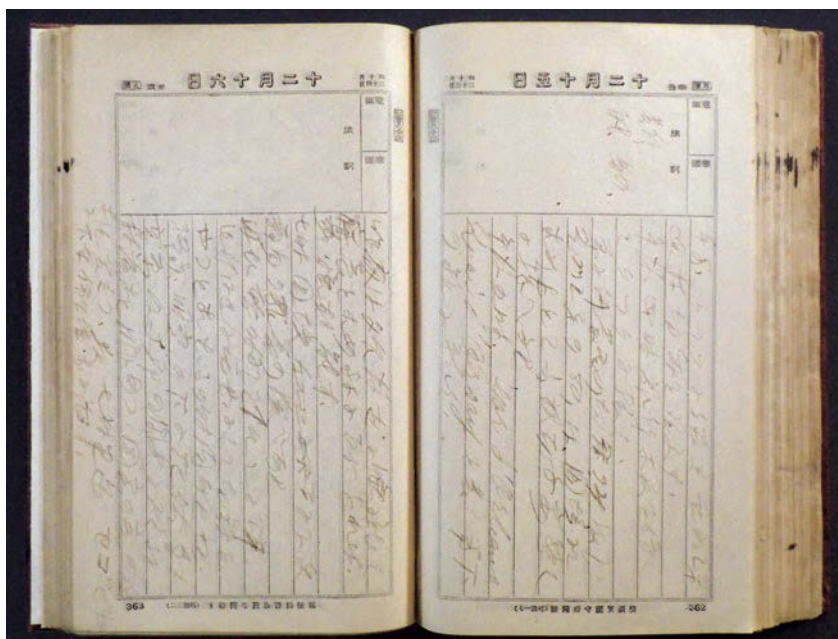
児島虎次郎日記 (1919年)
表紙



扉



5月6日、7日欄



12月15日、16日欄
挿図：いずれも筆者撮影

【凡例】

一 収録内容について

- ・本稿は、児島虎次郎日記のうち一九一九（大正八）年の日記を翻刻収録したものである。
- ・児島が使用した日記帳『当用日記（大正八年版）』（博文館発行）には、一九一九年分の日記以外に、補遺欄に翌一九二〇（大正九）年一月一日から二十一日までの日記、金銭出納記録欄に一九一九年一月から一九二〇年二月二十一日までの出納記録が記されているが、本稿ではこれらを対象としない。

二 記入欄について

- ・日記帳は、一頁に一日分があてられている。各頁上段には「天気」「寒暖」「予記」欄が設けられ、その下の縦野に日記本文を記入するレイアウトとなっている。本稿では、これら記入欄を【】内に示し、これに続けて当該欄に記入された本文を掲載した。所定の欄以外に記入されている場合は、「【欄外右側】」のように、記入されている場所を示した。
- ・欄をまたいで記入されている場合は、「【予記欄・本文欄】」のように、記入されている欄を「・」でつないで示した。また、異なる欄に文が続く場合は、「【本文欄↪予記欄】」のように、「↪」を用いて記入順を示した。

三 書式等について

- ・一月一日から十月二十九日までの日記は、日記帳所定の縦書きで、十月三十日から十二月三十一日までの日記は、日記帳を反時計回りに九十度回転させて横書きで記入されている。本稿はこれに対応する形で、十月二十九日分までを縦書き、十月三十日分以降を横書きのレイアウトで示した。ただし、ごく一部のみ縦書き／横書きが変わっている箇所については、その旨を脚注に示した。
- ・改行は原則として原文に従った。本誌誌面の都合上、原文にない改行が生じた場合は、その箇所を「↵」で示した。
- ・原文において、内容を区切る意図や空白を残す意図をもって

行間や文字間を空けていることが明らかな場合は、これを反映した。

- ・原文の字下げは原則的に反映していない。

四 文字、文字列について

- ・文字、文字列については、引き続き翻刻の精査を進めることを前提に、その便を考慮して次のように扱った。
- ①旧字、異体字等は、可能な限り原文のとおり掲載し、新字体への置き換えは行わないこととした。ただし、文字コードの制約等によりPCでの使用が難しい文字は、同意の近似する文字で代替した。
- ②判読できなかった文字は□で示した。
- ③児島本人によって、取り消しや訂正が加えられた文字は、「赤書」のように二重取り消し線で示した。
- ④引出線などを用いて追加された文字は、指示された箇所に加えた。
- ⑤児島以外の筆跡による書き込みは本文として扱わず、注にその内容を示した。

五 翻刻者による補足情報について

- ・読みやすさを考慮し、次のとおり情報を補った。
- ①明らかな誤字については、適宜（ ）内に正しい文字を示した。
- ②明らかな誤字であるが、正しい文字を補わない場合は、「マ」を付した。
- ③本文で示された名称等がわかりづらいものについては、今日一般的に用いられる名称・呼称などを適宜（ ）内に示した。
- ④翻刻に疑いの残る文字については、「？」を付した。
- ・外国語のカナ表記の誤りや揺れは、言語による発音の違い、時代による一般的外来語表記や呼称の違い、また、児島による外国語の文法・つづり・発音の誤り、さらには単純なカナ

の誤りなど、様々な要因が混在・複合して引き起こされている。これを踏まえて、次のように取り扱うこととする。

⑤ 欧文の単純なスペルミスや文法の誤り、カナの誤りについては、正しい文字・つづり等を適宜（ ）内に示した。

⑥ カナ表記の元となる欧文や、その日本語訳、今日の一般的呼称などの補足情報を適宜（ ）内に示した。

・ 児島に特有の用字・用語については、次のように情報を補った。

⑦ 原文では、仮名の濁点は殆どの場合省略されているが、原文のまま掲載することとした。濁点の省略は誤字として扱わず、濁点の省略によって理解が損なわれると判断した箇所については、「(エジプト)」のように、（ ）内に濁点を補った単語、または一般的名称・呼称を示した。

⑧ 「額縁(額縁)」「自働車(自動車)」など、当時比較的一般であった用字、「カンパス(カンヴァス)」など、児島が日常的に用いていた用語は誤字・誤記として扱わない。ただし、誤解を避けるために、適宜（ ）内に一般的用字・呼称などを示した。

⑨ 児島は「寝」「憩」を常に独自の文字(誤字)で表す。これらについては、正しい文字に置き換え、その傍に「*」を付した。

⑩ 児島は、いわゆる「くの字点」(二字以上の文字列の繰り返しを表す記号)を横書きでも用いており、縦書きの場合と同様に縦位置で配置している。縦書きのくの字点は「く」で表したが、横書きについては実際の字形に近い「ゝ」に置き換え、その傍に「*」を付した。

・ 以上①～⑩の補足情報および記号は、縦書きの場合は本文当該箇所の右横に、横書きの場合は上に配置した。

・ () および () 内に示した補足情報自体に疑いが残る場合

は、() または () 内に補足情報に続けて「？」を付した。

・ その他の補足情報を脚注に示した。

・ 人名については、初出のみ極簡単な人物情報を脚注に示した。初出以外については、一六一～一六九頁の人名索引を参照されたい。なお、これらは前後の日記や関係資料などから現時点で得られた情報をもとに人物の特定・推定を試みたものであり、更なる精査を要する段階のものであることをご了承頂きたい。脚注中、人物の特定・推定に用いた資料として、「児島の住所録」がたびたび出てくる。児島が使用した住所録としては、手のひらサイズのアドレス帳が五冊、他に日記巻末の住所録(いずれも児島家資料)が確認されているが、本稿ではこれらのうち現時点で人名等のデータ化が終了している住所録(一九二〇年前後に使用されたと思われるアドレス帳一冊、一九二二年および一九二三年の日記巻末の住所録)を参照した。

六 その他

・ 空欄となっている日については、日付・曜日のあとに「(記入なし)」と記した。

・ 一部、現代の社会通念や人権意識においては不適切と思われる用語・表現、またはプライバシーに関わる内容を含むが、当時の社会的背景や本資料の学術的意義を鑑み、原文のまま掲載した。本稿を活用される場合は、多様性の尊重、個人の権利への配慮をもって活用されるようお願いしたい。

本稿をまとめるにあたり、児島虎次郎の孫である児島塊太郎氏に格別なるご高配とご助言を賜りました。ここに記して、感謝の意を表します。

児島虎次郎日記 一九一九年（大正八年）

一月一日 水曜

【予記欄】

本年

渡欧の事

本日^(年)四月上旬

東京と大阪

にて作品展

覽會を開

く¹

右昨年末

決定の事

【本文欄】

元旦早起

早朝より倉敷に廻礼に出つ

午後二時帰宅

三橋氏²来宅

昨年暮より描きつゝある林氏母堂³

の肖像⁴尚未成なるため午後

林夫人⁵の来室⁷を乞ひ批評を

受く

一月二日 木曜

【欄外右側〳本文欄】

殆と

終日新年ハカキを書く

武内君⁶来訪

一月三日 金曜

【本文欄】

終日新年ハガキを書

吉田君⁷来訪

一月四日 土曜

【本文欄】

林氏母堂の肖像、

西湖の復写^(巻)をなす、

一月五日 日曜

【本文欄】

毎年の新年旅行を青野⁸の健康を

按し当年は余の宅にて行ふ事

とす柳井君⁹昨夜出産にて来席延

期の旨電報¹⁰し来る

青野、小林、吉田君滞在、

一月六日 月曜

【欄外右側〳寒暖欄〳本文欄】

昨日より

1 「児島虎次郎習作展覧会」東京展（東京美術学校、一九一九年四月一日〜三日、大阪展（大阪中央公会堂、一九一九年四月十四日〜十六日）のこと。児島にとって初めての個展となった。

2 三橋玉見（みはし・たまみ、一八八二—一九三九）であろう。大原家の主治医で、大原孫三郎の文化面でのブレーンでもあった。

3 林源十郎（十一代源十郎、甫蔵）（はやし・げんじゅうろう（ほぞう）、一八六五—一九三五）。薬種商を営む倉敷の実業家、社会事業家。大原孫三郎に大きな影響を与えた。

4 十一代林源十郎の母清（せい）の肖像画《林源十郎の母》（大原芸術財団所蔵、所蔵品登録No.010）のことと考えられる。清は前年十一月に死去している。

5 十一代林源十郎の妻浦（うら）。社会運動家山川均の姉にあたる。

6 武内潔真（たけうち・きよみ、一八八八—一九八一）であろう。倉敷紡績で電気技師などを務め、のちに大原美術館初代館長となった。

7 吉田苞（よしだ・しげる、一八八三—一九五三）であろう。洋画家。現岡山市出身。

8 青野俊一郎であろう。児島と同郷の親友で、倉敷紡績に勤めていた。

9 柳井新太郎であろう。児島と同郷の友人で、郷里成羽で呉服商を営んでいた。

10 小林寿美太（こばやし・すみた）。児島と同郷の友人で大阪で商店を営んでいた。

小林 柳井君、吉田君滞在

吉田君帰宅⁸

一月七日 火曜

【欄外右側／本文欄】

午後、

柳井君と岡山に出で後樂園の

研究会新年茶話會に列す¹¹

天勝を觀て夜九時の列車にて帰る¹²

柳井君泊す、
小林君帰阪、

一月八日 水曜

【本文欄】

柳井君泊す

一月九日 木曜 (記入なし)

一月十日 金曜

【本文欄】

午後岡山に出て久振りにて天主
教の先生に学ふ¹³

午後七時の列車にて帰宅、

一月十一日 土曜

【本文欄】

展覽會出品作品を一通り

準備のため検へ置く必要あり

尚加筆すべきものなどあれば

これより少時多忙なる日を送る事¹⁴

となる、

一月十二日 日曜

【予記欄】

発信

Aman-Jean¹⁴

Lamorelle¹⁵

(Bartholomé)¹⁶
Barthoromé

一月十三日 月曜 (記入なし)

一月十四日 火曜 (記入なし)

一月十五日 水曜

【本文欄】

終日修作、

百号迄の作品の手入を終り

たり

西湖の復写^(複)をなす

11 岡山洋画研究会のことであろう。後樂園(岡山市)で例会が行われていた。

12 奇術団の松旭齋天勝一座、または奇術を指すか。

13 デュトゥ神父(Jean Baptiste Laurent Dutru, 一八六五—一九三二)のことであろう。パリ外国宣教会の宣教師として来日し、岡山ほか西日本で活動した。児島は彼のもとでフランス語を学んでいる。

14 エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャン(Edmond-François Aman-Jean, 一八五八—一九三六)。フランスの洋画家。児島と親交が深く、児島に制作上の助言を与えたほか、児島によるフランス絵画収集に協力した。

15 ラモレル(A. Lamorelle)。パリの画材商。ポール＝アルベール・バルトロメ(Paul-Albert Bartholomé, 一八四八—一九二二)。フランスの画家、彫刻家。児島が出品していた国民美術協会(Société Nationale des Beaux-Arts)の会長をつとめていた。

一月十六日 木曜

【本文欄】

終日旧作修製

夜大原氏¹⁷を訪問黒田先生¹⁸へ面會され

たる様子を聞く

青野君の所に廻り夜を深し

て夜半帰宅、

林氏の母堂の肖像を描き終

り大原氏の宅へ届く、

一月十七日 金曜

【本文欄】

終日作品の修作、

夕方、大原、三橋、氏を

同伴来訪さる

一月十八日 土曜

【予記欄】

発信

斉藤、矩一、¹⁹

加藤、柳井、

発信

Claus²⁰

Delvin²¹

柳井、

斉藤

【本文欄】

終日旧作の修製に費す

午前中温暖快晴

一月十九日 日曜

【本文欄】

全上

一月二十日 月曜

【本文欄】

此朝は非常の寒冷生し

一日中氷溶けす

終日旧作の選擇修

製、カタログ調べ

一月二十一日 火曜

【本文欄】

此日の寒さハ昨日位の

降下なり

終日同上

17 大原孫三郎（おはら・まごさぶろう、一八八〇―一九四三）。実業家、社会事業家、倉敷紡績社長ほか。児島の制作活動を支援し、のちに児島を記念するために大原美術館を設立した。

18 黒田清輝（くろだ・せいき、一八六六―一九二四）。洋画家。児島の東京美術学校時代の恩師。

19 児島矩一（こじま・くいち、一八九六―一九三四）。児島虎次郎の甥。彫刻家。

20 エミール・クラウス (Emile Claus、一八四九―一九二四)。ベルギーの画家。児島は第一次滞欧時、クラウスに制作の助言を受けていた。

21 ジャン＝ジョゼフ・デルヴァン (Jean-Joseph Delvin、一八五三―一九二二)。

ベルギーの画家でゲント（ヘント）の王立美術アカデミーで校長を務めた。児島の恩師。

一月二十二日 水曜

【本文欄】

午前九時の列車にて
大阪に向ふ明日の岡山孤児院²²
の評議員會の愛染園²³
に開催列席のため

午後四時大阪着

一月二十三日 木曜

【本文欄】

午前九時愛染園に趣く
評議員會は午後二時
終る

卍展覽会の事につき皿井²⁴
氏を訪れ、小林君の所に立寄
り公會堂を一覧す、
夜山内愚僊氏²⁵を訪問し
直に神戸迄帰り一泊

一月二十四日 金曜

【本文欄】

朝神戸にて金山君²⁶の在宅[?]
を電話にて聞く 不在、

午後三時半帰宅

今朝より降雪、

帰宅の頃積雪一寸餘にて
雪景眺美し

一月二十五日 土曜

【本文欄】

昨日の雪消残り尚眺清
ければ朝来写生の考
へなりしに[?]

中山君²⁷早朝より来訪
昼帰途につかる
正午頃には早や雪のかけ
稀となる

一月二十六日 日曜

【予記欄】

雑誌
（黄薇之友）²⁸
黄薇の友
来る

【本文欄】

朝より小牧牛²⁹の描写に
費す
夕方吉田君来訪
夜倉敷に大原氏を訪る

22 児島の岳父石井十次（いし・じゅうじ、一八六五—一九一四）が岡山市で設立した児童養護施設。石井没後は大原孫三郎が経営を引き継いだ。

23 石井記念愛染園。石井十次が大阪で開始したセツルメントを、石井の没後大原孫三郎が継承し財団化したもの。

24 皿井立三郎（さらい・たつさぶろう、一八七〇—一九四五）であろう。岡山市出身の医師、俳人。号は旭川。児島の個展大阪会場の主催者のひとり。児島虎次郎の孫である児島塊太郎氏によれば、児島家の親類にあたるとのこと。

25 山内愚僊（やまうち・ぐせん、一八六六—一九二七）。洋画家。

26 金山平三（かなやま・へいぞう、一八八三—一九六四）。洋画家。

27 中山巍（なかやま・たかし、一八九三—一九七八）。洋画家。岡山市出身。

28 『黄薇之友』は東京で発行された岡山県人雑誌。一九一八年創刊、黄薇社発行。

29 『小放牛』（大原芸術財団所蔵、所蔵品登録No.4127）、またはその関連作品のことであろう。

一月二十七日 月曜

【天気欄】

晴

【寒暖欄】

やゝ暖し[?]

【予記欄】

来信

上田、

石井

【本文欄】

朝小牧牛の描写をなす

桃田氏来訪昼迄

午後小牧牛を描きつゝく[?]

夕方前三橋氏来訪暮迄

一月二十八日 火曜

【予記欄】

発信

柳井

【本文欄】

小牧牛描写、

一月二十九日 水曜

【本文欄】

全上

一月三十日 木曜

【本文欄】

小牧牛描写、

午後阿藤君来訪³⁰

夕方³¹の列車にて出岡

石井紀念會に出席

家族同伴

一月三十一日 金曜 (記入なし)

二月一日 土曜

【本文欄】

この日頃

東京に出品すべき作品を

梓よりはづし準備をなす

点数、百餘点

二月二日 日曜 (記入なし)

二月三日 月曜 (記入なし)

二月四日 火曜 (記入なし)

二月五日 水曜 (記入なし)

30 阿藤秀一郎(あとう・しゅういちろう、一八八八―一九七二)か。洋画家。現岡山県浅口市出身。

31 同日は石井十次の命日にあたることから、石井十次を紀年する会が、岡山にて催されたと考えられる。

二月六日 木曜 (記入なし)

二月七日 金曜

【本文欄】

東京に送るべき

(カンヴァス)

カンバスの荷造をなす

終日、大工さんの手続を
なす、

二月八日 土曜

【本文欄】

小牧牛描写

二月九日 日曜

【本文欄】

全上

二月十日 月曜

【本文欄】

東京へ荷物発送、

学校宛³²三箱、

長尾宛³³一箱、

二月十一日 火曜

【本文欄】

午前九時の列車にて大阪に
向ふ、

駅前に泊す、

牛夕方小林君を訪問、

夜須藤君³⁴等と同食

す、

二月十二日 水曜

【本文欄】

朝、愛染園に趣く

午後、斉藤³⁵、林君を

訪る、

夜六時より、大阪クラブ

に於て今回大阪にて展覧

會開催の事につき、

岡山県出身の在阪紳士

十名と會食會談す

九時散會

二月十三日 木曜

【本文欄】

朝八時半の列車にて小林君

と大阪を發し東上す

昼てあり、晴てあり、友語

し得らるしなとにて、

終日早春の旅心地よし

午後八時過木挽町の小林

32 東京美術学校のこと。
33 額縁店磯谷商店の長尾建吉（ながお・けんきち、一八六〇—一九三八）、またはその息子長尾一平（ながお・いつべい、一八八六—一九七八）のこと。

34 児島と同郷の友人須藤祐七または須藤新六か。両者は上海で須藤洋行・須藤通関所を営んでいた。新六は時期不明ながら児島の住所録で兵庫県武庫郡西郷町（現神戸市灘区）の住所が確認できる。

35 大阪毎日新聞の斎藤徳太郎（恵太郎、漢舟）であろう。三月二十一日欄参照。

君の宿に同宿す、

二月十四日 金曜

【本文欄】

朝、木挽町の宿を出て
金沢を訪る³⁶ の事問合せたれとも
美術学校に荷物未着
の由答へらる

運送店には已に送置りとの
事にて学校に趣くに荷物
已に到着致し居りたり

二月十五日 土曜

【本文欄】

午前、麴町に齊藤君を³⁷
訪問し
後黒田先生に面會
目下学校³⁸郊外写生にて
休業中なれは来る³⁹
月曜日、学校にて作品の
撰擇を乞ふ事となる
午後藤島先生を訪問す³⁸
午後金沢を訪聞
午後太平洋画會を參觀す

二月十六日 日曜

【予記欄】

来信
柿原得³⁹

【欄外右側へ本文欄】

朝金沢氏来訪
午前満谷氏⁴⁰を下落合に訪問す

午後三時川合玉堂氏⁴¹を

訪れ、柿原君よりの四五〇〇を
渡す、

二月十七日 月曜

【予記欄】

来信
柿原
政⁴²

【本文欄】

午前博物館に入場、
午前十一時学校に登る、
藤島先生、岡田、黒田、藤⁴³
島中村先生の来校を⁴⁴
乞ひ、
持参したる百余点の作
品より六十四点を
撰擇を受く、
午後昼食を⁴⁵諸兎師と

36 金沢巖であろう。児島と同郷の人物で、東京で薬局を経営していた。

37 斎藤豊作（さいとう・とよさく、一八八〇―一九五二）であろう。洋画家。児島の東京美術学校時代の友人。

38 藤島武二（ふじしま・たけじ、一八六七―一九四三）。洋画家。児島の東京美術学校時代の恩師。

39 柿原得一。倉敷紡績で重役を務めるほか、大原孫三郎の手がけた各種事業を補佐した人物。

40 満谷国四郎（みつたにくにしろ、一八七四―一九三六）。洋画家。現岡山県総社市出身。

41 川合玉堂（かわい・ぎよくどう、一八七三―一九五七）。日本画家。

42 柿原政一郎（かきはら・せいいちろう、一八八三―一九六二）。倉敷紡績をはじめ中国民報社などで大原孫三郎の右腕を務めた。のちに代議士、宮崎市長、宮崎県高鍋町長。

43 岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ、一八六九―一九三九）であろう。洋画家。

44 中村勝治郎（なかむら・かつじろう、一八六六―一九二二）であろう。洋画家。

精養軒に共にす、
夜、菊坂に、岩村氏を訪る⁴⁵

二月十八日 火曜

【本文欄】

午前磯谷⁴⁶を伴ひ美術学校に
至り額縁の注文をなす、

□□

午後二時校長に面會、
満谷氏を太平洋画會に
訪れ同伴して浅草
に夕食をなす、

二月十九日 水曜

【本文欄】

午前、駒込病院に岩村悦郎
夫人を見舞ふ入院式週間、
チブス^(チブス)の熱は衰へたるも心臓不良
にて危険なりとの事二三十分話す、
昼前藤島先生を訪れ他非同
食す、

午後四時の急行にて退京、
帰路伊勢太神に参詣の筈なり
しも時間不十分なるため
直行大阪下車の事となす、

二月二十日 木曜

【本文欄】

午前六時大阪着

直に電車にて奈良に趣く

八時頃着

市中をふら／＼なし十一時頃三山
亭に立寄る

午後  山に千塚あゆを訪ぬ⁴⁷
停車場より里余、これ神武皇后
の塚ならむとの推説、

帰路、正行の墳に詣ず、
夕方帰宿一泊、

二月二十一日 金曜

【本文欄】

朝奈良発 大阪に小林君の
所に三十分ほど話し十一時
過の列車にて帰宅
咽喉を痛めたるのみならず少
し感冒の気味あり

二月二十二日 土曜

【予記欄】

発太田⁴⁸、

奥原、

来太田

45

岩村悦郎か。(二月二十四日欄参照) 石井十次が経営した茶臼原孤児院教育部で教師を務めた岩村愛子の夫。(菊池義昭「大正期の岡山孤児院の運営体制と大原理事時代(Ⅰ)」『共栄学園短期大学研究紀要』第十八号、二〇〇二年、一一八、一二七―一二八頁)
磯谷商店(額縁店)。前掲注33参照。
『瓢箪山』の意であろう。
太田喜二郎(おた・きじろう、一八八三―一九五二)であろう。洋画家。児島と共にゲントの王立美術アカデミーで学んだ。

46 47 48

【本文欄】

十時頃迄朝床、

美術学校生徒の来訪あり

吉田君来る

衣を重ねてストーブの傍に話す

午後三時兩人共帰宅、

夜少し気分よきと大原氏明朝

日向出発の事を聞き倉敷に

出づ展覧会準備の様子を

傳ふ

但し大原氏の日向行は延期さる

二月二十三日 日曜

【予記欄】

発信

石井、疋田⁴⁹

柿原河原⁵⁰

柿原、関

村田

【本文欄】

後樂園の研究會⁵¹あるも、

咽痛を心配して欠席、

天気快晴、暖気催す

梅花枝を飾りて清香を

放つもの数樹、

夕方原田氏朝鮮⁵²将来品を

携へ来り示さる

首かけ德利式本を、土産に頂く

二月二十四日 月曜

【本文欄】

午前倉敷に出て柿原得君に

玉堂、関雪⁵²よりの受領証を

渡す

午後出岡、柿原政君に面會、

原田善吉氏を訪問不在

四時の列車にて帰宅、

夜電報来、

岩村愛子（悦郎夫人）⁵³長逝さる

二月二十五日 火曜

【予記欄】

来奥原、

出、柳井、太田、

岩村、

長尾

二月二十六日 水曜（記入なし）

49 疋田直太郎、または疋田家。直太郎は児島の従兄で医師。岡山県高梁市で眼科医

50 河原質市であらう。倉敷紡績で重役を務めた人物。児島の個展大阪会場の主催者のひとりであった。

51 岡山洋画研究会。前掲注11参照。

52 橋本関雪（はしもと・かんせつ、一八八三―一九四五）。日本画家。前掲注45参照。

二月二十七日 木曜 (記入なし)

二月二十八日 金曜

【本文欄】

出岡、佛先生⁵⁴を訪問す

原田善吉氏を訪問す、

午後二時帰宅

三月一日 土曜 (記入なし)

三月二日 日曜

【本文欄】

吉田君の来宅を乞ひ

東京より持帰りし、

(カンヴァス)
カンパスを各枠に張直

す手傳を乞ふ

終日、

羽織の手裏を描く

三月三日 月曜

【本文欄】

出岡、

吉田君と午後同道して

出岡、夕方帰宅

三月四日 火曜

【本文欄】

吉田君夫妻、三木令嬢

と他に一名の令嬢^(の?)を伴ひ

来酒、⁵⁵

小放牛の手指を描き改むる

ためモデル^(モデル)に乞ひたるためなり

夕方迄写生、

夜、願書、及羽織の裏地を

描く

三月五日 水曜

【本文欄】

午前、旅券願書をかく

描きたる羽織を大原に持

参、其席調印を乞ふ、

午後青野君訪問、痔にて

臥床、

夕方、満谷、松尾氏⁵⁶来

倉、

三月六日 木曜

【本文欄】

満谷氏朝岡山より来られ

⁵⁴ デュトウ神父のことか。前掲注13参照。

⁵⁵ 「酒津(児島の住所)に来る」の意であらう。

⁵⁶ 松尾哲太郎か。満谷国四郎の友人で、第六高等学校教授を務めた。

午後玉島に去らる
夕方、伊藤仙君夫婦連れに⁵⁷
て来訪、三橋氏来車

午前岡山に趣き縣廳に旅券下
附願書を持参す

三月七日 金曜

【本文欄】

午後吉田君来訪、
夕方倉敷に出て大原に屏風を
出して東京出品⁵⁸に就き如
何せんかと考ふ

三月八日 土曜

【本文欄】

終日画室に在り
満谷氏滞在
小放牛を習描す、

三月九日 日曜

【予記欄】

発信
林杉造⁵⁸
【本文欄】
終日画室にあり

琴かけ未た筆をとらず

満谷氏滞在

三月十日 月曜

【本文欄】

満谷氏滞在

三月十一日 火曜

【本文欄】

満谷氏滞在

三月十二日 水曜

【本文欄】

満谷氏滞在中なりしたため
仕事、及準備不可能、

午後大原宅にて屏風の手入
をなす、

午後雨降る

三月十三日 木曜

【本文欄】

前日にて描き終れす
今朝より午後すき迄て
手入をつゝく、

⁵⁷ 伊藤仙三郎か。児島の住所録に名前があり、住所は神戸市夢野町、野崎通および上筒井通となっている。
⁵⁸ 林杉造。大阪にて印刷会社林欧文堂を営んでいた。

夕方衝立に西湖を描く
夜半終る、

三月十四日 金曜

【欄外右側／本文欄】

東上

□早朝、□柿原氏の絹に
日の出を描き青野君の
ガクに京城を描く、

午前十一時の列車にて東上
夕方大阪に下車、
小林君を訪問し
林君と、齊藤氏の宅を訪る

停車場前に一泊

三月十五日 土曜

【本文欄／欄外右側】

早朝神戸に趣き、
郵便會社、静岡丸の乗船
切符の假契約を終る
正午前帰阪、
河原氏を訪問、
小林君と共に皿井、三越、
銀行に廻る

午後三時過の列車にて
京都に趣き、夕方太田君を
訪問同夜十時限の急行に
乗し東上、

三月十六日 日曜

【本文欄】

午前正午東京着、
直に村田氏^⑤に來宅を乞ひ
同道田井印刷所を訪問
カタロク印刷の件につき見積
を乞ふ、
夕方散髪、

三月十七日 月曜⁵⁹

【本文欄】

午前藤島先生を訪れ
午後三越に大原氏より依頼の
買物をなす、
夕方山本君を訪問不在
藤島先生、岡田先生に□肖像
画の依頼をなす、
結城氏へ屏風の事を話す
四月一ぱいかかる筈
吉田君來京

59 三月十九日欄に、印刷された日付を訂正
して記入されている。

三月十八日 火曜

【本文欄】

午前磯谷に趣く椽^(縁)未た、出来さるも
午後五時迄に出来る筈、

正午、吉田君矩一來訪

午後学校に趣き正木校長⁶⁰に
案内状兼招待状の起稿^(起稿)を求む

三月十九日 水曜⁶¹

【本文欄】

午前九時学校に趣き

田中の主人と写真屋同道来校⁶²

作品写真⁶³ 式十枚を撮影す、

午後、

畜産博⁶³を見物

夜に入り非常なる強風起る、

吉田君、同宿、

家内より来信

旅行□状下附につき一應倉敷警察に

登署せねはならぬと申来る、

三月二十日 木曜

【予記欄／欄外左側】

発信

青の

発電

青の、

来電

青の

斉藤

洗濯へ

シャツ一、カラ二

ハンカチ 六

【本文欄／欄外左側】

朝金沢氏来訪、

午前中田中印刷所に趣き写真

の撮影を一覧す、

正午村田君来訪、

午後光風會に同伴

山本⁶⁴、跡見⁶⁵、平井君に面會、

夕方、再び田中印刷所に

趣く、

昨夜国元より、来信「倉敷警察署

より旅券の事につき出頭せよとの事」

青野君に打電して帰国せすに済む工夫

を相談す、

60 正木直彦（まさき・なおひこ、一八六二
—一九四〇）。官僚、東京美術学校校長。

61 三月十七日欄に、印刷された日付を訂正
して記入されている。

62 田中印刷所。三月二十日欄参照。

63 第一回畜産工芸博覧会（中央畜産会主催）。
この頃上野公園内で開催されていた。

64 山本森之助（やまもと・もりのすけ、一
八七七—一九二八）であろう。洋画家。

65 跡見泰（あとみ・ゆたか、一八八四—
九五三）であろう。洋画家。

三月二十一日 金曜

【予記欄】

来信

青の

小林

【本文欄】

午前田中へ趣く

午後、齊藤溪舟、富永⁶⁶、磯谷⁶⁷、

時々の写真員来訪⁶⁸

午後會場に趣き面積を見る

大阪の會場中央公會堂借入
不可能となり

府立商品陳列場の式階を借
入れる事となる

三月二十二日 土曜

【予記欄】

来信

原、青の⁶⁹

発信

青の

小林、

自宅

【本文欄】

午前□□汐留、高瀬組運送店に

趣き出荷の事を依頼す

貨車借切、倍賃、護送者附

にて八日五日夜東京発送

八日午後二時迄にハ大阪着の予定

右約束を終る

正午、齊藤氏来訪村田氏来訪

午後、光風會にて三宅⁷⁰、辻氏⁷¹に面

會、□博物館に趣く

夜美術旬報の松原氏来訪

三月二十三日 日曜

【本文欄】

朝美術学校、昼黒田先生訪問
不在、午後村田氏宅に至り招待
状発送の事につき相談をなす

牛夕方光風會に趣き、岡野⁷²

田辺至氏⁷³に中国民報社洋画展⁷⁴

覽會の出品を乞ふ、

三月二十四日 月曜

【本文欄、欄外左側】

午前美術学校卒業式に参列

諸先生に會遇、

藤島先生より先日依頼せし

肖像ハ揮毫不可能なる由

申出られ小林萬吾氏⁷⁵に依頼の

事と決す、交渉済 □

66 斎藤徳太郎（恵太郎、溪舟）。前掲注35参照。

67 富永勝重（とみなが・かつしげ、一八八四―一九五八）か。洋画家。

68 時事新報のことであろう。

69 原澄治（はら・すみじ、一八七八―一九六八）か。大原孫三郎の右腕として倉敷紡績などで活躍。のち、倉敷町長。社会事業も多く手がけた。

70 三宅克己（みやけ・こつき、一八七四―一九五四）であろう。洋画家。

71 辻永（つじ・ひさし、一八八四―一九七四）であろう。洋画家。

72 岡野栄（おかの・さかえ、一八八〇―一九四二）であろう。洋画家、版画家。

73 田辺至（たなべ・いたる、一八八六―一九六八）。洋画家。

74 中国民報は岡山の地方新聞で、現在の山陽新聞の前身紙のひとつ。一九一三年より大原孫三郎が経営にあたっていた。

75 小林萬吾（こばやし・まんご、一八七〇―一九四七）。洋画家。

午後、日日の記者来る、写真班
村田氏来訪

今朝写真版の校正来る、
吉田君牛込行
宿分ず

三月二十五日 火曜

【予記欄】

榮、
来電
小林

【本文欄】

午前下谷警察に趣き指紋を
なす、
黒田先生訪問不在
今関氏訪問不在

午後村田氏宅に至り午後
七時頃迄招待状案内の
準備をなす

三月二十六日 水曜

【予記欄】欄外左側

来信
大原夫人⁷⁸
妻、⁷⁹

発

大原夫人

妻

青の

小林

発電小林

【本文欄】

朝より村田氏宅にて招待
状発送の準備をなす
午後五時帰宿
夜、黄微^(黄微之友)の友の田中氏
来訪

三月二十七日 木曜

【本文欄】

昨夜日□寒気加り帰りて風邪の
氣味ありて氣の面白からず、
午前砂田君⁸⁰来訪、

午後、坂田⁸¹、□□、
富永金山、氏来訪、
午後五時より山本氏に招かれて
有樂座に出かく
十時半帰宿、

77 76 東京日日新聞のことであろう。
今関天彭（いまぜき・てんぼう、一八八
二―一九七〇）か。漢詩人、中国研究家。
児島の住所録に本名（今関壽磨）が見え
る。

78 大原壽恵子（おおはら・すえこ、一八八
三―一九三〇）。大原孫三郎の妻、歌人。
児島友（こじま・とも、一八九〇―一九
七二）。岡山孤児院の創立者石井十次の
娘。一九一三年、大原孫三郎の仲立ちに
より児島虎次郎と結婚。

80 砂田正二か。洋画家。児島の住所録に名
前があり、住所は岡山市楠屋町となつて
いる。

81 坂田一男（さかた・かずお、一八八九―
一九五六）か。洋画家、岡山市出身。児
島の住所録に名前があり、住所は東京麴
町となつている。

三月二十八日 金曜

【本文欄】

朝藤島先生の宅を訪問、
午後同伴学校に趣く、
諸教授試験成□の審査に
登校、

夕方屏風荷をとく、

夜佃兄弟来訪、⁸²村田氏来訪
山谷氏来訪

三月二十九日 土曜

【予記欄】

発電
斉藤、
発信
自宅、
来信
小林、
青の、
自宅、
来電斉藤
【本文欄】
午前九時学校に趣き作品の
粹張をなす、
午後四時頃終る

高島屋に洋画家の邦画展

覽會を見る

夜、⁸³柚木、藤島先生来訪

学校にて佃、砂田、矩一吉田君
なと手傳されたるため案内
早くかたつく

三月三十日 日曜

【本文欄】

昨夜藤島先生来訪「有島山下⁸⁴
君⁸⁵なとと交情堪たるを復活させ
たしとの事」物語らる⁸⁶
朝九時学校に額の陳列準備を磯谷
に約したるも先生のため早朝
自働車にて山下君を訪問会談一
時間要領を不得帰途有島君
を訪問不在、
十一時学校□に到る、夕方迄陳列
準備、

三月三十一日 月曜

【本文欄】

午前八時半学校に到り昨日の
陳列を整ふ
十時頃より□招待したる記者達
ほつく来觀□さる

82 佃武昭（つくだ・たけあき、一八九一—一九六八）、洋画家。佃政道（つくだ・まさみち、一九〇一—一九九二）、洋画家、版画家。岡山市出身。

83 柚木久太（ゆのき・ひさた、一八八五—一九七〇）であろう。洋画家、現倉敷市出身。

84 有島生馬（ありしま・いくま、一八八二—一九七四）。洋画家。

85 山下新太郎（やました・しんたろう、一八八一—一九六六）。洋画家。児島とは、東京美術学校の同期卒業。

86 藤島武二が二科会発足（一九一四年）に参加しなかったことをめぐり、有島生馬・山下新太郎ら二科会創立会員である教子たちとの間に生じた不和について述べていると考えられる。

夕方迄、数多来観

夕方

四月一日 火曜

【本文欄】

午前八時登校

早朝より来観の人多し

終日會場にて招待の労をとる

此日會場者約四百位、

観者は非常なる熱心の度を以て

観覧さる、

総て専門家、學生など多し

来援の人々、

金沢、村田、新支局の人三人、矩一、藤、⁸⁸

佃、中山、坂田、小野片岡の諸氏

四月二日 水曜

【本文欄】

今朝も早くより登校

終日展覽會場にこもる、

入場會約、七百位^(首)

四月三日 木曜

【本文欄】

早朝より登校

終日在場、

説明を要し望まるし人なく^(も?)

渺からず、

午夕方五時閉會直に磯谷

は荷造に従事其夜総てを

芝の磯谷の所に持運ふ

夕夜食を手傳れたる学校諸氏など、[?][?]

會食す、

四月四日 金曜

【予記欄】

発電

筒井氏に

旅券の事

を依頼す

【本文欄】欄外左側

午前國民美術に趣く⁸⁹

午後、学校に趣き屋代氏に^(矢代?)⁹⁰

面會小使への心付なと相談す、

夕方村田氏来訪カタログの

計算を持参せらる

88 87 中国民報社の支局の意か。
藤彦衛（ふじ・ひこえ、一八九七―一九六八）か。洋画家、岡山県出身。児島の住所録に名前があり、住所は東京府下和田堀町となっている。

90 89 国民美術協会のことであろう。
矢代幸雄（やしろ・ゆきお、一八九〇―一九七五）か。美術史家。横に鉛筆にて「矢代幸雄」と書き添えられているが、児島の筆跡ではない。

七時より、赤坂三河屋に参会
此夜、藤島先生、斉藤、山下、有島
富永の諸氏余のため別宴を□らる、
「今朝、村田氏に依頼して外務省に
青木君を訪問し旅券の事を
尋ねて貰ふ
事にした

四月五日 土曜

【予記欄】

来電、

筒井、

【本文欄】

午前学校に至り

小使、門衛などに心付をなす、

幕⁹¹など損料支拂、

磯谷に趣き額^(額縁)椽代支拂

豫想よりは非常に安價にて[?]

済みたり、

帰途村田氏の局へ尋ね、

此所へも少しの心付をなす、

四月六日 日曜

【本文欄】

朝正^(お)本校長を牛込^(ママ)にの宅に訪問
半時後退出、

麴町に黒田先生を訪問、一時間
會談、
帰途、中国支局⁹²に村田氏を訪
ね旅券未着の事を謀る
今夕迄に着ならむと語らる
岡崎君、夜来訪
女子大学□の先生来らる、

四月七日 月曜

【予記欄】

発信

青の

発電

筒井

全

来□電

筒井

【本文】

午前金沢氏来訪

正午過中西屋へ錦絵の複

製を買求めに趣く欧州への土産

とせんためなり

二時過富永君来訪

藤島先生を訪問不在

夕方待詔たる旅行券到着、
明日は退京横濱に趣く予定

91 借用料の意。
92 中国民報社の支局の意か。

四月八日 火曜

【本文欄】

午前八時都田屋を辞し九時頃発
横濱下車、

英国領事館に至る写真二葉必要
なる由早速大庭氏⁹³に依頼して復写
を附近の写真師に乞ひ昼前

領事館に出頭手続をなす、

午後大庭夫人に誘れて大牧原^{本牧}

氏の三溪園を観る

午後五時頃[?]の急行にて大阪に向ふ

旅券証明本日出来上らず

後便に托し送付方を大庭氏に乞ふ

四月九日 水曜

【予記欄】

磯谷□

へ□電

【本文欄】

午前六時半梅田着

直に小林氏を訪問展覧会準備

備につき聞合せ直に齊藤氏の

宅を訪れ同道して米中央公會

堂に至る

倉紡出張店、欧文堂⁹⁴に至り

夕方迄小林君宅にて案内状

発信の準備をなす、

淀屋橋小路の越智旅館へ泊す

夜松原氏来訪⁹⁶

四月十日 木曜

【予記欄】

磯谷より

来電

【本文欄】

朝是則倉庫に至り荷物を

点検す、

明日市下新聞記者を招きて一應展

覧する□事となり場所を中央

電気倶楽部に約束す、

午後三越に趣き幕の事を

橋本氏に□す

午後方々に観覧券の配布に市

中を廻る、

四月十一日 金曜

【本文欄】

午前十時は則倉庫に趣き

後中央電気倶楽部

に箱荷を運び階上に陳列

す、

午後一時より招待したる

93 大庭猛か。児島の住所録に名前があり、住所は横浜市森町となっている。大庭は岡山孤児院出身で、大原孫三郎の援助により横浜で織維品貿易会社を営んだ。また、一時期岡山孤児院長を務めた。倉敷紡績。大原孫三郎が経営する紡績会社。

94 倉敷紡績。大原孫三郎が経営する紡績会社。

95 林欧文堂。大阪の印刷会社。前掲注58参照。

96 松原三五郎（まつばら・さんごろう、一八六四―一九四六）であろう。洋画家、岡山市出身。松原は児島の個展大阪会場の主催者のひとりであった。

新聞記者数名来場、
午後四時^(額?)97を箱に納む
めて再び是則倉庫に預く

夜発信の残務をなす、

四月十二日 土曜

【本文欄】

早朝来阪を乞ひたる長尾氏
来着、
公會堂に至り會場設備
の準備につき長尾氏の策を
求む、
案内状発信などの準備に
尚忙し、

柳井君来

四月十三日 日曜

【本文欄】

柳井君来阪(手傳のため)
愈々明日より開会の事、
長尾氏の方の準備なりたれハ
明^(明日?)の開会は正午の時刻を
遅れる事なからむ

林君の所のカタログ等無事[?]

運び都合よし

四月十四日 月曜

【本文欄】

六時公會堂に乘至り腰かけの取
かたつけをなす一方に額箱の
荷ときする人々、[?]多く松原[□]
の学生其店、⁹⁸小林、三原 林の
店員⁹⁹など、長尾氏の梓組^(額縁)
幕張、井上[?]額縁店の主人
人夫などの助により、正午
僅過ぎて全部陳列済と
なり午後一時開場す
夕方迄の人場者八百人余、

四月十五日 火曜

【本文欄】

朝より小雨降り正午前後は
非常の暴風雨となる、
も人場^(人)者多数にして
比較的静肅なる観賞家
の満つ、
人場者八百人余、
此夜成羽¹⁰⁰出身者の會食あり、
小林、柳井、林、横見、三原、
林弟、須藤、

97 偏は「客」、旁は「冢」から成る漢字が用いられている。「額」または「額縁(額縁)」の誤字と考えられる。

98 松原三五郎の画塾(天彩画塾)の塾生のことであろう。前掲注96参照。

99 「林源十郎商店の店員」の意か。前掲注3参照。

100 成羽(なりわ)は児島の故郷。現岡山県高梁市成羽町。

吉田君来阪

四月十六日 水曜

【本文欄／欄外左側】

空霽れて心地よし、

朝来入場者の数巨多午後

に入りて一層の数にて殆と雑

騒として静観に^(通)的せず、

入場数四千を越る事三

百

内藤博士、小山健三¹⁰²松方幸太郎^(幸次郎?)

氏来場松方氏羊の絵を

希望さる、

午後六時閉場直にとりかたつけ

をなし午後十時全て荷造などを

終へて印刷倶楽部に慰労會を開く

四月十七日 木曜

【本文欄】

午前中支拂などの雑用

あり

午後淀に余のため京阪在住の

画家双鳩會を開かる、

會するもの二十名

深夜大阪に帰る、

長尾氏、柳井、小林金沢氏

等しく趣く

四月十八日 金曜

【欄外右側／本文欄】

朝

長尾氏¹⁰¹三原、柳井氏と

共に奈良に趣く、

昼食後、大佛、¹⁰³井八幡春日

を廻りて三山亭に帰り夕食後

大阪に帰る、

長尾氏夜行にて帰東す、

四月十九日 土曜

【本文欄】

午前八時発午後三時帰倉、

家越、留守中の取かたつけ、渡

欧準備などにつき¹⁰⁴ほゞ考

按も定まる

四月二十日 日曜

【本文欄】

朝来¹⁰⁴大原氏先代の肖像画

を描き始む、十二号、

101 内藤湖南(ないとう・こなん、一八六六—一九三四)か。東洋史学者。児島は前年中国旅行に先立って内藤を訪問していることが、同年の児島日記から確認できる。

102 小山健三(こやま・けんぞう、一八五八—一九二三)。実業家、教育家、官僚。

103 松方幸次郎(まつかた・こうじろう、一八六六—一九五〇)か。実業家、政治家、川崎造船所社長。

104 《大原孝四郎像》(倉敷紡績所蔵)であろう。

四月二十一日 月曜

【予記欄】

発信 屋代^{(矢代?)¹⁰⁵}

正木、黒田、

林杉、¹⁰⁶山内

松原、斉藤、

山下、有島

斉藤豊

【本文欄】

肖像描き、^{(きつ)マク?}く

吉田、小林君来宅、

四月二十二日 火曜

【本文欄】

大阪より荷物到着、小林吉

田両君の手傳にて開箱、

倉に夕方迄にて全部の

かたづけを終る、

肖像を描き終る、

四月二十三日 水曜

【予記欄】

発信

太田、上田尚[?]

山本□

【本文欄】

屏風一双を描くべく大原氏

より依頼され、

屏風来り、春秋を描くべく

構図を謀る、

屏風に

夕夜デッサンを描く

小林君帰阪

四月二十四日 木曜

【本文欄】

終日屏風を描く吉田君は

泊酒¹⁰⁷されて取かたづけの手傳

を尽さる

四月二十五日 金曜

【本文欄】

屏風殆となる、

画室中のものは画室に数個の

木箱に収蔵し置く事と

なす、画室の額はすべて[?]

倉に蔵する事となす数日[?]

□来^{マツ}来毎日出しつゝの取かたづけ

のため画室の整理殆とつく

105 前掲注90参照。
106 林杉造のこと。前掲注58参照。
107 「酒津（児島の住所）に泊まる」の意。

四月二十六日 土曜

【本文欄】

屏風全くなる、
琴かけの図按を考ふ

一方の渡欧準備をなす、

四月二十七日 日曜

【本文欄】

午後七時岡山に趣く
九時より岡山中学に於ける
余のために催さる、研究会
の送別會に望む
正午過ぎ會を辞し、¹⁰⁸天主¹⁰⁹
閣の洋画陳列を観る
午後二時半の列車にて刎帰酒¹⁰⁹
琴かけを描く

夜都志氏¹¹⁰の宅にて迎¹¹⁰の諸氏の
會食に招せらる、

四月二十八日 月曜

【本文欄】

午前七時車にて堪井¹¹¹に趣く十時
発自働車十一時半成羽着、
午後学校を訪問し、本光寺に
墓参す、

夜深く迄語合ふ、
夜、井上、柳井、庄、遠藤諸氏¹¹¹
より饗應を受く

四月二十九日 火曜

【本文欄】

早朝柳井君と八幡宮に詣づ
八幡社前の丘の中、成羽川に向て
傾斜せる地面の眺めよく金が出
来たれば此の辺に住家を建て、
暮してもよしなど、地域の
撰定など試む夢の如き話し
なり、
正午中村井上、柳井諸氏と會
合午後一時の自働車にて
午後四時酒津着、
描きかけの琴かけをつゝく

四月三十日 水曜

【本文欄】

朝青野兄の喀血¹¹²しき夢を見て
醒む、
終日琴懸ゆを描く式枚にて各天女
の樂を奏する所なり、
午後近家に配布すべき色紙など
描く、夜荷物とりかたつけ
なとす、

岡山城天守閣のことであろう。

110 「酒津（児島の住所）に帰る」の意。
都志太郎、または都志家、都志太郎は、

大原孫三郎が経営する倉敷銀行で取締役
をつとめた人物で、児島の近所に住んでい
た。児島の孫である児島塊太郎氏による
と、両家は家族ぐるみの付き合いがあつ
たとのこと。

111 湛井（たたい）は現総社市の西部、高梁
川河畔の地名。児島の住む酒津から故郷
成羽に向かう途中に位置する。

五月一日 木曜

【本文欄】

昨夜深く青野兄の室重患なる
を傳へらる六時過ぎ同兄の宅を
訪問一時危篤を宣せられたるも
其後少し平安を得た由を報せ
らる、
心臓の不良なる事の特に心痛
されるも、□腹、より腹膜に移
りたる本症はや、輕快熱度降
下せるもとにかく重患なれはと
三橋兄宅となす、午後岡山□□寛博¹¹³
士¹¹²の来るあり、等しく重患なると
傳へらる、

五月二日 金曜

【本文欄】

昨夜は通夜して看護の手傳を
なす、
朝小林兄の来るあり、青野兄
の近親、諸友に報する事を
好まず、只危篤なる旨を強[?]に
親族の人々に通知す、
終日病状に差したる変化なし
此の一兩日最も危険らしく
兎に角^{つま}再起の望みなしとの事

なりしも余は徹頭徹尾快方
の来る事を自信す、

五月三日 土曜

【本文欄〱欄外左側】

昨夜九時、家に歸りて眠る、
午前三時、使來りて病者の死近き
を報す、急き趣く三橋兄すてにあ
り少時して脈傳や、平調に復し
て一同愁眉を開きしも
午前八時半遂に逝く、
暁の頃死の近づきたる病者は親近
を枕頭に寄せて明□なる遺言
を□す、
死は遂にせまりて心臓ををかす、
葬儀を明後五日と定む、
寄せ参しられたる近親友人、衆多、
青野兄は已に不歸を覚悟したるも失望の色面に現れ、
見るに
堪へず

五月四日 日曜

【本文欄〱欄外左側】

昨夜十時頃青野君の宅にて大原氏より
明日出発神戸にて準備したる方よからむ
と勧められ今朝より急遽[?]、旅□□
行李の支度を調ふ、正午酒津に

112 三橋玉見（医師）宅にて看護するという
意であろう。前掲注2参照。

113 寛繁（かけい・しげる、一八八一〜？）
であろう。医師、岡山医学専門学校教
授。

趣き大原氏に持行くべき画面四五を撰ふ、

午後三時発の列車にて倉敷を去る、岡山に下車、デユス先生(Olmsted)に挨拶に寄る吉田君訪問就床は腹膜炎にて一時重患なりし由と聞く、六時四十分岡山発十時過神戸着海岸後藤に泊す、

五月五日 月曜

【欄外右側く本文欄く欄外左側】

朝

八時過の列車にて大阪に趣き三井銀行に小切手五〇〇〇を受取る、三越にて小許(少)の買物をなす、正午帰過帰神、二時白耳義(ベルギ)領事館に証明を乞ふ恰もガンの出生なる書記館ありて直に済む(?)午後、市中に買物をなす、夕方、金山、伊藤夫婦来訪連立ちて散歩す、途上柚木君に遇ふ十一時帰宿、柳井、小林君すてに着宿、柳井君より青野兄の其後元気に復せしを聞く

五月六日 火曜

【予記欄】

見送られたる諸友、

小林、柳井、林、伊藤、金山115、太田、乙骨、須藤炭谷116、小野田117、妹尾、柚木、

来信数多、

【本文欄】

早朝、多くの人々宿に来訪、小林君と柳井君は両替に依頼す十時ランチにて乗船、静岡丸六千噸比較的新造船なるも、日本製造にて粗末千萬、一等は以前の欧州航路に比して二等の設備に劣るものあり、十一時出航横濱よりの客と神戸にての乗客を加ふるも尚、門司よりの乗客多数あるらしく賑かならず午後四時屋島高松を見て帯江の煙備118突らしきものを右舷にて廣島沖位？日没す

五月七日 水曜

【予記欄】

発信 自宅、

114 ベルギー北部の街Ghent（ヘント、またはゲント）のこと。「ガン」はフランス語での呼称。児島は第一次滞欧中、同地の王立美術アカデミーで学んだ。

115 乙骨安昌であろう。児島の住所録に名前があり、住所は岡山国富となっている。

116 炭谷小梅（すみや・こうめ、一八五〇―一九二〇）か。キリスト教の布教師。石井十次による岡山孤児院の活動を支援した人物。

117 小野田鉄弥（おのだ・てつや、一八六四―一九四八）か。石井十次とともに岡山孤児院の運営にあたった人物。

118 帯江村（現倉敷市帯江）にあった帯江銅山の煙突のこと。

小林、柳井、
自宅へ小包、

【本文欄】

早朝門司着、七時半上陸、
神戸後藤藤田旅館に帯を忘れたる
事を思出し袷衣の最早役立
たらぬ事を思出し上小包として自宅
に発送す、
九時の列車にて博多に向ふ、
正午前疋田を訪る、市中に出て
、僅かなる買物をなす、
船中涼風起きて暑気を感じる
処なかりしも此地に來りてすてに夏
なるを知る、夜晩く迄戯書をなす、

五月八日 木曜

【本文欄】

午前十一時発六時四十分？福岡
発、九時過ぎ門司着、直に帰船
十一時発船、岸近き港との様は
長崎に似て去年の旅を思出づ
港外の波も静かに玄海の船旅も
さほどの事なし、乗客一同の
食事を欠くもの一人たになし
日本より携へたる西南血涙史
を読み始む
晴快にて心地よし

五月九日 金曜

【本文欄】

波に明けて波に暮れたる今日も
されたる荒れもなし只終日霧に
包まれて快晴を見ず、
読書とデッキの遊戲に消暇す、
午後二時に諏訪丸乗船上田君
より無線電信来る、今朝上海
発帰国の途にありと田小生より
返電に會し尚一回通信あり小生
より重ねて返電す、
意識快明を欠き氣進まず

五月十日 土曜

【予記】

発信
自宅、
大原、

【欄外右側】

上海の甚三郎は今朝彼か父の悲報に接し帰国のため、
発船

【本文欄】

八時起床、外海すてに濁色に黄はみ
て上海の近つきたるを知る、揚樹江を
遡りして郵船埠頭に投錨したるハ
正午頃なり昼食を済して二時

119 加治木常樹著『薩南血涙史』のことであ
ろう。西南戦争の記録。

120 「揚子江」または「楊樹浦」の誤記であ
ろ。

過上陸直に須藤氏を訪門¹²¹少時、
附近の散策を試みたれとも見る
ほとものものなし

伊藤妹尾、須藤兄弟の月の家に案
内されて夜深して須藤君の宅に
一泊す、

上海の暑氣烈しく極暑と思ふ

五月十一日 日曜

【予記欄右側】

発信、大原、

青の、家族、

矩一、柳井、

【本文欄～欄外左側～予記欄左側】

昨日の蒸暑さは夜半に急変し

て非常の涼気を催来る午前

八時起床十時頃迄故国の諸友へ

通信を書く

十一時、原田瓊生氏¹²²の宅に訪門

王、統一氏の来訪中、支那人

の対日思想なるもの及支那人の日

本人の性格觀察□日本人と支那

人の思想、性格上に現れたる差異

などに就きて興味ある意見を聞

く原田氏の宅にて昼食をすゝめられ

たるも食欲なし食事せず夕方より須藤、妹尾、伊藤

氏に案内を受けて競馬場附近の支那料理店に至り△¹²³

△

十時過頃

會食、

十時半

シマパン[?]にて

帰船、

五月十二日 月曜

【本文欄～予記欄】

午前八時上海郵船埠頭を発船す、上海

より新なる乗客の増したるものとあれと上海に上

陸したの人と差引増客なし、揚子江の

濁流の波色減する頃より船波荒く船の

動揺烈しく霧深くして小雨交る、

午後に至りて読書するも睡気を

催するのみ遂に夕方迄半眠半醒の

姿にて煙突室に過す、昨日より消化

剤の服薬を試みつゝあるも空腹を

来さす夕食を控ゆゝ多くの乗客も

等しく船暈の氣味?△

△

夜に入りて波

穏かに一同の

快氣生ず

夜晩く迄

蓄音器

を聞く

¹²¹ 須藤五百三、祐七、新六兄弟のいずれか。
祐七および新六については前掲注34参

照。須藤五百三(すどう・いおぞう、一
八七六一一九五九)は医師で、上海で医
院を営んでおり、魯迅の主治医として知
られる人物。

¹²² 大原孫三郎の幼なじみ。児島の住所録に
名前があり、高田商会の関係者であるこ
とがわかる。

¹²³ 文章が別の欄に続くことを示した記号。
児島は「△」を用いることが多い。

十時就床
睡眠充分

五月十三日 火曜

【本文欄】

昨日は少し波高かりしも今日は終日平穩にて空晴れて風涼しく快氣を催し[?]食味あり甲板の遊戲と読書になかき終日を送る
明後日は香^(香港)海着の予定
上海に上陸せし時ほととの暑さに至らず想像より涼氣あり、

五月十四日 水曜

【本文欄】

終日海上平穩にて明朝は香港着の予定、
午後ゴルフの競技を乗客一般に行ひ夕方迄時の過きを知らす、

五月十五日 木曜

【本文欄】

早朝香港入港九時半上陸同船の両三氏と自働車にて一時間廻遊し

正午頃ピークに昇る二時過迄市中を徨い東京ホテルにて食事をなし夕方帰船、
三度目に観る香港の風光、
朝も昼も夜も晴れたるも曇りも山も水も建築も草も花も木美しとも鮮し
往年スケッチに過せし香港の思出も此旅には只賛美の眺に時を過すのみ

五月十六日 金曜

【予記・本文欄】

今朝再び香港に上陸し少し珍らしき物にても目につかは何か買求めて紀念の種にもせんと考へしも正午出帆なれハ上陸しても氣忙しからむと遂に船に止りて上陸せず
昨夕籐行李を支那人より買求む、
船は正午正しく出航す、朝来風強かりしかはたして港外風愈々強く波荒し
出航す[?]くより船の動揺烈しくして不快^{??}この上なし、
夕に至るも[?]静穩に復せず夕食を見合す、

五月十七日 土曜

【天氣・寒暖・予記・本文欄】

昨日の荒波何時の程よりか静まりて

空晴れ渡り今日の航海の平穩を期せ
らる、西南血涙史〔西南血涙史？〕を読む事と、

デッキにてゴルフをする事と時に煙突室
にてトランプを遊ぶ事は毎度日同じ日課
の如し、

香港以来暑氣次第に加り来り、乗客の
白衣に改むる人多し余この日白服に改む
日没の頃より熱氣去りて涼風起り夕方より
夜にかけての心地よく眠につくは大低夜半
に入る、毎夕九時或は十時入浴す、

五月十八日 日曜

【天氣・寒暖・予記・本文欄】

暑氣は一日と増し来りて蒸暑し、海上常
に風氣あるもなま温きくして氣重し、
寢室に丸窓の小なるもの二つあれと風を
通するによしなし、室内に一個の送風器
あるも小にしてしかも廻轉力弱く風を起す
に足らず終夜暑に蒸れて安眠する事を
不得床に就てハ夜半甲板に出て、涼風
に浴し再び寢に就く、
巴里の様着佛後などの事思浮べて予想を
定めむとするも不得、
日本の出立後の出来事に知らむとする事と
多々あれとこれも不可能なり

五月十九日 月曜

【予記・本文欄】

朝来霖雨アツ暫々来て涼風快爽

数日来の暑熱一時に去て終日殆と

南洋の旅にある事を忘れしむ、

読書するも遊戯するも快味渺からず、

西南血涙史〔西南血涙史？〕は昨日読終りたればLa maison

の続読をなす、

午後に至り雨霽れたるも風涼しく終に

暑さを知る事なし、

夕食は乗船来始めての日本食を供せらる、

酒津の宅124の事なと思出て、

琥一郎の事突然頭に浮ふ若し彼の上に何事か

災の来りしにハあらずと心配の念湧く

五月二十日 火曜

【欄外右】

洗濯靴下縮シャツ125、寝衣125

縮下シャツ125 スミ

【天氣・寒暖・予記・本文欄】

海平穩なり航海中は大低無風125と云ふ
事なく船の進行につれて何れよりか
涼風の起らざる事なし
昼は殆と暑氣に苦しむほどの事
なけれとも夜に入りて船室に下れば
通風なくし醒眠なくして夜を通
す事かたし、

124

児嶋琥一郎（こじま・こういちろう、一
九一四—一九九二）。児島虎次郎の第一
子。戦後、祖父石井十次の児童福祉事業
を再興し、児童福祉家として活動した。
洗濯に出した衣類をメモし、受け取った
仕上がり品を取り消し線で消除したもの
と思われる。「スミ」は、全品の受け取り
が済んだという意であろう。

125

五月二十一日 水曜

【欄外上側】

□

袖ナシ

ヅボン下

縮シヤツ由

靴下

スミ

【天気・寒暖・予記・本文欄】

今日の一日の航海も静かに船は午後三時新嘉坡に入港、四時旅券の検を終へ上陸、海岸の碩田館に泊す、往年此の宿に泊したる事を思出す

夕方迄にサラサ屋に趣きサロン四五四枚を買求む
夜夕食後浴衣かけにて海岸に天幕張にて
馬來オペラを観る奏楽はすべて洋式にして
ピエロも何か洋風めきたるもの日本の浅草
辺の歌劇の類のものか

国民記者山田氏余等の室に来らる
これにて四席満員となる

五月二十二日 木曜

【欄外右側】

発大原、自宅、青の、吉田、林源、矩一

【天気・寒暖・予記・本文欄】

新嘉坡の夏も朝風は涼し同宿せし小笠原¹²⁷

加藤¹²⁸の諸氏とサラサ屋に來り市中を廻て

午後二時、帰船す、

船は午後四時出航ペナンに向ふ、

海波揚らす暑氣甚しからず

日は没して清光の星空に満つ、

明日一日の波の上明後日は又ペナンに上陸
を得む、

海の上は気倦みて時長しされと港に
寄るの日を思へは又快興湧き來て

空想に耽ける、

五月二十三日 金曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

終波静かなりし

読書とゴルフに時を費す、時にトランプ
将棋などを試む、

五月二十四日 土曜

【欄外右側】

発信、大原、自宅、青の、林杉、関、上田、妹尾、
富永、―外四、

【欄外上】

洗濯

縞シヤツ一

ヅボン一

縮シヤツ一

〃半袖一

126

児島の住所録に「山田毅一」の名がみえる。当時國民新聞の記者で、のちに政治家として活動した山田毅一（やまだ・きいち、一八八七―一九五三）のこと。山田の著書『戦後の欧米漫遊記』（放天義塾、一九二〇年）により、児島と同じ船に乗船していたことが確認できる。

127

小笠原長丕（おがさわら・ながまさ、一八九一―一九六八）。子爵。六月二十日欄参照。

128

御木本真珠の加藤虎之助。六月二十日欄参照。

ハンカチ一

スミ

【本文欄より予記欄】

早曉船はペナン港外に近く着港後
警吏の面倒なる旅券検べの後十
時上陸朝日館に憩ふ^{*}同船の人々
植物園極楽寺などに趣く余は車を
雇ひて市内を廻る何か紀念の品を
購ふべくも何の珍らしきものを發見
せず午後スケッチブックを携へて
市中を彷徨すマーケットの傍に
籠を頭に載せて立つ十三四才の小^少
女裸足黒褐の馬來^{マレー}端然たる姿
勢嘆美に價す、

一式枚の鉛筆
写生をなし
たるは日本
出發以來
始めての写生
なり
昼と夕を
諸氏と共に
此の宿に會食し
午後九時
歸船す、

五月二十五日 日曜

【欄外上側】

下

シヤツ一
カラ一

【天氣・寒暖・予記・本文欄】

午前八時出帆愈々印度洋の波にさからひて
コロンボに向ふ、今の期はムーンスーン^(モンスーン)
の頃にて向風なかくに強きため船の
動揺かなり烈しく風力強くし
て^(やつと)一時間やと十哩未滿の航行
のみされと波と風の都合にては二十九
日或は三十日の朝迄にハ到着の予定
なり、
此の波の旅を一週間もつゝける事の我身に
堪へ得るや如何にと、

五月二十六日 月曜 二十九日 木曜¹²⁹

【五月二十六日欄の欄外右側】

六月七日記

【五月二十六日欄の天氣・寒暖・予記・本文欄】

ペナンよりコロンボ迄は五日間の航程常にムーンスーン^(モンスーン)
の
風を向に受て進む事なれば波は高く風は愈
暴し平均一時間十哩位の速力に満足するより
外なし

129

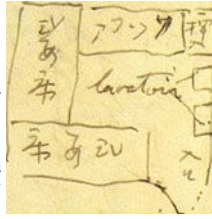
五月二十六日欄から二十九日欄までは、
当該期間、つまりペナンよりコロンボ間の
様子を、後日六月七日に記している。

日本出発の時船中にて写生も試みるべき時
もあらむとカンパス^(カンヴァス)写生箱絵具等を第一の
調度品としてトランクに詰込みたるも□其れ
を引出して来りてついそ筆とり写すべき気
もかつて起らず各港に上陸する時スケッチ
ブックのみは携へ持するもこれさへ鉛筆を
走らす物の物うく暑気の烈しきと気

【五月二十七日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】
の進まざるによりむ写生欲のなき事は

我なからに不思議なる思ひそする

僅か四畳半大の船室に上下式安の寢床二ヶ



(lavatoire 洗面台)

所ありラバトアール式臺とベツ

ト大のソツファ^(ソファ)一臺とあり一室四人

詰満員にて殆ど□小荷物のカバン

さへ置く場所なく持来りし

トランク式個は下甲板層の荷物

庫に入れありてそのバガーシルーム^(baggage room 荷物室)の

温度は今百二十度位ならむか

一式度夏服の取入れに入て見たか

【五月二十八日欄の予記・本文欄】

とても五分間とも止て居る事の出来ぬ
位の暑さにてシャツ一枚にても出る時は汗にひつ

しよりとなる事なり、そんなためか写生道具は
依然としてトランクの中に留むるまゝとなし

船中の写生は鉛筆にてもと思へとも一等乗

客の外人日本人の子供連多く香港？よりは

都合十二才を頭に十三人毎日方々で大騒を

始めてうるさくとても前回の如く甲板にて

写生なとする事不可能と思へハ始めぬ方

かましとそれもそのまゝ新嘉坡より□□□

などのテツキパセンジャー^(デッキ・パッセンジャー)などの衣色美しき¹³⁰

【五月二十九日欄の天気・寒暖・予記・本文欄・欄外左側】

装の多く乗込む事と思ひしも積荷多

くしてこれ等の乗客をとらさ□□何となく物た

りなく折角船中写生の種をと思ひ

しも訳なく終りぬ、

波は絶へす高く荒のみなれとあまり面倒

なる読書もせずデツキの運動は何かと

相手のあり次第毎日一式間は怠なら

ぬ事としたれは三度の食事を欠す様の

事なく荒海の旅にかく食欲の衰へさる

事は我なから心強き限なり

但し朝食は只カツフェと僅かのパンと玉子位

に止置たり

【五月二十八日欄の欄外右側】

洗、ネマキ一、縞シャツ一、ヅボン下一□シャツ

ツボン一上衣一、リ、ネクタイ一フランネル一、サ、

ルマター、

五月三十日 金曜

【本文欄】

午前十時コロンボ港¹³¹内に¹³²入る
旅券の検べ各港と等し
午後一時過ぎ上陸、每港衆各^(客)
と共に行動を共にするため
自分の思ふ様の所をぶら／＼
廻て見る事出来ため一人にて
市中をふらつきく商店に入
りて産物の珍らしきものなきやと
探す、前年此地にて色々土産物
を買求めたるを思出す、
六時船に帰り泊す、

五月三十一日 土曜

【欄外右側】

雨

【天気・寒暖・予記・本文欄／＼欄外左側】

午前九時再上陸平塚氏と馬車にて博物¹³¹
館に趣く一時間ほど見物す、
^(ヌラードブラ)¹³²
Anuradhapuraにてセイロン島(コロンボより百二十
哩)の紀元前四百三十七年より紀元後七百六十九年
のセイロン島の最も古く最も偉大なりし旧都
の文明せる遺物の多く陳列されたるを見る
ポンペイの如く全くハイトイしたる都らしく
紀元前の印度藝術の発達せる事に驚くガラス類
にてエジプトの如く美しきもの多くあり、

其他^(ポロンナルワ)¹³¹ Polonnaruwa (769-1319 a.d.) の

佛教藝術品などの遺物も尠からず、午後三時迄市
中を見物、
船中午後四時出帆の予定なるも
ポートサイド同盟罷業のため此地にて水炭積込のため
め十時出帆

六月一日 日曜

【予記欄】

昨日コロンボ
にて
赤茶地布に
刺繡せる幕
式枚を求む
其他香箱
など

【本文欄】

朝来ウネリ強く波高し、
往年賀茂丸乗船の時には此
位のウネリはさほど船の動揺を
催せざりしと思しに此の船は
船の丈短ければにや前後への
動揺なか／＼に烈し、
幸に天晴れて風割合に涼し
ければ船暈など催す事
なし船と波に慣れたるにや
時々日本の事を思出して

133 132

133 132
ヌラードブラ。スリランカ中部の古都で、
ポロンナルワ。スリランカ中部の古都で、
十一〜十三世紀は首都であった。

131

山田『戦後の欧米漫遊記』(前掲注126参
照)一一頁の記述、および六月二十日欄
に「平塚農学博士」とあることから、農
学・蚕糸学者の平塚英吉(ひらつか・え
いきち、一八八八―一九八四)であるこ
とがわかる。

色、の事を考ふ、

六月二日 月曜 〃 五日 木曜

【六月二日欄の欄外右側】

シャツ一、縮白シャツ一、靴下一、浴衣、一ネルヅ、
ホシ一、ツメエリ一、サルマター

【六月二日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

コロンボよりホートサイド^(ホートサイド)迄は通常十三四日の航
程なるもこの強き向風と荒波にては十五日

間でもとても着けるかどうか疑[?]らしく

風位左舷の正側即ち斜面西西南にして

船体常に右にかたむき左右の動揺なきも

前後の揺は波と共にかなり烈しく時に

下甲板に波の打かふさる事あり[?]ゴルフす

る時も常に白泡より起るシブキ小雨の

如く降り来りて衣□□て塩氣にてじ

トトとして氣持あし

波の形波の色も鮮かにして美し空は

【六月三日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

幸に毎日晴れかちにて雲の形など面

白く眺めらるゝもの珍らしからず夜は

空の星光鮮明にて若月の光さへ美

しく静かに荒れ狂^{マッ}く波を輝す夕も

ありこの大洋にては夕陽の没景盛

烈なる光景を観る事あるも毎回は

未だ壮なる夕暁を見る入夕^{クツ}なし、

思はんとして黙すも遂に夢に入る事
あり読書せんとして欧書など出せは

頭重くなり来りて不快を感じられ人と

語らむとすも相手少なく殆んどほんやりと

【六月四日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

不為に時を過すより外なし

時に過去向後の上に就き考へ浮ふ事

も尠[?]しせず

これから自分の仕事一、自分はすてに人生の

半途を過きたりとすれハ今残る半途の

路は愈々進むに難くして捉へんとする

對照^(対象)は高くやゝもすれハ精力感情の

衰弱を来す事なきやと愁ふ、

今自らの歩み来りたる迄の余は比較

易々たるものなりし或は誰れにても

出来得べき容易なる業なりし[?]か

【六月五日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

これより進むべく否進まねはなる前途^{マッ}は

とてもこれ迄の自分の全体では及もつか

ぬほと遠大なる業なるを思ふ時自分の

賤弱なる事の何とも云へぬ心細さを起す

のみ、偉大なる偉大ならむとす今後

の大業かはたして此のこれ迄の不肖なる

自分の力にてなし遂け得らるゝてあらふ

か自分は自分の價値を考へてあまりに

それか無謀な望みてハないかと躊躇^{マッ}す

するのである

六月六日 金曜 (記入なし)

六月七日 土曜

【欄外上側】

昨日正午より本正午迄百九十余哩航

【予記・本文欄】欄外左側、欄外下側、欄外右側】

コロンボを出てより波は一日一日と

荒く風は暴しく洋水茫々終日一隻の

すれ[?]遇ふ船の影たになく同じ様なる日を同[?]

し様なる事をして其日くを暮すのみ明ては

暮れを待ち暮れてハ明を待のみの樂し

さ、昨日よりも今日の風は朝来非常の烈し

さ下甲板に時々打揚る大波は正午前より

上甲板迄にも越揚て波の音風の音すさまじ

ともすさまじく覆布の大ズックの太綱か¹³⁴

切れるやら木材が打おられるや船か殆ど右舷

の沈む様にかたむくやら朝食昼食にはテブル^(テーブル)

に態々杵を用ひる迄の荒方なり正午過スマトラの島

に近づきて風漸く静かに趣きしも夕方迄には又其勢^々

を

盛返したり明日は少しハ波も

穏かになる頃ならむと船員のかたるを聞く

六月八日 日曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

食堂に杵を用ひたる只昨日のみなりしも

今日も波浪の高きなかくに衰へ来らす

上甲板に打越す回数尠からず、

船に弱き余も何となく海の様に興味

生して少しも船暈を催す事なく

終日デッキに在り少しは読書さへ試る

事あり、

船は兩三日にして紅海に入るべければ

洋域次第に狭り来たれば航行の船

に會する事少なからず、

六月九日 月曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

此所ポートサイドに碇泊する事の長時

間なりせばカイロ迄陸行してエジプト^(エジプト)

遺物の一半のみにても接し度く望みしも

とても其の時間の生せさ^(後?)事船員の語らる

ゝに余は明^(後?)年、帰朝の途を此の道にとり

ポートサイト^(ポートサイド)寄港して一月間位此地に遊ぶ

尚印度に上陸して一句或は半月を彷徨

ひてエジプト藝術と印度藝術の關係

に就て研究を試むに兩者の文明上に就て

少しハ得る所の智識も加らむ□と思起し

ぬ若しこれを得むとせハ幸甚なる^(べからず)

亜米利加經由を断念せざるべかず

134 帆布のこと。

六月十日 火曜

【欄外右側】

六月十九日記

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝来少は波浪の衰へたるを見れと尚蒼浪の高きを見る、正午に近き船はアデンの沖近く過ぐ夕方に入りて波は次第に勢失し来る、夜バベルマンデブ海峡¹³⁶を過ぎて愈紅海に入る、

印度洋は今貿易風の期にて今回の如く往々烈げき浪の海と化する事あるも多くは普通只風に向て進むのみにて却て暑熱烈しからすこれに反して紅海は風絶へて兩岸沙漠の熱氣に苦しまされは過きるを得ず、然し地中海へ入る迄僅か数日なるのみ

六月十一日 水曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

暑き思寒き思は旅の興ならむ波の荒るも静かなるも亦旅の思出たらむのみ、此回の印度のゲキ浪もかつてなき荒海の旅の味を覚へて思出深からむ、

紅海の暑熱は覚悟の程なりしも印度

洋の暴風の影響を受けてか紅海

上常に涼々たる向風に會してスエズ通^(スエズ)

過迄殆と毎日心地よきほどの涼しき

日のみ送り、印度洋の浪に苦しめられし不快なる心地も紅海に入りてハ全く愉快なる船旅を洋上に楽しむのみ、

六月十二日 木曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

数日後ポートサイド^(ポートサイド)に寄港すれハそれにてロンドン迄は寄港の港もなく最終の物珍らしき上陸を楽しむ事尠からず、少しはエジプト^(エジプト)紀念の珍物ても聞[?]くものありやかと考ふ事時、ポートサイドに投函すべく書信を数通かく暑熱あまりに烈しからされは気分も引しまり来りて読書するのも興味多し、日本出発以来非常に時の経過きたる心地す、

六月十三日 金曜 (記入なし)

六月十四日 土曜¹³⁷

【天気・寒暖・予記・本文欄・欄外右側】

午前早起すてに遙に右舷に当りて遙に山影を見る兩岸次第に近づき来りて

山質土砂粘岩にして一つの青草緑樹を見ず、

茫々連々たる山脈廣くつゝきて遠き所^マ

空に連らるを思ふ、^(連なる)

135 アデンはイエメン南部の港湾都市、あるいはアデン湾のこと。

136 バブ・エル・マンデブ海峡。アデン湾と紅海とを分ける海峡。

137 六月十四日分の日記は、六月十四日欄から六月十三日欄の右2/3に続けて記入されている。

昼すぎスエズ港を遠望するを得港外に
投錨^{イカリ}すれば市街近く、碇泊する船数隻、
土人の土産物など持込て客を求むるあれと
木低買求むるほどのものなし、

午後四時出帆^{イカリ}なり、の事、荷揚などの
都合にて、午後八時、満月の運河の水に
影す頃^{イカリ}途々船は河口に進む

【六月十三日欄の天気・寒暖欄・予記・本文欄（右²/₃）】
船は夕食後前除々としスエズ運河に入る河口市
街の傍に多くの天幕を張りたる野衛^{イカリ}の軍
隊を見る、

運河は十五夜の満月静く昇りて茫々たる
半砂の漠野東空は月に光りりて西空^{イカリ}
は尚紅に染み残りて高く清光の星は
輝く、

六月十五日 日曜¹³⁸

【六月十五日欄の欄外右側】
六月十三日の欄に記入

【六月十五日欄の欄外上側】
〇〇

発信、
青の、
自宅、
大原、
柳井、

ハカキ

ニダース

【六月十三日欄の予記・本文欄（左¹/₃）】欄外左側

早起すれば両岸高く堤只一つの見るべき物象
なし、船は進みて□左舷に見る停車場に近づく
頃より両岸限りなく廣く敷れたる野衛の兵^{イカリ}
隊を見るこれ欧乱の残影にして尚数多千の陣影
は当時のま、〇〇〇〇備を守る、あり、

八時過ぎ〇〇〇〇ポートサイドの町かけ眼界に入る、
【六月十五日欄の予記・本文欄（欄外左側）】
午前九時余、ポートセツドに着^{イカリ}

投錨、直に上陸、此地は別に訪観
すべき地もなければ同船の諸氏と共に
に廣くもなき市中を往復して

各土産物などを賣る商店に立寄り種々の買
物を試みんとするも先年余の訪れたる期に比し
て物價の非常に高價なる□一驚す、午後、

六時出帆の事なれば、とて一同と五時過帰船す、
エシプト^{イカリ}の寶玉遺物などの発掘品に模したる珍
らしき小品多々あり、布及金箱、石など買求
めて帰る、カイロ辺にて至れば何か面白き品も見
出し得るならむか

六月十六日 月曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

ポートサイドは昨夜七時過出帆海上小波を見るのみ
の静かさ愈々船は地中海に入りぬ

四方茫々たる大洋なれと印度洋

なとに比しき何時となくなつかしき

心地して海の色も空の色も夏の色光も

何となく優れて観ゆ、

地中海に入れば行□□手遥に見渡す事

も得されとも、神話期の名残の所多く

限りなき空の彼方に隠れて見へめも何と

なく身のかつて黄金時代の物語に加里

たる心地す、気温は昨日よりも一層下降

暑を感じず

六月十七日 火曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

昨日はギリシャの沖を航行す此船のマルセ

ーユに寄港せされは亜非利加の沿岸近く地中

海の南方を行く此日終日□□一つの島かけ

一隻の船体を見す 只坦々たる水の上を船は

かろき風に迎へられて軽く行くのみ、

外気、冷気を加へ来れば船客のデッキに

出つる人次第に少なくなりて殆ど半日は船

室に話合ふ様になる

ロンドン上陸及入国手続となかくに面倒らし

く再び佛国への入国手続などの事なと思出し

て少々嫌な思を起す、

六月十八日 水曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝来冷風漂々として起るもそは只船航の速力により、

生する空気の抵抗のみ、海波一つの起るなく見渡す

限り洋々たる緑藍の水面のみ昨日以来気温は

とみに下降して七十余度となる、白衣の装を

更へてチヨキさへも着するを要す、両三日前

より少し喉を痛めて気分悪しかりし□□□も

今日頃全く快□□に帰す、上甲板の籐椅子に

よるは已に寒冷を感じる位にして殆ど

下甲板にてゴルフをなすの外は船室に諸氏と談

笑するのみ、最早やロンドン迄は旬日とせま

り来る上陸の事なと思出て、面倒な□□事と

想像す、

六月十九日 木曜 二十一日 土曜

【六月十九日欄の欄外右側】

廿一

【六月十九日欄の外上側】

二十二日記

【六月十九日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

地中海の波は実に静雅にして毎日只船中

に在るを忘れて全く陸上の生活に在るか如し

印度洋の旅を思出してハ実に快味限りなし

朝に多く床を起き出て、甲板に登るも涼気

を感じる位にて最早白服の用なき事と

なりぬ 船客の持合せの書籍など借読

みて時を過す、

此頃は一日中比較的多くの時間船室に在りて同室の人と語合ふ事あり夜など他室の人々も加りて毎夜を深ふする事例となりぬ、同室の人々は山田国民記者と

【六月二十日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

東京御木本真球^(真珠)の加藤虎之助氏とコロソにて青野氏と入更りて乗船されたる西村氏¹³⁹(江商々會重役とか)、

各語合ふ話題は各方面に渡りたるものなれと多く時の過きるを悦ぶ様の談合のみ、

他室より来る人に平塚農學博士と

小笠原子爵あり各年若く

ロンドン留學の士なり、

其他海軍主計の二村光三氏¹⁴⁰もあり

山田氏を大低¹⁴¹中心として話しは湧き出て、

【六月二十一日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

時に生欲上の問題に走る事尠からず

山田氏としてハ多く政治を語らるも

余としてハ多くの興味を持す不能

其他西村氏の珍話を語る事ある

外総て残りの諸氏は寡言なり、

あまりに海の静穩につゝきければ旅の日數の

経重なるも意とす所なく尚一ヶ月は

こんな旅なれは続けて興あき来る

様の事なからむと思ふしかし

ビスケーの海を思出せば想像せはロン^(ロシヤ)

ドンの着港を楽しむものならむと思ふ

六月二十二日 日曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

正午後ジブラタルの頭南島形

を右舷遙に望む全山要塞の完

備□現る、地中海を出れば潮流加りて

風なきも□波起る様の心地す

風は地中海以來殆ど同じ追手なり

タリファ¹⁴¹の辺は岸に近く航行せるため

市街城砦の様接見するを得、

午後船は次第に少しづつ、の動揺を

加へ来りめ、トラファルガー^(トラファルガー)¹⁴²を過ぎて、大西

洋の波に揺られて船は夕暈照の空を

追ふて西北に走る、

【欄外左側】

此の日頃一日三百哩の航程數度あり、

六月二十三日 月曜 二十四日 火曜

【六月二十三日欄の欄外上側】

七月

十一日追

記

【六月二十三日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

船は愈ビスケー湾の航路に入る風浪の益し来り

て再應印度洋の荒しを偲はしめ来らむと

す、ビスケー湾に入りてより往來の船舶

139 江商株式会社の西村磯右衛門。児島の住所録に名前があり、山田「戦後の欧米漫遊記」(前掲注126参照)五一頁でも氏名が確認できる。同書には、江商の中尾優も西村とともに乗船したことが記されている。

140 山田「戦後の欧米漫遊記」(前掲注126参照)には「二村海軍主計少監」とある。

141 タリファ。イベリア半島最南端部、ジブラタル海峡に面する町。

142 トラファルガー岬。ジブラタル海峡西端の岬。

に會遇するもの多く欧州近き旅を思はしめ来る

長かりし航海も後数日にて終らむとす日本出發の時数多用意せし写真道具も何の用をも成さず全く呑気なる間に式ヶ月を終りたる事を残念に堪へざるもせん方なし幸に船旅の平安なりし事を思へはこの二ヶ月の取戻しは着欧後奮闘すれば□差引

【六月二十四日欄の天氣・寒暖・予記・本文欄】

の就さる事もあらざるべし

明後日は或はロンドンに着港すべきやも不計との事なりしも 昨日より向風の度加り来りたれば先日中三百哩も航せしものかやつと式百五十哩位より進む事不能との□なれはとて廿六日に着港は不可能ならむ一通トランクなど整理する必要もあれば室の荷物のかたづけ及 Baggage room のトランクを引出して荷物の詰更をなす

六月二十五日 水曜

【天氣・寒暖・予記・本文欄】

昨日より波は如何程か静まりたる様なれとも風も尚衰へず船の進航例日の如し、船中常に無聊に苦しむも如何ともなす事なく、読書せんにも面倒なる書籍を手にする事不能、船中誰彼れの読さしの

小説単本など手にまかせて読破するのみ

コロンボより乗船の西村氏河原賀市君

の知人なりと云ふ夕食に碎ふてなか／＼

滑稽を演ぜらるゝ事あり

明日の昼頃迄にはビスケー湾も通過すべし

れは船の味も覚ゆる事は今日明のみ□となる

六月二十六日 木曜

【天氣・寒暖・予記・本文欄】

愈明日中には英国に上陸出来得べし何となく重荷の下りたる様の氣持す、

六月二十七日 金曜

【天氣・寒暖・予記・本文欄】

早朝より右舷に遙か佛国の陸平

の見ゆ、これ或はノルマンデー^(ノルマンディー)の辺ならむか、

正午頃に入りて船の進むに従ひ左方に

英国の陸を眺めてドーバーを過ぎてよ

り船は進てド^(サウザン)ブ^(アプトン)チームズに入りぬ、

午後六時頃サウザンプトンの岸に着此所

にて旅券の検査及、荷物の検査を終

り上陸、八時ロンドンに向ふべき特別

列車ありてこれに乗して一時間余にしてロ^(ロンドン)ン、サントパン^(セント・パンクス)ク^(ラス)ラス停車場に着一行と

ときわ料理店に到りて夕食をなし夜晩く

イウストンロードのオックスホテルに投宿す、

六月二十八日 土曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

木村山田小笠¹⁴⁴の蘭三氏と共に同道正金¹⁴⁵に至る、日
本よりの為替金五〇〇受取、後一行と
同道、佛国領事館に旅券証明を
受く後、ローヤルアカデミーを観る、
前回の時かつて見を得さりしか想像通
り殆ど見るべきものなしサンジヤンか描
きし戦士の図も何の價値なくブラン
キグイン¹⁴⁶の出品なきは非常に物足なき
心地す、夜は早々宿に帰りて床に
就く
此日午後四時過ベルサイユにて平和條約調印済と
なれりとの号外出づ

六月二十九日 日曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

午前一人にてナシヨナルギャラリー^(ナシヨナル・ギャラリー)に参
観す、午後、セントパンカール停車場^(セント・パンクラス)
場に來り預置きのトランクを宿に引
取る、
木村氏と明日佛国に向て同行を約し
ウオタロー停車場^(ウオタロー)に至りて切符を求
む。ドーバカレー^(ドーバ・カレー)の線も、フオクストン^(フオクストン)、ブロー
ンヌ^(ブローンヌ)の線も公用の人のみに限られ旅行し
得るも一般はサブサンプトン^(サブサンプトン)、ハーブル^(ハーブル)の線
を過るよりの外なし、

夕食をときわに來り、山田、小笠原、西村中尾¹⁴⁷
木村の諸氏と会食す、

六月三十日 月曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝ピカデリーに近き骨董店に至り
ガラス瓶とペルシヤの皿の破片を求む、
午後ブリテイッシュ・ミュージアム^(ブリテイッシュ・ミュージアム)を参
観す、
午後七時ウオタロー停車場^(ウオタロー)発サブサ
ンプトン^(サブサンプトン)に着したるは九時過なり此所
にても旅券の檢非常に面倒なり
十一時發船佛地に向ふ

七月一日 火曜

【天気・寒暖・予記・本文欄・欄外左側】

早起すれば已に船は陸地の近¹⁴⁸てあり
これハーブル^(ハーブル)の港外なり
七時着港又旅券の檢査要して
九時発車、午後一時少し過ぎ巴里
着、
Boulevard de Clichy^(クリシー大通)
ブルバールクリシーの諏訪と云ふ日本
人の経営せるホテルに今夜不取一泊する事
となす、木村氏聞¹⁴⁹木村氏はハーブル^(ハーブル)
にて一泊、「昼食を終へて直にグランパレー
に趣くに尚サロンは昨日迄に閉場せずし
て來る日曜日迄日延なりと云ふ何たる至幸！

144 木村半蔵。児島の住所録に名前があり、
山田『戦後の欧米漫遊記』(前掲注126参
照)一五頁でも氏名が確認できる。

145 横浜正金銀行のこと。

146 フランク・ブラングイン(Frank Brangwyn,
一八六七―一九五六)。イギリスの画家。
江商株式会社の中尾優であらう。前掲注
139参照。

148 諏訪ホテルのこと。諏訪秀三郎がクリシ
ー大通で営んでいたホテル。着仏間もな
い日本人客が多く利用した。

夕方パンテオの傍に宿を求見当る

七月二日 水曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝ガールサナザルの荷物を自働車に積

(Carré Saint-Lazare サン・ラザール駅)

みて Place Pantheon の Hotel Des Grands

(Place du Pantheon パンテオン広場)

Hommes に運ぶ先ず一ヶ月滞在の約を終ゆ、

午後諏訪ホテルの小荷物を運びて

愈々巴里の客となりたる気持す、

午二時過大使館に趣く何れへも小生への

通信来り居らす聊か悲観の感を生ず、

七月三日 木曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

午前ルーブル参観絵画の室は殆と

(ルーヴル美術館)

尚閉されて見るものなし

午後ルクサンブルこれも同前只

(リュクサンブル美術館)

彫刻のみ参観せらるゝのみ

ルクサンブルの園何時見ても美し

とも美し

余の求めし室はパンテオンの右側にして

三階の前室なればパンテオンと前の廣

場の眺望よく日没の夕照堂上の

圓柱の辨に輝く頃日本で見られぬ偉

大なる感じす

七月四日 金曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝ベルネヘイムジャン及、シヨウじ

(ベルネーム・ミュージエム画廊)

プチに趣く ジョーシプチにてドカの

(ジョルジュ・ブティ画廊)

150

デッサンの入札あり高價なるに驚く

七月五日 土曜

【欄外右側】

発信 小林、青の、自宅、山田芳

151

七月六日 日曜

152

【天気欄】

晴

【予記・本文欄・欄外左側】

午前十時朝のカッフェを終へてセーブルに

趣くべくポロワイヤル迄出かけたるも

開戦後渡止となりたるや川蒸気の停船場には

人影もなし乗合船は向岸に撃かれて古ひて観

(驚)

ゆ電車にて正午前セーブルの棧橋畔のカッフェに

て昼食を済し陶磁器のミュー

ゼに趣く、此所にもエジプト、ギリシヤ、ローマン

(ローマン)

の

古代の陶器多く列せらる、ペルシヤのものにも見

るべきものあり、日曜日なりしたため工場は休業

(Jardin des Plantes 植物園)

一度ジャルダンプラント迄歸りたるも此所ミューゼ

(セーヌ)

閉館再びセンの岸リユーードテヤートルに青山君の宿

154

149 第一次世界大戦中より閉室されたままであるということ。

150 エドガー・ドガ (Edgar Degas, 一八三四—一九一七)。フランスの画家。

151 山田芳三郎か。児島の住所録に名前があり、ロンドンの高田商会の関係者であることがわかる。大原孫三郎傳刊行会編『大原孫三郎傳』(大原孫三郎傳刊行会、一九八三年)七五頁にも同じ名前が見え、明治四十五年に倉敷紡績に入社したとされている。

152 欄外上側に鉛筆にて「青山熊治」との書き込みがあるが、児島の筆跡ではない。セーヴル陶磁器美術館か。

153 青山熊治(あおやま・くまじ、一八八六一一九三二)。洋画家。

訪ふ同氏不在夕食後滞室

七月七日 月曜

【天気欄】

晴

【本文欄】

昨日山田西村の一行、巴里着夕方
小生を訪問されしも小生不在なりし
ため名刺を残して今朝早く是非
案内に来て呉れとの事スワホテル
に趣き午後より、オペラの附近を
ままをうろつき夜リッセルの日本飯屋
はすき焼に趣く、
夜オリピヤを観る
(オランピア劇場)

七月八日 火曜

【天気】

小雨

【本文欄】

朝ルール^(ルール)ブルマカザン^(百貨店)
による、午後ルール^(ルール)ブルミューゼ^(美術館)
を観る、夜日本飯屋にスキ
焼を會食す
今日も案内して方々を馳
廻る、

七月九日 水曜

【本文欄】

午前十時半山田、西村、中尾氏と
共にベルサイユに行く午前
中庭園に遊び午後大小の
トリオノ^(トリアノン)を見、後宮殿の各
室を観る、平和調印のされ
たる鏡の室を見る、
夕方パリに電車にて返る、
又日本飯屋に趣く、今夜オペラ
に趣く苦なりしも一行の労れ
渺なからすして中止す、

七月十日 木曜

【本文欄】

ラモレルに趣きて金山君より依頼
のトワル^(画布)の件を傳へる、
午後久し振りにて湯に浴し
夕方食事後早く床に
就く
此頃日脚なくして九時半ならて
は點燈するの必要なく大低^(低?)毎
夜十二時を過ぎ一時に近づく頃
就床するを慣とす、
朝は八時頃起床朝のシヨコラ^(低)
大低^(低)十時前後となる

七月十一日 金曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

青の、

妻、

【本文欄】欄外左側

朝ギユスターヴ・モロー¹⁵⁵のミユゼに趣

く此所は故人が住宅の後にして

レツドシヨセ¹⁵⁶の両三室と二階三階

の画室に使用せし廣き両室に

全く空間なく直に多くの遺作

品を陳列したり完製のものも尠

からされと未完のもの多あり七百

のタブローと四千400近きデッサン

は故人が逝きし時の俤に此画室と

共に永遠に保存されんとす偉と

云ふべし

午後ミユゼ、ギユメ、¹⁵⁷及ミユゼガラリレアを観る、

七月十二日 土曜¹⁵⁶

【予記欄】

来信

青の、

妻

【本文欄】

朝 rue de Theatre に青山君を訪問す

昼食後同道して Billancourt

都鳥¹⁵⁷、廣瀬氏¹⁵⁸を訪問す、

夜十時過迄話込て帰宅す、

明後日は14 Juilletなり今年

戦捷□共盛大なる事ならむ、

今夜あたり方々の辻々にて奏

楽してしよばく雨の降る中を

男、女の群かしきりと舞愉を

試みて夜を深して居る

七月十三日 日曜

【予記欄】

発信

青の、自宅、

柳井、斉藤、

ハガキ

二十四枚

【欄外右側】

金のことを申送る九月始送出の事¹⁵⁹

【本文欄】

朝シヨコラを飲み一寸出かけ

て帰て正午迄青野君と妻とに

手紙をかく、

午後ルクサンブル¹⁶⁰にカル、ステュ

ラン¹⁶⁰を展覧会を観る筆に於

て壮なるも、色調に快味を覚へす

155 ギユスターヴ・モロー (Gustave Moreau, 一八二六—一八九八)。フランスの画家。

156 欄外右側に「リュードチャートル」、欄外上側に「都鳥(トトリ)英喜 広瀬勝平」との鉛筆での書き込みがある。児島の筆跡ではない。

157 都鳥英喜(ととり・えいき、一八七三—一九四三)。洋画家。

158 広瀬勝平(ひろせ・かつぺい、一八七七—一九二〇)。洋画家。

159 同日予記欄の「青野」と引出線がつないでいる。

160 カロリユス・デュラン (Carolus-Duran, 一八三七—一九一七)。フランスの画家。

肖像の表情何れも俗悪なるを
悲しむ、午後ハガキ二十四枚手紙
なとかく夕方迄^(エトワール)エトワールよりコンコルド
迄明日の支度を大観するため散歩
す

七月十四日 月曜

【本文欄】

14 Jillet 朝九時過コンコルド迄
出かけたシヤンゼリゼの凱[?]セン式は
人群の遙に馬上の兵士や剣の先
の旗か見へる位であつた人出は沢山
て乗物なと殆^(達絶)とと絶、夜色火
花□火なとあつた
パンテオンの側でも五臺のサー
チライ^(ト)とを発動させてパンテ
オンの堂上に^マに赤き色火を燃て
なか／＼壯観であつた十二時頃眠につ
く迄外は尚騒然たるものであつた

七月十五日 火曜

【天気欄】

曇

【本文欄】

午前近所を散歩した、
午後、二時バルトロメ氏を訪
幸在宅数刻話して帰つた

極親切そふな老人である
日本から携へ来た竹根の印
を贈た非常に悦て居られ
た、夕方迄ふら／＼と散歩
したボンマルセ^(ボン・マルシエ百貨店)に寄てアラ
ブの布を買た、
ノートルダム^(ノートルダム)の附近を歩廻た
夜今日買った布の手入をした

七月十六日 水曜

【本文欄】

朝ラモレルに行絵具箱の小さきもの
及額^(額縁)縁なと求む、
午後ブルベートルイタリアン^(Boulevard des Italiens イタリア大通)の方
に出かけてベルンヘイム^(ベルネーム・ヒュヌ美術館)、^(ジョルジュ・ブチ)ブチに趣たるも何の展覧会
もなし夕方宿に帰る

七月十七日 木曜

【本文欄】欄外左側

午前ルクサンブル公園^(リュクサンブル公園)を中心として
其附近に借部屋なきやと尋ね
廻る大きな画室^(空室)の明たるものあれ
となか／＼立派すぎるらし、
午後三時頃迄歩廻た、
朝ルクサンブル^(リュクサンブル宮殿?)の日光に輝く
緑葉紅花の清香心地よし

夕方一時間ほとルクサンブルの公園内に憩ふ夕日の没せんとする噴水の池水暗くなり行てパンテオの堂殿紅に窓硝子の黄金に輝く頃さても美しき所なり

七月十八日 金曜

【本文欄】

朝ルクサンブル公園に写生に
趣く殆と三四ヶ月振りにて油
絵具を手にした

午後ルーブルにエジプトローマ、ギリキの硝子臺の写生に出かけ、ベルジャルデニユに寄る

七月十九日 土曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

暑気を
感ず

来信

加藤

【本文欄】予記欄右端、欄外左側
朝ミューゼカルバレを觀ユーゴの住宅を訪れた、

カルナヴァレ博物館にては石器時代及ローマ時代の遺品最も趣味深し、ユーゴの生活を偲びて甚た廣潤なる趣味に驚く然して其家具を自分にて調製せしものなど或はデッサン写生などに独特なる描法のほとこされたるに感ず、
午後コルラツセニ、クロキに趣く
午後七時迄
夜、青山君来訪

七月二十日 日曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

冷気を感じる

発信

加藤

自宅

【本文欄】欄外左側

十時過青山君を訪問昼食後同道してレビアンクールに都鳥、廣瀬氏を訪問し同道してセン川の中洲に写生行く夕餐を共にし十時帰宅
セン川岸か洪水にて土くづれ

161 仏語の Breque または英語の Greek であろう。

162 鉛筆にて引出線がつけられ、「臺」と書き加えられている。児島の筆跡ではない。

163 ヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo, 一八〇二—一八八五)。フランスの小説家、詩人、劇作家。

164 ヴィクトル・ユゴー邸 (博物館)

165 「アカデミー・コラロッシにクロッキに赴く」の意であろう。アカデミー・コラロッシは私立の美術学校。

たる辺ガラス瓶の破片数多捨
られて各片表面に風化したる

美しき輝きあり何時頃の時代の
ものなるやエシプト^(エジプト)、ローマ朝の破片と
殆ど同時代のもゝの如し

最も美しき一片を持帰る

【欄外左側】

バルトロメ¹⁶⁶
バルトメ氏

留守中に来訪せらる

七月二十一日 月曜

【欄外上側・予記欄】

発信二十二日書留、

大原、金山

大原へ九月十日迄
の送金の事を

申送る、

金山^(カンヴァス)
カンパス代取替

九百五十法送金の

事を申送る

【本文欄】

朝、ヘルネーム¹⁶⁸ジュヌ画廊^(ヘルネームジュヌ画廊)
へクル¹⁶⁷べの
展覧會を観る、マドレン^(マドレーヌ寺院)の横
の骨董店に支那の物を陳列
してあつたか別にほしそふなもの

なし

正午前コントワールナシヨナレデラ
マントにて一〇〇〇の分の為替¹⁶⁹を受取
午後入浴ラモレルに金山君^(カン)の^{ヴァス}
パス代九四八法を取替支拂、
夕方迄クロツキ

七月二十二日 火曜

【予記】

来信

山田

青の

【本文欄】

朝少しかたつけて居たら十一時
頃になつた朝のカツフエを抜にし
て昼食を済してベルジャルデニエ^(ベルジャルディニエール百貨店)
に洋服の着合せに行つた
午後、克蘭シヨミ^(克蘭ド・ショミエール¹⁷⁰)へにクロツキ
に行く
夕方より雨降り外出せず手紙など
かく

七月二十三日 水曜

【欄外右側・天気・寒暖・予記欄】

来備

青の

166 鉛筆にて「バルトロメ？」と書き添えられてゐる。児島の筆跡ではない。

167 ギュスターヴ・クルベ(Gustave Courbet, 一八一九—一八七七)。フランスの画家。ベルネームIIジュヌ画廊で開催されていたクルベの個展を観覧したものと考えられる。

Exposition Courbet, Galerie Bernheim-Jeune, Paris, Jul. 18-31, 1919

169 鉛筆にて「為替」と書き添えられている。児島の筆跡ではない。

170 アカデミー・ド・ラ・グラン・ド・ショミエール。私立の美術学校。

発信、

武内、三橋、

三宅専¹⁷¹、原田

都志、

来信矩一、

【本文欄】

昨夜半床に就てより急に腹痛にて

醒め二回便通（何の原因たる[?]と不知）

朝トロカデル迄出かけたれと氣

進まずして帰る昼めしを抜

として午後クローキ^{（クローキ）}に行く、

夕方より少し心□よくなる、

午後都鳥、廣瀬氏来訪され

しも小生不在

七月二十四日 木曜

【予記欄】

発信、矩一

廣瀬

今日も午前中

より少し腹

の痛みを感じ[?]

昼食を抜

きにす、

【本文欄／欄外左側】

午前十一時四十五分の列車にてシャトール^{（シャトール）}

チエリー^{（チエリー）}に向ふ最急行にて一時間に

て達すマルン川^{（マルヌ川）}の架橋の切断

されたとホテルビル^{（Hotel de ville 市庁舎）}の廣場の辺

など最も無斬な家屋の破壊及焼

燃されたるを見るアマンチヤン^{（アマンチヤン）}氏幸

に在宅氏の邸宅も殆と総ての窓硝子の

のなき迄に破損し他に物置などの堀

の壊れたる所多し此所へ来て見れば

始めて戦後の悲惨を目前にする事

を得独逸捕虜の数多労役せるを見る、

午後四時発の列車にて帰巴¹⁷²、

七月二十五日 金曜

【寒暖欄】

寒し¹⁷³

【本文欄】

朝木村氏をホテルミラボー¹⁷⁴に訪ふ不在

午後二時帰宅、

山田氏来訪伊太利より昨日巴里に

歸られたる由午前中に来訪

さる、

三時訪問し共にボンマルセ^{（ボンマルシェ百貨店）}に

同道す、夕食後帰宅

171 三宅専一か。大原孫三郎傳刊行会編『大

原孫三郎傳』（前掲注151参照）七五頁に、
明治四十年倉敷紡績入社者として名前が
見える。

172 「パリ（巴里）に帰る」の意。

173 印刷された「寒暖」の文字のうち「暖」
に取り消し線を引き、「し」を書き足すこ
とで「寒し」としている。

174 児島の住所録には「木村半蔵 Hotel
Mirabeau, rue de la Paix, Paris」あり。
前掲注144参照。

七月二十六日 土曜

【寒暖欄】

□

【予記欄】

来信

中尾?

【本文欄】

朝山口女史を訪問しアトリエ
の明たるものなきかと尋ぬ

午後三時、山田氏を訪問し

氏のロンドンに出発をガルサナ

ザールに送る、

克蘭シヨームエに夕方趣くも

モデル面白からすルクサンブル

の写生をなす、

七月二十七日 日曜

【予記】

発信

炭谷

【本文欄】

午前十一時ルクサンブル停車場より

Sceauxに向ふ四十分にして達す

都の生活から久し振りに田舎の

空気に接して矢張は呑気な

閑静な田舎に限る何を苦し

むて都に住むのであらうかと思ふた

附近を大分散歩して一枚スケッチ
を試みて午後四時帰寓した、

昨夜少し□かあつたかよく眠られ

なかつたので今日は少し勞れて居る

様である夕方一寸夕食に出て帰る、

七月二十八日 月曜

【予記欄】

Janssen

発信

来信 原

【本文欄】

朝晩く出かけてペルシヤ陶器の破片と

コブラン織の断片を求む

午後クロツキーに趣きラモレ

ルにて画室の明きたるものある

やも不知との事にてフアギエー

ルの方面を散歩す、なし

ガールノールに行き汽車の時

間表を求むベルギー行のため

夜早く就床、

山口青山君など留守に

来訪さる、

七月二十九日 火曜

【本文欄～欄外左側】

朝画室の事につきて山口嬢の所に趣く大低借入れ得る事(抵)なれとコンシエール(concierge 管理人)ジュの意中不明なる点あれば直に借入る事を見合す、午後、ルーブル(ルーヴル美術館)に行きVerre(ガラス)のスケッチをなす、夕方帰宅後スケッチに彩色などしてクロッキーに行暇なく日暮る早く床に就き新聞を読む風邪の気あり、

七月三十日 水曜

【本文欄】

朝画室約策(束)のため

No18, rue Ernest Cresson に趣く十月より三ヶ月分三百法支拂、別にコンシエール(concierge 管理人)ジュ百法世話話を呉れとの事これは先方より申出すべきものならざるのみか百法とは法外なる金なれと先づ支拂置く事となす、午後、久し振に浴湯に行く(クロッキー)クロッキーへ寄り、夕方

近所にマダムルロア175を訪問す、

七月三十一日 木曜

【本文欄】

朝ルクサンブル停車場に写生に出かけた、何か構図の材料にもと鉛筆スケッチをなす、色は午前も美しけれとパンテオン(Pantheon 逆光)を望む方面はコントルシュール(Controul 逆光)にて装飾風のものには不適當ならむか、午後ミユゼギユメ(ギメ美術館)に行くローマン(ローマ)の古き布模様の模写をなす、夕方再びルクサンブル(ルクサンブル公園)の写生に趣く

八月一日 金曜

【欄外右側】

送金を催促する事 青野兄へ

【予記欄】

来信
木村、山田、
発信
山田、加藤、

今日は腹痛のため
に終日何もせずに

175
ルロワ夫人 (Madame Arthur Leroy de Borgard) は児島が第一次渡欧時に滞在した下宿の主人。ルロワ家の下宿は、藤島武二はじめ日本人画家が滞在したこと
で知られる。

終た

【本文欄／欄外左側】

朝故コラン先生の妹さんの住所を聞

(ヴォーシラール通)

くためRue de Vaugirardの旧宅を訪ね

んとして出かけた出かけから少し変て

あつた腹部が非常に痛を感じ

て便通を催して来た中途で帰宅する

事にした昼食を見合して一時間

ほと眠た三時頃西村中尾氏来訪

された同道して出かけたいかとうも腹

か安かてないので失敬した

先般案内した謝礼たとして金を置て

行かれた其の金で夕方兩人に送るべきピン

を式本買た、

八月二日 土曜

【予記欄】

来信

Ja □ □ □ □ 178

【本文欄／欄外左側】

朝Vaugirardの旧コラン先生のアトリエ

(Conciergerie 管理人)

に行き妹さんの事をコンシユールシ

ユに聞く妹さんは長い間リユマチ

か神経痛にて就床の処、昨年

終に永眠一ヶ年程経たる由妹さ

んからは手紙を頂た事がある実

人生不常―、

コラン先生の東洋品コレクションはリヨン

のミューゼに買取たらしく遺作品は

も共に妹さんの存命中それ／＼賣

渡して始末つきたる由、

(ギメ美術館)

午後ミューゼギユメに布の模写に行き夕食後、

(Pigalle)

Pigalleに西村氏を訪れピンを渡す

八月三日 日曜

【天気欄】

晴

【寒暖欄】

― ?

【本文欄／欄外左側】

朝カバンのかたつけなとして遅く

(Gare du Nord 北駅)

なつて十一時頃よりガールドノールに

行きモンモランシー行きの切

(Engelen アンギャン)

符を求め十二時五分発アンフエン

にて乗換総て三十分間にしてモンモラン

(ジャン＝ジャック・

ルソー) 179

ルローの住地たりとて其の住宅は

今、住人ありて参観させず町役場

にルソーの遺物あれと見るほと

のものなし写生箱を持行たるも

写生する所なし日曜日の人出数多にし

(して)

雑騒を極む午後六時電車にて帰巴

176 ラファエル・コラン (Raphael Collin, 一八五〇―一九一六。フランスの画家。黒田清輝の師として知られる。

177 ブランシュ・コラン (Blanche Collin) 七月二十八日の予記欄に対応する人名であらう。

179 ジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 一七一二―一七七八)。フランスの哲学者。

八月四日 月曜

【本文欄】

朝ルクサンブル公園のスケッチ

に出かけた

昼食の頃から又腹痛が起て

便通を催した昼食をそこく

によして 午後ロタン¹⁸⁰の遺作品

をホテルBiron¹⁸¹に集めたものか

今日開館式があつて後一時

より公衆に観せるとの事行く

筈であつたか勇気な¹⁸²

夕方クロッキーに趣き夕食後

續の散歩をして帰る、

八月五日 火曜

【本文欄】

今朝は醒たのか九時半であつた、

出かけたのか十一時て朝のシコラ抜き¹⁸³

クリニーの傍のP.E.□□□のレストランで¹⁸⁴

二法半の食事をして電車にてミユセ¹⁸⁵

ギユメに行く又何たか腹か変て

あるからよして帰ろうかと考へたか今

日始めて支那のコレクションが見へるからと

入館した餘り感心す品なし、

遂に階上に昇り古布の模写を

なす、夕方帰寓外出せず、

パンテオンのデッサンを試む、

八月六日 水曜

【予記欄】

発信 柳井 岩村、

来信

中尾氏

Decoeuleの壺を求む

辰沙¹⁸⁶



【本文欄】

朝ルクサンブル¹⁸⁷公園¹⁸⁸にスケッチ¹⁸⁹に行昼頃グ

ラン・ブールヴァール¹⁹⁰に廻たジョシブチは開館

ベルネヘイム¹⁹¹も其は同しくクールベ

午後Hotel Biron¹⁹²なるロダンの遺

作品のミユセを観るロダンの

殆と総ての作品及其初期後期

のものを比してロタン¹⁹³は全くの凡匠

であつた、只表面しか観察し得ぬ

しかも総ては至て優弱なる技巧家て

あることを知たとてもミケランシロ¹⁹⁴の

如き巨匠と共に語るべき彫刻家て

はない 夕方ルクサンブル¹⁹⁵に写生に趣く

180 オーギュスト・ロタン (Auguste Rodin, 一八四〇—一九一七)。フランスの彫刻家。ロタン美術館の開館のこと。
181 ミケランジェロ・ブオナローティ (Michelangelo Buonarroti, 一四七五—一五六四)。イタリアの彫刻家、画家。
182
183

八月七日 木曜

【予記欄】

発信

矩一、自宅、

来信

コンシエール^{〔concierge 管理人〕}

ジュ

【本文欄】

朝 Ernest Cresson のコンシエール^{〔concierge 管理人〕}

ジュから画室の事が出て呉れとの手紙が着したので出かけた五階か

借せてもよいとの事なれは如何^{〔貸し〕}

との事、一應考へるからと云ふて

山口女史の所にて昼過迄話、

ミユセクリニを観る、^{〔タリユニー美術館〕}

中尾氏より依頼されたる地図を探し

にオペラの辺迄出かけた、なし、

夕方一寸ルクサンブル^{〔リュクサンブル公園〕}に写生に

出かけた

八月八日 金曜

【予記欄】

発信

黒田先生

【本文欄】

朝早く西村中尾両氏来訪

地図と戦争記念写真帖買求

め度き由にて昼過ぎ迄方々案

内に同伴した

夕方ルクサンブル^{〔リュクサンブル公園〕}にスケツチに

行た

夕方後スツローホテルの隣に^{〔ホテル・スフロウ？〕}

滋野男爵を訪問、¹⁸⁴

夜シヤトレ劇場^{〔シヤトレ劇場〕}に八十日間世界

一週を観る、十年前に此の劇

場にて見たる何日間世界一週とかと

何の撰ふ所なく何の新味もなし

八月九日 土曜

【予記欄】

発信

加藤

【本文欄】欄外左側

朝画室の事につき山口嬢来訪、

五階の画室の借主か画室に在る家具

を買て呉れ、は賣渡したしとの事

宿の主人に一通り價格を見積て

貰て高値でなけれハ引取る事と

せんと主人同道、道具はきほ決し

て言値の貳千法にてハ高からすとの

事千八百五十法にて買求む事

とする、午後、ループルに趣く、

夕方帰寓、硝子瓶[？]の写生に色

彩す、夜、原九郎氏来訪夜半

184 滋野清武（しげの・きよたけ、一八八二
—一九二四）であろう。男爵、パイロツ
ト。

過迄語る、

八月十日 日曜

【予記欄】

発輪

加藤、平塚

【本文欄】

早朝、同宿のルロア君とCampigny^(campagne-)に至る水流の岸緑葉繁り

着佛後始めて欧州の田舎に

在る事を思ふ、

夕方迄同君の友人なとと會

談し夕食頃巴里に歸る、

夜、加藤君よりの国民新聞

を読む

八月十一日 月曜

【予記欄】

発輪

大原、青の

送金の事

黒

新聞と

雑^(雑?)□を郵送

【本文欄】

朝散髪髪す久し振りなり、

一昨日頃より暑氣急に増し

て夏心地となる、

午後クロッキーに行き夕方迄

写生、歸りをルクサンブル

公園に行む、

夜暑さのためか睡気つき

た氣の勞れを感ず、十時前

就床、

八月十二日 火曜

【予記欄】

来信、

西村、

【本文欄】

朝少し読書す、

昨日より宿のカツフェを飲む事

にしたれは早く外出する必要

なし、

昼前モンマルトルのモーロー美術^(モロー美術)館^(館)に趣く一日より十五日迄閉館

なる由、

午後、岡田氏¹⁸⁵の所を訪る、夕方

久し振りに入浴しふらく散歩

して歸る

三四日前より食料品値下運動にて賑そふ

なり夕方路上にて菓^(果)実賣と弥次の言争

185 岡田毅（おかだ・みのる）か。洋画家。児島の住所録に名前があり、住所はRue du Sommerard, Paris Vとなつてゐる。

盛なるを見たり、

八月十三日 水曜

【本文欄】

今日も朝から暑そふである
絵具箱を携へてルクサンブル^(リュクサンブール公園)
に行く霧が包んでなかく
美しい腰を据へて考へて
居る間に正午か来た、
昼食後あまり暑いので室
て憩^{*}て五時からクロッキに出^(クロッキ)
かけ夕方帰る、

八月十四日 木曜

【予記欄】¹⁸⁶

発輪

太田

【本文欄】

今朝青山君来訪ルノアール¹⁸⁷
の所へ作品購入の話に行きたい
から同行して呉れとの事、
早速出かける、ルノアール先生
在宿、次の月曜日来れとの事
昼前長谷川君の宿を訪ふ¹⁸⁸
午後宿に帰る、青山君と
夕食を支那料理店に行
き十時過頃帰る、

八月十五日 金曜

【天気欄】

晴

【本文欄】

今日は何のためか日曜の如く休日である、
金曜日だから何か宗教上の祝日¹⁸⁹
か知ら、
午前中ルクサンブル^(リュクサンブール公園)にてスケッチ
をなす
午後オデオンのマチネを観る、
^(オデオン座)
^(劇場) Le Grillon du foyer^(おうち)
今日もなかくの暑であつた、
今晚は早く就床しようと思ふて
居る所に岡田氏来訪十二時過迄會談
す

八月十六日 土曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

発輪

三宅、加藤、

発信三原

加藤君より

¹⁸⁶ 予記欄に鉛筆にて「長谷川潔(創作版画エッチング)」との書き込みがある。児島の筆跡ではない。

¹⁸⁷ ビエール・オーギュスト・ルノワール(Pierre-Auguste Renoir, 一八四一—一九一九)。フランスの画家。

¹⁸⁸ 長谷川潔(はせがわ・きよし、一八九一—一九八〇)。版画家。
¹⁸⁹ 同日八月十五日は聖母被昇天の祝日。

発送されし

藤島先生

よりの托品

来着す、

【本文欄】

朝少し読書して昼前出かけた
昼食後ルーブルに趣く午後一時
の開館に三十分ほど待ねはならぬ
のて帰宿、滋野氏を一寸訪問す、

午後読書と午睡をなす

夕方パンテオンの写生を試む

夕食後 Les Peintres

(Peintres)
Impressionistesを求め

ルノアールの傳を通読す、

夕方前降雨ありて涼氣を覚ゆ、

八月十七日 日曜

【天気欄】

晴

【本文欄】

朝セーヌ河岸(セーヌ河岸)にてスケッチをした、

午後読書して居る内今日

も又睡氣催して一時間ほど

午睡した、

夕方の絵と夜の畫を少し描
た

日本から一向発信か来ぬかと
うしたのか知ら、

八月十八日 月曜

【予記欄】

発信

小林、金山、

今関、伊仙、

疋田、足立、

笹川、赤木萬¹⁹⁰

小林寿、自宅

来信

原、

【本文欄】

朝青山君来訪先日約せし

如くルノアール先生の寓を訪

問す先生昨日曜日田舎に趣き

たるま、歸らすと云ふ

長谷川氏の寓に立寄り

支那飯を食して帰宿

青山君夕方迄在宿、

夕方パンテオンの写生を

なす、

190

赤木萬二郎か。児島の住所録に名前ととも
に「朝鮮平壤中学校校長」と記されて
いる。また、児島は前年の中国旅行の際、
赤木を訪ねていることが日記（一九一八
年六月十二日―十五日）で確認できる。
赤木は児島と同郷で、平壤中学校校長、
平城師範学校初代校長を務めた人物。

八月十九日 火曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来輪吉田、

中尾

発輪 吉田

西村、

【本文欄】

今朝は早く床を出た、八時過ル^(リュクサンブル公園)クサンブルグにスケツチに出かけた、

ラモレルに寄てスケツチ板と絵具

を買ふ 午後モデル^(モデル)か来ると云ふ

のて待て居たか来なかつた

午後と夕方と夜と写生をなす

セザンヌ^(セザンヌ)の傳記を読だ

彼か殆と死る迄畫筆を握て居

た位彼は絶へざる勉強家て

あつた、

八月二十日 水曜

【寒暖欄】

晴

【予記欄】

来信加藤、

山田

Dr Le Goff

178 rue du

^(Faubourg)
Faubg, Saint

Honoré

【本文欄】

朝窓の下^(ルソー)のルソーの銅像を写生

しかけたら二時間近く過ぎた、

昼食後藤島先生よりの托送

品か三四日前ロンドンの加藤君に

預て置たのか着たのでゴッパ氏¹⁹²

の処に持参す不在、

直に帰宅、夕方頃、ルクサンブル^(リュクサンブル)プロに

一寸出かけた、

パンテオンの夕照の写生をつける

僅の間しか写生する事が出来ぬ

八月二十一日 木曜

【予記欄】

発輪、藤島

満谷、

発信

太田、栗川

加藤、青の

岡崎、岡本

関、須藤

発信

平塚

191 ポール・セザンヌ (Paul Cézanne, 一八三九—一九〇六)。フランスの画家。

192 同日予記欄にある「Dr. Le Goff」の字であろう。

【本文欄】欄外左側

珍らしく朝来降雨であるしよ
ぼく雨の間を絵具箱を携
へてセンヌ(セーヌ)の川岸に出た其間
に雨は霽た川岸に土砂
運ふ馬車と労働車(者)のスケッ
チを試たる帰途をシャルタン
ドプラント(植物園)に廻り□石の標本室
を観る化石の面白きもの多く
あり二時過昼食午後窓外の
写生をなす、「少し頭重し涼気
の勢にや
古布を買って洗濯をした、

八月二十二日 金曜

【予記欄】

来信 Gott
中尾
廣瀬
発輪
Gott

【本文欄】

朝ギユスターヴ・モロー(美術館)を見
に出かけ昼迄、午後読書、
夕方パンテオンの写生
ギユスターヴ・モロー(ギユスターヴ・モロー)の専心研究
の深かりし事何処迄も自

分の藝術を自分か満足する

迄遂行して居る、テクニク

も如何なる事でも試みて居る

モロー(モロ)の描た様に裸体を取扱

て構図を試て見たいあんな気

韻のある裸体は同感である、

八月二十三日 土曜

【予記欄】

ブリストール(ブリストール)
ホテルに行て
自分の巴里着以
前に来て
居た、青野
兄と矩一から
の一通づゝ
の手紙を
受取た

【本文欄】

午前中パンテオンの夕方画を
修した、
昼食後岡田氏の宅を一寸訪
れてGott氏の所か今日は午
後來て呉れないかとの事
にて出かけた、
夕方写生出ようと思ふ
たか今朝から又腹の加減か

よくないので加藤君から来た
新聞を読た、

八月二十四日 日曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

(川口儀平氏の知友)

中沢彦吉¹⁹³

氏等

【本文欄】

(リュクサンブール公園)

朝ルクサンブールに写生に出る

今日日曜日なるも人少なし

四五の画人池の周りに写生を

なす、

昼食頃より青山君日本よりの来遊

者三人連にて今余の宿を訪ひたる所

なりと云ふ、路上にて出會す、

午後ルーブルを共に參觀す、

八月二十五日 月曜

【本文欄】

青山君早朝来訪昨日中沢氏ル

ノアールの作品一枚買受たけ

れはとの事三人同伴して

ルノアール氏を訪問、中沢氏

七千法を支拂、一ヶ月ルノアール

カンヌ¹⁹⁵に帰宅したる上送品する
事を約す、

午後再び額縁の件にてルノア

ール氏を訪問 正金にて調製

の事を依頼す

夜半氏中沢氏のホテルにて語る、

八月二十六日 火曜

【本文欄】

(リュクサンブール公園)

午前ルクサンブールに趣く、

写生

午後中沢氏の依頼により、

ルーブル、セーブルを案内す、

夕方巴里に帰り、古董屋

にペルシヤの陶器を数点

求めらる

青山君に案内なと頼たれば、

同君の作品を譲受る様

約せらる、

八月二十七日 水曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

木村、

発信

194 193
中沢彦吉(二代目)。実業家、銀行家。
同日予記欄に青山(熊治)が連れてきた
「日本よりの来遊者」のひとりとして、中
沢彦吉の名を記している。

195
一九二〇年、再興第七回日本美術院展覧
会の特別陳列として開催された「仏国近
代絵画及彫塑展覧会」に中沢彦吉所蔵の
ルノワール《西班牙の女》が出品されて
いる。同作品は同じく中沢所蔵のロダン
《考える人》とともに関東大震災で焼失し
たとされる。(下山肇「大正期日本のロダ
ン蒐集家群像」1912-1927)『ロダンと日
本』展図録、静岡県立美術館・愛知県美
術館、二〇〇一年、一六八頁) 児島は青
山熊治とともに同作の入手に関わってい
る(九月末まで)ことがわかる。

青山

【本文欄】

朝中沢氏より依頼されたる
ま、早くパレーロワイヤル^(「パレーロワイヤル」)辺の
古董屋^(骨)に趣く□□□ペルシア
ギリシヤ辺も品多けれどエジ
プトのもの尠しRue de la Paix
のカルビジュアン、フレールの店に^(Kalebidian Frères カレブジアン 骨董店)
趣く中沢氏数点を求む、
午後、久し振に浴湯に行く
夕方近日引越のため籠を
購ふ夜パンテオンの写生を
試む、夕方青山君を訪問す、

八月二十八日 木曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

来信

木村、

【本文欄】

朝、rue la Pelelier<sup>(「ルペリエール」
(le peletier) 通)</sup>の古董屋^(骨)に¹⁹⁶
趣きペルシヤ陶皿の破片を求む、
(一五〇法来月の支出に□す)
午後青山君来訪夜迄共
に外出す、
不在中、木村氏来訪の由し^{ママ}

八月二十九日 金曜

【予記欄】

発信

自宅大原

三橋 柿原

武内

【本文欄】

朝ホテルミラボーに木村氏を訪問
不在、エルネストクレソンに廻^(concierge 管理人)
りコンシエールジュに明後日轉
宅の事を告ぐ
午後ミューゼデコラチープ^(「バリ装飾美術館」)
を観る、
夕方帰宅、

八月三十日 土曜

【予記欄】

来信

妻、

疋田、柳井

【本文欄】

朝□□□の廣瀬氏来訪
明日轉宅□予定なれはとて
かたつけをなす、
昼食後□紐を買求めに行
く夕方、かたつけをなす、

196
インディアン骨董店(A. & M. Indioindian
Frères) のところ。同店の住所は9, rue
Le Peletier。

一日甚た短き思して暮したり

八月三十一日 日曜

【予記欄】

発信

自宅、疋田

柳井

【本文欄～欄外左側】

朝宿の主人と同道してエルネスト

クレソンの画室に至り家具残金

及一ヶ月半の借室料共に弍千法

卍の内三百法先月渡し置きたる残

千七百法を渡す

夕方引越すべく僅[?]荷物の取かた

つけをなす、

五時青山君来援され愈々

此夕よりエルネストクレソンの画

室生活に就く

室内散乱して取かたつけになかく[?]らし

荷物は幸に宿カルソン^(ギヤルソン)自ら取運ひ呉る、

九月一日 月曜

【本文欄】

殆と終日室内の掃除に費す

午後三時頃昼食を済せて

大使館に宿所変更の報知を

なし白耳義行^(ベルギ)の旅券の

裏書を乞ひ直に白耳義公

使館に^{マツ}に趣き手続を終る、

夕方帰宅、

途上青山君に會遇、君は今午後

轉宅したりと余の近所にし

て賑かになりたり、[?]

風邪の氣味[?]にて頭重し、

九月二日 火曜

【予記欄】

来信

原

【本文欄】

終日外出せず掃除に暮す

昼前青山君来訪午後

手傳呉れらる

昼食夕食を日本食をなし

共に會食す、

夜十一時頃迄青山君と

藝術上の問題につきて

語る、

九月三日 水曜

【本文欄】

朝九時過迄就床朝のカツフエを

十一時前喰^(飯)た アマンシアン^(アマン＝ジャン)氏の

所へ出かけて見ようかと考へた

か少し時間の間に會ぬらしいの
と雨ても降そふてある、

昼食後ホテルトビユのマガザンに
(Hôtel de ville 市庁舎)

買物に趣く降雨□々たり

午後五時帰宅、

夕方食事に出づ、

九月四日 木曜

【本文欄】欄外左側

午前少し読書した、十時半シヤト
(シヤトール＝
テイエリ)

チエリに趣くべくガールエストに向ふ
(Gare de l'Est 東駅)

一時着の筈の列車はやつと二時

を過ぎてシヤトチエーに着駅前のレストラン
(シヤトール＝テイエリ)

ランにて昼食す、

三時頃アマンシヤン氏を訪ふ在宅製
(アマン＝ジャン)

作中、藤島先生よりの箱を送

る 夕食を共にすべければとの事、

来合せたる或画家と共に向の丘に

登り写生をなす、この辺の一村は全く

戦□にて破壊し終□たり、

午後八時半の列車にて十一時巴里着、

九月五日 金曜

【予記欄】

発信

原、

藤島

来信

石井、

【本文欄】

朝青山君来訪、昼食を共に

し夕方散歩を共にして八時

過歸寓す、青山君再来

十一時迄話す

青山君より借りたる黒板博

士の西遊式年¹⁹⁷のエシフト^(エシフト)行

を読む、

九月六日 土曜

【予記欄】

発信 石井、木村

都鳥

2. chemises

1. chemise du nuit

3. canisoles

1. caleçon

1. fra□□□□□□□□

3 coles^(cols)

□□□□p□□r. draps VW

【本文欄】

午後アカデミーにクロツキ、
(クロツキ)

油、□彩、スケッチ板などを買

求め帰宅、夜読書

197 黒板勝美著『西遊二年欧米文明記』(文会
堂書店、一九二一年)のことであろう。

九月七日 日曜

【予記欄】

来信、

原、

Renoir

【本文欄】

昼前掃除の女来る、

外出、長谷川君明日出発

南佛の地に病後を療養

せんとさる由御見舞に行く

午後ダリヤの花を買求め

帰宅、一時間ほど写生をなす

九月八日 月曜

【本文欄】

朝岡田氏来訪昼食を共にす、

朝と午後昨日写生のつゝきを

描く、

夕方セ^(セーヌ)ヌ河岸を散歩す

夜壁に張りたる支那女優の

絵を眺めて修作の辺を定む

九月九日 火曜

【予記欄】

発信、

自宅

青の

【本文欄】

朝〇^(オム)へ花買に行く

昼前より写生す、

タリヤ^(タリヤ)、シオンの類数多の花

を水^(水注)つきに抑^(挿)して洗面臺の

上に置きて周囲を描く¹⁹⁹

夕方迄、

青山君昼過ぎ来り夕方迄

話す、

昨日も今日も自炊して生活

九月十日 水曜

【本文欄】

昨日から始めた花の写生を朝から

夕方迄つゝけた

画室に計^(ばかり)こもつて毎日描て居れば

巴里に来て居る心地かせぬ、

然し何か一つ試みて見ねはなるまい

静物はかし描て居たとて何にも

なるまい

加藤君^田から送て呉れられる日本の

新聞を通読す日本も糧食問題^(食)

と社界問題^(金)でかなり騒て居る様で

ある

199

《小放牛》（大原芸術財団所蔵、所蔵品登録No.4127）のこと。前年一九一八年に中国にて取材、その後日本にて制作が進められ、一九二〇年にフランスの国民美術協会展に出品された。出品前にパリにて加筆修正されていることがわかる。以下、「支那女優の絵」「支那芝居の絵」などと表記されている。
モチーフや構図についての記述内容が「児島虎次郎画伯遺作展覧会」（大阪中之島朝日会館、一九三六年）出品番号No.88《静物》（所在不明）の図版と一致することから、同作またはその関連作と考えられる。

198

九月十一日 木曜

【予記欄】

発信

加藤

【本文欄】

午前中描きつゝけの花の写生

午後昼食後ルーブルに出

かく、

街上暑氣烈しくして外

に在に不堪、六時前帰宅、

先日より描きし花は如何にして

も意を不得夕方八号に同じ

様なるもの一枚を描く

九月十二日 金曜

【天気欄】

晴

【寒暖欄】

暑

【本文欄】

朝ラモレルに絵具買[?]に趣く昨

日より暑氣強し

少し暑さに勞れたる心地す

午後より夕方迄支那の女優の絵を修

作す

九月十三日 土曜

【本文欄】

朝岡田氏の所にアトリエの話

にて趣く、夕方迄岡田君留

守

九月十四日 日曜

【本文欄】

終日支那女優の絵を修作す、

朝より夕方迄、青山君

来訪、

九月十五日 月曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

来信

山田芳

【本文欄、欄外左側】

早朝岡田君アカデミーに同伴

し呉れとて来訪アカデミー^(アカデミー)に

行く、ルクサンブル公園

を一人にて散歩す、

街上子供を三人連れたる中年

の貧しき婦人か残年の歌を

独唱して銅貨を乞ふて居た

余は簡單なるスケッチをなす、

正午後前帰居、廣瀬氏来訪

午後青山君とMr. Rivier

氏の所にルノアールの絵を見に行く²⁰⁰

夕方、他の廣瀬（佛文）氏²⁰¹原君と来訪²⁰²

九月十六日 火曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

発信

アマンジヤン^{（アマン＝ジャン）}

【本文欄】

朝アマンシヤン氏へ手紙を書く^{（アマン＝ジャン）}

昼食後支那女優の修作

を夕方迄つゝけた

今朝は早くルクサンブルの公園

に出かけて見ようと考へたか

空が曇りて薄寒いので中止し

た、

今朝はルクサンブル^{（リュクサンブル公園）}の園は静

かて淨いよい氣持である、

今月も早や半月過ぎた

日本から一向手紙か来ぬ

九月十七日 水曜

【本文欄】

朝窓外の写生を始む、昼食後

ルクサンブル辺の散歩に出つ

壱貳時間古董屋に過す、^⑧

辰砂の壺の口かけのもの三品

價安く求む

四時頃帰宅して食事、

夕方少し支那女優の修作

をなす睡氣催して力なし

九月十八日 木曜

【予記欄】

来信

長谷川

【本文欄】

午前中在宅、

昼前岡田君来訪共に

昼食す

午後青山君来宅の筈

なるも不来

岡田君と中川氏²⁰³の寓を

訪問

夜シネマを観て夜半帰

宅

九月十九日 金曜

【予記欄】

発信

長谷川

²⁰⁰ ジョルジュ・リヴィエール (Georges Riviere, 一八五五—一九四三) か。フランスの作家、美術評論家。一九一九年九月十二日消印の児島宛ルノワールの書簡が現存しており、リヴィエールの住所と作品受け取りについて記されている。

²⁰¹ 広瀬哲士 (ひろせ・てつし、一八八三—一九五二) であろう。フランス文学者、岡山県出身。児島の住所録に名前があり、住所は Welcome Hotel (パリ五区) および東京市外中野となっている。

²⁰² 原勝四郎 (はら・かつしろう、一八八六一—一九六四) であろう。洋画家。

²⁰³ 中川紀元 (なががわ・きげん、一八九二—一九七二) か。洋画家。

【本文欄】

朝ロンドン山田氏より来電本日
夕方巴里着の由
夕方迄朝より支那女
優の修作
四時頃青山君とRivier氏
の宅にてルノアール氏の作品
を受取る²⁰⁴
(Care at Nord 北野)
ガールドノールに山田氏久保
氏を訪聞出迎ふ両氏三井
の人とグランドホテルに就く、
(フオリール・ベルジエール)
ホリベルゼールを案内して夜半過ぎ雨に降れ
て帰宅したるハ一時半

九月二十日 土曜

【本文欄】

(rue de Liège リエージュ通り)
朝リエージュに木村
氏を訪問昼食を氏の^{[pension}
(宿舎)
ヨンにて饗せられグランドホテ
ルに置手紙して帰る、
夕方山田、久保氏来訪、
夕食を共にす、
(オランピア劇場)
夜オランピアの案内す

九月二十一日 日曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

発信
青野
矩一
Renoir
来信

矩一

【本文欄】

連日夜晩く就床のため睡眠
不足、日曜なれはと思ひゆ
つくり睡り、醒めたるは十時に
近し、朝ルノアール氏へ手紙を
かく、
午後、少し散歩に出づ、夕方
支那女優の修作、
夜原君来訪、支那飯に
趣く、

九月二十二日 月曜

【天気欄】

晴

【本文欄】

朝原君来訪原君に依頼されて同道して~~北~~
ワルトロカデロの附近に趣く
夕方青山君の所に同道す
午後~~北~~ワルトロカデロより宿迄^(セーヌ)
の河岸を散歩す

九月二十三日 火曜

【天気欄】

曇

【本文欄】

朝、(「グランド・ホテル」) クランドホテルに山田氏への

電報を持参す、

恰も見物に出かけの折にて夕

方迄自働車にて引廻す、

風邪の氣味なれば早く就

床す、

九月二十四日 水曜

【天気】

晴

【予記欄】

来信

中沢、

山田氏への電報来る、

【本文欄】

朝九時離床よく眠りたるため
にか頭少し軽くなる

瓦斯ストーブを焚きて暖房
す、

昼前都鳥氏来訪夕方
迄談合す、

九月二十五日 木曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

発信

山田、

発電

山田

【本文欄】

夜発汗したれば朝少し心地

よし、中沢氏より巴里に帰

着の由はかき受けたれば依頼

され居る額縁屋(「額縁」)に出かく、

午後支那劇の修作をなす、

九月二十六日 金曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

自宅、三通

柳井、岡崎

来電山田氏への

発信

山田氏

自宅、柳井

成羽、大原（輸）

太田

【本文欄】

朝中沢氏ホテルに帰着の事と
考へ向たれと尚巴里に帰

られざる様子

諏訪に廻り古董屋に寄り

昼支那飯に趣く、

風邪の心地よし、

夜手紙をかく、

九月二十七日 土曜

【天気欄】

雨曇

【予記欄】

発輪

自宅、斉藤

信

柳井、岡崎

来信

山田芳

「山田氏への
手紙二通

【本文欄】

朝九時迄睡る、午前中洋服の
repasageをなす、

昼食を山口氏の所にて御馳走
になる、

午後青山君、松永君²⁰⁵山口氏
の所にて来語す

夕方一寸外出す冷氣なか／＼
に強し、

九月二十八日 日曜

【本文欄】

朝中沢氏より来電、直にホテル
に趣く、別に何の用事もなく

日曜日にて用達も出来ず

昼食を御馳走になりて夕方

迄遊て帰る、

九月二十九日 月曜

【予記欄】

来信

Duthe' 妻

金沢、岡崎

【本文欄】

朝ルクサンプール^(リュクサンプール公園)に写生に行

205 松永津志馬（まづなが・つしま、一八九
三―一九六〇）であろう。洋画家。

く

く ^(「エジプト」)
エジプトの板画一五〇²⁰⁶を購む、

^(「額縁」)
克蘭シヨームイエーとラモレルに

寄る、

午後中沢氏来訪、

九月三十日 火曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

Gott

【本文欄】

朝青山君と中沢氏の宿に

趣く、^(「額縁」)
額縁屋にてルノアールの

作品に對する木彫の椽^(「椽」)を撰

ふ²⁰⁷

午後同道してRue de la Paixの

^(「會」)
古董屋にて中沢氏新にギリシ

ヤの品数点を求めらる、

十月一日 水曜

【天気欄】

晴夕雨

【予記欄】

発信

Gott

長尾建吉

^(「額縁」)
額縁代の

事を申送る

【本文欄】

朝ルクサンブル^(「リュクサンブル公園」)に久振りに

スケツチに趣く池の側にて子供

の噴水を描く

午後ガールドリオン^(「Gare de Lyon 駅」)に時間表

を買求む后ルーブルに^(「エジ」)
プト^(「エジ」)の墓標を觀る

十月二日 木曜

【予記欄】

来信

小笠原、

小林、

岡本、

発信

自宅、

Duthu

【本文欄】

先般中から中沢氏に依頼された

用事で殆ど数日を費したし其の

用便か至極不愉快千萬であ

つたためか頭かなんとか嫌てたま

らぬ、何所か田舎へ飛出し

206 「二五〇フラン」の意であらう。

八月十四日、二十五日、九月十五日、十
九日欄参照。

て来て見たくもあるし今日モン
チニー辺に遊て見ようかと考へたら
又思直した、朝大使館に手紙の
事て出かけて帰途を都鳥氏の寓に
寄て四時頃迄話した夕方小柴君²⁰⁸
の所を訪れて帰つた、

十月三日 金曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

ホテル

Grand Hommes

発信

小笠原、加藤、

小林、

【本文欄】欄外左側・欄外下側

(Gare de Lyon - en face 駅)

十時五十分カールドリオンよりモンチ
ニーに絵具箱を携へて十年振りに
ロアン^(ロワン 町)の清流に見んとす、

十一時半前着、停車場前にて昼食川岸
に降りて橋上より一枚写生す降雨に
會ず陶器屋に歸りて壺一個を求む、
川^(とほろ)グレの方への道をほどくと歩た雨に濡
れた緑葉の鮮さとても都にては見られ

ぬ色なり紅と燃る蔦の羨しきほと
美しさよ、町はづれにて一枚スケッチを試み
た五時僅か過ぎ七時迄の汽車を待つにはあ
まり時間あればモレー迄歩行き見む林道を急行した
恰た三四キロ行た所て馬車か馳て来た御者か同乗を
すゝめる
のて車上の人となる、六時半少し過ぎ停車場着、巴
里へ空腹の
まゝ十時帰寓飯を炊て食事した

十月四日 土曜

【本文欄】

朝ルクサンブールの池を十五号に画
室て描直した

午後デュランルエル^(Rue La Boétie 通り) ヌリユド^(ヌーイユド 通り)

ボヘッチーの Bernheim²⁰⁹ などにタブ

ローを見る シヤバンヌ²¹⁰のパステル

十号程のもの六万五千法 かなり

よい品であつた

夕方迄歩み通して勞れて帰寓

青山君来訪

十月五日 日曜

【予記欄】

来信

矩一、青野、
柿原、金沢

208 小柴錦侍(こしば・きんじ、一八八九—
一九六二)か。洋画家、版画家。
209 ジョルジュ・ベルネーム画廊。
210 ビエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ
(Pierre Puvis de Chavannes、一八二
四—一八九八)。フランスの画家。

発信

矩一青野

柿原金沢

【本文欄】

午前中に在宅昨日の夜画を少しつゝける

午後、外出ホテルクラントホーム(ホテル・デ・グラン・ゾム)の

主人を訪ふ

夕方帰宅、諸氏への手紙を

夜迄かく

人生に最も発達しつゝあるものハ
虚偽を以て第一とす

十月六日 月曜

【予記欄】

来信

山本 久保田

【本文欄】

朝山本氏ローマより明朝帰巴

すべければスワホテル(諏訪ホテル)に宿を求

め呉れとの手紙を受取る

昼前スワに趣く午後少し

朝顔?の絵を修作す²¹¹

十月七日 火曜

【予記欄】

来信[?]

中沢、

【本文欄】

朝(Gare de Lyon リオン駅)ガールドリオンに山本氏を

迎ふ 午後同導して山本

氏の買物をなす、

夜カジノドパリ(カジノ・ド・パリ)を観る、

十月八日 水曜

【本文欄】

朝スワホテル(諏訪ホテル)に趣く山本氏

正午の汽車にてロンドンに出

発さる、

午後

十月九日 木曜

【予記欄】

来信

加藤

【本文欄】

朝 朝顔の画を修作す、

夕方ホルトオレアン(Belle Orleans オルレアン)の城

外を散歩す

211

《朝顔》（大原芸術財団所蔵、所蔵品登録
No.4050、4111、4112）のこと。三点が日本
で制作され、うち二点が一九二〇年の国
民美術協会展に出品された。出品前にパ
リにて加筆修正されていることがわかる。

十月十日 金曜

【本文欄】

朝ルクサンブルに写生に
出かけ

グランパレにオートモービルの
エキスポジションを観る
(Exposition Automobile)
夕方より室内の写生を
始めた

十月十一日 土曜

【予記欄】

来信
平塚
発信
岡本

【本文欄】

午前中在宅午後(グラン・ブール
パール)グランブル
パールに趣きシヨージブチに水
彩画展覧會を観る
夕方帰宅、

大使館に寄り満谷氏よりの
手紙を受取る

十月十二日 日曜

【予記欄】

来信
妻、吉田

柳井青の
小林上田、
中尾

【本文欄】

午前中在宅午後(クリュニー美術
館)ミュセクリ
ニに行く館中、廣瀬、関野
博士に會遇す、夕方迄兩氏
のホテルに寄る博士より印度
旅行の物語及数多の写
真に示さるつき教示を得、
夜日本への数多の返信を認
む 夜半過就床

十月十三日 月曜

【予記欄】

発信
鼎宅、妻
青の、柳井
上田、小林、
吉田、
妻

来信、

212 関野貞（せきの・ただし、一八六八―一九三五）。建築史・美術史家、考古学者。

小野、木村
妻より写真
来る

【本文欄】

朝渡欧の時同船したる小野²¹³氏来
巴したれは遊びに来て呉れとの手紙
を受け午後クリシーのホテルに
訪ひ夕方迄同道して市中
を散歩す、
午前室内のデッサンを五十号
に描く、

十月十四日 火曜

【予記欄】

来信
中沢、
青の
妻、
三宅、
【本文欄】
(クリュニー美術館)
朝クリニーに出かけようかアマン
ジャン^(アマン＝ジャン)
ジャンのシャトールウチエリー
に出かけようかと色々考へた末
シャトールウチエリー行は日延とした
(クリュニー美術館)
午後クリニーにペルシャのデッ
サンを模写に出かけた
夕方暮くなつて三時半退

出した
(カレブジャン骨董店)
カルブジャンからギリシャのテール
(赤陶)
キュイの少なのを二個届けてよ越
した先日^{???}の礼ならむ

十月十五日 水曜

【予記】

発信
中沢、
三宅、
長谷川

【本文欄】

(クリュニー美術館)
午後ミュゼクリニに
(ロードス)
Rhodesの皿を模写に趣く
夕方帰宅、
(ベルギ)
白耳義^(ベルギ)に行て来たいのと
(アマン＝ジャン)
アマンジャン氏の宅を訪れ
たいのとモデルを描きたい
しの三つの問題か毎日頭の
中を支配して然しかも毎日
三つの何一つも出来ないのである
奮起を要す

十月十六日 木曜

【予記】

来信

213 小野輝男か。児島の住所録に名前があ
り、住所はロンドンとなっている。

久保田

山田、

【本文欄】

午前中昨日クリニー^(クリュニール美術館)にて描写したる

皿の絵を修正す、

午後St. Honore^(サン・トノール)の店に

ゴガンの展覧会を見る、

夕方帰宅、ゴガンの作品

ブルタニユ^(ブルターニュ)にて描たもの、みらしく

二十枚もあつたか風景はゴ

ガンのものとは思へぬ様な穏

雅なよいものかあつた

十月十七日 金曜

【予記欄】

発信

久保田

山田、

満谷

【本文欄】

午前中室内の写生をなす、

五十号に先日来デッサンを描

き置しも室内に子供のモデルを置

く積りなるも一向モデル来らず

昼食を支那飯に行く途中

岡田君に會遇す食後共に

ミユセルクサンブル^(リュクサンブール美術館)を観る、岡田君

の寓に帰り日暮過迄話す

中川君も来合す、

アラブ製?の大幕を購ふ價非

常に安價

十月十八日 土曜

【本文欄】

午前中昨日の続きに室

内を描く

午後Rue Royale^(ロワイヤル通り)に展覧

會を観る

夕方、ルクサンブル近くの

古道具屋に入る一時間

費す、

朝来霧深くして町余と辨

せぬ位なり、

十月十九日 日曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

加藤

【本文欄】

朝九時迄睡眠す 此頃暁頃?

よく醒めて朝起の際頭痛む

214 ポール・ゴーギャン (Paul Gauguin, 一八四八一—一九〇三)。フランスの画家。

215 サントノレのバルバザンジュ画廊で開催されていたゴーギャンの個展を観覧したものと考えられる。

Paul Gauguin: Exposition d'œuvres inconnues, Galerie Barbazanges, Paris, Oct. 10-30, 1919

寒さ加りたるため？

午後ミユセギユメに趣き新に

エジプトの室と印度の室を觀

るルーブルのそれに比して遜色な

きのみか模写などするのは非

常に都合よし、

夕方帰宅、

今日は□春先の如く暖気心地よし

大陸なれば支那の如く三寒四温

の存するにや、

十月二十日 月曜

【予記欄】

来信

長谷川

【欄外右側／本文欄】

午前中²¹⁶シシカ²¹⁶ペナンでスケッチして来た

子供の構図を描て見た²¹⁶

午後支那飯からセンヌ川の

岸の方に散歩して

帰途、^(サルファージュ、石棺)エジプトの Sarcophage

の破片を買求めて来た

美術学校にて羅馬賞²¹⁷の彫刻²¹⁷コン

クールの作品陳列を觀る、

十月二十一日 火曜

【本文欄】

昨夜より少し風邪の気味

なりしか今朝は熱もかなりあり

喉も痛むし気分も悪し

終日一寸買物に出たるのみにて

ストーブの側にてセザンヌを

読む、

外はあまり暖かそうふてもなし

十月二十二日 水曜

【予記欄】

来信

小野、

加藤

都鳥

【本文欄】

午前中在室

昨夜より風邪の氣味なりし

ため発汗させむと昨夜^(フドー酒?)ブー酒

を熱して飲しもきめなし九時迄

就床、

昼前花の絵を描始む

昼過ラモレル迄用達に行く

吉田君へ^(絵具のシルバーホワイト)ブランドルジャンを九本発

送を依頼す

午後²¹⁷青山君来談、

217 216

五月二十四日欄参照。
ローマ賞。芸術分野の学生を対象とした、
フランス国家による奨学金付留学制度。

夜手紙をかき読書（セザンヌ）

十月二十三日 木曜

【予記欄】

発信

大原、加藤

【本文欄】

午前中鉢花を描く矢張暁

寒冷を感じて熟睡不能

風邪の気減退せず、

午後ルクサンブル（リュクサンブール公園）の園に

写生に出かく

室内のストーブの傍に居るより

外出して日光に少しでも浴す

る事が非常に快よい

夜久し振りにシネマに行く

今晚はよく睡られて明日は

すつかり氣分の直る事を祈る

十月二十四日 金曜

【予記欄】

来信

岡本

【本文欄】

午前中花の写生をつゝけた、

午後ルーブル（エジプト）に埃及の壁画の

一部を模写に行た

面積の大なるものか描けぬ
ため三部に劃分して写し

た、

十月二十五日 土曜

【予記欄】

発信、

柿原、

岡本

【本文欄】

午前中花の写生をなす、

午後ルーブルに昨日の模写の

つゝきをなす

夜国民新聞を読む

柿原君に送金の事について問合す

十月二十六日 日曜

【本文欄】

午前青山君来訪

昨日、ルーブルにて模生（模写／写生）せし

エジプト壁画の破片を

の絵を修作す

午後一寸ルーブルに覗く

夜山口、松永氏と支那飯

に趣く、

十月二十七日 月曜

【予記欄】

発信

青の

妻

【本文欄】欄外左側

午前中、(Chou キャン) シューとトマトを机の

上に置いて写生昼迄に描き終

へられす

午後美術学校に(コンクール)の

成績を見物に行く

夕方迄方々散歩して又

(エジプト) エジプトの sarcophagus の破

片を買た

夜松永氏来話さる、

来月の分へかき延す²¹⁸

十月二十八日 火曜

【本文欄】

午前中静物を描く

午後美術学校に絵画部

の競技成績を参観

に行く、

夕方帰宅、

十月二十九日 水曜

【予記欄】

来信

小野

【本文欄】

昼前外出、午後ルーブル

に行く、

今朝モンチニーに写生に出

かける積にて写生の支度な

として居る間に、とても十時

五十分の汽車に乗る間に會ぬ

様になつたので断念した

今モンチニーには都鳥氏が

滞在中秋の盛なる由報

せらる、

218

「エジプトの Sarcophagus」の上より引出線をつないでいる。同作の購入については、出納帳の来月分の欄へ記入するという意であろう。

十月三十日 木曜

【本文欄～欄外下】

午後小女^(少女)のモデル来る筈にて
夕方迄待たるに終に来らず

^(クロッキー)

夕方^(モンチニー) Croqui^(クロッキー)に行く、

montigny^(モンチニー)に行たきも天気

毎日曇り勝にて時に小雨

などあり此の陽気にては田

舎に出かけても画興とこ

ろか腸を害する様なるもな

きある見合勝となる、

画室の東北の窓に窓幕を懸たの

て夜中晩室中の寒冷さほど強

□□なる、

十月三十一日 金曜

【予記欄】

来信 原

【本文欄】

午後ミエセギユメ^(キメ美術館)に行く

エジプト^(エジプト) XIX²¹⁹ – XX^(王朝) dinastie^(dynasties)

の Tombeaux^(墓)の内より支那の

明時代の香水瓶の小なるもの

数個発掘されたるもの陳列

さる

夕方散歩して帰宅

今日は天長節なり大使より

通知来らず

日本より送金に接せず

十一月一日 土曜

【予記欄】

発信、山田、

【本文欄】

朝サロ^(サロンの)ン・ポート^(ポート)ンス^(ス) 220

の開会されたるを観る館中スチー

ムなく非常の冷氣にて腹痛を催

一廻大急きにて観て帰る

1914よりこの方久振りにて面²²¹

白きもの尠からず、

午後市中を散歩して夕方帰

宅、

十一月二日 日曜

【本文欄】

朝中川君を訪れ昨日都鳥

氏など□□留守に来訪されたる

時同導^(導)ならさりしかとと尋ぬ^{ツツ}

午後 musée Cluny^(クリュニー美術館)を一寸

□く 夕方帰宅、

雪細く降る樹木の白く染

り来る、

219 前行頭からここまでは縦書きになっている。

220 サロン・ポートンス。フランス芸術家協会展をはじめとする既成公募展の保守性に反発して、1903年に創設された公募展。

221 第一次世界大戦の影響により、1914年以降サロン・ポートンスが展覧会開催を休止していたことを述べている。

昨日の寒さも今は降雪のためな

るか気さほ□□強からす

一時間ほと^(方 聖 節)Toussaint

の人通出の町を散歩す、

十一月三日 月曜

【予記欄】

来信

矩一

中尾、

【本文欄】

朝の中salon d'Automne^(サ ロ ン ・ フ ェ ー ト ン ヌ)を

参観す、

午後、松永氏来訪夕方迄

夜外出シネマを見る

十一月四日 火曜

【予記欄】

来信、書留、

(大阪倉紡、松尾)

三宅専、

Duthu

発輪

大原、柿原、青の

山田、松尾、

発信

山田小林、

都鳥

【本文欄】

朝、書留来る、

九月二十二日の投函なれば

延着にあらすして発信の遅れ

たるなり、三千圓 11.120fcs.

午前中書簡を認む

午後、カタログmusee Guimet^(ギ メ ー ム ェ 節 節)

を求に市中に出て冬の□ラ[?]ン[?]

シを買求めて帰る、

十一月五日 水曜

【予記欄】

来信矩一

【本文欄】

朝ル^(リ ャ ク サ ン ツ ル 公園)クサンツルに写生に行く

降雨にて雨宿して描く行人

稀に秋色清□たり、

午後より夕方迄アカデミ^(ア カ デ ミ ー)にて雇た

る小女^(少)を室内の画中に加へ

て描く

十一月六日 木曜

【予記欄】

来信笹川

【本文欄】

朝室内の画を描く午後モテル^(モテル)

来らす

夕方、関野博士を訪問し

松永氏等と支那食を共にして

帰宅、

十一月七日 金曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

来信 林、

柿原、妻、

石井、小村、

都鳥、

【本文欄】

朝より室内写生中、都鳥氏

中原氏来訪、²²²

昼食を共に自炊して

午後散歩して夕食を日本人

倶楽部に趣き十時頃帰宅、

十一月八日 土曜

【天気欄】

雨

【予記欄】

発信、妻、²²³

石井熊夫、林

来信、

中尾、岡崎

【本文欄】

午前少し室内の写生を続^{(パレ・}

昼前松永氏と同道して palais^{ロワイヤル)} (特)

Royalの古董屋に行き後

(ギンヌ 美 館)
Musée Guiméに趣く

夕方過帰宅、

十一月九日 日曜

【天気欄】

快晴

【予記欄】

発信、

三宅克、□原、

小林笹川

矩一

岡崎石井日向²²⁴

青の

222 中原實 (なかはら・みのる、1893-1990)。洋画家、歯科医師。

223 大原孫三郎の義兄。倉敷紡績に勤めたほか、倉敷商工会議所会頭などを務めた。

224 「日向 (宮崎) の石井」の意であろう。

来信山田、

【本文欄】

午前中室内写生
午後より関根博士^(第)の印度旅行講演あるため先生の宿に
趣く集まるもの七八名

都鳥廣瀬諸氏と夕食を共にして帰宅、十時、

十一月十日 月曜²²⁵

【予記欄】

来信中尾²
(モデル)

【本文欄】

十一月十日

午前室内を描く
午後外出

十一月十一日 火曜²²⁶

【天気欄】

曇

【予記欄】

来信原

【欄外上側】

十一月十一日

【本文欄】

朝室内の絵を少し修製す
午後 Salon d'Automne^(サロンドートンヌ)を
観る^(第?) 場合都鳥氏に會遇

此頃はよく支那料理に行く
今日昼、夕、共に支那料理で
済した

十一月十二日 水曜²²⁷

【天気欄】

曇

【予記欄】

昨夜降雪
僅少
寒氣強し

【本文欄】

午前中自画像を描く N°15²²⁸
(リ エクサンテール公園)
午後ルクサンテールをスケッチス^(チ)

夜食事に出て活動に寄る

久し振りにバイオリンを出して
見た、壁の傍に箱を置いてあつたの
で 濕氣のために一部糊か
離れて板か割れかけて居た
今少しの事ですっかり駄目に

225 11月10日の日記は、11月12日欄に印刷された日付を訂正して記入されている。
226 11月11日の日記は、11月10日欄に印刷された日付を訂正して記入されている。
227 11月12日の日記は、11月11日欄に印刷された日付を訂正して記入されている。
228 「15号カンヴァス」の意であらう。

なる所であつた

【欄外下側】

十一月十二日

十一月十三日 木曜

【予記欄】

来信

金山、妻、

直平、²²⁹太田

発輸、

太田、妻、直平

【本文欄】

午前中自画像を描く

午後食事を兼ねて外出して紅葉し

たる樹枝を買めて帰り自画像

のfontとして写生す、²³⁰夕方

迄

夜 花の静物を夜半過迄

描く、

十一月十四日 金曜

【予記欄】

午後大に雪

降る、

【本文欄】

朝洋服を着するのを少しくづ^{*}

したら又腹工合か変になつた、

午前中自画像を少し描た

午後大使館に金山君からの為

替か着しては居ぬかと出かけたか

未着 (腹工合悪し) St. Honnore ^(カントノレ)に

Courbetのl'atelier de peintre ^{(クールベ) (画家のアトリエ)}

を観た大作のみならず自画像に加ふる

自分の知己親友と他に自分の會遇した印象

ある人物 (貧民など) をうまく構図してあつた ²³¹

ベルネームにMorisotの展画をも見る ²³³

見るほとものな夕方帰宅

十一月十五日 土曜

【予記欄】

発信

Delvin

Claus

来信

金山

柿原 妻、

三原、

【本文欄】

昨夜よりの降雪、尺に近し、

朝起出て、直に二十五号に窓外の

写生をなす、

午後二時過にてやつと終る

229 見島直平。見島虎次郎の甥、山陽新聞

記者。のちに、『見島虎次郎略伝』(見島

虎次郎伝記編集室、1967年)を著した。

230 紅葉した樹枝が背景にある自画像に該当
するものとしては、『自画像』(大原芸術
財団所蔵、所蔵品登録No.4003)がある。
同作またはその関連作のことと考えられ
る。

231 ギュスターヴ・クールベ『画家のアトリ
エ』はこの当時サントノレのムゼム・サ
ンジュ画廊の所有であつた。同作品は翌
1920年にルーヴル美術館に収蔵されてい
る。

232 ベルト・モリゾ (Berthe Morisot, 1841-
1895)。フランスの画家。

233 当時、ベルネーム＝ジュヌ画廊ではベル
ト・モリゾの個展が開催されていた。
Cent Oeuvres de Berthe Morisot
(1841-1895). Galerie Bernheim-Jeune,
Paris, Nov. 7-22, 1919

昼食を昨夜の残飯を食す、
夕方来信多し 返事をかく
夜十一時迄

金山君より^(カシヤマス) 234
九百四十五法の所
千法切手にて来る、

十一月十六日 日曜

【予記欄】

発信妻
金山、柿原、
吉田、三橋、
三原、
橋本、青の、

【本文欄】

昨日の雪は少しも消へ解て居ない
朝日か美しく白雪に輝て居る、
昨夜少し腹か痛てよく睡られ
なかつた 九時頃起きてから
八号に昨日と同じ位置で雪
の町を写生した 昼頃終る
昼食のために外出したか腹工合は
矢張よくない運動不足と、消化
不良ならむと中昼を見合して川岸の
雪景を眺め^(奥画)なから散歩した、
夕方一寸活動^(奥画)を觀て同じく工合あしけれ

は帰寓、

十一月十七日 月曜

【予記欄】

発信 吉田、
Aman Jean、
^(Comlard?) 235
Comlar

来信 吉田、
吉田君より
帝展入選の
報来る、

【本文欄】

朝ル^(リエラ)クサン^(サン)ヅール^(ジュール)の^(世界四地城の) Fontain de
噴水^(天文台噴水)
Quatre Parties du Monde
 quatre mondes の傍に残雪
のスケッチに行く²³⁶
今は雪の後てさほど寒さ強
からず、午後松永氏と^(ベル・シャルズ・ニエール百貨店)
Belle Jardinierに買物に
行く、

夕食の支度中 田舎水の入
^{(大鍋(キヤセロール))}
た grand caserole を引くり返²³⁷
して頭か痛くなつた

234 予記欄に書かれた「金山」からの引出線が、以上3行の頭の部分につなげられている。また、以上3行は縦書きとなっている。
235 見島のアドレス帳には「Comlard」という名前がみえ、住所は「Samoreau par Yvaines-sur-Seine」となっている。
236 《ルクサン・ジュール公園の噴水》(府中市美術館所蔵)の制作に関わるスケッチと考えられる。

十一月十八日 火曜

【予記欄】

発信青の
来信青の

【本文欄】

朝ルクサンブールに出た、今日も雪
の写生に出かける筈であつたか
昨日からの暖気で今朝はすつ
かり雪か消て終た、
セナの前で鼈甲の香合を買求めた
ラモレルに廻て黒田先生へ絵具
を送付する事を依頼した、
タクロツキーに行き支那食後、
〔オデオン座〕〔イタリヤの麦わら
odeon でChapau de paille
帽子〕
d'Italieを観た、

十一月十九日 水曜

【予記欄】

発信青の

【本文欄】

午前中、在宅何をするともなく
過した
〔ロダン美術館〕
〔Musée Rodin〕
午後Musée Rodanを観る
武回なり
〔Rodin〕
Rodanの作品よりもRodanの
〔collection〕
〔レリーフ〕
corectionしたエジプトのレリーフ

とか彫像などに面白いものか

あつて矢張Rodanも自らの作品
を作る事よりも往古の作品に接す
るの慰めを味た事の潔かりし事
を思ふ、夕方入浴して帰る、
湯に浴すれば気持よし、

十一月二十日 木曜

【予記欄】

〔Comllard ?〕
来信、Comllar
加藤、小笠原、

【本文欄】

午前十時頃迄在室 隣の女の所に
又早くから男かやつて来□た、騒
て居る こんな響の中で仕事の
手につく筈はあるまい、
金山君から送つて来た金を銀行
〔ソシエテ・ジェネラル銀行〕
〔Société Générale〕
に取に趣く、Société Generale,
〔デュラヌ＝リエール前座〕
Durand-Ruelに廻て Albert
André氏の作品を観る南欧ヱル
²³⁷
セーユ辺の小品面白きもの数からす
〔ベル・ジャールデュエール百貨店〕
〔Belle Jardiniere〕
Belle Jardiniereに洋服の假縫に
〔マノン・レスカウト〕
〔Manon Lescaut〕
寄り夕方迄活動て Manon Escaut
を観た

237 アルベール・アンドレ (Albert André, 1869-1954)。フランスの画家。

十一月二十一日 金曜

【予記欄】

発信加藤
小笠原
来信
Aman-Jean

Delvin

発信

黒田先生、

【本文欄】

朝の内くづりした^{*}
先夜Odeonで観た^{〔オデオン座〕}舞臺面²³⁸
を小なものに描て見た、
午後ラモレルに行き、
黒田先生への絵具及送料を支拂
ふ205frs
満谷氏へ送るべき^{〔圖布〕}トワルを注文し
自分もトワル粹などを買求む
夕方^{〔モンソー公園？〕}parc Mon^{〔公園？〕}□□□□迄絵具
箱を携へて出かけた夕方の風か少
し身に沁む写生をせずに帰寓した^{〔アマン=ジャン〕}
デマンシヤン氏□□来信 一週間程前
より巴里に在りと

十一月二十二日 土曜

【予記欄】

矩一に
彫刻の
写真を郵
送す、

【本文欄】

朝より二時頃迄噴水の雪のスケ
ッチを十五号に写した²³⁹
昼飯も食すにつゝけたら何たか
終た時ぽんやりとした様で
あつた、
三時頃一寸外出したか雨か
ほしよと降て居る^{*} 夕方迄夕食
に外出する迄読書した、
食後^{〔サラベール公爵〕}Sarah Bernardtに^{〔サランベール公爵〕}
La Danne aux Camelias^{〔La Dame aux Camelias〕}
を観る、

十一月二十三日 日曜

【予記欄】

発信
矩一

【本文欄】

朝の中に昨夜観た^{〔La Dame aux Camelias〕}La Dame
aux Cameliasの舞臺面を

238 児島はしばしば「舞臺面（舞台面）」と
いう語を用いる。それらの使用例から、
「セットも含めた舞台の（一）場面」と
いう意であると解釈できる。

239 前掲注236参照。《ルクサンブール公園の
噴水》（府中市美術館所蔵）の画面サイ
ズは51.3×62.8cm、15号相当である。

スケッチ板に描た
午後昼食に門の所迄出ると
岡田君に會遇同道して日本人
倶楽部に昼食に趣きく 吉江
孤²⁴⁰氏に會す、夕方迄話す 岡田君の
所へ日夕食前一寸寄て支那
飯に同道して帰宅、

十一月二十四日 月曜

【予記欄】

発信、
中山巍

【本文欄】

昨夜とうも夜半に度々醒めて
熟睡か出来なかつた発汗を度
々して今朝は身体の骨か少
し痛む様だ午前中何もせずに
加藤君から送られた新聞を読む
午後ア^(ア・マ・ソ・シ・ヤン)ンシヤン氏を訪問す、
錦^(錦)絵の板集を贈る
日本から持来た作品を携示した
支那劇の絵はさほどの出来てないか
他の作品は皆面白い明年是非
サロンに出品せよと勧告さる、²⁴¹

十一月二十五日 火曜

【予記欄】

来信
青の小林、
重成、妻、柳
井、矩^二

【本文欄】

昨日身体の痛みは少しは□□た、
朝^(セルヌスキ美術館) Musée Cernuschi
を參觀に出かけたら来年の春迄は
整理のため開館せすとの事昼食
後^(ラ・ボエーヌ) rue Boetheを雨に
濡れり^{*} 歩んだ ルー^(ルーヴル美術館)ヴールに
一時間ほど寄て夕方^(ラスパイル) Raspail
の古道具店に1時間ほど話して
帰つた

十一月二十六日 水曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

発信、
妻小林
柳井矩一
青の、重成
Delvin、

240 吉江孤雁（喬松）（よしえ・こがん）（た
かまつ）、1880-1940）。フランス文学者、
作家。

241 「支那劇の絵」は《小放牛》のこと（前
掲注198参照）。翌1920年の国民美術協
会展には、《小放牛》《秋》および2連画
として《朝顔》が出品されている。（サ
ラ・デュルト「児島虎次郎のサロン出品
について」『生誕130年児島虎次郎—あな
たを知りたい』展図録、大原美術館、
2011年、160-170頁）

【本文欄】

昼一寸前Salon d'Automneを
観に行く
午後Musée Clunyに寄る
夜松永君とモンパルトルの
小芝居に出かけた (Théâtre Arlequin)
les Verges du Nil
クロッキを少し試た

十一月二十七日 木曜

【天気欄】

小雨

【本文欄】

朝昨夜の芝居を板に描た
午後、Musée Ethnne Cluny
新らしき室か今日から開館
をさ□□me etageで□く□□□ル
や布のものが多い Antinoie
の布も少しあつた、

十一月二十八日 金曜

【予記欄】

来信
原、

【本文欄】

朝、セナの前の古道具屋に行

き昨日買ったエジプトの首飾

の残を買た

午後ルーヴルを一寸見物して

帰つた

夜OdeonにMonsieur

Dassoucyのdernier repetition

generaleを見物に行つ

なかゝ面白能書である

舞臺面もかなり美し

十一月二十九日 土曜

【予記欄】

来信矩一

岡崎

発信原

【本文欄】

午前中雪の絵を少し直した

今日は珍らしく朝来の晴天で

雨後の陽光輝き鮮なり

昼食後箱を携へて郊外

に出かけんと思たか都合

よく電車が来ぬのと、

少し寒くなつたのでルクサン

ズールに行てgymnote

ギニョルの芝居を少し付て観

た、見物の子供の動作になか^{*}り
面白いものがある、

十一月三十日 日曜

【本文欄】

午前中在宅、
目正午都鳥氏来訪、夕寿造
食迄話し合ひて支那
飯に趣く、

十二月一日 月曜

【本文欄～欄外下側】

朝、Gare Orléan^(オルレアン鉄道のことか?)に西班牙
旅行検へのため時間表を買求
めに行く
午後松永君と郊外 Fontenay^(フォントナー)に
写生に行く、
夕方迄一枚スケッチして
帰る
夕方迄丘上風の当る所にて
写生しても少しも寒さを覚へ
ぬ位であるこれなら冬も苦
くなし然し陰鬱は少しも明らむ
事かない

十二月二日 火曜

【予記】

発信
岡崎、矩一
成羽、柳井

【本文欄】

昼前目ラモレルに行く、
午後松永氏と Musée<sup>(モロ
美術館)</sup>
Moreau に趣く、
モンパルトルの絵具屋と
ベル・ジャルデニエール^(ベル・ジャルデニエール百景西)の洋服の
仕立合せに寄り夕食して帰る、

十二月三日 水曜

【予記欄】

来信
中尾、
西村

【本文欄】

朝サン・ミセル^(サン・ミセル)の本屋に注文の
L'Espagne illustres^(illustré)を取に
行く 未着
方々の書籍店を探し廻つたか
何れも持合せなし
午後ウルース^{ウルース}の本店に行つて
求めた
夕方前帰宅、一通り通覧した

夜日旅行案内を少日し検
べた

十二月四日 木曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信 妻、藤島

吉田、足立

武内、三橋

小笠原

青の、岡崎

松尾、

【欄外左側】

発信西村

【本文欄】

昨日 l'art Décoratif^(?) を

買たら Baertisme 氏^(バートル・バートスマ) かジョー

ジイチ^(画家) で展覧会をして居る

様^(?)の日に記載してあつた

但し十一月号

朝同所へ出かけた十日^(?) 午前

に終た期間一ヶ月なりと^(バートル・トソン) バル

ツン先生か来巴して居た事など

聞た実に失望し尽した

午後 Fontaney にスケッチに行

く

【欄外下側】

夜西村の用事で諏訪ホテルに趣く

本日

去る二日ルノアール永眠の報新聞に出づ

十二月五日 金曜

【予記欄】

発信、

妻、松尾

吉田足立

岡崎 武内

【本文欄】

朝、銀行に至り先日来りし為替を

受取る、

午後ジャツなどの買物をしてタ

方帰宅

日本への数通の通事^(通)をかく

本日の新聞に西班牙貨幣の

佛貨に貳倍余價する事

を掲けられたるに驚く

伊太利は殆ど同價格なり

夜も手紙をかくに深す

十二月六日 土曜

【予記欄】

来信 妻

242 アルベール・バートルソン (Albert Baertsoen, 1866-1922)。ベルギーの画家。児島と同じくダントの王立美術アカデミーでアルヴァンの教えを受けたことから、児島は第一次滞欧時にバートルソンのアトリエを何度か訪れている。

【本文欄】

昼前アカデミーに諸君を訪れ
昼食を日本人倶楽部に行く、夕方迄
諸氏と會談す、
(チャトレ劇場)
夜松永氏と Chatli□に
芝居を観る、

十二月七日 日曜

【天気～寒暖欄】

曇風雨

【予記欄】

来信

太田、上田

【本文欄】

終日在寓、
(スベイトン)
西班牙の案内を檢へて読
書す、

久し振りにバイオリンを出して

松永君と合奏をして見た

十二月八日 月曜

【予記欄～欄外下側】

発信太田

上田妻

来信青の

【本文欄～欄外下側】

昼前ラモレルに絵具代支拂
に趣く、
(アヤン=ジャン)
午後アヤンジャン氏を訪問す、
藤島先生と余とにパステル
画十号のもの (複製) しかも額縁
の付きたるものを恵まる
余は藤島先生に對して何なり
と紀念のため御送り下さる事を乞
ひ余に對しても何の受くる所なき事
を以て辞したるに終に一枚恵興
さる事となりたり先生の眞情賛
美に絶するものあり、

十二月九日 火曜

【予記】

発信

大原 書留

(アヤン=ジャン)
アヤンジャン

作品購入の事

申送る

青の

【本文欄】

午前中支那芝居の幕の辺を少
し直した
(スベイトン 領事館)
午後 Espagne の Consulat

243 見島田藏のアヤン=ジャン作品《二人の女》か。パステル画でサイズは50×33.9cm、10号相当。

の所に旅券の事で出かけた、

夜晩く 食事に趣く

十二月十日 水曜

【予記欄】

来信 岡崎
発信 都鳥

【本文欄】

午前中旅行の下検に過した
午後ラモレルに絵具代支拂
及藤島先生に荷物発送の
事につき相談に行つた
夕方迄旅行の買物なとし
て過した
早く旅行を終へて勉強に
かゝらねは駄目である

十二月十一日 木曜

【本文欄】

朝、Cook(ツツク旅行社) 244 (スベイトン)に行て西班牙行の汽
車賃を聞た、戦前百八十法□□□□
のものか六百九十幾法たと云ふたの
て一寸考へるため帰つた
午後西班牙(スベイトン)の鉄道會社に趣
たか西班牙国内(スベイトン)のものしか賣
らぬと云ふCook(ツツク旅行社)のより少し安

い様たか大差はない

十二月十二日 金曜

【予記欄】

発信、藤島
岡崎

十二月十三日 土曜 (記入なし)

十二月十四日 日曜 (記入なし)

十二月十五日 月曜

【予記欄】

発信
自宅、青の

【本文欄】

午前(ツツク旅行社)ツツクに趣き西班牙(スベイトン)
廻遊切符を注文す、
午後四時旅行支度を終て
て(ツツク旅行社)ツツクに趣く、
單に仏蘭西の切符のみ渡して
西班牙(スベイトン)のものは、国境にて
求めよとて不親切千萬驚く
に堪へたり、
午後五時、Gar d'Orleans(オリエアン鉄道のことか?)
Quai d'Orsay(オルセー河岸 駅)を發し南下

244 旅行会社トーマス・ツツク・アンド・サ
ン (Thomas Cook & Son)。

の旅に就く

十二月十六日 火曜

【本文欄～欄外下側】

昨夜は夕食後直に睡に就く
寝臺を求めたるにあらされは、
熟睡する能す、
七時国境ヲカサニ下^ニ目^ニに下車
荷物の旅券^ツの検^ツべあり
再^ニひ暫時にしてイロ^ニン^{（イロ）}に下車
此所は已に西国^{（イロ）}にして切符を
やつと求むるの時間ありたり
終日^ニ目^ニ明空の下に起伏多き
高原内支那の風光に似たる
村落^ニと眺めつ、同室の客の話
なと聞きつ、夜七時半過 セゴビヤ
に下車停車場前に泊す、

十二月十七日 水曜

【欄外上側】

Hotel Biarritz Victoria de Madrid

【天気～寒暖欄】

快晴

【予記・本文欄】

早朝カツツエを済して市中見物に趣く
町の中央迄約二キロ程あり、巾廣き往来
両側の人家、驢馬上の村夫婦など如

何にしても支那の風光に似たりと云ふ

外なし、城砦に近に従て右側遙に
高くローマン水道の橋梁を仰ふ廣大
大な^{（大）}□驚嘆の外ならず、

午後、再び宿より市外を散策す終日
逍遙してスケッチ数枚を描く少し

尚寒さ感すれども写生欲□なり、然し

先を急^{（急）}けは^{（急）}目^{（急）}夕方七時半の急行にて^{（急）}ツ
リ^{（急）}ドに向ふ延着十時過に着く

十二月十八日 木曜

【天気欄】

快晴

【本文・予記欄】

朝早く須田²⁴⁵氏の寓を訪た幸に在
宅、初対面なるに閑せず親切に案内の勞を
諾せらる 午前²⁴⁶先つ旅券のため日本公使館
に趣く、新美術館、午後、プラド美術館
に閉館迄停れと殆²⁴⁷□□をもも観る不
能す其の数多なる傑作に驚く
ベラスケスとゴヤの非常の□□²⁴⁸なり
ルーベン^{（ルーベン）}等ベニス派等南陽^{（ベニス）}
世界有数の美術館として推賞するべ
し夕方寄席に西班牙のダンス^{（ダンス）}などを観る、
夜案内書を検す、

245 須田国太郎（すだ・くにたろう、1891-1961）。洋画家。

246 デイエゴ・ベラスケス(Diego Velázquez, 1599-1660)。スペインの画家。

247 フランシスコ・デ・ゴヤ(Francisco de Goya, 1746-1828)。スペインの画家。

248 ピーテル・パウル・ルーベンス (Peter Paul Rubens, 1577-1640)。フランスの画家。

十二月十九日 金曜

【天気～寒暖欄】

快晴

【本文・予記欄】

朝須田氏来宿同道して佛国

領事館に趣き旅券の表書を乞

ふべく托し置く午後再びPrade^(アララフ美術館)

のMusée残部を観る、各派

の初期の作品になかゝ観る

べきものあり、

夕方前芝居に同道せらる

午前中Musée Archeologiqueを観る

ゴヤの壁画あ

る小寺院を

町端れに

訪ふ至極小

なるものなれとゴ

ヤ壁画は壁の色

に調和して心地よき作たり

夕方佛国領事館に出かけ旅

券を受取る、

十二月二十日 土曜

【天気欄】

快晴

【本文欄～予記欄】

午前須田氏を訪問し同道差支を訪問同道

してMusée ArcheologiqueMusée Archeologiqueを^(考古博物館)

観る羅馬朝の遺品なかり多く^{*}

エジプトの集品もさほど貧弱な

らず、メキシコの蒐集見るべき

もの多し

午前中再びPradoを観る

各室を通観す、

クレコ^(エル・グレコ)の強みは見るを重ねて

愈少しベラスケスの気品高

きもの優れて餘りあり

夜

Rubinstein²⁵⁰

のピアノ独奏

を聞く傑出したる

楽家なり

十二月三十一日 日曜

【寒暖欄】

快晴

【本文欄】

午前須田氏差支あればとの事

にてPrado^(アララフ美術館)の終後の通観

をなす

午後市中を散歩す、

夕方六時発の列車にて須田氏

249 エル・グレコ (El Greco, 1541-1614)。クレタ島出身、イタリヤおよびスベインで活動した画家。

250 アルトウーラル・ルーベンシュタイン (Arthur Rubinstein, 1887-1982) か。ポーランド出身のピアノリスト。

(註) Escorial エル・エスコリアル
と Escorial に趣く八時頃
着、一泊す

十二月二十二日 月曜

【天気欄～寒暖欄】

快晴

【本文欄～予記欄】

昨夜よりの風愈々烈しく殆
と出會したる事なきほどの烈風
なり

午前、午後にてこの大建築の内部
を殆と通觀す

Palais の各室は感興深き
ものありコヤの下画なるゴブラン
織の壁懸は見事なるものなり

Panteon 内の構造精美にして驚くべし
グレコ^(フ)の各作品は総て靈妙なるも
のなり、タ方汽車に投し七時^(フ)マ
リッド^(フ)に着す、

夜九時発、

トレドの汽車あ
りと思ひ停

車場迄出て
たるに、日曜日
のみの列車にて
翌日を待つべく
再び投宿す、

十二月二十三日 火曜

【寒暖欄】

快晴

【予記欄】

来信、
自宅

兩三日前
より少し風邪
の氣味あり
この日も少し頭
重し

【本文欄】

午前七時宿を發し午前八時過
發の列車に投しトレドに向ふ
車中二時間、十時過トレドに着
此日頃日の如く快晴鮮
光の美云はん方なし、
此辺朝霧と白霜にて車中よりの
眺めは全く煙の中を通る
心地せり

昼前昼後、案内書により參觀 クレ
グ^(エル・)の住宅後のミューセは最も感深し
外砦の周圍を翫散步す、

十二月二十四日 水曜

【寒暖欄】

曇

【欄外左側】

発信須田氏松永

【予記欄】

昨夜よく眠

り過ぎたれは

殆と睡眠を

催せず

知人へ二十

枚ほど発信²⁵¹

【本文欄～欄外下側】

午後朝室内眞暗なれは点燈して

時計を観るに十二時にて止まり居

る様なれは今何時なるを知す、然

し氣かゝりのまゝ窓を開く最早起き

てもよさそふの時なり着衣してコーヒー

を命すべく食堂に入れば一時半なり

驚くべし余の止まり居りしを信ぜし

時計は正午なりしなり

霧深くして今尚一日止りて写生

にても試むべかりしも断念して

午後少し散歩し夕方六時発、
(アルゴドル)

Algodorにて二時間Badajoz行の汽車
(バダホス)

を待合せて車中の客となる、

十二月二十五日 木曜

【寒暖欄】

曇

【本文欄】

(アルゴドル)
Argodorより十三時間、

午前十一時、Badajozに着く
(バダホス)

(Hotel du Palais?)
Hotel de Palaisに寄る、

昼食前一通り案内記に従

ひ馳廻る、

午後絵具の用意をして砦に

そふたる²⁵²辺にて一枚スケッチを

なす、五時になりて已に暮れに

近し宿に帰る、

明日は空の晴れ輝かむ事を

切望す、

十二月二十六日 金曜

【本文欄】

(バダホス)
朝八時過Badajoz発車午前十

時過Merida着 荷物を宿へ置
(メリダ)

きて早速羅馬朝遺跡を探索、
(ロマー)

(Alcazar) 252
Arcazarと長橋を観る空晴れ

やらす寒さ強し劇場の遺跡を

見る今尚発掘を終らざるものなら

む？発掘されし石柱石像所狭²⁵¹

251 以上2行を線で四角く囲っている。

252 Alcazaba (アルカサバ、要塞) の誤り
か。

き迄に地上に列せあり この様はとて
も伊太利にても見る事不能さらむ？
幸に此地に来りたる甲斐ありたると喜ぶ
夕方、郊外水道梁を写生す、

十二月二十七日 土曜

【本文欄】

朝郊外の水道梁を写生に出づ
十一時発車 Sevilla^(セビリヤ)に向ふ
午後八時着のもの迄時間余延着
Hôtel Oriente²⁵³に泊す、
夜は矢張り宿につきて昼間窓外
の風光を眺めつゝ旅するに限
る、なるほど時間と費用は少
しかゝる問題である、

十二月二十八日 日曜

【欄外上側】

Sevilla

【本文欄】

例の如く案内記により終日見
物、朝、Muséeに趣くムユ^(ムユ)
ロー²⁵⁴の作数多あれと感ずるもの
なし、Archeologiqueのコレクショ
ン面白きものあれと貧弱たるを
まぬかれ□ Alcazar^(Alcazar)の建築完
美と云ふべし 然し其庭園の

快感を感じたるは限なし
午後 C a r l i d a d のムユロー^(ムユリヨ)を観る
川向に渡り Triana^(トリアナ)を散歩
す、

十二月二十九日 月曜

【欄外上側】

Sevilla

【予記欄】

絵はかき、
二十余枚を
発信す、

【本文欄】

午前七時半発車、Carmona^(Carmona)
に趣く九時過着 (途中乗換)
Nécropole Romaine^(Nécropolis Romaine)迄は僅か或
十分 (土地の中流の人懇々案内して同所迄
導かる) George Ronsor 氏 (英人)
の発掘にかゝる (案内人はRonsor 氏は画
家なりと云ふ) 同氏は日発掘され
たる数多の遺跡の中央に住宅兼小
Muséeを建て、数多の遺物を陳列
されて居る見るべきもの尠からず、
汽車遅延六時頃 Sevilla 帰着、

253 現存する領収書 (1919年12月31日付) に
よれば、ホテル名は「Gran Hotel de
Oriente」。

254 バルトロメ・エステバン・ムリロ ヨ
(Bartolomé Esteban Murillo, 1617-
1682) のこと。スペインの画家。同日本
文欄9行目参照。

十二月三十日 火曜

【欄外上御】

Sevilla

【本文欄】

(Alcazar)

朝 Alcazar の庭に写生に趣く

午後五時迄油絵スケッチと鉛

筆のデッサンをつゝく

Sevilla は気持のよい所なり

然し至る所土地に慣れ宿に親

しみかければ直に他に轉す

る事(12)のなるのである、

明日は引揚て南の方に趣くべ

きか或は尚留りて何か一枚

描て見るか、さても心急しき旅

なり

く園(セラニウム)ジエラエーム咲く停車場の
庭なと南国の□美し

十二月三十一日 水曜

【本文欄】

(Malaga)

午前十時 Sevilla 発、Malaga

に向ふ例の如く二時間余汽車

延着、五時半のもの八時頃着、

(Simon)

Hotel Simon に泊す

Sevilla よりは路治道

カンラン(サボテン)シヤボテン等赤土の畑

を飾る事美し、密柑(蜜)レモン

の尚色つかぬものあり 目葉の

尚散残りたるものありバウ咲

人名索引

- ・本表は、見島虎次郎日記（1919年）に登場する人名と日付をまとめたものである。
- ・一部、特定個人と関わる商店名を加えている。
- ・「氏」「君」などの敬称は人物の特定に役立つ場合があるため、日記中で敬称が用いられている場合は敬称もあわせて示した。
- ・日記の前後や関係資料から得られた情報をもとに人物の特定・推定を試み、「氏名等」欄に示した。これらは、更なる精査を要する段階のものであることをご了承ください。
- ・「氏名等」欄は、該当する可能性のある人物が複数考えられる場合は、特定を避けて空欄とした。ひとりの人物であるが氏名がわからないものは「不明」、空見出しの場合は「―」とした。
- ・日記に記された名前を五十音順に示し、続いて、欧米人のみ姓のアルファベット順に示した。ただし、名前の漢字の読みが誤っている可能性があることをご了承ください。

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
青木君	不明（外務省関係者）	4/4	
青野			
青野君	青野俊一郎	1/16, 3/5, 3/14, 3/20, 5/4, 7/13	注8
青野兄	〃	4/30, 5/2, 5/3, 5/5, 8/1, 8/23	
青野	〃	1/5, 9/21, 10/5	
青の	〃	3/20, 3/21, 3/22, 3/26, 3/29, 4/7, 5/11, 5/22, 5/24, 6/15, 7/5, 7/11, 7/12, 7/13, 7/22, 7/23, 8/11, 8/21, 9/9, 10/12, 10/13, 10/14, 10/27, 11/4, 11/9, 11/16, 11/18, 11/19, 11/25, 11/26, 12/4, 12/8, 12/9, 12/15	
青野兄の室	青野俊一郎夫人	5/1	
青野氏	不明（静岡丸乗船者）	6/19-21	
青山			
青山君	青山熊治	7/6, 7/12, 7/19, 7/20, 7/28, 8/14, 8/18, 8/24, 8/25, 8/26, 8/27, 8/28, 8/31, 9/1, 9/2, 9/5, 9/9, 9/14, 9/15, 9/18, 9/19, 9/22, 9/27, 9/30, 10/4, 10/22, 10/26	注154
青山	〃	8/27	
赤木萬	赤木萬二郎	8/18	注190
足立		8/18, 12/4, 12/5	
阿藤君	阿藤秀一郎？	1/30	注30
跡見（君）	跡見泰？	3/20	注65
アマンニジャン	―	→Aman-Jean, Edmond-François	
アマンシアン氏／アマンニジャン氏／アマンシヤン／アマンシヤン氏／アマンニジャン／アマンシヤン			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
有島			
有島君・有島（君）	有島生馬	3/30	注84
有島	〃	4/4, 4/21	
石井			
石井日向	石井家（石井十次遺族）	11/9	
石井熊夫	石井熊夫	11/8	注223
石井		1/27, 2/23, 9/5, 9/6, 11/7	
伊仙	―	→伊藤	
磯谷	磯谷商店	2/18, 3/18, 3/21, 3/30, 4/3, 4/5, 4/9, 4/10	注33, 46
伊藤			
伊藤仙君	伊藤仙三郎	3/6	注57
伊仙	〃	8/18	
伊藤	〃	5/6	
伊藤夫婦	伊藤仙三郎夫妻	5/5	
伊藤（氏）		5/11	
伊藤		5/10	
井上			
井上額縁店？の主人	不明	4/14	
井上		4/28, 4/29	
今関			
今関氏	今関天彭？	3/25	注77
今関	〃	8/18	
岩村			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
岩村氏	岩村悦郎	2/17	注45
岩村	”	2/25	
岩村愛子	岩村愛子	2/24	
岩村悦郎夫人	”	2/19	
岩村		8/6	
上田			
上田尚	不明	4/23	
上田	不明	1/27, 5/9, 5/24, 10/12, 10/13, 12/7, 12/8	
エル・グレコ	—	→El Greco	
クレコ／グレコ			
遠藤	不明	4/28	
王統一氏	王統一	5/11	
欧文堂	—	→林欧文堂	
太田			
太田君	太田喜二郎	3/15	注48
太田	”	2/22, 2/25, 4/23, 5/6, 8/14, 8/21, 9/26, 11/13, 12/7, 12/8	
大庭			
大庭氏	大庭猛	4/8	注93
大庭夫人	大庭猛夫人	4/8	
大原			
大原氏	大原孫三郎	1/16, 1/26, 2/22, 3/17, 4/23, 5/4	注17
大原	”	1/17, 5/10, 5/11, 5/22, 5/24, 6/15, 7/21, 8/11, 8/29, 9/26, 10/23, 11/4, 12/9	
大原	大原家 (大原孫三郎)	3/5, 3/7	
大原 (宅)	”	3/12	
大原氏先代	大原孝四郎	4/20	
大原夫人	大原壽恵子	3/26	注78
岡崎			
岡崎君	不明	4/6	
岡崎	不明	8/21, 9/26, 9/27, 9/29, 11/8, 11/9, 11/29, 12/2, 12/4, 12/5, 12/10, 12/12	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
小笠原			
小笠原子爵	小笠原長不	6/19-21	注127
小笠原	”	5/22, 6/28, 6/29, 10/2, 10/3, 11/20, 11/21, 12/4	
岡田			
岡田先生	岡田三郎助	3/17	注43
岡田 (先生)	”	2/17	
岡田君	岡田毅	9/13, 9/15, 9/18, 10/17, 11/23	注185
岡田氏	”	8/12, 8/15, 8/23, 9/8, 9/13	
岡野 (氏)	岡野栄?	3/23	注72
岡本	不明	8/21, 10/2, 10/11, 10/24, 10/25	
奥原	不明	2/22, 2/25	
乙骨	乙骨安昌?	5/6	注115
小野			
小野氏	小野輝男	10/13	注213
小野	”	10/13	
小野		4/1, 10/22, 10/29	
小野田	小野田鉄弥?	5/6	注117
柿原			
柿原得君	柿原得一	2/24	注39
柿原得	”	2/16	
柿原君	”	2/16, 10/25	
柿原政君	柿原政一郎	2/24	注42
柿原政	”	2/17	
柿原氏	柿原得二 または政一郎	3/14	注39, 42
柿原	”	2/23, 8/29, 10/5, 10/25, 11/4, 11/7, 11/15, 11/16	
寛博士	寛繁	5/1	注113
片岡	不明	4/1	
加藤			
加藤虎之助氏	加藤虎之助	6/19-21	注128
加藤君	”	8/10, 8/16, 8/20, 8/23, 9/10, 11/24	
加藤	”	5/22, 9/11	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
加藤	加藤虎之助？	7/19, 7/20, 8/1, 8/9, 8/10, 8/16, 8/20, 8/21, 10/3, 10/9, 10/19, 10/22, 10/23, 11/20, 11/21	
加藤	不明	1/18	
金沢			
金沢氏	金沢巖	2/16, 3/20, 4/7, 4/17	注36
金沢	〃	2/14, 2/15, 4/1, 9/29, 10/5	
金山			
金山君	金山平三	1/24, 7/10, 7/21, 11/14, 11/15, 11/20	注26
金山 (氏)	〃	3/27	
金山	〃	5/5, 5/6, 7/21, 8/18, 11/13, 11/15, 11/16	
カロリユス・デュラン	—	→Carolus-Duran	
カルルスデュラン			
川合玉堂			
川合玉堂氏	川合玉堂	2/16	注41
玉堂	〃	2/24	
川口儀平氏	川口儀平	8/24	
河原			
河原賀市君	河原賀市	6/25	注50
河原氏	〃	3/15	
河原	〃	2/23	
関雪	—	→橋本関雪	
木村			
木村氏	木村半蔵	6/29, 7/1, 7/25, 8/28, 8/29, 9/20	注144
木村	〃	6/28, 6/29, 8/1, 8/27, 8/28, 9/6, 10/13	
ギュスターヴ・モロー	—	→Moreau, Gustave	
ギュスターヴモロー／ギュスターヴモロ			
松旭齋天勝？			
天勝	松旭齋天勝？	1/7	注12
玉堂	—	→川合玉堂	
矩一	—	→児島矩一	
クールベ	—	→Courbet, Gustave	
楠木正行			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
正行	楠木正行	2/20	
久保氏	不明	9/19, 9/20	
久保田	不明	10/6, 10/16, 10/17	
栗川	不明	8/21	
黒板博士	黒板勝美	9/5	注197
黒田			
黒田先生	黒田清輝	1/16, 2/15, 3/23, 3/25, 4/6, 8/8, 11/18, 11/21	注18
黒田 (先生)	〃	2/17	
黒田	〃	4/21	
虻一郎	—	→児島虻一郎	
ゴージェン	—	→Gauguin, Paul	
ゴザン			
小柴君	小柴銅侍？	10/2	注208
ゴッヅ氏	—	→Le Goff	
児島			
矩一	児島矩一	1/18, 3/18, 3/29, 4/1, 5/11, 5/22, 7/23, 7/24, 8/7, 8/23, 9/21, 10/5, 11/3, 11/5, 11/9, 11/22, 11/23, 11/25, 11/26, 11/29, 12/2	注19
虻一郎	児島虻一郎	5/19	注124
妻	児島友	3/26, 7/11, 7/13, 8/30, 9/29, 10/12, 10/13, 10/14, 10/27, 11/7, 11/8, 11/13, 11/15, 11/16, 11/25, 11/26, 12/4, 12/5, 12/6, 12/8	注79
直平	児島直平	11/13	注229
成羽	児島家 (児島徳太郎)	9/26, 12/2	
小林			
小林寿	小林寿美太	8/18	注10
小林君	〃	1/7, 1/23, 2/11, 2/13, 2/21, 3/14, 3/15, 4/9, 4/21, 4/23, 5/5, 5/6	
小林 (君)	〃	4/22	
小林兄	〃	5/2	
小林	〃	1/5, 1/6, 3/21, 3/22, 3/25, 3/26, 3/29, 4/14, 4/15, 4/17, 5/6, 5/7, 7/5, 10/12, 10/13, 11/25, 11/26	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
小林		8/18, 10/2, 10/3, 10/12, 11/4, 11/9	
小林氏	小林寿美太または 寿美太の義父？	4/9	
小林萬吾氏	小林萬吾	3/24	注75
小村	不明	11/7	
ゴヤ	→Goya, Francisco de		
ゴヤ／コヤ			
小山健三（氏）	小山健三	4/16	注102
コラン			
コラン先生	→Collin, Raphaël		
コラン先生の妹さん	→Collin, Blanche		
斉藤			
斉藤豊	斉藤豊作	4/21	注37
斉藤君	〃	2/15	
斉藤	〃	4/4, 7/13, 9/27	
斉藤溪舟	斉藤徳太郎（溪舟）	3/21	注35
斉藤氏	〃	3/14, 3/22, 4/9	
斉藤	〃	2/12, 4/21	
斉藤	斉藤豊作または 斉藤徳太郎	1/18, 3/20, 3/29	注35, 37
坂田			
坂田（氏）	坂田一男？	3/27	注81
坂田	〃	4/1	
笹川	不明	8/18, 11/6, 11/9	
皿井			
皿井氏	皿井立三郎	1/23	注24
皿井	〃	3/15	
重成	不明	11/25, 11/26	
滋野			
滋野男爵	滋野清武	8/8	注184
滋野氏	〃	8/16	
ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ	→Puvis de Chavannes, Pierre		
シャバンス			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
庄	不明	4/28	
甚三郎	不明	5/10	
須田氏	須田国太郎	12/18, 12/19, 12/20, 12/21, 12/24	注245
須藤			
須藤氏	須藤祐七（または五百 三、新六）	5/10	注34, 121
須藤（氏）	〃	5/11	
須藤君	須藤祐七または新六	5/10	
須藤	須藤新六または祐七	2/11, 4/15, 5/6, 8/21	
須藤兄弟	須藤祐七、新六、または は五百三	5/10	
砂田			
砂田君	砂田正二？	3/27	注80
砂田	〃	3/29	
炭谷	炭谷小梅？	5/6, 7/27	注116
諏訪	諏訪秀三郎	7/1	注148
関	不明	2/23, 5/24, 8/21	
関野博士	関野貞	10/12, 11/6, 11/9	注212
セザンヌ	→Cézanne, Paul		
セザンヌ	不明	5/6, 5/10, 5/11, 5/24	
妹尾			
武内			
武内君	武内潔眞	1/2	注6
武内	〃	7/23, 8/29, 12/4, 12/5	
田中			
田中印刷所	田中印刷所	3/16, 3/20	
田中	〃	3/21	
田中の主人	田中印刷所の主人	3/19	
田中氏	不明（『黄薇之友』関係 者）	3/26	
田辺至氏	田辺至	3/23	注73
佃			
佃	佃武昭または佃政道	3/29, 4/1	注82
佃兄弟	佃武昭、政道	3/28	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
辻氏	辻永？	3/22	注71
都志			
都志氏	都志太郎	4/27	注110
都志	”	7/23	
筒井			
筒井氏	不明	4/4	注167
筒井	不明	4/5	
妻	—	→児島友	注222
デュトウ	—	→Duthu, Jean Baptiste Laurent	
デュス先生			
天勝	—	→松旭斎天勝？	注44
天主教の先生		→Duthu, Jean Baptiste Laurent	
トガ		→Degas, Edgar	注222
都鳥			
都鳥氏	都鳥英喜	9/24, 10/2, 10/29, 11/2, 11/7, 11/11, 11/30	注157
都鳥 (氏)	”	7/12, 7/20, 7/23	注157
都鳥	”	9/6, 10/22, 11/2, 11/4, 11/7, 11/9, 12/10	
富永			
富永君	富永勝重？	4/7	注67
富永 (氏)	”	3/27	
富永	”	3/21, 4/4, 5/24	注101
内藤博士	内藤湖南	4/16	
直平	—	→児島直平	注147
中尾			
中尾氏	中尾 優	8/1, 8/6, 8/7	注188
中尾 (氏)	”	8/8	
中尾	”	6/29, 7/9, 7/26, 8/19, 8/22, 10/12, 11/3, 11/8, 11/10, 12/3	注33
長尾			
長尾健吉	長尾健吉	10/1	注4
長尾氏	長尾健吉 (または一平)	4/12, 4/13, 4/14, 4/17, 4/18	
長尾 (氏)	”	4/18	注139

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
長尾	”	2/10, 2/25	注203
中川			
中川君	中川紀元？	10/17, 11/2	注193
中川氏	”	9/18	
中沢			
中沢彦吉氏	中沢彦吉	8/24	注222
中沢氏	”	8/25, 8/26, 8/27, 9/25, 9/26, 9/28, 9/29, 9/30, 10/2	
中沢	”	9/24, 10/7, 10/14, 10/15	注44
中村			
中村先生	中村勝治郎	2/17	注222
中村	不明	4/29	
中原氏	中原 實	11/7	注27
中山			
中山 縄	中山 縄	11/24	注139
中山君	”	1/25	
中山	”	4/1	注52
成羽	—	→児島家 (児島徳太郎)	
西村			
西村氏	西村磯右エ門	6/19-21, 6/25, 8/2	注188
西村 (氏)	”	7/9, 8/1	
西村	”	6/29, 7/7, 8/8, 8/12, 8/19, 12/3, 12/4	注167
橋本			
関雪	橋本関雪	2/24	注157
橋本	不明 (三越関係者)	4/10	
橋本	不明	11/16	注188
長谷川			
長谷川君	長谷川 潔	8/14, 8/18, 9/7	注3
長谷川	”	9/18, 9/19, 10/15, 10/20	
林			
林源	林源十郎 (甫三)	5/22	注139
林氏	”	1/1	
林氏 (の)	母 堂	1/1, 1/4, 1/16	注4

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
林夫人	林浦	1/1	注5
林杉造	林杉造	3/9	注58
林杉	〃	4/21, 5/24	
林欧文堂	林欧文堂	4/9	注58, 95
林君		2/12, 3/14, 4/13, 4/15	
林		4/15, 5/6, 11/7, 11/8	
林弟		4/15	
正行	—	→楠木正行	
原			
原氏	原富太郎 (三溪)	4/8	
原君	原勝四郎	9/15, 9/21, 9/22	注202
原	原澄治	3/22	注69
原	原勝四郎または原澄治	7/28, 8/18, 9/2, 9/5, 9/7, 11/11, 11/28, 11/29	注69, 202
原九郎?	原九郎?	8/9	
原田			
原田善吉氏	原田善吉	2/24, 2/28	
原田氏	〃	2/23	
原田	原田善吉?	7/23	
原田瓊生氏	原田瓊生	5/11	注122
原田氏	〃	5/11	
ハートルソン	—	→Baertsoen, Albert	
ハルツン先生			
ハルトロメ	—	→Bartholomé, Paul-Albert	
ハルトロメ氏			
足田	足田直太郎または足田家	2/23, 5/7, 8/18, 8/30, 8/31	注49
平井君	不明 (光風会関係者)	3/20	
平塚			
平塚氏	平塚英吉	5/31	
平塚農学博士	〃	6/19-21	注131
平塚		8/10, 8/21, 10/11	
廣瀬			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
廣瀬氏	広瀬勝平	7/12, 7/20, 7/23, 8/30, 9/15	注158
廣瀬	〃	7/24, 8/22, 10/12, 11/9	
廣瀬 (仏文) 氏	広瀬哲士	9/15	注201
藤	藤彦衛?	4/1	注88
藤島			
藤島先生	藤島武二	2/15, 2/17, 2/19, 3/17, 3/24, 3/28, 3/29, 3/30, 4/4, 4/7, 8/16, 8/20, 9/4, 12/8, 12/10	注38
藤島 (先生)	〃	2/17	
藤島	〃	8/21, 9/5, 12/4, 12/12	
二村光三氏	二村光三	6/19-21	
佛先生	—	→Duthu, Jean Baptiste Laurent ?	
ブラングイーン	—	→Brangwyn, Frank	
ベラスケス	—	→Velázquez, Diego	
正木			
正木校長	正木直彦	3/18, 4/6	注60
正木	〃	4/21	
正行	—	→楠木正行	
マダムルロア	—	→Leroy (Madame Arthur Leroy de Borgard)	
松尾			
松尾氏	松尾哲太郎?	3/5	注56
松尾		11/4, 12/4, 12/5	
松方			
松方幸太郎	松方幸次郎?	4/16	注103
松方氏	〃	4/16	
松永			
松永君	松永津志馬	9/27, 11/26, 12/1, 12/7	注205
松永氏	〃	10/26, 10/27, 11/3, 11/6, 11/8, 11/17, 12/2, 12/6	
松永	〃	12/24	
松原			
松原氏	不明 (美術旬報関係者)	3/22	
松原氏	松原三五郎	4/9	注96

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
松原□	〃	4/15	
松原	松原三五郎？	4/21	
三木令嬢		3/4	
ミケランジェロ	—	→Buonarroti, Michelangelo	
満谷			
満谷氏	満谷国四郎	2/16, 2/18, 3/6, 3/8, 3/9, 3/10, 3/11, 3/12, 10/11, 11/21	注40
満谷 (氏)	〃	3/5	
満谷	〃	8/21, 10/17	
三橋			
三橋兄	三橋玉見	5/1, 5/3	注2
三橋氏	〃	1/1, 1/27, 3/6	
三橋	〃	1/17, 7/23, 8/29, 11/16, 12/4	
三原			
三原 (氏)	不明	4/18	
三原	不明	4/14, 4/15, 8/16, 11/15, 11/16	
三宅			
三宅克	三宅克己	11/9	注70
三宅 (氏)	〃	3/22	
三宅専	不明	7/23, 11/4	注171
三宅		8/16, 10/14, 10/15	
村田			
村田君	不明 (中国民報関係者？)	3/20	
村田氏	〃	3/16, 3/22, 3/23, 3/24, 3/25, 3/26, 3/28, 4/4, 4/5, 4/6	
村田	〃	2/23, 4/1	
ムリリヨ	—	→Murillo, Bartolomé Esteban	
ムユロー			
桃田氏	不明	1/27	
モロー	—	→Moreau, Gustave	
モロ			
屋代 (矢代？)	矢代幸雄？	4/4, 4/21	注90
柳井			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
柳井君	柳井新太郎	1/5, 1/6, 1/7, 1/8, 4/12, 4/13, 4/29, 5/5, 5/6	注9
柳井 (君)	〃	5/5	
柳井氏	〃	4/18	
柳井	〃	1/18, 1/28, 2/25, 4/15, 4/17, 4/28, 4/29, 5/6, 5/7, 5/11, 6/15, 7/13, 8/6, 8/30, 8/31, 9/26, 9/27, 10/12, 10/13, 11/26, 12/2	
山内			
山内愚僊	山内愚僊	1/23	注25
山内	〃	4/21	
山口			
山口嬢	不明	7/29, 8/9	
山口女史	〃	7/26, 8/7	
山口氏	不明	9/27	
山口 (氏)	〃	10/26	
山口	不明	7/28	
山下			
山下君	山下新太郎	3/30	注85
山下	〃	4/4, 4/21	
山田			
山田国民記者	山田毅一	6/19-21	注126
山田氏	〃	5/21, 6/19-21, 7/25, 7/26	
山田 (氏)	〃	7/9	
山田	〃	6/28, 6/29, 7/7, 8/1, 8/20	
山田	山田毅一？	7/22	
山田芳	山田芳三郎 (高田商会)	7/5, 9/15, 9/27	注151
山田氏	〃	9/19, 9/23, 9/24, 9/26, 9/27	
山田 (氏)	〃	9/20	
山田		9/25, 10/16, 10/17, 11/1, 11/4, 11/9	
山谷氏	不明	3/28	
山本			
山本 (君)	山本森之助	3/20	注64
山本氏	〃	3/27	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
山本君	山本森之助？	3/17	
山本氏		10/6, 10/7, 10/8	
山本		10/6	
山本□		4/23	
結城氏	不明	3/17	
ユゴー	—	→Hugo, Victor	
ユゴー			
柚木			
柚木君	柚木久太	5/5	注83
柚木	”	3/29, 5/6	
横見	不明	4/15	
吉江狐厂氏	吉江狐雁	11/23	注240
吉田			
吉田君	吉田苞	1/3, 1/5, 1/6, 1/26, 2/22, 3/2, 3/3, 3/7, 3/17, 3/18, 3/19, 3/24, 3/29, 4/15, 4/24, 5/4, 10/22, 11/17	注7
吉田 (君)	”	4/21	
吉田	”	4/21, 5/22, 8/19, 10/12, 10/13, 11/16, 11/17, 12/4, 12/5	
吉田君夫妻	吉田苞夫妻	3/4	
ルーベンス	—	→Rubens, Peter Paul	
ルソー	—	→Rousseau, Jean-Jacques	
ルソー／サンジヤクルロー			
ルノワール	—	→Renoir, Pierre-Auguste	
ルノアール／ルノアール氏／ルノアール先生			
ルロア君	—	→Leroy ?	
ロダン	—	→Rodin, Auguste	
ロダン／ロタン			

氏名等	日記に記された名等	日記の日付	参照先
Aman-Jean, Edmond-François (エトモン＝フランソワ・アマン＝ジャン)			注14
Aman-Jean		1/12, 11/21	
Aman Jean		11/17	
アマンシアン氏		9/3, 9/4	
アマンジヤン氏		10/15	
アマンジヤン		9/16	
アマンシヤン氏		9/16, 11/21, 11/24, 12/8	
アマンシヤン		10/14, 12/9	
アマンチヤン		7/24	
André, Albert (アルベール・アンドレ)			注237
Albert André氏		11/20	
Bartholomé, Paul-Albert (ポール・アルベール・バールトロメ)			注16
Barthoromé		1/12	
バールトロメ氏		7/15	
バールトメ氏		7/20	
Baertsoen, Albert (アルベール・バールトソン)			注242
Beartsme氏		12/4	
バールツン先生		12/4	
Brangwyn, Frank (フランク・ブランクイン)			注146
ブランクイン		6/28	
Buonarroti, Michelangelo (ミケランジェロ・ブオナローティ)			注183
ミケランシロ		8/6	
Carolus-Duran (カロリエス＝デュラン)			注160
カルゝスデュラン		7/13	
Cézanne, Paul (ポール・セザンヌ)			注191
セザンヌ		8/19, 10/22	
Claus, Emile (エミール・クラウス)			注20
Claus		1/18, 11/15	
Collin, Blanche (コランシユ・コラン)			注177
コラン先生の妹さん		8/1	
Collin, Raphaël (ラファエル・コラン)			注176
コラン先生		8/1	
Comllard ?			注235
Comllar		11/17, 11/20	

氏名等	日記に記された名等	日記の日付	参照先
Courbet, Gustave	(ギユスターヴ・クールベ)		注167
	Courbet	11/14	
	クールベ	7/21, 8/6	
Degas, Edgar	(エドガー・ドガ)		注150
	ドガ	7/4	
Duthu, Jean Baptiste Laurent	(ジャン・バティスト・ローラン・デュトウ)		注13
	Duthu	10/2, 11/4	
	Duthe	9/29	
	デュス先生	5/4	
	天主教の先生	1/10	
	佛先生	2/28	
El Greco (エル・グレコ)			注249
	グレコ	12/22	
	クレコ	12/20, 12/23	注214
	ゴガン	10/16	
Goya, Francisco de	(フランシスコ・デ・ゴヤ)		注247
	ゴヤ	12/18, 12/19	
	ゴヤ	12/22	
Hugo, Victor	(ヴィクトル・ユゴー)		注163
	ユーゴー	7/19	
Janssen ?			
	Janssen ?	7/28	
Le Goff (ル・ゴフ)			
	Dr Le Goff	8/20	
	Goff 氏	8/23	
	Goff	8/22, 9/30, 10/1	
Leroy (Madame Arthur Leroy de Borgard)	(ルロア夫人)		注175
	マダムルロア	7/30	
Leroy ?			
	ルロア君	8/10	
Moreau, Gustave	(ギユスターヴ・モロー)		注155

氏名等	日記に記された名等	日記の日付	参照先
ギユスターヴモロー	ギユスターヴモロー	7/11	
	ギユスターヴモロ	8/22	
	モロ	8/22	
Morisot, Berthe	(ベルト・モリソ)		注232
	Morisot	11/14	
Murillo, Bartolomé Esteban	(バルトロメ・エステバソ・ムリリヨ)		注254
	ムコロ	12/28	
Puis de Chavannes, Pierre	(ピエール・ピュザイス・ド・シャヴァンヌ)		注210
	シャバンヌ	10/4	
Renoir, Pierre-Auguste	(ピエール＝オーギュスト・ルノワール)		注187
	Renoir	9/7, 9/21	
	ルノワール氏	8/25, 9/19, 9/21	
ルノワール先生			
	ルノワール先生	8/14	
	ルノワール	8/14, 8/16, 8/18, 8/25, 9/15, 9/30, 12/4	
Rivière, Georges	(ジョルジュ・リヴィエール) ?		注200
	Rivier 氏	9/19	
Mr Rivier 氏			
	Mr Rivier 氏	9/15	
Rodin, Auguste	(オーギュスト・ロダン)		注180
	Rodin	11/19	
	ロダン	8/4, 8/6	
	ロダン	8/4, 8/6	
Ronsor, George ?			
	George Ronsor 氏 (英人)	12/29	
	Ronsor 氏	12/29	
Rousseau, Jean-Jacques	(ジャン＝ジャック・ルソー)		注179
	ルソー	8/3, 8/20	
	サンジャクルロー	8/3	
Rubens, Peter Paul	(ピーテル・パウル・ルーベンス)		注248
	ルーベンス	12/18	
Rubinstein, Arthur	(アルトウール・ルービンシュタイン) ?		注250
	Rubinstein	12/20	
Velázquez, Diego	(ディエゴ・ベラスケス)		注246
	ベラスケス	12/18, 12/20	

編集・投稿規定

公益財団法人大原芸術財団は、『大原芸術研究所紀要』（以下、『紀要』）を、原則として一年度に一回刊行する。『紀要』は、当財団ならびに大原芸術研究所における調査研究の成果を発表することにより、当財団の所管する分野の専門的研究の深化、事業活動への反映のみならず、国内外の芸術研究活動の普及に資することを目的とするものである。

1. 投稿資格

- (1) 当財団職員
- (2) 当財団職員との共同研究者
- (3) 当財団が執筆者として認めた者

2. 投稿原稿

- (1) 未発表の論文
- (2) 未発表の研究ノート
- (3) 未発表の資料紹介
- (4) 未発表の調査報告
- (5) 未発表の書評、展覧会評
- (6) その他(当財団におけるシンポジウムおよび講演会での発表の報告等)

- ・ 論文は本文・註を含めて一偏20,000字以内、挿図は10枚以内を基準とし、600～800字程度の日本語と英語の要約を付ける。また、掲載内容によっては、字数や図版の制限は公益財団法人大原芸術財団の判断で変更される可能性がある。
- ・ (1)、(2)、(3)、(5)については、投稿原稿の内容に鑑み、専門知識を有する研究者に査読を依頼し、採択された原稿のみを掲載する。
- ・ 採択された原稿を紀要に掲載する権利は公益財団法人大原芸術財団が有する。このほか、投稿者は、著作権法上の複製権及び公衆送信権の利用を同財団に対し認めるものとする。
- ・ この規定に記されていない事項については、公益財団法人大原芸術財団が判断する。

執筆者（五十音順）

阿部善也（東京電機大学工学部応用化学学科助教）
大下浩司（吉備国際大学外国語学部外国学科教授）
小林俊介（山形大学地域教育文化学部地域教育文化学科教授）
孝岡睦子（公益財団法人大原芸術財団研究部部長）
塚本貴之（公益財団法人大原芸術財団研究部研究員・学芸員）
伴祐子（公益財団法人大原芸術財団研究部研究員・学芸員）
水島博（公益財団法人有隣会研究員）
柳沢秀行（公益財団法人大原芸術財団シニアアドバイザー）
吉川あゆみ（公益財団法人大原芸術財団特命上席研究員）

査読委員（五十音順）

大原秀行（絵画修復家〔吉備国際大学名誉教授〕）
児島塊太郎（倉敷芸術科学大学加計美術館館長）
柳沢秀行

大原芸術研究所紀要 第1号

令和7年4月1日発行

発行

公益財団法人大原芸術財団
岡山県倉敷市中央1-1-15 電話:086-422-0005

編集

大原芸術研究所紀要編集委員会
第1号編集委員 大塚優美／孝岡睦子／寺元静香／伴祐子

表紙デザイン

横田惇史(株式会社中野コロタイプ)

印刷

株式会社中野コロタイプ
岡山県岡山市北区玉柏390

翻訳

小川紀久子(pp. 3, 5, 9, 27, (57), (11), (3))

Bulletin of the Ohara Art Institute No. 1

Date of Issue: April 1, 2025

Published by the Ohara Art Foundation

1-1-15, Chuo, Kurashiki, Okayama, 710-8575, Japan
Tel. +81-86-422-0005

Edited by OTSUKA Yumi / TAKAOKA Chikako / TERAMOTO Shizuka / BAN Yuko

Printed by Nakano Collotype

